

季節のない街

山本周五郎

青空文庫

街へゆく電車

その「街」へゆくのに一本の市電があつた。ほかにも道は幾つかあるのだが、市電は一本しか通じていないし、それはレールもなく架線もなく、また車しゃたい軀さえもないし、乗務員も運転手一人しかいないから、客は乗るわけにはいかないのであつた。要するにその市電は、六ちゃんという運転手と、幾らかの備品を除いて、客観的にはすべてが架空のものだったのである。

運転手の六ちゃんは「街」の住人ではない。中通りと呼ばれる、ちよつとした繁華街に、母親のおくにさんと二人でくらしていた。

父親はなかった。死んだのか別れたのか、その消息は誰も知らないが、ともかく父親を見た者はなかった。おくにさんは女手でてんぷら屋をいとなみ、六ちやんと二人で肩身せまくらしていた。——断わっておくが「てんぷら」屋といつても、じつは精進揚げのことである。

おくにさんは四十がらみで、顔もからだ肥えていた。眼にはあらゆる事物に対する不信と疑惑のいろをた湛え、口ははまぐり蛤のように固くむすばれ、いくらか茶色っぽいかみの毛は、油つけなしのひっ詰め髪に結われていた。

古い伊勢縞か、木綿の布子か、夏は洗いざらした浴衣に、白かっぱう割烹前掛をつけ、夏冬とおしてえり衿に手拭を掛けていて、黙って

てんぷらを揚げたり、客の応対をしたりするのであった。衿に掛けた手拭と、白い割烹前掛とが、喰たべ物を扱う彼女の動作を、いかにも清潔らしく見せるように感じられた。

おくにさんは無口だった。客にもよけいなあいそは云わず、あたしの揚げるてんぷらの味が充分にあいそを云っている筈だ、と自負しているようなそぶりがちらちらした。——事實はそうでなく、絶えまなしに六ちやんのことが気にかかり、絶えまなしにおそっさまの御利益や、奇蹟きせきや、効験きとくあらたかな祈禱きとう師の噂うわさなどが、そのいくらか茶色っぽいかみの毛を油けなしでひっ詰め髪に結つた頭の中で、せめぎあっていたのだ。

一日のしようばいが終り、店を閉め、寝る支度をすませてから、

おくにさんは仏壇を開いて燈明と線香をあげ、玩具のような団扇うちわ太鼓を持つて、六ちゃんと並んで坐る。できるなら標準型の団扇太鼓にしたいのだが、近所に遠慮があるし、（なぜなら近所にはてんぷらを買ってくれる客が多いから）まさか太鼓の大小によつて、おそつさまの機嫌が変るものでもあるまいと思ひ、多少ひけめを感じながら、その小さな太鼓でまにあわせているのであつた。「なんみようれんぎよう」坐るとすぐに六ちゃんが、仏壇に向つておじぎをしながら、母親に先んじてお願いをする、「——おそつさま、毎度のことですが、どうか、かあちゃんの頭がよくなるように、よろしくお願いします。なんみようれんぎよう」

そして、おくにさんが玩具のような団扇太鼓を叩き、お題目を

となえ始めるのであった。

おくにさんの祈りが、わが子六ちゃんのためであることは断わるまでもない。にもかかわらず、お題目とおそっさまに対する祈念が、主として母親の本復を六ちゃんのほうで乞い願っているところに、天^{てん}秤^{びん}の狂いのようなものがあつた。

六ちゃんはふざけているのではない、あてつけや皮肉でそんなことをするのでもなかつた。かあちゃんが自分のことで世間に肩身のせまいおもいをし、自分のためにおそっさまを拝んだり、お呪^{まじない}禁^{ない}をしたり、いろいろな祈禱師を招いたりするのはわかつていた。そんな必要はない、かあちゃんはそんな心配をすることな

んか少しもないのだ。

どうしてそんなに心配ばかりするのさ、かあちゃん、なにが不足なんだい、と六ちゃんは幾たびも云った。そうだよ、不足なんかなんにもないよ、心配なんかしちやあいないよ、とおくにさんはいつも答えるが、その顔にあらわれている望みを失ったような悲しみの影は、消えも弱まりもしなかった。六ちゃんにはそれが気がかりなのだ、このままでなんの不足もないのに、精をすり減らしているかあちゃんが哀れで、そんなかあちゃんをなんとかしてまともなものにしてやりたい、と念じているのであった。

「お願いします、おそっさま」おくにさんのとなえるお題目のあいまあいまに、六ちゃんはしんそこ祈るのであった、「——毎度

のことで飽き飽きするかもしれないが、かあちゃんのことではよろしくお頼みします、なんみょうれんぎよう」

おくにさんは胸がせつなくなってくる。もうなん年となく同じおつとめを欠かさずやっているのだが、わが子のその祈願を聞くたびに、そのたびごとに胸がせつなくなり、涙がこぼれそうになった。

この子はこんなに親おもいで、こんなにちちゃんと口もきける、きつといまに頭もまともになるだろう、おくにさんはそう信じようとする。六ちゃんはそういうかあちゃんあわの顔を、憐れむような眼つきで見まもり、ちようど母親が怯おびえている子をなだめるように、夫丈夫だよ、なにも心配することはないよ、万事うまくいっ

てるじゃないか、氣を樂にしなよ、と云いきかせるのであつた。

六ちゃんが好きなのはかあちゃんと、「街」の住人である半助と、半助の飼ひ猫のとらだけで、反対に云えば、この二人と一匹だけは六ちゃんのことを好いていた。その他の人たちを六ちゃんには好かない。かれらは六ちゃんをからかったり、悪口を云つたり、六ちゃんの運転する市電の妨害をしたりする。特に、市電の運転の邪魔をする者が多いので、六ちゃんは氣のしずまるときがなかつた。

じつに知恵のないはなしだが、その町内の人たち、ことに子供たちは、六ちゃんのことを電車ばかと呼んでいた。そうかもしれない、客観的にはそれが当っているかもしれないが、主観的には

六ちゃんはもつとも勤勉で、良心的な、市電の運転手であつた。

朝、——起きるとすぐに、六ちゃんは電車の点検をする。電車は車庫の中にあり、車庫は家の横のろじにある。

狭い勝手の揚げ蓋の隅に、古い蜜柑箱みかんばこがあつて、その中に口の欠けた醤油注ぎや、ペンチや、ドライバーや、油じみた軍手や、ぼろ布が整頓せいとんされてある。これらは客観的にも存在するのだが、そこにはまたコントローラーを操作するハンドルや、名札や、腕時計や、制帽などが、主観的には存在するのである。口の欠けた醤油注ぎも、主観的には油差であつた。

六ちゃんは油差とドライバーとペンチを持って車庫へゆき、自

分の運転する電車を点検する。客観的にはなにも存在しないのだが、六ちやんの主観には、そこにはつきりそれが見えるらしい。彼は仔細しさいありげに眉をしかめたり、ときには舌打ちをしたり、片手で顎あごを撫なでたりしながら、その電車のまわりをぐるっと廻つてみる。ボディーを手で叩き、踏かんで、ボディーの下の車軸や、エンジンンジンの連結部を眺めたりするのだ。

「しゃあねえな」六ちやんは頭を振つて呶つぶやく、「整備のやつ、なにようしてるんだ、なつちやねえじゃねえかな」

彼はドライバーを使つてどこかを直し、ペンチを使つてどこかを直し、軸受のところを足で蹴けつてみる。もういちど蹴つてみて、首をかしげて舌打ちをし、さも不満そうに舌打ちをする。

「もうこいつも古いからな」六ちゃんは怠け者の整備係に譲歩して呟く、「やつらに小言を云つてもしやあねえだろう」

終つて顔を洗い、朝めしが済むと出勤であるが、おくにさんがしようばいの材料を買出しにゆく日は、帰つて来るまで待たなければならぬ。買出しはたいてい一日おきであるが、毎日のおきもあつて、すると六ちゃんはいらだ苛立つておちつかず、こんな遅刻が続いては成績に影響する、と不平を云うのであつた。

出勤するときは勝手へまわる。例の蜜柑箱から制帽を取つてかぶり、油じみた軍手をはめ、コントローラー用のハンドルと名札を取りあげる。右のうち現実に存在するのは軍手だけで、他の三品が客観的には架空なものなことは、まえに記したとおりである。

六ちゃんは電車へ乗り、まず名札を札差に入れ、ハンドルをコントロールのノツドへは箆め込む。そして右手で制動機のハンドルをつか握み、左廻しにしながらと廻してみたら、次に右へがらと廻し、制動機に故障のないことをたし慥かめる。これらの動作は毎日きちんと、狂いのない順序で行われるし、六ちゃんの顔には、どんなに優秀な運転手よりも敏感そうです。しんけんそのものといった表情があらわれるのであった。

「さあ」と彼は呟く、「発車しようぜ」

そして制動機をがらがらとゆるめるのだが、これは右手で握んだハンドルを放して、右の腕をちよつとあげればいい。すると制動機はがらがらと巻き戻るのであった。

人は六ちゃんのことを「電車ばか」と呼ぶ。

六ちゃんはほかではなかった。ひとびとの意見にさからうようだが、彼は幾人もの専門医の診察によつて、白痴でもなく、精神薄弱児でもないことが、繰り返し証明された。彼は小学校を出ている。だが初めから終りまで、なんにも勉強しなかつたため、各学年の修業免状も、卒業証書も貰えなかつた。彼は学齢に達したとき小学校にはいり、六年かよつて小学校を出たのだ。学課はなにか一つまなばなかつたし、体操も遊戯もしなかつた。初めて教室へはいつたときから、ずっと電車の絵ばかり描いてい、六年のあいだ、ただもう電車の絵だけを描き、家にいるときは電車の運転

に没頭しようとした。

人が彼をばかと呼ぶとおり、慥かに六ちやんの電車は現実には存在しないし、それを発車させ、運転し、終電に至って入庫させるまでの作業は、すべて架空なものであった。

けれども、それなら現実^に市電を運転している者はどうであろうか。——中通りを北へ行って、橋を渡り、横丁を一つ越すと本通りがあつて、市電やバスや、各種の車が往来している。それはみな、現実の運転手によつて、現実^に運転されているのであり、その事実には些^{いささ}かの疑問もないが、しかし、はたしてそのままを信じていいだろうか。

ここに一人の運転手が、いま市電の運転をしている。だが、彼

の心はそこにはない。彼はゆうべ細君とやりあったこと、またそのあと、近所の呑み屋で侮辱されたことなどから、少なからず厭^え世的^{んせい}な気分になっており、そのため感情が苛^{いら}だつていた。彼は空想の中で細君を痛烈にののしり、呑み屋で自分を侮辱した客を繰り返し殴りつけ、そんな不愉快なめにあうのも、結局は自分が市電の運転などをしているからだ、という理由で、その職業までも呪^{のろ}つた。こういう気分であつたから、乗客の待っている停留所を素通りしてしまい、下車する客にどなられた車掌から停車のゴングを鳴らされ、慌てて停車操作をする自分に、いつそうはらを立てる、という結果になるのだ。

もちろん、他の職業人でも同じような例があるだろう。たいて

いの人間が自分の職業に満足していないらしい、口ではどう云おうとも、心の中では自分の職業を嫌うか、軽蔑けいべつするか、憎みさえしている者が少なくないようだ。

これらの人たちと六ちゃんを比較するのは、正しい評価ではないかもしれない。けれども、六ちゃんはまさしく、精神的にも肉体的にも、市電を運転することにうちこんでおり、そのことに情熱を感じ、誇りとよろこびを感じているのであった。

さていま、六ちゃんは中通りを進んでゆく。左手のハンドルをローからセコンドにあげ、右手でブレーキのハンドルをしっかりと握り、そして車輪の音をまねる。

「どですかでん、どですかでん」

これははじめ、どで、すか、でん、と緩徐調でやりだし、だんだんに調子を早めるのである。つまり、車輪がレールの継ぎ目を渡るときの擬音であつて、交叉点こうさてんにかかると次のように変化する。

「どでどで、どでどで、どですかでん」

これは交叉する線路の四点の継ぎ目を、電車の前部車輪四組と、後部四輪とが渡る音であつた。

突然、前方に不注意な通行人があらわれる。六ちゃんは足を停めて、右足の爪先で地面を叩きながら、がんがんがんと警告のゴングを鳴らす。不注意な通行人は気がつかない。線路の上をま

つすぐにこつちへやって来る。こういうのは殆んどよその町の人で、六ちゃんのことを知らず、六ちゃんの運転している電車や、その線路も見えないのだ。

六ちゃんは驚いてまっ赤な顔になり、慌ててけんめいに停車操作にかかる。

「あぶないぞ」

六ちゃんは喚きながら、左手でコントローラーをがちゃんとゼ口^ゼに切替え、右手でブレーキのハンドルをぐるぐると、ありったけの力で廻し、上半身を反らせてうーつと締めあげる。口でききき、とブレーキのしま緊る音をまね、その電車はかろうじて停車する。

「あぶないじゃないか」

六ちゃんは車窓から首を出し、赤く怒張した顔でその不注意な
歩行者を叱りつける。

「電車にひかれるじゃないか、電車にひかれたらどうしようもない
じゃないか」それからしんけんな眼つきで睨みつける、
「線路をあるくのは違反なんだ、田舎者はそんなことも知らないんだか
らな、ほんとに、気をつけなくちゃ困るじゃないか」

不注意な歩行者は口をあけ、六ちゃんのただならぬ顔を見て、
いそいで脇へよけてゆく。六ちゃんはそのうしろ姿をいまいまし
そうな、軽侮の眼で見やりながら、なんてまぬけなやつだ、と呟
く。

「なんてやつだ」と六ちゃんは云う、「自分がどこをあるいてる

かもわからねえんだからな、いなかも」

そして、右の肱^{ひじ}をあげてブレーキをがらがらと解き、コントローラーをセコンドに入れ、緩み終ったブレーキのハンドルを止めて握ると、左手で速度をあげ、どですか、でん、と進行してゆくのであった。

町内の人たちはもう六ちゃんに興味をもつてはいない。六ちゃんはその町の風物の中に溶けこんでいるのだ。六ちゃん自身もかれらには無関心であるし、子供たちがわるくふざけたり、からかったりしても、ちよつと睨むだけで、まったく相手にならなかった。

中通りを三往復すると、六ちゃんはうちへ帰って休み、また三

往復しては休みして、終電になる。その日の気分によつて終電の時間はまちまちだが、途中で半助の飼ひ猫のとらに出会うと、電車を停めて抱きあげ、半助のいる「街」まで届けにゆくのであった。

とらは黒ずんだ三毛猫の雄で、すばらしく大きい。顔はフツトボールの球くらいもあつて、まるく太く、軀もよく太っている。半助が飼うようになってからでも七年になるが、猫について見識のある人に云わせると、少なくみつもつても、十二、三年はとしをくつている、ということだが、この界限かいわいでとらがボスのナンバー・ワンであることには、紛れがなかった。

「どうしたとら」六ちゃんは抱きあげたとらに話しかける、「今日はなにを停らした、トラックか電車か」

とらはにやあと答える。声は出ない、にやあとというように口はあくが、声は出さないのである。交尾期や日常の闘争で声帯を酷使するため、よほど必要なときでない限り、声は出さないように注意している、といったふうであつた。

「どのくらい停めた」六ちゃんはまたたずねる、「三台か五台か、てんぷらは食つたか」

こんども猫はにやあとというように口をあき、眼を細くして喉^{のど}を鳴らす。てんぷらと云つても、それは六ちゃんのうちではなく、本通りのむこう側の新^{しん}道^{みち}にある「天松」という店の、本格的な

てんぷら屋のものであるが、とらとてんぷらの関係については、のちに記すでしょう。

「うちへ帰るんだな」六ちゃんは電車の方向を変えながら云う、
「よしよし、規則違反で監督にみつかるとうるせえが、おれの電車であつてつてやろう、しっかりつかまつてな、スピードをあげるからな、ほら、どですかでん、どですかでん」

電車は古いから、そのままゆけるときもあるが、故障をおこすこともある。故障がおこると六ちゃんは舌打ちをし、電車を停めて運転台からおりる。肩にのせた猫をなだめながら、六ちゃんは電車の周囲をゆつくり点検してまわり、仔細ありげな渋い顔つきで、車軋を叩いたり、下を覗いてエンジンのぞの連動部を見たり、シ

ヤフトの受け軸を足で蹴ったりし、それから空のほうを見あげて、架線とポールとの接触をたしかめたりする。

これらの動作はおどろくほど写実的で、初めて見る者には、それが単に空想の所産にすぎない、などとは信じられないに相違ない。点検してまわるときに描く長方形の各辺の長さは、そこに車軀があるという現実的な立体感を与えるうえに、どこかを叩いたり、足で蹴ったりするときには、その音が聞えるようなりアリテイをもっているからだ。

「整備のやつら、みてやがれ」六ちゃんは呟く、「こいつがいくら古いからって、整備をずるけてもいいっていう法はねえ、入庫したらとつちめてやるからな、みてやがれ」

六ちゃんは運転台へ戻り、電車を発車させる。

「さあ、スピードをあげるぞ」六ちゃんは肩の猫に云う、「どですかでん、どですかでん」

中通りの南よりに、安八百屋と呼ばれる八百屋がある。ほかの店より三割がた安く売るそうで、かなり遠くからも買いに来る客があり、そのためそんな呼び名が拡まったものらしい。看板には「八百屋やおたつ」と書いてあった。

その八百屋と、靴の修繕をする小さな店のあいだに横丁があり、でこぼこで水溜りみずたまなどのある道が百メートルほど、西へむかつて延びている。道の左右は古びて忘れられてしまったような、小

さな家並が続き、そこを通りぬけると広い荒地へ出る。

そこは草原でもなくあき地とも云えなかつた。赭あかつち土まじりの

地面に、ところどころ草が生えているのは、老衰して毛の抜けた犬の横腹のようであり、見る限り石ころや欠け茶碗や、あきかん罐や紙屑かみくずのちらばっている中に、ひねこびたくぬぎ櫟が五、六本かたまつていたり、幅二メートルほどのどぶ川を挟はさんで、灌かん木の茂みがあつたりするが、ぜんたいの眺めから受けるものは荒廃という感じじでしかなかつた。

六ちゃんはその原っぱを横切つてゆく。まばらに生えた草の中の踏みつけ道は、やがてどぶ川に遮さえぎられる。それは荒地のほぼ中央おおにあり、一メートル五十くらいの深さで、両岸から蔽おほいかかる

雑草や灌木をすかして見ると、油の浮いた青みどろの水の淀みに、
欠けた椀や皿や、折れた箸はしや穴のあいたバケツなど、すでに役目
をはたしたあらゆる器物、またしばしば、犬や猫の死躰などが捨
ててあり、四季を通じて、この世がいとわしくなるような悪臭を
放っていた。

六ちゃんはそのどぶ川をとび越える。そこは一種の境界なのだ。
どぶ川の東側は中通りのある繁華街に属し、そこから西側は「街」
の領分であつて、どちらの人たちも、その境界を越えることはな
かった。

これは「街」の住人たちが極めて貧しく、殆んど九割以上の者
がきまつた職を持たず、不道徳なことが公然とおこなわれ、前科

者やよた者、賭博者や乞食さえもいるという理由から、近づくとをいやがられているのではなく、東側の人たちにとって、その「街」も住人も別世界のもの、現実には存在しないもの、というふうに感じられているためのものであった。

例のひねこびた櫟の脇をぬけるとすぐに、われらの「街」が見える。長屋が七棟、朽ちかかった物置のような独立家屋が五軒。

一とかたまりではなく、寄りあつたりちらばつたり、不規則に、あぶなつかしく建っている。これらのうしろは高さ十五メートルほどの崖で、崖の上は西願寺の墓地であるが、墓地そのものは、竹やぶや雑木林に蔽われていて見えず、ただその高くて岩肌のあらわな崖の、威圧的な量感とひろがり、「街」のみじめな景観

をきわだたせているように思えた。

六ちゃんはとらを肩にのせて、そちらへ近よつてゆく。荒地には子供たちが遊んでいるが、決して六ちゃんを見ることはない。

荒地には子供だけでなく、内職のためになにかを割つたり、乾したり、束ねたりする老人や、いくらかの手間賃になる雑多の仕事にはげむ老婆やかみさんたちもいるのであるが、これらもまた子供たちと同様に六ちゃんを見ようとはしない。

かれらには六ちゃんが見えないのだ。ちようどどぶ川の東側の人たちにとって、ここの住人たちが別世界のもの、現実には存在しないもの、という考えかたと同じ意味が、ここの人たちの場合

にもあてはまるのだろう。——これはしいてなにかを暗示しようとするのではなく、われわれが日常つねに経験していることである。雑踏する街上において、劇場、映画館、諸会社の事務室において、人は自分と具体的なかわりをもったとき初めて、その相手の存在を認めるのであって、それ以外のときはそこにどれほど多数の人間がいようと、お互いが別世界のものであり、現実には存在しないのと同然なのである。

「もうすぐだぞ」六ちゃんとはらに云う、「そら、もうそこがおめえのうちだ」

彼はろじへはいつてゆく。そこは左右が二階建ての長屋で、といつても一般のものとは違って棟が低く、二階は屋根裏と呼ぶほ

うがいくらいで、立つてあるくことができなかつた。——葺ふきい板たの屋根はもちろん、軒ひさしも庇も、不規則に曲つたり波を打つたりしているし、建物ぜんたいがあぶなつかしく傾いていた。長屋ぜんたいが一方へ傾いているのではなく、一部は前方へ、一部は後方へといったあんばいで、そのためろじの入口から眺めると、左右の長屋が一部では仲よく軒を接し、一部では敵意をもつかのようにお互いが相手から身をそらしているようにみえるのであつた。

六ちゃんの肩から、とらはのたりと地面へとびおり、一軒の家の半分あいている格子口へはいつていつた。その格子はあけてあるのではなく、閉めることができないのだ。それ以上あけること

もできないし、閉めることもできないので、ずっと以前からそのままになつていたのであつた。

「とらを送つて来たよ」

六ちゃんが戸口でそう云うと切貼きりばりだらけの障子が二インチほどあいて、五十歳ばかりの瘦やせた男が、顔の半分だけでこつちをのぞいた。それが半助であつた。——臆病で疑いぶかいなにかの動物が、穴からそつと外をうかがい、そこにいるのが無害な相手か、それとも危険な敵であるかを、よくよくたしかめたいとでもいうような、極めて慎重なのぞきかたであつた。

「六ちゃんだね」半助は低い声で云つた、「とらを送つて来てくれただね」

「とらを送つて来てやったよ」

「いつもすまないね」半助はあいそう笑いをした、「ありがとうよ」

だが、二インチほどあけた障子はそのままだし、あがれと云うようすもなかった。

六ちゃんのかぶっている——實在しない——帽子をぬぎ、手の甲で額をこすった。

「まだ信心しているかね」半助がきげんをとるような口ぶりであった、「毎晩おそっさまに欠かさず信心をやっているかね」

「ああ」六ちゃんは答えた、「毎晩おそっさまに信心してるよ」

半助は溜息をついた、「おつかさんもたいてえじゃないね」

「だいじょうぶさ、心配なんかないよ、おれが付いているからな」

「うん、それはそうだ」

半助は気弱そうにそつと六ちゃんから眼をそらせた。六ちゃんは持つている——空想の——制帽の底ひさしを撫でている、それから半助に問いかけた。

「おじさんの仕事はうまくいつているのかい」

「まあまあだね」

半助は眼で笑った、「うまくいつてるって言うほどでもないが、まあそうわるいつてもないね、まあぼちぼちつてところだね」
六ちゃんは「ふーん」と鼻で云った。

半助の脇からとらが顔を出し、六ちゃんを見て、大きく口をあけた。ないたのであろうが、やはり声は出ず、そのまま半助のうしろへ引込んだ。

「さて、——」

半助はそう云い、指で鼻の脇を撫でた。すると、それが別れを示す協定の合図であるかのように、六ちゃんは帽子をかぶり、片手を振って戸口からはなれた。

「ありがとよ」半助はそう云った、「おつかさんによろしくつてな」

六ちゃんは黙ってろじを出ていった。

夜になり、寝る支度をしたあとで、母親のおくにさんは六ちゃ

んと二人、仏壇の前に坐る。仏壇には燈明がともり、線香の煙がゆれている。おくにさんが小さな団扇太鼓を手に持つと、六ちゃんがまず両手を突いておじぎをし、母親のためにお願いをする。

「なんみようれんぎよう」彼は合掌し、あたかも仏壇の中におそつさま自身がいるかのような、純粹なしたしみと、信念のこもった表情で呼びかける、「——どうかまいどのことであうるさいかもしれないが、どうかかあちゃんの頭がしっかりするように、よろしくお願いいたします、なんみようれんぎよう」

それからおくにさんがお題目をとえ、団扇太鼓を叩きだすと、六ちゃんがまたおじぎをし、仏壇に向つて云つた。

「かあちゃんのことは、とらんとこのおじさんも心配しています」

おくにさんは太鼓もお題目も中止して、けげんそうに六ちゃん
のほうを見る、六ちゃんは母親をなだめるようにうなずいて云つ
た。

「かあちゃん気にしなくっていいんだよ、気にするのがいちばん
頭に毒だからな、だいじょうぶだよかあちゃん」

おくにさんは向き直って、お題目をとなえ始めた。

僕のワイフ

島さんは左の足が短い。右の足より三インチほど短いようだ。

しぜん、あるくときにはかなり派手にびっこをひいた。

島さんは口髭くちひげを立てている。眉のきりつとした、眼のきれいな、品のいい顔だちで、こんな「街」に住むような人柄とはみえない。移つて来て半年たらずのうちに、ここの住人たちの殆んど

ぜんぶと知りあい、誰彼の差別なくつきあい、いつもあいそいい笑いと、陽気な話しぶりとでみんなに好かれた。

——ええ、僕は満足してます、なんの不満もありませんね。

島さんのようすを見ると、こう云っているように思える、——この世もすばらしいし、この世に生きているということもすばらしいじゃありませんか、え。

ただ困るのは、と近所の人たちはかげで云いあった。あの顔の

やまいだな、足のほうはなんでもないが、顔のあのやまいだけは
どうにも馴染めないよ。

島さんには一種の持病がある。顔面神経痙攣けいれんとでもいうのだ
ろうか、時をおいて顔にデリケイトな痙攣がおこり、同時に、喉
の奥のほうからなにかがこみあげてき、喉を這はい登って「けけけ
けふん」というふうな音になって鼻へぬけるのであった。

向いあつて見ていると、まず片方の眉がつりあがり、眼がすば
やいまばたきをする。これが痙攣のおこる前触れなのだが、初め
はたいていの人がウインクされたように感じて狼狽ろうばいするようだ。

私はへどもどしちやつてね、と古物商の小田さんは云った。――
あの眼をぱちぱちつとやられたときには、今夜おめえの女房を

貸せよ、とでもいう謎なぞじゃねえかと思っちゃってさ。

このウインクに続いて、左右の眉と眼と口とが、それぞれ勝手な痙攣を始め、鼻までがうごめきだし、そうして喉からこみあげてきたものが、「けけけけふん」と鼻へぬけるのである。——これらデリケイトな発作は、まったく不定期におこった。二時間も音沙汰なしでいたり、十分おきに反復したりする。酔ったときにはしばしば安全であるが、そう気がつくかなり激烈なやつが襲ってくる、というぐあいであった。

島さんには妻がいた。島さんより十センチほど背が高く、躰重も十キロは多いだろう。脂肪のたっぷり付いた腰に怒り肩、手も足も大きく、胸などは乳牛ほどもあった。

——ほんとだよ、と相長屋の女房たちはかげで云った。あのみさんが通るとうちが揺れて、棚の物が落つこちるんだから。

髪は茶色で薄く、眼がすわっていて、唇が厚く、左の頬に青い痣あざがあつた。——としが幾つであるかは見当がつかない、島さんは三十四だと云っているが、彼女は同じくらいにもみえるし、四十五、六にみえるときもあつた。いつも黙っていて、近所の人たちともつきあわず、朝晩の挨拶さえもしないくらいだった。

島さんの妻は人に好かれないばかりでなく、むしろ嫌われていたようだ。

彼女は不機嫌な岩のように尊大で、人を見るとときには「眼の右

下の隅からみさげる」と云われた。また、それと同時に唇の左の隅が左のほうへへし曲るので、どんなに根性わるな者でも「あれほど小意地のわるい顔つきはできないだろう」という評もあつた。

ここの住人たちのつきあいは、物の貸し借りと、ぐち話の交換が中心になつている。他人は泣き寄り、という言葉がかれらの唯一の頼りであり、信仰であるようにさえみえる。物の貸し借りといつても、小皿へ一杯の醤油とか、一と摘^{つま}みの塩とか、茶碗一杯の米ぐらいのものであるが、貸してやったほうは「源さんのところらしくじゃないんだね」と思い、自分のうちにはまだ少しはゆとりがあるのだ、というささやかな心づよさと優越感をあじわせるのである。それはしばしば、相手にそういう感情をたのしませる

ために、必要でもない一と摘みの塩を借りにゆくといい、隣人愛のあらわれともなるのであつた。

島さんの妻はそんなことはしなかつた。この「街」にも八百屋と魚屋がおり、どちらも戸板一枚に並べるだけの品しかなかつたし、魚は僅かな塩物とあらばかり、八百屋は色も水気もないしなびた野菜ばかりで、両方とも市場で捨てる屑を拾つて来るのだといわれているが、それでも住人たちは、その二軒でけっこうまにあわせていた。だが島さんの妻は振向きもせず、買い物にはいつも原っぱを越して中通りまでいった。

「あの奥さんはいへんなひとだよ」住人のかみさんたちはこう話しあつた。「このあいだ安八百屋でキャベツを買うのにさ、上

つ側の葉はしなびてるし傷があるからって云って、ばりばり剥むいて捨てちゃうのさ、およそ六、七枚も剥いちやつたろうかね、それからあとのキャベツを店の人に渡して、これを秤はかりにかけておくれと云うじゃないの、キャベツは一個いくらときまつてる、目方で売るんじゃないって店の人が云ったら、こんな傷だらけのしなびた葉まで値段に入れるのかい、それで安八百屋だなんてよく云えたもんだ、おまえんところは貧乏人の血を啜すするんだね、つて一町四方に聞えるような声で喚きたてるじゃないの」

客はこわがって出てゆくし人立ちはするしで、店の人もやけくそになったのだらう。そんなら只でやるから持ってゆきな、と云ったのがいけなかった。島さんの妻はひらき直って、おらあ乞食

じやねえぞ、と男みたような啖呵たんかをきりだし、結局は店の人があやまつて、キャベツを秤にかけたうえ値段をきめた。

「ところが驚くじやないの、金を払つて帰るときにさ、あの奥さんは自分が剥いて捨てたキャベツの葉を拾い集めて、買ったキャベツといっしょに抱えて、しやあしやあと出てつたわよ」

魚屋へいったときの話もあるが、キャベツの例と同じように、どこまでが事実かはよくわからない。噂をする女房たちも事実を求めているのではなく、島さんの妻に対する共通の反感をたのめばいいので、話の真偽は問わないのであった。

島さんはこの「街」へ移つて来るとすぐ、古物商の小田滝三を

呼んで払い物をした。

家財道具を売ってその土地を去る。つまり世帯じまいをする、という話はあるが、引越して来てすぐに家財道具を売る、という例はあまり例がないだろう。——しかもそれらは、まだ新しそう
なうえに高価らしい品にみえた。鉄の釜かま、大きな鉄鍋てつなべ、南部の鉄瓶てつびん、金銀の象眼ぞうがんのある南部鉄の火箸ひばし。また桑材の茶筴筒ちやだんす、総桐の長火鉢、鏡台、春慶塗の卓その他で、小田滝三は眼をむいた。

「こういう出物になると」小田滝三は尊敬のあまりしりごみをして云った、「とてもわたし独りでは仕切りきれません、たて場に有力者がいますから、それに来てもらってもいいでしょうか」

島さんはよかろうと答えた。

「おい、大儲おおもうけだぞ」うちへ帰った小田滝三は、昂奮こうふんのあま
り息をはずませて妻に云った、「何年にもお眼にかかったことの
ねえ大きな世帯じまい——じゃあねえな、引越して来たばかりな
んだからな、こんなのはなんて云うんだろう」

立場から呼ばれて来た有力者というのは、さすが有力者だけあ
つて具眼の士らしく、それらの品を見てもたじろぐようすは少し
もなかった。初めにひとわたり眺めまわし、それからおもむろに、
これと思わしい物を手に取ってみたが、それはほんの二つか三つ
で、あとは興味もないというふうに、向き直つてタバコに火をつ
けた。

「四月にしちや冷えるな」有力者は誰にともなくそう呟いた、

「このぶんじやあ花もおくれるこつたろう」

小田滝三は有力者のようすに驚き、島さんの顔色をうかがった。島さんは気楽そうに、明るく笑いながら有力者にあいづちをうち、有力者は急に話を変えた。

「旦那はこれを幾らでお売んなさるつもりかね」

「高いほどいいね、僕は」島さんはにやつとした、「これはみんないわくのある品なんだ、手放すのは惜しいんだ、ほんとに、そのその釜なんぞは特にね」

そして各品について、それぞれの伝来や由緒や、秘話などを詳しく語りだし、まるでお家騒動の芝居ばなしのような雰^{ふん}圍^{いき}気が展

開したため、小田滝三は魅入られるような気分になったが、有力者はタバコをふかしながら、依然として四月にしては冷えすぎるとでも云いたげな顔をしていた。

「そういう話は話として」と有力者はやがて云った、「旦那はいつたいどのくらいなら、これをお払いになる目算ですか」

島さんが金額を云うと、有力者は首を振った。

「だめですな」有力者はタバコを灰皿で揉み消しながら云った、「とても相談にならない、^{けた}桁がちがいます、私もだてにこんなしようにばいをしているんじゃないやあねえんですから、おい滝さん、失礼しよう」

そうして、小田滝三といっしよに帰ってしまった。

小田滝三はわけがわからないので戸惑い、外へ出るといそいで理由をきいた。有力者は鼻をならして、あれらの品は全部いかさまだということを、その道の術語で云った。長火鉢の桐は張ったものだし、桑材の茶箆筒も、春慶塗の卓も、塗料を使ってそれらしい色と木目を付けたものであり、南部鉄の火箸も金銀の象眼ではなく、真しんちゆう鋤ゆうとニツケルのメツキだという。鍋も釜も底に穴があいていて、屑鉄の値にしかならない。どれ一つとしてまともな品はない、あんな物にうっかり手を出すとひどいめにあうぜ、と有力者は注意した。

小田滝三は頭を搔かいて、こんなこととは知らないものだから、

大事な暇をつぶさせて申し訳がないと、繰り返しあやまった。

「髭なんぞ立てやがって」と有力者は云った、「——へ、ふざけた野郎だ」

島さんはべつの古物商を呼んで来て、それらの品を始末したらしい。右隣りの富川さん夫婦の話によると、小田滝三の呼ばれた次の夜、もう九時すぎたじぶん、島さんの家で器物を動かす音と、低い声で値段のかけあいをしているのが聞えたそうである。

「身につまされたね」と富川さんは云った、「引越して来たばかりだからな、引越して来たばかりでまた、もう世帯じまいをするのかと思つたからね」

もちろん誤解であつたし、島さんはそれから数日のちに、近隣

の人たちを招いて酒をふるまった。

「晩めしのあとで来て下さい」島さんはそう云つて廻つた、「なんにもありません、ほんの顔つなぎだと思つて下さい」

彼は十四、五軒をそう云つて廻つたが、実際に来た客は五人だけであつた。来なかつた人たちの大部分は、明日のたべ物を稼かせぐため、外へはたらきに出るとか、内職の夜なべで手があかなかつたのだ。

五人の客の中に、みんなから先生と呼ばれる、五十年輩の男がいた。背丈は一メートル五十ちよつとで、痩せていて白髪頭で、しかしまつ黒な口髭をぴんとはね、やはりまつ黒な顎あご鬚ひげをたくわえていた。眉毛も黒くて太く、その下にある眼は並はずれて大

きく、人を見るとときには、いや笑うときでさえも、まるで威嚇するようになぎよろつと光った。——すり切れて地の薄くなった、黒というよりは小豆色にちかいモーニングに、膝ひざのところがまるくふくれた縞ズボンをはき、そのくせ靴下なしの素足であった。

「ごめん」先生は戸口で云った、「お招きにあずかって参上した、かんどうせいきようという浪人者です、よろしく」

ごめん、という古風な云いかたと、先生の大時代な恰好と、そして例のぎよろつとした眼を見て、島さんはなにも感じなかったのだろうか、まるで十年の知己に会ったかのように、白い歯をみせてあいそよく笑い、さあどうぞと手を振った。先生はすぐには

あがろうとせず、モーニングの胸ポケットから、一枚の大きな名刺を出して島さんに渡した。——一般のものより三倍くらい大きな名刺で、それには「憂国塾塾頭 寒藤清郷」と大きな活字で印刷してあった。それは使い古したものとみえ、手垢てあかでよごれ、四隅がめくれていた。

かんどうせいきようと読みながら気がつくと、寒藤先生が片手を出していた。

「やあどうも」と島さんは云った、「僕の名刺はいま刷らせているところですよ、古いやつは捨てちまったものですよから、失礼します」

そりやあ構わんよ、と云ったけれど、寒藤先生は手を引込めよ

うとはしなかった。島さんはすぐにそれと気づき、持っていた先生の名刺を先生に返した。そこで寒藤先生はもとのポケットへ慎重にそれをしまい、ちびた下駄をぬいであがった。

そこにはすでに古物商の小田滝三と、右隣りの富川十三夫と、たんば老人が来てい、互いに挨拶を交わしながら、寒藤先生はいちばん奥へいつて坐った。そのあとから岡田辰弥たつやが来たのだが、詰衿の服にまる刈りの坊主頭で、島さんの眼には十四、五の少年としかみえず、酒を飲むのだから子供は遠慮してくれと、なだめるように断わった。

「僕は子供じゃありません」と岡田辰弥は答えた、「これでも一家の主人ですよ」

「そうだ、それは失敬だが島くんの誤解だ」と寒藤先生が云った、
「岡田少年はとしこそ十九だが、五人家族の主人であり立派に生
活をいとなんでおる、酒も飲める」

あがりたまえ、と云いかけたとき、島さんのデリケートな持病
が活動し始め、岡田辰弥はびつくりして逃げ腰になった。第一の
ウイנקに続いて、顔ぜんたいの造作がそれぞれ勝手に痙攣し、
なにかが島さんの喉の奥でごろごろ鳴りだしたので、「帰れ」と
いう激しい拒絶の表現だと思つたらしい。

島さんは手まねで岡田少年を制し、そのうちに喉を這い登つた
ものが、けけけけふん、と鼻へ抜けたので、島さんはにこつと笑
つて云つた。

「あがりたまえ」

あとの客は来ない、とわかつたので、島さんは酒を出した。

部屋は六帖一と間しかない。そこへちやぶ台一つと、なにかの空箱を重ねて並べ、その上へ張板を二枚のせたのが食卓で、洗った敷布が掛けてあるから、中の仕掛は見えないけれども、肱を突いたりよりかかったりすると、ひとたまりもなく解躰してしまうから、島さんは初めに念を押して断わつた。

部屋には古くて傷だらけの筆筒と、鏡にひびの入つた鏡台と、やなぎこうり柳行李と瀬戸の火鉢、などが眼につくだけで、ほかにこれとい

う家財道具はみあたらなかつたが、六帖の広さには変りがないか

ら、主人と客たちが食卓を囲むと、もう身動きもできないように思われた。

二リツトルびん壇びんに半分の酒と二リツトルそっくり詰っている焼しょう酎ちゆうが出され、大きなどんぶりばち井鉢どんぶりばちの片方にあみの佃煮つくだに、片方に大根なます、どっちも山盛りになっていて、取り箸がいちぜんさかずき盃さかずきの代りには茶飲み茶碗が六個、——みんな大きさも形もまちまちであるし、そのうち三個は、隣りの富川さんから借りたものであった。

「きまりきった挨拶はやめ」と云って島さんはごくつとおじぎをした、「僕は島悠吉ゆうきち、——どうかよろしく」

「それがきまり文句だ」と寒藤先生は茶碗を取り、それに焼酎を

注ぎながら云った、「——よろしくと云われたって、ここの住民には人の面倒をみる能力を持った人間は一人もおらん、きみ自身もそんなことを考えちやおらんだろう」

「あ痛」と島さんは胸を押えた。

「かりそめにも」と寒藤先生は云った、「男子たる者が心にもないことを云うものじゃない」

そして持っている茶碗を上にあげて、「いただく」と云い、ぐつと一と息に飲んだ。

「さあ、諸君もどうぞ」島さんは他の四人に向って、明るい笑顔をみせながら云った、「摘み物はおのおの手にのせてやって下さい、古代ローマでは帝王も貴族もみな手づかみで喰べたものです、

僕はここで、——不義なる富と虚飾をわらって飲もう、と云いた
いところですが」

「帝王や貴族にまねるのなら」と岡田少年が云った、「富や虚飾
をわらうことはできませんね」

寒藤先生がばかげた声をだして笑い、島さんはまた「痛い」と
いうふうに胸を押えて、云った。

「ブルータスよおんみもか」

「自由だ、解放だ」と岡田少年が云った、「圧制は崩壊した」

島さんは頬へ平手打ちでもくったように眼をみはり、すると例
のデリケートな発作がおこった。岡田辰弥少年はいま経験したば
かりだし、隣りの富川さんと小田滝三はすでにその病癥を知って

いた。けれども寒藤清郷とたんば老人の二人は初めてなので、いちどは驚いたが、次には深い興味を^{そそ}唆られたとみえ、島さんの顔面にあらわれる無秩序な、むしろ乱脈ともいえる神経痙攣の経過を見まもっていた。

島さんは見られることに馴れているのだろうか、例のものが喉から鼻へ抜けるまで、ゆうゆうと発作に身を任せていて、それが終るといさましく笑った。

「これはサプライズだ」と島さんは岡田少年に云った、「きみはシエクスピアを知ってるんだね」

「岡田少年は英語の天才だ」寒藤先生が代って答えた、「ひるま

は大新聞社に勤務し、夕方からは正則英語学校の夜学にかよつておる、将来は大英語学者になる人物なんだ」

「それは洋々たるものですね、きみ岡田くん」と云つて島さんは右手を差出した、「握手をしよう」

それから酒がまわり始め、寒藤先生が「細君はどうした」と云つた。細君に一杯酌がしてもらいたい、客を迎えるのに一家の主婦が顔を見せないという法はない、と主張したが、島さんは「使いに出ているがもう帰るでしょう」と答えただけであつた。

島さんの妻は、——あとでわかつたことだが、決して客の前へは出ない。近所づきあいもしないように、島さんのどんな親しい友人が来ても、挨拶はもとより、一杯の茶を出そうともしないの

である。この「街」のかみさんたちは、顔の痣あざを見られたくないからであろう、と云っているが、そんな女らしい羞恥心しゆうちしんからでないことは、良人の島さんがよく知っているようであった。

「ちよつと諸君にきくが」島さんが急に、あらたまつた調子で云つた、「諸君は米屋からただで米を略奪したことがあるかね」

「借り倒しなら」と寒藤先生が答えた、「僕はその道の達人だ」
「いやそうじゃない、借りるんじゃない、略奪するんだ、それも正々堂々とき、どうだい諸君」

誰も返辞をせず、好奇心をおこすようすさえなかつた。この「街」の住人たちはひつくるめて、うまい話、というものを信じない。かれらはうまい話にとびついたため、これまでに幾たびと

なく裏切られた覚えがある。かれらにとって、この世にうまい話があるなどは、とうてい信じられなくなっていたのだ。

「それなら教えよう」

と島さんは云った。

まず鉄の釜の内部を水で濡らしてから、知らない米屋へゆき、米を二キロ計って入れさせる。二キロ以上でも以下でもいけない、というわけは心理学の応用問題だから略すが、二キロの米が釜の中に計り入れられたら、これを貸してもらえないかと問いかける。知らない顔だからたいてい断わるだろう、断われたら残念そうに、ではまたこの次にしよう、と云って釜の中の米をあけて返す。釜の内部は濡れているから、米粒のおよそ一と側は貼り付いて残

る。

島さんがそこまで話したとき、岡田少年が口をはさんだ。

「それは落語ですよ」と岡田少年は云った、「ええ、たしか^{ざら}箎でもって同じようなことをする落語がありますね、ラジオで聞きましたよ」

「そうじゃない、違うんだ」島さんはにこつと笑った、「はなしかつてやつは独り合点でよくまちがったことを云うがね、これは箎じゃあ絶対にだめなんだ」

岡田少年は黙り、他の四人は初めて島さんに注意を向けた。

「というのはだね」と島さんは続けた、「これが箎だとすると、

さかさまにして底をはたかれる、米はきれいにはたき出されてしまうんだ、わかるね」

岡田少年のほかの四人はかすかに頷いた。うなず

「そこへゆくとさ」島さんは云った、「そこへゆくと鉄の釜はそうはいかない、底には煤すすが付いているし、それ自体が重いから、さかさまにしてはたくというわけにはいかないんだ」

「そればかりじゃない」

島さんはそこで調子を高めた。

「鉄の成分にあるイオンが米粒に触れると、化学作用をおこして一種のアルカロイド物質が生じるんだな」

「アルカロイド？」岡田少年がびっくりしたような声をあげた。

「いや」島さんは口ごもった、「いや、アルデハイドだったかな、いや、やっぱりアルカロイドだったと思うがね、まあそんなことはどっちでもいい、とにかく鉄と米粒の接触によつて或る化学作用がおこり、接触した米粒がはなれにくくなるんだ」

したがつて、筴などとは比較にならない量が釜に付いて残る。これを二軒か三軒やつて廻れば、五百グラムぐらいの米は確実に集まる、というのであつた。

「こんなことぐらい知らないとすれば」と島さんは結論をつけた、「諸君はまだまだ本当の貧乏は知らないと云えるだろうね」

「あたしなんざ、恥ずかしいが」と小田滝三が云つた、「まだ鉄の釜つて物を使ったことがないんですよ、ええ、親の代からもう

土釜だもんでしたから」

「そんなことがなんだ、めしは土釜で炊くのがいちばんうまいんだぞ」と寒藤先生がきめつけた、「いずれにせよ、男子たるものがめしのことなんぞに頭をひねくるといふのはばかくさい話だ、島くん、きみはいまの政界をどう思うか、きみの意見を聞かしてもらおうじゃないか、どうだ」

小田滝三は水つぽい酒を啜りながら、いよいよせつぱ詰つたときのために、島さんの米を略奪する方法が嘘か本当か、一度せびためきの啓さんにきいてみなければならぬ、と考えていた。

岡田少年はときを計って、たんば老人の茶碗に酒を注いでやり、老人はにやっと微笑して頷き、黙ったまま、けれどもたのしそう

に少しずつ啜りながら、みんなの話を吟味するように聞いていた。寒藤先生は島さんを、政界の問題へひきずり込み、そこへ釘付くぎづつけにしようとした。島さんは明らかにその問題が嫌いとも見え、そこから脱出しようとして、持ち技のある限りをこころみているようであつた。

「そうだ、そうだ」とついに島さんは云つた、「あなたはライガ―総理にそっくりだ」

島さんはついに、政界問題からの脱出口を発見したことを知つた。彼は猛牛に鼻環はなわをはめたのであつた。

寒藤先生の表情がなごやかになり、口が横へぐつと一文字にひ

ろがった。

「僕は誰かに似ていると思つていたんだが」と島さんは云つた、
「そうだ、まちがいなく浜内ライガー首相だ、あなたのその口の
あたりは総理にそっくりだ、ねえ諸君」

富川十三夫が初めて、ライガーとはなんですかと質問し、島さ
んが、それはライオンとタイガーと交尾して生れた混血獣であり、
だがそれは「一代限り」で、後継者は生れない、と説明するあい
だに、寒藤先生の口はますますしつかりと、あたかも浜内ライガ
ー首相それ自身であるかのように、横へひろがり、上唇にふくら
みをあらわしていた。

「うん、人は可愛かわいがつておくもんだよ」と寒藤先生は表情を崩さ

ないように、注意しながら云った、「——彼が某省の次官でくすぶつておつたころ、僕は太夕紙の社会部長だったが、みどころのあるやつだと思つたから局長の反対を押しきつて、彼のためによくトツプ記事を書いてやつたものさ」

「うん、人は可愛がつておくべきものだ」と寒藤先生は大きな口髭を捻ひねりながら、感慨ふかそうに頷いて続けた、「次官なんぞでくすぶつていたあの男が、いまでは浜内ライガー首相、一国の総理大臣にのしあがつたんだからな」

たしかに似ている、どうしていままで気がつかなくつたのか自分でも合点がいかない、と富川さんが初めて口をきいた。

「やめてくれ、せいしゆく」と寒藤先生が叫んだ、「諸君はそう

云つてくれるが、僕はうれしくない、なんだ浜内ごときが」

そして拳こぶしをあげて、いさましく食卓を打った。島さんがとめようとしたけれどもまにあわず、テーブル・クロスであるところの敷布の下の仕掛は分解し、やかましい物音とともに酒壇や茶碗や并鉢などが転げ落ち、張板の片方がはねあがり、寒藤先生は力あまつて前のめりになった。

つづめていえば、それが宴の終りであつた。富川さんは自分が貸した茶碗を捜し集め、三個とも無事であつたことを慥たしかめるのにいそがしかつたし、寒藤先生はモーニングの衿のところを、鼠色になつたハンカチーフで熱心にこすっている。小田滝三は雑巾を取りに勝手へ走り、岡田少年とたんば老人は立ちあがつたまま、

あつけにとられている。そして島さんは、收拾のつかなくなつた食卓の残骸を眺めながら、もういちどそれを組立てる氣力が、自分にはもうないということ認め、こんなときにこそ例のデリケイトな発作がおこつてくれればいいのに、とでもいうのか、鼻や口をしきりにもぐもぐうごめかせていた。

島さんがどういう勤めをしているのか、誰も知らなかつた。^{もつと}尤もこの「街」では大部分の者がそうであつたし、それを詮^{せんさく}索するようなひまじんは数えるほどこしかなかつた。

そのひまじんの一人が、島さんの左隣りにいた。徳さんというひとり者で、本通りの向うに大きな繩張を持つている「築正」親

分のみうちだ、ということ^{ばくちう}を極秘でたれかれに耳うちをしている。本職の博奕打ちだ、と云いたいのであろう。としは四十がらみで、中肉中背のどこといつて特徴のない、平凡で穏やかな人柄であつた。

「あれはどうやら、ね」と徳さんは或るとき囁き^{ささや}声で告げた、

「高利貸の出前持ち、じゃなかつた、御用聞き、でもないか、つまり貸し金の取立てをやるやつさ、なんというのか、ね、——島さん夫婦の話しているのを聞いたんだが、どうもそんなようなからくりだとにらんだ、ね」

「どうもおかしい、あつしにはちよいと腑^ふにおちないんだが」徳さんはべつ^{べつ}のときにまた囁いた、「あれは高利貸しのお先棒じゃ

ない、どうも探偵社のようなところへ勤めてるらしい、ね、探偵社の勧誘員かなにかだとにらんだ、それが慥かなところらしいよ」彼は次には、島さんを三百代言だと推察し、次にはなにか汚職関係で警察に手配されているため、こんなところに身をひそめているらしい、とにらんだ。そして次にはまた、――

これらはみな夜のしじまに、薄い壁ひとえ隣りから、話し声を聞いてさぐりだした情報であるが、だれにしろかれにしろ、まじめには受けとらなかつたし、もともとそんな他人のことなどに関心はなかつたのである。

島さんはたいてい十時ごろに家をでかけてゆき、帰りの時刻はまちまちである。夕方のときもあれば、夜半に帰ることもあった。

島さんはいつもきちんとしていた。古いけれども注文製らしい背広に、黒いソフト。自分で磨くのだそうだが、靴もきれいに手入れがしてあり、ステツキを左の腕に掛けていた。

「やあ、お早う」家から出て誰かに会うと、口髭の濃い上品な顔いっばいに笑いをうかべ、右手でソフトをちよつと持ちあげて挨拶する、「いい天気だね、景気はどうです」

「やあ、よく精が出ますね」と女性か老人のときにはやさしく云う、「坊やの風邪はどうです、熱はさがりましたか」

こういうあいそを云わないときでも、顔いっばいに笑って、こくんとおじぎをしながら、「やあ」と明るい声で会釈することは決して忘れなかった。

そうして、ステツキを腕に掛けた島さんが、軀を一方にかしげ、次に反対側へかしげ、また一方へかしげながらあゆみ去る姿にも、そんなあるきぶりをたのしんでいるようにみえ、すると人びとは島さんに対して、尊敬とあたたかいしたしみを感じるのであつた。

島さんは「街」へ移つて来て二た月めくらいに、なにがし興信所へ就職した。

彼は古物商の小田滝三と、隣りの富川さん、そして寒藤先生と岡田辰弥少年の四人に、新しい名刺を出してそれを告げた。

「こんどまた一杯やろう」と島さんは岡田少年に云つた、「英語のほうはどうだ、夜学へはちやんとかよっているのかい」

少年は首を振った、「夜学じゃありません、午後の部です、まだかよつてますよ」

彼の勤めている大新聞社の係長が、彼を夜勤にまわしてくれたので、学校の午後の部へかよえるようになったのだ、と少年は簡単に説明した。

「じゃあ近いうちに」と島さんは云った、「こんどはビールで盛大にやるよ」

だが、盛大なビールの宴は実現しなかった。島さんは勤勉に興信所へかよい、人に会うと明朗に笑い、誰とでも気軽に立ち話をした。けれども、隣りの富川さんですら、茶をのみにいちど呼ばれたためしもなかった。

島さんの妻は、相変らず近所づきあいをせず、外で誰に会つても知らん顔をしていた。尤も、高ぶつていたりとか、相手を軽蔑しているとかいうのではなく、つめたいとさえも感じられないほどの無関心——空の雲ゆきについて犬が無関心であるような無関心を示すだけ、と云うようであつた。

近所の細君たちは、彼女のことを「奥さん」と呼んでいた。この種の「街」で奥さんというのは、例外なしに蔑称であることが共通しているし、またしばしば「おきちさん」というのも同意語で、それはどこか尋常でないもの、きちがいじみているもの、という意味をあらわしていた。

「おどろいたよ、あたしは」とかみさんの一人が云う、「島さん

ちじやあ島さんが煮炊きして、あの奥さんはそれをふところ手で眺めてるよ、あんな夫婦つてあるかしら」

「徳さんの話だけどね」と他のかみさんが云う、「島さんちには客もないし、いつも二人つきりだろう、それで話をするのは島さんだけで、奥さんは黙りつきりなんだつて、ときたま聞えたと思うと、うるさいね、とか、少し黙つてな、とかつて、どなるだけなんだつて、それつきりまたしんとなつちやうんだつてよ」

こういう蔭口には際きりのないものだが、右にあげた二つなどは尾お鰭ひれの付かない例にはいるだろう。夏が去り、秋が去り、冬が来て十一月の下旬、——島さんの家には珍しくも客があり、酒が始まった。

それは月給日のことで、客は三人。なにがし興信所における島さんの同僚たちであつた。客を同伴することは予告してあつたのだらう、電燈がついてから帰つた島さんは、たてつけの悪い格子をあけながら、陽気な声で叫んだ。

「おい、お客さんだよ」

しかし家の中から返辞は聞えて来なかつた。

障子には燭光の弱い電燈の明りがさしているし、中で人の動くけはいもするが、はいとも、お帰りなさいとも、云う者はなかつた。

客の三人は眼を見交わした。

「どうぞはいりたまえ」島さんは元気に云った、「遠慮されるよ
うな邸宅じゃあない、さあどうぞ」

三人は狭い土間へはいつて、帽子をぬぎ、オーバーをぬいだ。
そして島さんのあとから、互いに軀からだをぶつつけあいながら部屋へ
あがった。

片方の障子があいていて、そこに一人の大きな女のいるのが、
客たちに見えた。女とは云うまでもなく島さんの妻であり、そこ
は勝手に、女は煉炭火鉢のぐあいをみているらしい。

「おい、お客さんだよ」島さんはまた云った、「ちよつと来てご
挨拶しないか」

「めんどくさい火だね、ちつ」奥さんは煉炭火鉢に向つて舌打

ちをした、「ああ癩かんしゃく癩かんしゃくがおこる、しとのうちへのこのこ、たかりに来る野郎どもがいるからこんなめんどくさいことをしなきゃならないんだ、ちっ、なんて火だろう」

「今日の文書部長の顔はおもしろかったね、松井くん」と島さんは妻の独り言をかき消そうとするように、高い声で云いだした、「——まるであれだよ、そら、タバコへ火をつけたら、それがはじけタバコでさ」

「ぱちんとはじけたので眼を剥いた、って凶だったな」と松井くんが云った、「島くんはうまいことを云うよ、まったくそのとおりだったね」

「鼻の先でぱちんとさ」と島さんが云った、「ふつうのタバコだ

とばかり思つて火をつけたら、ぱちん」

三人の客はおもしろくつてがまんができない、ということを証明しようとするかのように、口をあいて笑つた。

そこへ奥さんが出て来た。客たちは彼女の^{たいく}軀軀の大きいのと、顔にあらわれた異常さ、——痣があるという意味ではなく、あの非人間的な無関心、この世のあらゆる事物を認めようとしなない、完全な無関心を示す表情に、胆を抜かれた。

「きみ、こちらが井河くん」と島さんは客を紹介した、「こちらが野本くん、松井くん、諸君、僕のワイフです」

三人の客は紹介された順に、ズボンの膝を気にしながら、坐り直してそれぞれの名をなおり、「よろしく」と挨拶した。しかし

奥さんはなにも聞えず、なにも眼にはいらぬようすで、低く鼻唄をうたいながら、そこへちやぶ台を押しやり、勝手から大きな井を二つ、片方にはあみの佃煮、片方には福神漬が、それぞれ山盛りになっていゝるのを持つて来て、ちやぶ台の上へ放りだした。誇張して云うのではない、文字どおり放りだしたので、二つの大井はいまにも転げそうに、左右へ二、三度もひつかしがり、福神漬は一と握りほどこぼれ落ちたため、松井くんは慌てて膝を横へ向けた。

島さんはすばしこく手を伸ばして、二つの井を安定させながら、松井くんのほうを見た。井の一つから福神漬が汁といっしょに、

一と握りほどこぼれ、松井くんが慌てて膝をよけたからだ。月賦のズボンをよごしたのではないか、二つの井を安定させながら、島さんはそう問いかけようとしたのであるが、その瞬間にいつもの発作が起こり、それがけけけけふんと鼻へ抜けるまで、問いかけを待たなければならなかった。

「オツケー、大丈夫だ」

松井くんはズボンの膝を撫なでながら答え、眼の隅で勝手のほうをにらんだ。島さんは品のいい顔をほころばし、はじけタバコについて語りだした。三人の客たちは、怒りをいっばいに詰めた風船だまのような顔になり、それでも島さんの胸の中がどんなであるかを推察して、しらけた気分を隠しながら、島さんの話にあい

づちを打った。

そこへ奥さんが勝手から出て来た。片手に風呂道具を抱え、片手に手拭をぶらさげて、口には火のついたタバコを啜くわえていた。

「湯へいつて来るからね」と奥さんは云った、「火はおこつてるよ」

そして鼻唄をうたい、ぶらさげた手拭を振りながら、大おお股またに出た。客たちは眼を見交わし、島さんは陽気にしやべりながら、軀を振り振り立って行って、勝手に酒の燗かんをつけ、——それはガス台でやるのだが、次に二十センチ四方ばかりの板を持って来て、ちやぶ台の脇に置き、さらに煉炭火鉢を抱えて来て、その板の上へしつかりと据えた。このあいだも島さんは休みなしに

話し続け、盃や取皿や箸をはこび、湯豆腐の具のはいったニューム鍋や、薬味汁の小鉢を四つ配り、それから爛のついた二合徳利を持って来て、ようやく自分の席に戻った。

「この湯豆腐はうちの自慢でね」と島さんは云いかけ、やあ、かんじんの鍋を忘れた、と立ちあがりそうにしたが、僕が取って来ましよう、井河くんがすばやく立っていった。

三人は心の中で涙ぐんでいた。足が不自由で、顔面に神経痙攣の持病をもち、しかも陽気で明るく、紳士のような風貌の島くんが、あんな女相撲の大関みたような、ばかでかくて無神経で、冷血動物のような細君の暴慢な態度を叱りもせず、客をもてなすために独りで奔走している姿は、男同志として、平静な気分で眺め

ていられるけしきではなかったからだ。

「さあ、井河くんからいこう」島さんは徳利を持った、「この中ではきみがいちばん若いんだろう、松井くんはジュニアがいたんだっけね」

「それは僕だ」と野本くんが云った、「松井くんは結婚して十年になるがまだ子供はない」

そしてむっと口をつぐんだ。

島さんは戸惑ったように、湯豆腐の鍋のかげんをみた。野本くんの言葉は、口から棒切れでも吐きだすような調子で、その棒切れの一つずつが、彼の感情に棘とげの生えたことを示すように聞えた

のだ。

島さんは鼻と口をもぐもぐさせた。こんなときに例の発作がおこってくれば、話題の転換の助けになるのだが、こういうときに限って、発作のやつはそっぽを向いたまま、協力しようとしなないのであった。

「今朝は痛いけしきを見たよ」と島さんは云った、「いつもより早く出て、ちよつと自分の仕事をしていたんだがね、そこへ外国部次長の二平さんが来たんだ、あの人はいつも居眠りばかりしているだろう」

「あれはもう芸の一つですね」と井河くんが云った、「タイプを打つのは一日にせいぜい五通くらいなものでしょう、大事なもの

は部長がみんなやっちゃうからね」

「中村部長は英語が達人なんだ」と松井くんが云った、「法明大学の夜間部の教授をしているくらいだから、しゃべらせてもアクセントが違うよ、アクセントがね」

島さんは湯豆腐の鍋へ、それぞれの食品を入れながら、二平さんが一日じゅう居眠りをしているようすを、身振り入りで語り、上品に笑い、デリケートな発作が過ぎ去るのを待って、話を戻した。

「僕はデスクの上に自分の仕事をひろげていた、文書部の者はまだ誰も来ない、社長秘書の黒板くんがちよつと顔を出したな、――さあ諸君、箸を取ってくれたまえ」島さんは煮えてきた湯豆腐

のほうへ手を振り、三人に酌をして続けた、「やがて二平さんが来たね、例のとぼけたような顔で、角のやぶけた靴かばんを抱えて、口スタン流に言えば鉛の靴をはかされたみたいだな足どりでさ、ゆっくりかんと自分のデスクへゆき、靴を置いて大きな欠伸あくびをした、彼の日課の開幕というところだ」

野本くんはあみの佃煮を口へほうりこみ、手酌で酒を三杯ながしこんだ。

「さて靴をあけて中の物を出し、タイプライターの蔽おおいをとった、そこへ会計部長がいそぎ足で入社して来たんだ、と、二平さんを見るなり、やあ、速達が届きませんでしたか、と云った」島さんは可笑おかしそうに、白いきれいな歯をみせて笑った、「やあ、二平

さん速達が届きませんでしたか、ってね、そしてそのままいそぎ足で会計部のほうへいつちまったよ」

「あの人はいつもいそぎ足だ」と松井くんが云った、「いつものなにかを追っかけてるようだ」

「二平さんの顔がさつと変るのを僕は見た」と島さんが云った、「あのねぼけたような顔がきゅつとちぢまり、まつさおになつて、いつとき呼吸が止つたようだった、僕はこの眼でそれを見たんだ」

若い井河くんは自分の箸を持ってちやぶ台をまわり、鍋の脇に坐つて、自分たち三人の取皿に、湯豆腐とぐをよそい、二つを松井くんと野本くんの前へ押しやると、自分はすぐさま喰べはじめ

た。

「僕にはなんのこともわからなかった」と島さんは云っていた、
「速達とはなんのことだろう、と思っているとき、二平さんはい
まデスクの上へ出した物を鞆の中へ戻し、タイプライターへ蔽い
を掛け、その蔽いの上からタイプライターをそつと撫でたね、二
十秒ばかりそうやっていたかね、まもなく鞆を取って抱え、あの
型の崩れた古いソフトをかぶって、なにも云わずに帰っていった」
「速達は解雇通知さ」松井くんが云った、「外国部のサラリーは
二十日に出るんだが、サラリー分はきっちり働かせたわけだろう
さ」

「二平さん速達が届きませんでしたか」島さんはこわいろを使っ

て云った、「それで終りだ、あの人は十幾年か勤めたそうだが、それが一通の速達でオール・イツ・オヴァ、二平さんがタイプライターを撫でていたのは、それだけが別れを惜しむ相手だったからだろうね」

「ああ居眠りばかりしていたんじや、友達もできやしないさ」と松井くんが云った、「細君と子供が五人、いちばん下はまだ幼稚園だそうだ」

野本くんは黙って飲み、あみの佃煮ばかり喰べていた。彼の感情に生えた棘はますます太くするどくなるばかりで、彼はそれますます太くするどくなるのを、あみの佃煮と酒とで助長しているようであった。

話は同僚やら課長、部長などのうわさが続いた。それが悪口やおひやりかして占められるのは、こういう場合の常識であろう。中でも島さんの表現がいちばん辛辣しんらつであり、井河くんや松井くんは幾たびも声をあげて笑わされた。

野本くんだけは黙っていた。彼がいちばん多く飲み、誰よりも先に赤くなつたが、いつかその赤みは消えて、顔は白つぽく硬こわばり、眼がすわつてきていた。

「きみ、島くん」野本くんはやがて、うるんだような声で問いかけた、「——僕たちは今日は、招かれざる客じやなかつたのかい」「どうして」島さんの顔に発作がおこり、それが鼻へぬけるまで答えがとぎれた、「僕がなにか気にいらぬことでも云つたかい」

「きみはいい人だ、じつにいい人だよ、それは僕が保証する」

野本くんは十円印紙を証文に貼るような口ぶりで云い、次に本題へはいろいろとしながら、もつとも簡単に効果的な言葉はないかと、頭の中で記憶のページをめくってみたが、適当なやつが思いだせないというようすで、おもむろに唇を舐めた。

「しかしあの女はなんだ」野本くんは唇を舐めてからいきなり云った、「きみは僕のワイフだと紹介した、だから僕たちは、僕はそう信じた、信じたればこそ頭をさげて挨拶したんだ」

「そうか、済まない」島さんはこくんとおじきをし、歯をみせて明るく笑った、「それは僕があやまる、なにしろ野人のうえにわ

がまま者なんで」

「きみにあやまってもらうことはない、僕はきみを責めているんじゃないんだ」と野本くんがさえぎって云った、「きみはいい人だし、僕はきみのために人間的義憤を感じているんだ、なんだいあの女は、あれでも人の妻だと云えるのかい」

松井くんが割ってはいろいろとしたが、野本くんは手を振って拒み、自分で自分の言葉に感動しながら続けた。

「僕はいい、僕たちに対する無礼はいいよ、だが良人おっとであるきみに対するあのやりかたはなんだ、主人が勤めから帰ったのに、お帰りなさいとも云わない、客があるのに挨拶はおろか茶も出さない、おまけに湯へいつてくる、火はおこってるよって、冗談じゃ

ない、どこの世界にそんな女房があるもんか、僕ならたつたいま叩き出してやるよ」

「だからさ、野本くん、それは僕があやまるから」

「きみを責めてるんじゃないって云つたらう、きみはいい人だ、きみがあやまることはないんだ」と野本くんは泣き声で云つた、

「僕たちにあやまるより、きみはあの女を叩き出すべきだ、男同志として云うが、あんな女は」

そこで事態が転回した。野本くんが終りまで云いきらないうちに、島さんが立ちあがってとびかかった。片足が短いとは信じられないほどすばやく、野本くんにとびかかり、押し倒して馬乗りになった。野本くんは肥えてはいないけれども、背丈は高く骨太

なので、人並より小柄な島さんが馬乗りになったところは、不安定というよりも反自然な印象を与えた。

「なにを云うんだ、きみはなにを云うんだ」島さんは相手の肩を押えつけながら、吃り吃り叫んだ、^{ども}「僕のワイフがきみになにかしたんならともかく、なんにもしないからといって叩き出せとはなんだ」

「まあ島くん」と松井くんが云った、「まあきみ、乱暴なことはよしたまえ」

「いいから構わないでくれ」と野本くんは仰向きに押えつけられたままで云った、「島くんの云い分を聞こうじゃないか」

「あれは僕のワイフだ」島さんは齒をくいしばった声で云った、

「きみたちには三文の値打もないとみえるかもしれないが、あいつは僕のために苦労してきたんだ、食う物がなくて水ばかり飲むような生活にも、辛抱してきてくれたんだ」

松井くんも井河くんもしゅんとなり、野本くんは顔をそむけた。「きみたちは知るまいが」と島さんは続けた、「米屋からただで米をめしあげるには、鉄の釜を濡らすのがいちばんだ、ということとまでためさなければならぬほどの貧乏にも、あいつは耐えぬいてくれたんだ、それをなんだ、なんの権利があつてきみは、叩き出せなんて云うんだ、え、きみにどんな権利があるんだ」

島さんは一と言わずに野本くんの肩を押しつけた。とびかかっ

たときの勢いでは、殴るか首を絞めでもするかとみえたが、島さんはパン屋が小麦粉をこねでもするように、細い腕でただもう野本くんの肩をぐいぐい押しつけるばかりであった。

「わかった、もうよそう」と野本くんが云った、「僕の失言だ、あやまるよ」

島さんは野本くんの上からおり、苦しそうに喘あえぎながら、元のところへ戻っていつて坐った。同時に顔面の発作がおこり、喉のどをなにかが這いのぼって、陽気な音声となって鼻へぬけた。

野本くんは起きあがって、ネクタイや上衣の乱れを直し、井河くんは湯豆腐の鍋の中を覗のぞき、松井くんはその場の緊張した空気をほぐすために、なにか突飛な話題をひねりだそうとしているよ

うにみえた。それは時間にして十秒くらいのものだったであろう。松井くんが突飛な話題をひねりだすまえに、表のたてつけの悪い格子があいて閉り、障子をあけて閉めて、島さんの妻がはいつて来た。片手に湯道具を抱え、片手に濡れ手拭をぶらさげていた。

三人の客はさつと左右に眼をはしらせた。動物園で「ライオンが檻おりから逃げた」と聞いたときの観客の表情は、そんなふうではないかと思われるような表情であった。

「失礼しよう」と野本くんが云った、「——どうも御馳走さま」それを聞いてから、奥さんは勝手へいった。

「まあきみ、野本くん」と島さんは片手をあげた、「まだ酒が一本あるんだ、湯豆腐も残ってるし、ようやく始めたばかりじゃな

いか」

だが松井くんも井河くんも、浮き腰になつて馳走の礼を述べ、帰り支度をした。たしかに三人とも島さんには友情を感じているけれども、友情ですら引止めることのできないほどの強力なものが、かれらを追いたてるようであつた。

島さんが三人を送りだして、ちやぶ台の前へ戻ると、勝手から奥さんがあらわれた。彼女の顔は磨きあげた赤銅の洗面器のように、赤くてらてらと光つてい、立つたままで島さんを見おろした。「話は聞いたよ、僕のワイフだつて、ふん」と奥さんは鼻をならした、「あたしがおまえのワイフかい、笑わしちやいけないよ」これはどういう意味であろう。島さんはただ黙つて、盃に残つ

ている冷えた酒を啜すすった。

半助と猫

半助の家はいつもしんとしていた。彼は独身で、とらという猫がいつしよに住んでいる。どんな稼ぎをしているのかわからない、ときどき小さな風呂敷包を持ってどこかへゆき、帰りにはその包が大きくなっている。日用品とか食物にちがいないので、でかけるときの包には、稼ぎのものがはいつているのであろう。とすれば、——一日じゅう家にいるのだから、内職をしているには相違

ないのだが、なにをしているかということとは、誰にもわからなかった。

半助は五十がらみで、髪は青年のように黒ぐろと濃いのが、軀はしなびた糸瓜へちまのように瘦やせていた。血のけのない壁土色のおもながな顔は小さく、いつも誰かに殴られるのを恐れているような、卑屈な、おどおどした眼つきをしていたし、人と話すときには、それがいつそう際立ってみえた。——彼はいつも誰かにあやまっているようだし、自分は自分自身の軀のうしろにちぢこまっているようだ。外をあるくときでさえ、自分自身の軀のうしろから、そつとついてあるくように感じられた。

「まるで指名手配でも出されている人間みたいだな」と退職刑事

の和泉正六いずみが云った、「きつと叩けば泥の出るやつだぞ」

それを聞いたヤソの齋田先生が、あとで笑った。

「叩いて出るのは埃ほこりだ」と齋田先生は云った、「泥は吐かせると云うものだ、退職刑事もどうやら怪しいな」

半助は近所づきあいをしなない。たまに訪ねて来るのは、べつの町内にいる六ちゃんという少年と、この街で「小屋の平さん」と呼ばれる男の二人だけであつた。

平さんは半助と同年配で、十日に一度ぐらい訪ねて来るのだが、かくべつ用があるわけではないらしい。小半日ちかくいるときでも、話し声は殆んど聞えないし、たまに聞えるのは茶を啜る音か、天気のこと、景気のよしあしなどで、なんのために訪問し、なん

のためにそうしているのか、とんと理解がつかないのであった。

半助はこの街の誰よりも早く起きて、井戸端で洗面をしたあと、東の空に向ってかしわ手を打ち、敬けいけん虔けんに眼をつむって頭を三度さげながら、口の中でなにかつぶや呟く。願いごとをするのだらうが、なにを祈願するのか、ぶつぶつ呟くだけで内容は聞きとれない。それから二つのバケツに水を汲くんで帰る、というのが日課の始まりで、これは季節や天候に左右されることなく、毎日きちんとおこなわれた。

極めて稀まれに、井戸端で人といっしょになることがある。

「お早う」と相手が呼びかける、「いつも早いね、半助さん」
すると半助はたちまち肩をすぼめ、卑屈におじぎをしながら、

相手のきげんをとるように、おどおどと返辞をするやいなや、二つのバケツをさげて、自分の家のほうへ小走りに去るのであった。

半助の生活はとらと呼ぶ飼ひ猫とだけ、密接につながっていた。とは云つても、特に變つたところがあるわけではない。一般に猫好きとか犬好きとかいわれる人たちの中には、常識はずれな例が少なくないが、それらの人たちに比べると、半助ととらの関係は極めて平凡な、ありふれたものにすぎなかつた。——ただ人づきあいをしない半助が、とらとだけは話をしたり、いっしょにめしを喰^たべたり、共寝をしたりするところに、「密接」なつながり、という感じがするのであった。

朝はやく、夏でも暗いうちに半助は眼をさします。

「とら公」と半助は呼びかける、「そろそろ起きようかね」

掛け夜具の裾のほうで、まるくなつて寝ているとらが、眼をあいて主人のほうを見る。半助は夜具の中で伸びをし、大きな欠伸をしながら、軀のどこかを搔く。——とらに呼びかける声も囁くようだし、欠伸をするにも声は出さない。起きて夜具をたたみ、戸納とだなへそれをしまうにも、殆んど物音をさせない。これらはすべて、大切な重病人が側に眠つてでもいるように、注意ぶかくひそやかにおこなわれた。——それから着替えをして井戸端へ出るのだが、たてつけの悪い格子と雨戸をあける音だけは、半助にも防ぎようがなかった。

「腹がへったかい」と彼は七厘でめしを炊きながら云う、「待つてろよ、もう少しだからな、とら」

とらはにやあとなくが、口をあけるだけで声は出さない。小さなニュームの鍋なべでめしが炊きあがると、同じような小鍋で味噌汁を作り、そのあいだに漬け物を出し、お膳ぜんの支度をする。いまは田舎でもみかけない古風な、蓋付きの箱膳で、中に食器がはいつてい、蓋を返して箱の上へのせると、そのまま食膳になった。終れば食器は布巾で拭いて、元のように箱の中へしまふから、勝手までいって洗うてまが省けた。半助はきれいなほうだが、それでもときたま、布巾を洗うだけで満足していた。

とらは半助の側をはなれない。勝手でも部屋でも、彼について

まわり、軀をすりつけたたり、彼の手や足へ冷たい鼻を押しつけたり、坐ればその膝へ乗ったりする。——半助は徹底した菜食主義で、だしをとる鰹かつおぶし節以外には、魚も肉も絶対に喰べない。とらにも漬け物をかくやに刻んでめしに混ぜたのを与えるだけであつた。

「魚や肉はな、軀に毒なんだよ」と彼はとらに云う、「魚だの肉を喰べるといのちをちぢめるだけだ、野菜と米のめしを喰べてさえいれば、病氣にもとりつかれないし、寿命だけは必ず生きられるものなんだから」

とらにはやあと、声を出さずになき、主人を見あげる。それはまるで、あなたの云うとおりです、知らない世間のやつらは哀れ

なもんですね、とでも云っているようであつた。

めしを喰べるにも、半助は茶碗や箸の音をさせない。誇張して
 いえば、物を嚙む音さえさせないのである。したがって、そのよ
 うすは食事をしているといふより、ぬすみ食いをしている、とい
 うふうであつて、なにかを喉へつかえさせるとか、むせて咳せきをす
 るなどということはまったくなかつた。

朝めしを済ませると、半助はすぐ仕事にかかる。なにを作るか
 は判然としないが、小さいけれども櫪材かしざいの頑丈な小机と、小刀
 や各種の鑿のみ、糸鋸いとのこ、特別に誂あつらえたらしい小さなまんりき、三種
 類ほどの錐きりなどが道具で、材料は上質の象牙ぞうげと、鉛の延棒だけで

あつた。

極めてこまかい仕事とみえ、片方の眼に時計屋が修理のとき使うような、筒形の拡大鏡をはめ、机にのしかかつて、慎重に、入念に細工を進めるのである。そのようすは、なにかの仕事をしているというより、荘厳な神事でもおこなっているというほうがふさわしくみえた。——仕事のあいだも物音はたてない、錐を使い各種の鑿、糸鋸の類を使つても、殆んど音が聞えないのだ。小刀で象牙を削るときには、ごくかすかに、やわらかな擦音が出るけれども、それでさえ側へ寄つて、じつと耳をすまさなければ聞えないのであつた。

それはよほど大切な、しかも秘密な仕事なのだろう。「小屋の

平さん」でさえ、それらの道具を見たことはない。平さんが来れば部屋へとおすが、どこへどう隠すものか、頑丈な小机以外にはこれといって眼につく物はなかった。平さんのほかに部屋へおす者は絶対にないし、中通りの六ちゃんが来ても、切貼りだらけの障子を少しあけ、顔を半分だけ出して話す、というのが常のことであった。

なにをするにも音を忍ばせ、食事のときに箸の音さえたてず、ひっそりと息をひそめているような生活の全部は、すべてその仕事をするためのトレーニングであるようだ。その仕事の大切さと秘密を要することと、さらにその細工が極めて微妙であるため、起居動作からして、それに順応するように自分を馴らしている、

というのが真相のようであった。

とらは主人が仕事にかかるのを見届けてから、机の脇のところ
で眠るか、外へでかけてゆくかする。眠るときは俗に香箱こうばこを作
るといふかたちで、横になることはめつたにない。外出したいと
きには、主人の膝へ軀をこすりつけたり、仕事に熱中している主
人が気づかない場合には、「にやあ」とかすかにないてみせ、主
人が障子をあけてくれるまで待った。

外へ出たとらは、ゆうゆうとあるいてゆく、彼は黒つぽい三毛
猫で、軀もたつぷり肥えていて大きいし、顔もサッカーのボール
くらい大きくてまるかった。半助が飼ってからでも七年になるそ
うだが、十年以上のとしよりだという者、もうそろそろ化けるこ

ろだ、という者もあつた。

とらはボスのナンバー・ワンであつた。

主人の半助がひつそりと、自分自身のうしろにちぢこまつてい
るようであるのと対^{たい}蹠^{せき}的に、とらはいつも堂々といばりかえつ
て、なにもかも気に入くわん、とでもいうような眼つきで、ゆうゆ
うと好きなどころを好きなようにあるいてゆく。——彼の繩張が
どこまで広いか見当もつかない。この界^{かい}隈^{わい}はもとより、中通り
から本通りのほうまで、彼の勢力圏にはいるようだ。云うまでも
ないが、これは実力で獲得したものであり、この範囲内では、か
なり古参の犬でさえ彼にちよつかいをだしたため、片眼を失つた

り、耳を食い千切られたりしたものが四、五匹はいた。

いまでは挑戦するような犬もいないし、たまにそんなおろかなやつがあらわれても、彼のほうで暴力をふるうことはなかった。

単に立停つて、じろつと見返すだけでいい。相当あたまの悪い喧嘩んか好きな犬でも、とらのその眼つきを見るだけで尻尾しっぽがさがつてしまう。自然に尻尾がさがり、今日はまたなんていやな空模様だろう、とでも云いたげに、天のほうを見あげたり、または急に用を思いだしたといったようすで、あらぬ方向へ走り去つたりするのだ。

彼が暴力をふるうのは交尾期だけである。いまでもその期間には、彼がいかにボスのナンバー・ワンであるかを、現実に見るこ

とができた。——ここに一匹のみめよき雌猫がいるとする、まず若い雄猫たちが彼女を囲んで、恋のセレナーデを競いあい、うたい勝ったやつが彼女に近づくのをきっかけに、かれら独特のレスリングが始まる。もつと経験を積んだ猫たちはそんな軽薄なまねはしない、若いかれらが独唱したり格闘したりするのを黙って見ている。そうして、若輩どもがたたかい疲れたじぶんに、自分がそこにいることを主張し始める。それからミドル級の勝ち抜き戦になり、終りのヘビー級となると一対一か、せいぜい三者対立くらいで勝敗を争うことになる。しかし、もしもそこにとらが出て来るとすると、ヘビー級で勝利を占めた選手も、決して自分の選手権を主張しようとはしない。すぐさま自分の権利をとらに譲つ

て、ほかの恋人を捜しにかかるのである。

交尾期には、相当かしこい猫でも多少はあたまにきているから、中にはとらにいどみかかる勇士もある。そのときこそ、とらは平生とっておきの喉を存分に開放するが、その叫喚のすさまじさは形容しようのないものであり、牙を剥き出した顔つきのすさまじさもまた、形容を絶するものであつた。それでもなお頑張ろうとするやつがたまにはいるけれども、そいつはまもなく軀じゆうから血を流し、毛を^{むし}り取られ、びっこをひきひき自分のおろかさや、大事な時間をむだにしたことを悔みながら、そこから逃げだしてゆくのであつた。

われらの「街」から出たところは、いま荒地を横切り、中通りがあるいてゆく。肥えていて大きいから、あるきぶりもおもしろくゆったりしている。左の前まえあし肢を出すときには、左の肩肉がくりくりと動くし、次には右の肩肉がくりくりと動く。脇見などは殆んどしない、なにかもわかっているのだ。ここが靴の修理屋で次が荒物屋で、その隣りのしもたやには犬がいるが、それは臆病者のめめしいやつで、格子の中できちがいのように吠ほえたてるが、ちよつと睨にらんでやると、まるでどこかを噛まれてもしたように、きんきん悲鳴をあげながら土間の隅へ隠れてしまい、すると顔の青ぶくれたような細君が出て来て、乳呑み児をあやすようなあまだるい声でなにか呼びかける。

「うん、ここを噛まれたんだ」とそいつは訴えるようなくんくん
 声を出す、「あいつです、あの悪い猫が僕のことを噛んだんです
 よ、いつもなんです」

「よしよし、だいじよぶよ」とその細君はそいつを抱きあげてと
 らのほうを睨む、「またとらのやつだわ、なんて憎たらしいつら
 をしているんだろう、しっしっ、あっちへゆけ、悪いのら猫だよ」

とらは軽侮にもあたいたくない、といたげに髭ひげをふるわせてそ
 こを去る。安八百屋の近所には二疋ひきの雄猫がいるし、甘露堂とい
 うたいそうな看板を掲げた駄菓子屋には、猫でも犬でも生き物さ
 え見れば石を投げたり、棒で叩いたりする六歳ばかりの女の児が
 いる。——とらにはこれらすべてが、退屈なほどみえすいていて、

いまさら注意をひかれたり、好奇心を唆^{そそ}られたりする対象はなにもないのだ。

「ふん、いつものとおりだ」と彼は呟くようである、「こんな変りばえのしない生活を繰り返して、よくもやつらは飽きないもんだな」

中通りを北へゆくと橋がある。掘割に架けた石の橋で、それを渡り、二た筋目の横丁を構わずとおりぬけたところに、本通りがあり、流行のトップをゆくと称する、各種の商店や貴金属店、服飾店、キャバレー、銀行、百貨店、レストランなどが軒を並べてい、道の中央に市電、車道にはトラックや自転車、多種多様な自動車などの往来が絶えなかった。

とらがここへ来るには目的があつた。それは、この本通りを横切つた向う横丁にある、「天松」という本格的なてんぷら屋なのだ。

本格的といったが、それはおくにさんのやっている五色揚げに對してのことで、事實は「駄てんぷら」であり、その故にまた下町の客にはよろこばれていた。お座敷てんぷらの、白っぽく、上品にとりすました揚げかたは、ばちがいだと下町の客は云う。狐色よりやや濃い色に、ぱりつと揚げたやつこそ本筋で、もともとてんぷらなんてやつはげて物なんだ、ちかごろは職人も客もそいつを知らねえからな、などと云うのであつた。

とらはその「天松」のてんぷらがひいきだった。大きな店ではない、間口三メートル、奥行六メートルほどの広さで、入口の右側が板場、左が細長い土間で、テーブルが五つ、椅子がそれぞれ三脚ずつ置いてある。四脚置くと通路がなくなるからで、食事どきにははいれない客が、よく店の前で順番を待っていた。

主人は五十五、六、痩せた背の高い男で、顔だちは五代目菊五郎にそっくりだといわれていた。もちろんずっと古い客の評が伝承されたので、いまでは五代目の顔など写真でさえ見ることはないが、そういうわれればそうかと、客たちは思うのであった。――息子は二十六、七、色が白く、痩せていて、父親によく似た顔だちであり、父親と同じように無口であった。ほかに出前や雑用を

する小僧が二人、奥のことは不明だが、店には女つけはなかった。材料の買い出しから下したごしら拵え、揚げるのも客へ出すのも、この父子できびきびとやっていた。

とらはこの店の入口へ来て、どっかりと腰をおろし、てんぷらを貰うまでは動かない。客がはいろいろとすると、じろつと睨んで牙きはを剥きだすのである。なにしろずう躰がすばらしく大きいし、サッカーのボールほどもある顔で、牙を剥き出しながら睨まれると、たいていの者がはいりそびれてしまう。しっしっ、などと追ったぐらいでは動かない。水をぶっかければすばやく脇へよけるが、すぐにまた入口へ坐りこむのである。

初めのころだったが、小僧の一人が竹たけぼうき帚ぼうきでもって打つまね

をしたところ、身をおどらせて小僧の胸にとびかかり、四肢の爪で搔きむしったり噛みついたりした。

「いやだよう」と小僧は悲鳴をあげた、「おっかないよう、ごめんだよう」

ほかの小僧たちや主人、息子などがとびだして来ると、とらはびんしょう敏捷しょうに逃げてしまった。

小僧はかなりの傷だったので、すぐに近所の医者へやった。医者には傷の手当をしたのち、「そこうしょう鼠咬症しょうというやつがあるから猫咬症なんてこともあるかもしれない」と云い、なにかの有効な注射を打ったそうである。——幾日かおいて、とらはまた平然とあらわれ、そんなことがあったかしらん、とでもいうような顔つきで、

店の入口へ腰を据えた。

「お、また来やがった」もう一人の小僧は吃驚^{びっくり}してとびのいた、
「親方たいへんです、ちよつと来て下さい」

これには主人もあきれたようだが、としの功だけあつて、とらの居坐りがなんのためであるかすぐに察し、ちようど揚げ残りのてんぷらがあつたのを、二つ三つ出してやれと命じた。石油^{せきゆかん}罐

に客の食いかすがあるから、それでたくさんだろうと小僧は云つたが、主人は黙つて睨みつけた。猫もこのくらい権威者になるとごまかしはきかない、そこらのぎつとした人間などより、趣味も嗜好^{しこう}もよほど洗練されている、ということを知っていたよ

うである。

とらは三つのでんぷらの内、海老えびを残して、あなごときすの二つを喰べると、口のまわりや髭などに付いた揚げ油を、左右の前肢でいいねいに撫で、「天松」の人たちをではなく、「店」のほうをちらと横眼に見て、ゆつたりとあるきだし、歩み去つていった。

「へえーえ」と無口な息子が、去つてゆくとらの姿を見送りながら感嘆の声をあげた、「云うこたあねえな」

これがとらと「天松」との、馴染になるきっかけになり、その後は両者の関係がずっとスムーズに続いていた。店先にゆきさえすれば、とらは必ずでんぷらの幾つかにありつけたし、痛めつけ

た小僧とも、——彼は猫咬症なんということにはならず、済んだが、——かくべつトラブルはおこらずに済んだ。

揚げ残りではあるけれども、本筋の下町ふうてんぷらに満足したとらは、食後のけだるい幸福感にひたりながら、ゆったりと帰途についた。こんども脇見などはしない、世間はおれのものだとでもいいいたげな顔つきで、一步、一步と、本通りを横切つてゆく。各種の自動車、自転車、市電など、ぜんぜん気にかけない。——トラックが走つて来てクラクションを鳴らす。ずう躰じやりが大きくて、あるきぶりがゆうゆうとしているから、たとえ砂利トラの運転手でも眼をひかれずにはいられないのだ。

「やい、その泥棒猫」と運転手はクラクションを鳴らしながら

どなる、「どかねえとひき殺すぞ」

とらは走りだすだろうか、否、彼は逆に立停つてしまい、ゆつくりとトラックのほうへ振り返る。なんだ、という顔つきで、じつと運転手を睨みつけるのだ。運転手もまさかひき殺すわけにはいかないから、慌てて急ブレーキをかけ、トラックを停める。とらはそれを確認してから、おもむろに車道を横切つてゆくのである。

市電でも同じことであつた。市電には正規のレール上を運行するということ、一種の特権を与えられているから、そんなことはないだろうと思われるが、運転手には感情があるので、やはり承知しながらひき殺す気にはなれない。やけなように警笛を鳴らしたうえ、これも急ブレーキをかけて電車を停める。——とらはそれを

振返って見ている。軌道上に立寄り、大きなまろい顔を振向け、なんだ、という眼つきで睨みつけるのである。

市電が確実に停車するのを慥^{たし}かめてから、とらは悠然とあるきだす。ゆっくりと歩をはこぶので、左右の肩の肉が、くりつ、くりつと動くありさまが見えるのだ。

とらはこのように、人間どもに対してさえ、ボスであるところの自分の権威をゆずろうとしない。いつも正面から現実にぶつかってゆき、それを突きやぶり、うち勝ってゆくのである。——半助はこの事実を知っているだろうか、これを知ったら、自分の生活態度を変えるであろうか。いつも誰かに殴られはしないかと、

びくびくしながら身をちぢめ、息をころしているような生活から、ぬけだすことができるであろうか。

そうは思えない。とらが市電やバスを停車させたり、「天松」からてんぷらをせしめたりするのを見たとしても、自分のくらしぶりを変えようとは思わないだろうし、まずとらと自分との、くらしぶりを、比較する気にさえならないであろう。半助は半助であつて、自分なりに人生の重荷を背負っていたのである。

或るとき三人の紳士が、ふいに半助の家へやって来た。いずれも背広姿で、一人はハンティングをかぶり、他の二人は無帽だつた。

三人とも見知らない顔なので、近所の人たちは好奇心にかられ、

それとなくようすをうかがっていた。なにか異常なことがおこりそうだった。人づきあいをしない半助の家へ、突然そんなふうに、背広の紳士が三人も訪れて来るというのは、尋常な出来事ではないからであった。

だがこの期待は裏切られた。

「よう、やっぱりおまえだったんだな」と紳士の一人が云った、

「ずいぶん捜したぜ」

半助の声は聞えなかった。

「あがらせてもらうよ」と他の紳士の云うのが聞えた、「じつとしてろ、手数をかけるじゃねえぞ」

ついで、なにか器物の音がしたが、乱暴をするとか、争うよう

な音ではなかったし、半助の声は少しも聞えなかった。

用件はむずかしいものではなかったらしい、やがて三人の紳士が半助を伴^つれてあらわれた。紳士の内の二人が、なにか風呂敷包を抱えてい、半助を中にはさんで去つていった。紳士たちも半助も近所の人たちには言葉をかけなかったし、眼を向けさえもしなかったそうである。

「なんだろう、どうしたのかね」

と近所の人たちは云いあつた。

「あの三人はなに者だろう、半助さんの友達かしらね」

「それならこれまでに見かける筈だな、友達ならさ」

かれらは心の中で察していた。この「街」の住人なら、そんな

ときぴんとくる考えはきままっているのだ。まもなく、島悠吉さんの隣りにいる博奕^{ばくちう}打ち、高名な「築正」親分のみうちだという徳さんが、かれらの推察に裏書きをした。

「あの三人は刑事さ」と徳さんは云った、「半助はいかさま賽^{さい}を作る名人なんだってよ」

徳さんの云ったことを伝聞したたんば老人は、やさしい声ですつと笑った。

「刑事とはおかしいな」たんば老人は云った、「いかさま賽を作っていたにしろ、刑事が三人も来るなんてえことはないだろう」「もしまた、いかさま賽を作っていたというのが事実なら」と老

人はなお云った、「やって来たのは刑事ではないな、そのみちのしようばいにんの手先だ」

つまり職業的博奕打ちが、いかさま賽でからきめにあつたか、あるいは半助の賽が欲しいために、住所を捜し求めて来たか、どちらかであろうと老人は云った。

「すると、半助さんはどういうことになるんです」

「わからないな、私には」たんば老は慎重に答えた、「どこかへ掠さらつてゆかれたにしても、あとのほうならまず軀かみに別条はないだろう、人に知れないところに匿かくまわれて、いかさま賽を作ればいいんだが、これがまえのほうだとすると無事では済むまいな」

博奕でいかさま賽を使えば、殺されないまでも軀かみのどこかをつ

められる。半助は使ったのではないけれども、よほど巧妙な細工だとすれば、二度とそんな物が作れないように、やはりどこかをつめられるかもしれない。

「どっちとも云えないな」と老人は云った、「まあそのうちにはわかるだろうよ」

近所の人たちは、暫くその話で気ばらしをした。いかさま賽については、徳さんが各種の例を説明し、その中には人間わざでは作れそうもない細工があり、どこまでが本当のことか疑わしかったが、それだけになお、半助の日常のひっそりした、呼吸さえ忍ぶような生活ぶり、決して人づきあいをしてない明け暮れが、これで初めてわかったと、かれらは語りあった。

半助が連れ去られてから五、六日して、ジャンパーにズボンという恰好の男が二人来て、半助の家の中を片づけて去った。まえに来た三人とはべつの男たちで、隣の住人にもなに一つ云わず、勝手に家の中へはいり、なにかごとごとやったのち、雨戸を釘付くぎづけにし、口笛を吹きながら去っていった。

とらはどうしたろうか。俗に猫は家に付くといわれ、飼い主が移転しても、家に付いてはなれないそうであるが、とらはそんな俗説には関心がなかったのだらう、家のまわりで、幾たびかなくのを聞いた人はあるが、その後はさっぱりと姿をみせなくなった。「きっと半助さんのあとを追っていったんだよ」と近所のかみさんの一人が云った、「三日飼われると死ぬまで恩を忘れないって

いうからね」

「それは犬のことさ」とべつのかみさんが云った、「猫なんか恩のおの字も知りやあしないよ、猫にできるのは化けるくらいのものさね」

半助はついに帰って来なかった。

親おもい

「そつちの番だよ」とたんば老人が云った、「私はこの桂はねだ」
岡田辰弥は重たい石でも持ちあげるように眼をあげて、一枚板

の古い将棋盤の上を見た。いつも顔色こそよくないが、切れ味のいい刃物を思わせるような、きらつとした活気のひらめいている顔が、いまはむくんだように力を失い、たるんでいるようにみえた。

——またなにか困ったことがもちあがつたんだな。

たんば老人はそう思ったが、けぶりにもみせず、半インチほどになったタバコのすい殻を、キセルの火皿に詰め、それを手焙りてあぶの火ですいつけた。

「痛いな」岡田辰弥は聞きとれないほどの声で呟いた、「——弱ったな」

たんば老人は黙っていた。辰弥少年がやおら駒を進めても、黙

つてタバコをふかしてい、辰弥も黙つて盤面を見まもつていた。外は雨で、古い板葺き^{いたぶ}屋根を打つ雨の音が、かなり高く、そして間断なしに聞えていた。

「それじゃあだめだね」とたんば老人が忘れたじぶん^{じぶん}に云い、盤面の駒を指さした、「この桂がはねたんだよ」

辰弥少年は指摘された点を見まもつたが、いいや、やつちまえと呟いて、べつの駒を動かした。たんば老人は深い溜息^{ためいき}をつき、タバコをふかした。それから暫くたって、老人は黙つたまま、盤面の一隅を指さして云つた。

「角が当つてるよ」

「ええと、そうか」

辰弥は両手の指を揉み合せ、盤へのしかかるようにして、駒の配置をゆつくり眺めまわした。

「なんです」

辰弥は老人を見た。老人は喉の奥で忍び笑いをしていた。

「なんでもない、いまね、ひよつと治助さんのことを思いだしたんだよ」と老人は柔和な眼で少年を見ながら云った、「——あの男はなにををするにも、慎重に念を入れて考える癖があるんだよ、或るときこんなことを云ったよ」と老人はそこで声の調子を変えた、「——私はね、よくよくはらをきめてね、それがよかろうと思つたものだからね、めしを喰べることにしたよ」

「なんです、それは」

「べつに意味はないんだよ」老人はまた喉の奥で忍び笑いをした、「めしを食うのに、よくよくはらをきめた、というだけのことさ、あの男はいつもそんなふうなんだがね」

辰弥は聞いていたのかどうか、腕組みをして天床を見あげるかと思うと、振向いて、じつと壁をみつめたりした。

たんば老人はキセルを手焙りのふちではたき、火箸で火皿の中をほじくった。

「またあにきのやつが帰って来たんです」と辰弥は云った、「いつものとおりなんです、僕はもういやになっちまった」

たんば老人は、いちど置いたキセルを取りあげ、タバコのすい

殻のはいったなにかの空き罐を引きよせたが、思い直したとみえて、また元のところへそつとキセルを置き、なんとということもななく、溜息をついた。

「話してごらん」と老人は云った、「悪い物を喰べたときは、ひまし油をのんで出してしまふに限る、さつぱりするだけでも儲け^{もう}ものだからね」

「金を都合しろつて云うんだ、帰つて来ればいつもそうなんだけれど、こんどは大きいんですよ」

老人は黙つたまま、一枚板の古い将棋盤を、駒の配置の動かないように、脇のほうへそつと押しやった。

「僕は自分がなんのために生きて来たのか、なんのために生きて

ゆくのかわからなくなってきた」と辰弥は云った、「あにきは十二のとしに家出をしました、僕は二つだったからなにも知らないんですけれど、戦争が終つてすぐ、おやじが死んでしまつて、うちの生活がどん底になつたとき、あにきは逃げだしてしまつたんです」

父親は軍需機械の下請工場に勤めていて、栄養失調と過労のため、敗戦の年の十月に死んだ。あとには妻と十二になる長男、二歳の二男の三人が残り、長男は父の死後七日と経たぬうちに、ふいと家を出ていったまま、行方不明になつてしまつた。——そのまえ、彼は学童疎開で仙台の松島へいつていた。期間は二年くらいだつたらう、家へ帰つたのは九月末だつたから、辰弥は殆ん

ど顔も覚えてはいなかった。そのころ一般の生活がどんなものだったかは、ここに繰り返すまでもない。母は二十一年の二月に再婚した。

底の知れない社会的不安と食糧難、あらゆる物資不足の中で、女一人のゆくさきが心ぼそくなつたのは当然だろう。再婚した相手は母より二つ若く、大学を出たサラリー・マンだった、ということであるが、戦後はブローカーのようなことをしていた。

「僕はその人を本当の父だと思っていました、いまでもそうときや思えないんです」と辰弥は云つた、「僕の下に弟二人と妹が生れました、それが父の子なんです、父は弟たちよりも、僕をいちばん可愛がつてくれました、叱ることも叱るけれど、叱りか

たでも弟たちとは違うんです、僕は母よりも父のほうによけいあ
まえました」

辰弥は五歳のときから英語を教えられた。進駐軍は半永久的に
日本を支配するだろう、だから英語ができなければ、これからの
日本人は生きていけないんだ、と父は云った。

辰弥が十二のとき、家出をした兄が帰って来た。父が仕事で大
阪へでかけた夜のことで、そのことを慥かめて来たらしい。固太
りに肥えて眼が赤く、髪もぼさぼさだし髭だらけで、荒い呼吸は
むせるほど酒臭かった。

母は泣きながらとびついた。

母は辰弥に、これがおまえのじつの兄さんだ、と告げたが、辰弥には信じられなかったし、弟や妹たちは側へ寄ろうともしなかった。兄であるかないかというより、こわい男だと思ったのだ。

としは満で二十二歳だったろう。しかし見たところはずっとふけていた。酔っているために赤かった眼や、黄色っぽい大きな歯や、ぶしよう鬚の伸びた、固太りの、膏あぶらでぎらぎら光っている顔は、特攻隊くずれ、などといわれた若者たちのようだし、ことさらにやさしい作り声で話す口ぶりには、ぶきみな凄すげみさえ感じられた。

「おつかさん、夜なべなんかおよしなさい、疲れますよ、——なんて云うんです」と辰弥は無表情に続けた、「肩を揉みましよう

か、だとか、苦勞しましたねだとか、おっかさんの夢をみて泣かない晩はなかった、だとかって、———そらぞらしいあまつたれ声で、おっかさんおっかさんの云いどおしなんです」

明くる朝、辰弥が眼をさましたとき、兄はもういなかった。岡のどこかに勤めているので、すぐに帰らなければならなかったのだ、と母は辰弥たちに語った。けれども実際はそうでなく、兄はどう云いくるめたか、母からうまく金をせびり取っていったもので、父が出張から帰ってくると、母とのあいだに初めて、かなり激しい口論がおこった。

その前後から、父の仕事はうまくいかなくなっていたようだが、^{からだ} 軀も眼にみえて衰弱し、それをまぎらわすためだろうか、深酒を

飲みだし、道みち傍ばたに酔いつぶれているのを人に教えられて、母と辰弥とで伴れ帰りにゆくようなことも、幾たびかあった。

辰弥が十三になった年の冬、父は咯かっけつ血をして倒れた。医者 of 診察によると、古い肺結核の再発で、すぐに入院しなければだめだ、ということであつた。病院を紹介してくれたが、どこにも空いているベッドはなかつた。——大丈夫だ、テーベなら僕は自信がある、これまで二度も医者にテーベだと宣告されたが、二度とも薬さえのみならず自分で治した、心配するな、と父は力づよく云つた。

母はこのときだけ、けんめいになつた。空きベッドがないかと、熱心に病院を捜し続ける一方、父と共同で仕事をしていた人たち

を訪ねて、入院費用をかき集めたりした。——辰弥は新制中学にかよっていたので、留守のあいだのことは知らなかったが、このあいだにも兄は、ひそかに母を呼び出して金をせびった。町の中で待伏せたり、近所の子供を使って呼び出したりしたのだろう。

——共同経営者の一人が父をみまいに来、母が五人のなかまから、金を集めていった、ということがわかった。

父はその金をみせろと云い、母は出してみせたが、父の聞いた金額の三分の一にも足りなかった。父はその金を辰弥の手に握らせ、涙をぽろぽろこぼしながら、これを放すんじゃない、と云った。

「誰がなんと云つても、決してこれを渡すんじゃない、これは辰弥の金だよって」

辰弥はちよつと口をつぐみ、自分の言葉が感傷的に聞えないようにと、つとめて平板な調子を保ちながら続けた。

父は母を責めなかった。不足の金額は長男に貸した、と聞いたとき、彼女の顔をじつとみつめた。それは奇妙な、いま初めて会う人を見るような眼つきであった。けれどもその瞬間から、父は母に対して口をきかなくなった。母は弁明し、長男の窮状を訴え、金は必ず返る、と繰り返したが、父は聞いているようすもなかった。

病気は自分で治す、二度も治したんだから自信がある、決して

心配するなと云い続けたが、父のは奔馬性とかいう悪性のものだつたそうで、三度も大量の咯血をし、四たびめのときに、血が气管に詰つたため窒息して死んだ。

学校が冬休みにはいつていたから、辰弥はその臨終を見た。初めに吐いた血を、父は新聞紙で隠しながら、まだ死ねない、いま死んでは困る、いまは困る、と齒をくいしばって叫んだ。

「なにかの本で読んだんですが、夏目漱石が死ぬときにも、同じようなことを云つたそうです」と辰弥は云つた、「新聞に書いている小説を中断させたくないためか、小さい子供たちに心が残つたのか、とにかく、いま死ぬことはできない、というようなことを云つたそうです」

たんば老人は眉も動かさず、穏やかな顔でゆつくりと頷いた。うなず

父に死なれた母は、泣くのはあとまわしだと云つて、家財の始末をし、この「街」へ移つた。それまで払い物をしていた古物商の、小田滝三が口をきいてくれたのである。そして、ここへ移ると同時に、父の共同経営者の一人の世話で、辰弥もいまの新聞社に雇われたのであつた。

人間おちめになつたら、とことんまでおちるほうがいい、中途半端がいちばん悪いのだ、と母は子供に云いきかせた。おつかさんは屑くず拾ひろいだつてしてみせるから、おまえたちも自分のお小遣や、学校の給食費ぐらいは、自分で稼かせぐつもりになつておくれ。

——それは嘘ではなかつた。屑拾いこそしなかつたが、賃縫いや、

ラウンドリーの下請けや、進駐軍ハウスの芝刈りや、闇成金の家掃除、米や薯いもや魚介の買出し、宝クジ売り。そのほか数えきれないほどの、そのときばったりの仕事をみえも外聞もなくやつたうえ、いまでは体力も弱つたのだろうか、家におちついて、授産所からまわってくる内職を専門にやるようになった。

辰弥が給仕として雇われた新聞社に、「河馬かば」という渾名あだなの、或る部長がいて、どんなきつかけがあつたともなく辰弥をひいきにし始め、特別手当の出るようにはからつてくれたり、英語学校の夜間部にかよっていると聞くと通学時間にゆとりがあるように、あんばいをしてくれたりした。

その「河馬」部長のおかげで、辰弥の収入は平社員より多いところがあるくらいだったし、英語学校でも、午後のクラスへかよえるようにしてもらえた。——弟の一人も就職したが、一人は新制中学の三年、妹は中学の一年である。弟たちには大学までやらせるつもりだったので、辰弥はけんめいに頑張ったが、少しゆとりができたころになると、兄がやって来て、僅かな貯金まで召上げられてしまう。この「街」へ移って来てから三度、今日は四たびめというわけであった。

「僕は母にないしよで、ほかに貯金をしていたんです」辰弥は恥ずかしそうに云った、「それは、どこかに家があったら、ここを出てゆきたいと思ってるからなんですが、——学校へいつている

弟や妹のことを考えると、もう少しましな環境でくらしたいんです」

できればそうするほうがいいだろうね、たんば老人は呟くように云った。

兄が来たので、すぐに辰弥は家を出た。母が持っている金くらいなら、せびり取られてもしようがない。そういうきょうだいのいることは世間に例がないわけではなし、母はしよせん兄には勝てないのだから。けれども貯金のほうは絶対に困る、これだけは自分たち一家の将来に関する金なのだ、と辰弥は云った。

「僕がうちを出て来たのは、僕は心に隠していることがあると、すぐ顔に出てしまうからなんです、あにきなら一と睨みで見抜い

てしまうでしょう、それは自分でよくわかってるんです」

老人は辰弥を見てきいた、「貯金帳を持つてかね」

「通帳はうちにありますが、誰にもみつかると心配のないところに隠してあるんです、それに、——僕が貯金していることだって、誰にも云つてはないんですから、自分で持つてるより大丈夫なくらいです」

たんば老人は半インチほどに切つた巻タバコの一つを取り、キセルの火皿に詰め、火鉢ですいつけてうまそうにふかした。

「金を都合しろつて、いったいどのくらいの額なんだね」

辰弥はその金額を告げて云つた、「——どうしても必要だからつて、いろいろな事情を書いた手紙が、三、四日まえに届いてい

るんです」

「今日もその話をもちだしたのかい」

「僕は挨拶しただけで、話はしらずに出て来ました」

「すると、金がいらなくなつて、それを知らせに来たのかももしれないね」

辰弥は冷たく微笑しながら、首を左右に振つて云つた、「そんなあにきならいいんですがね」

「私もいつか、そのにいさんという人を見たことがある」とたんば老人はタバコの煙をみつめながら云つた、「たぶん、きわどい生活をしているからだろうが、どこかにぎらつとするようなものが感じられたね、しかし、それほど悪い男だとは思わなかつた、

なんだか気の弱い、人みしりをする性分のようにみえたがね」

「みかけだけじゃなく、することも云うこともそんなふうです」と辰弥が云った、「大きな声をだしたり、乱暴したりするようなことはありません、やさしい声でゆっくり話しますし、いつでも自分が悪いとか、みんなに濟まないとか云つて、すぐに涙をこぼすくらいです、それがあにきの手なんですから」

老人は火鉢のふちでキセルをはたき、火箸を取つて、キセルの火皿をほじくつた。

「ずっと昔のことだがね」と老人が静かに云つた、「私の知りあいにひとり変つた男がいた、かなり大きな商店の主人で、女中も

三人、店の者もひところは十人以上使っていたかね」

その男は人使いが荒く、朝から晩まで口小言が絶えなかつた。

自分はなにもしないで、台所から店の内外まで、見てまわつては小言を云う、妻にも子供にも遠慮をしない。落語の小言幸兵衛はその男をモデルにしたのではないか、と思われるほどであつた。

「そこに埃がある、これを片づけろ、あれをしまえ、煮物が焦げつくぞ、雑巾がぐしやぐしやだ、それをこうしてあれをどうして」
たんば老人はキセルでなにかの廻るようなしぐさをした、「——
そうやってみんなをこき使い、きりきり舞いをさせたあげく、その男はどつかり坐つて云う、——やれやれくたびれた、腰が痛くなつた、つてね」

老人はそこでちよつと口をつぐんだ。話の効果をたしかめるようにではなく、その男をしつかり思いだそうとするかのように。そうしてやがて、含み笑いをし、ひどくゆつくりと頭を振った。

「これにはみんな呆れたね^{あき}」とたんば老人は続けた、「まるで自分^{あき}が一日じゆうこき使われたような口ぶりで、それがまたじつに感じの出ている調子なんだね、——やれやれくたびれはてた、くたくただ、腰が痛い」

辰弥はたんばさんがなんでそんな話を始めたのか、理解にくるしむといいたげな顔つきで、もちろん笑いもせず^{あき}に聞いていた。

「みんなは蔭で、さんざん悪口を云つたものだ」と老人は続けた、

「^{いんごう}因業じじいだとか、厄病神だとか、早くくたばつちまえとか

さ、ところが、——或るとき軀の調子がおかしくなり、医者に診てもらうと、ようつい腰椎カリエスだということがわかった」

辰弥はびっくりしたように眼をみひらいた。たんば老人はそつと眼を細めた。

「世間にはよくそういうことがあるんだな」と老人はといき太息をついてから、やわらかな声で云った、「あとになってから、あのときああしてやればよかったと、悔むようなことが誰にでもある、それがまた、人間の人間らしいところではあるだろうがね」

たんば老人はタバコをすおうかすうまいかと迷うように、みれんらしくキセルと空き罐とを見比べた。

辰弥は家へ帰った。たんば老人の話は、彼に一種のショックを与えたようだ。それがどういう内容のものであるか明瞭ではないけれども、辰弥の顔には急に、幾歳かとしをとった男のような表情があらわれていたし、あるく足どりにも、つねにない力がこもっていた。

「そうだな、それもあるな」

と彼は考えぶかそうに呟いた。

「あにきにはあにきの云い分があるだろう、戦争ちゆう親たちからはなされ、遠い田舎で疎開ぐらしをしていた」

ことによると父や母が、敵の爆弾で死ぬかもしれない、そのときはどうしたらいいか。そういう心配が頭から去るときはなかつ

たにちがいない、それから敗戦になり、家へ帰ると父が死んだ。

「おれはなにも知らない」彼は声に出して呟いた、「おれはまだ赤ん坊も同様だったから、——けれどもあにきは十二になっていた。あのめちやくちやな世の中で母と弟を自分が背負わなければならぬ、自分ひとりで背負うわけではないにしても、重荷の一端はかかってくる、却^{かえ}つて自分のいないほうが、母にはやってゆきやすいのではないか、そうだな」

彼は唇を噛んで立停った。

「そうだ」と彼は自分に答えた、「おれだって逃げだしたかもしれない、考えるだけでもたまらなかつたらうからな」

親きようだいにまで隠して、こそこそ貯金をしていた自分こそ、

けちな利己主義者だったともいえる。このみじめな「街」からぬけ出ようという考えも利己主義だ。ここに住んでいる多くの家族は、自分たちがおちぶれて迷い込んで来たとき、それぞれのかたちであたたかく迎えてくれた。

「その人たちの多くはここからぬけ出すことができない」

そうじゃないか。中には子供の代になっても、ぬけ出せない人たちがいる。その中で自分たちだけぬけ出してゆく、——いや、それはひどい利己主義だ。貯金はあにきに進呈しよう、けちくさい貯金なんかしなくとも、時期が来ればしぜんと出てゆけるだろう、貯金はあにきに進呈すべきだ。

「なにをしておる、英学者」うしろで活潑な声がした、「がまぐ

ちでも落したか」

寒藤清郷であった。辰弥はどぎまぎし、赤くなつた。

「うちへ帰るところです」

「どこのうちへ帰る、もう通り過ぎとるぞ」寒藤先生は例のとおり、古ぼけたモーニング姿で、うしろに大学の応援団のような、いさましい恰好の青年を一人伴っていた。「これはわが憂国塾の塾生で、姓名は八田忠晴という」

寒藤先生はそう紹介した、「よろしく」

その青年も「よろしく」と云いながら、活潑におじぎをした。

そして二人は、自由主義をばぶつ潰せ、^{つぶ}などとうたいながら歩み去っていった。

岡田辰弥が家へ帰ってみると、兄はもういなかった。

すぐ下の弟は勤め先の人たちとハイキングにゆくと云って、朝はやくから出てゆき、二番めの弟と妹がいたのであるが、いまは母と弟の二人きりだった。

母は勝手になにかしてい、弟は机に向っていた。辰弥は弟のそばへ行って、あにきはとうした、ときいた。

「帰ったよ」と弟は答えた。

弟は英作文をやっているらしかった。机の上は書き損じた紙や、ぼろぼろになった参考書や辞典やノートなどがいっぱい、見るだけでもうんざりした。

「机の上をなんとかしろよ」と辰弥は云った、「まるで屑籠くずかごをひっくり返したようじゃないか、よくそれで勉強ができるな」

「諄くどいなあ」と弟は云った、「こうしなければおれは勉強ができないんだって、何度も云っているじゃねえか、うっちゃつといてくれよ」

「辰弥かい」と勝手から母が呼びかけた、「茶筆筒ちやだんすにおやつがはいっているよ」

「のらさんのみやげさ」と弟が低い声で云った、「ジー・アイの残飯の中からも拾って来たらしいぜ」

のらさんとは、弟や妹たちがあにきに付けた呼び名であった。

辰弥が茶筆筒をあけてみると、ふちの欠けた洋皿に、エクレアの

ような菓子^が二つ^のせてあつた。

「おまえ喰べたのか」

「犬じゃあないんでね」弟は振向きもしなかつた、「アメちゃん
の食い残しなんかまつぴらごめんさ」

もう米軍の残飯を食うなどということとはなかつた。実際にそれを喰べて飢えを凌^{しの}いだのは、母と辰弥とすぐ下の弟くらいである。だが四男である彼は、それを喰べた母の乳で育つたというだけで、いまでも事ごとに激しい憎悪を感じるようであつた。

辰弥は菓子には手をつけず、茶筌筒の戸納を閉め、弟のそばへ
いって、あにきはおとなしく帰つたのか、と声をひそめてきいた。
「ごきげんだつたよ」と弟は辞典を繰りながら、ぶつきらぼうに

答え、振向いて辰弥を見た、「頼むから宿題ぐらいゆつくりさせてくれよ、おれは」

彼がそう云いかけたとき、戸外で人の声がした。どうやらこの家をきいているらしい、ええそこですよ、という女の声がし、すぐに戸口で「岡田さん」とおとずれる声が聞えた。辰弥が答えながらいつて、障子をあけると、制服の警官が立っていた。

——とうとうきたな。

あにぎがなにかやったな、と辰弥は直感し、急に呼吸が苦しくなった。警官はメモのような紙片を見ながら、岡田辰弥くんかたずね、そうだと答えると、伸弥という兄さんがいるかときいた。

「はい、おります」

そう答えながら、辰弥は自分の顔色の変るのを感じた。

「兄はおりますが」と辰弥はかすれた声で続けた。「このうちには住んでいないんです、よそへ出てはたらいっているんですが、兄がなにかしたんでしうか」

「交通事故なんだ」

警官は辰弥の眼を避けるかのように、メモを見たままで云った。
「いま本通り一丁目の交番から連絡があつてね、伸弥くんが小型乗用車にはねられたんだそうだ、向うからの電話連絡なんで」

「うちの息子がどうしたんですって」と母がとびだして来た。

「まあおちついて下さい」警官は片手で、なだめるような手まね

をした、「本通り一丁目の交番から電話連絡があったんで、ぼくには詳しいことはわからないんだが、なんでも小型乗用車にはねられて」

「場所はここです、けがは重いんですか軽いんですか」

「おっかささん」と辰弥が制止した、「静かにしなきやだめだよ」

「とにかく電話連絡なんでね」と警官はひたすらメモをみつめながら云った、「場所はまあ交番に近いところだろうと思うが、けがの程度までは連絡では云っていないなかった、中橋のそばにある仁善病院というのへ入院させて」

「病院へ、入院ですって」

「おっかささんったら」と辰弥はまた母を制止して、警官にきいた、

「中橋の仁善病院ていうんですね」

「そういう電話連絡なんだ」

警官は初めてメモから眼をあげた。そして、このみじめな住居にすばやく視線をはしらせて、誰かすぐにゆけるかどうか、とあやぶむようにきいた。

「はい、すぐにゆきます」と辰弥が答えた、「どうもお手数をおかけました、ご苦労さまです」

警官は拳手の礼をして去った。母は泣きだし、驚きのあまり立っつていられないように、そこへ坐っておろおると、長男の名を呼んだり、また泣きいったりした。

「おい光雄」と、辰弥は弟に云った、「おまえ先にいってみてく

れ、おつかさんとぼくは必要な物を持ってあとからゆく、いいな」
「そんな必要があるのかい」弟は机に向つたままで云つた、「病院に入院しちやつたんなら、医者がなんとかしてるだろ、おれがいそいでいったつて、なんにもできやしねえと思うがな」

「いいよ、頼まないよ」と云つて、辰弥は母をせきたてた、「泣いてる場合じゃないよおつかさん、着る物やなにか出さなくつちや、それに毛布くらいはいま持つてゆかなくちやならないんだらう」

「あたしにや、なにをしていいかわからない、あの子はきつと大けがをしてるんだよ」

「だってこの住所や名が云えるくらいだもの、きつとたいした

ことじゃないよ、それより早く着る物を出しておくれよ」

風呂敷包を自分で持って、母を支えるようにしながら、辰弥はその病院へいった。戦後に建てた安普請のバラックで、白と緑で塗りたくったペンキも剥げ落ち、仁善病院と書いた看板の字も斑まだらに剥げていて、やっと判読できるくらいだった。

狭い土間の片方にある受付に、四十がらみの女性がいた。白い看護衣の鼠色になったのを着ているが、口のききかたも動作も、看護婦のようではなく、まるで不景気な外食券食堂のかみさん、といった感じであった。

「ドアをちゃんと閉めて下さい」彼女はまずそう命じてから、辰

弥の問いに答えた、「ええ、その人は預かっています、あなたがたは家族の人ですか」

「いま院長にきいてみます」とまた彼女は云った、「たぶん面会謝絶だろうがね」

そして二人をぎろりと白い眼で睨み、五十キロもある荷物をはこびでもするような、たいぎそうなあるきぶりで奥へいった。面会謝絶という言葉聞いたとき、母は辰弥の腕をぎゅつと掴つかんだ。彼はその母の手をやさしく叩き、しっかりとするんだよおっかさん、大丈夫だよ、と囁ささやいた。

「どうぞ」と戻って来た女が云った、「いま院長先生がおみえになるから」

辰弥は母を支えながら玄関へあがった。五足ばかりあるスリツパは、みな古く、ぞつとするほどきたならしく、やぶれたり擦り切れたりしていた。——二メートル四方ほどの待合室には、ニスの剥げた木の腰掛と、タバコの吸い殻だらけで火のない火鉢があり、壁に貼った診療時間割の紙も、一隅がやぶれて垂れさがっていた。

ぎしぎしきしむドアをあけて、おどろくほど背の低い、中年男がせかせかと出て来た。初めは子供かと思つたくらいで、軀も顔も子供っぽく肥えてい、顎あごの下に厚く肉がくびれていた。

「岡田伸弥の家族の方ですね」とその男は息苦しあえそうに、喘あえぎながら云つた、「いま昏こんすい睡状態で、係り官が来るでしょう、お会

いになつてもわかりませんよ、ぼくは院長の大豊です、とよはゆたかという字です、表に看板が出ていますが、まあお掛けなさい」母はおろおろ声で容態をたずねた。大豊院長は診察衣のポケットから、くしゃくしゃになつたタバコの紙袋を出し、へし曲つた一本のタバコを抜き取ると、こんどはあらゆるポケットを捜したのち、聴診器といっしよにライターをつかみ出して、ようやくタバコに火をつけた。

「なにしろ頭蓋骨^{ずがい}折で、手足にも骨折があるでしょうね、心臓も肥大しているな、酒の飲みすぎだと思うが、ここへ担ぎ込まれたときにはもう意識不明でした、ああ、本人は苦痛も感じていなかつたと思う、頭蓋骨折だからね」

「しかし」と辰弥が反問した、「住所姓名は云えたんじゃないんですか」

「それは違うね、まったく話が違うね、ああ」と院長は云った、
「あの患者は意識不明のまま担ぎ込まれて来たんだ、さつきも云ったとおりね、係り官は聞いたかもしれない、たぶん係り官が事故現場へ駆けつけたときには、まだあるいは口がきけたかもわからない、しかしここへ担ぎ込まれて来たときは、意識不明で口をきくどころじゃなかった、はつきり云えばだな、丸太ン棒を放り出されたみたようなもんだったよ」

「会わせて下さい」と母は云った、「あれはわたしの子供なんで

す、どうかいますぐに会わせて下さい」

「会つてもわかりやしませんよ、ひどい姿になっているし、包帯をしてはあるがそれも血だらけで、まあおつかさんは見ないほうがいいでしょうね」

「いいえ会います、どんなにひどい恰好だつて驚きやあしません、あれはわたしの子供なんですから」

「まあまあ」と云つて院長は辰弥を見た、「きみは弟だといったね」

辰弥は頷いた。

女親に見せるのはむりだ、と院長は云つた。しかし病院の立場としては、患者に対する応急処置や、使用した高価な注射薬につ

いて親族の了解を得る必要がある。なおまた希望によつては、——その費用を払う能力があればのはなしだが、——さらに高価な注射薬をもちいてもよい。そういう意味で、きみに病室へいつてもらいたい、と院長は云つた。

「はい、ぼくが会います」辰弥はそう云つて母を見た、「ぼくが先に会いますよ、そのようすによつておつかさんも会うほうがいいでしょう」

「あの子は死ぬんですね」母は院長に云つた、「あの子は助からないんですね」

辰弥が「おつかさん」と制止した。院長は医者であることの威厳を示しながら、医者には患者の生死について発言することは許

されていない。患者が生きているうちは生きていたのであって、呼吸と心臓が止り、その肉體が生きることがをやめたと確認したとき、はじめて「死」を宣告することができるのである、と云った。「この仁善病院は儲け主義の病院じゃないんだ」と院長は急にふきげんになって云った、「よそみたいにぶったくり主義なら、とつくに建物も改造しているし、薬局だってどしどし新薬を入れられるんだ」

「病室はどこですか」

と辰弥がきいた。母がわたしもとゆっくり立ちあがり、院長は面倒くさいとでもいうように片手を振って、いましがた出て来たドアのほうへあるきだした。この病院は儲け主義ではないとか、

ほかの病院のようにやっていたらもつと薬局にも新薬を備えることが出来るなどと、院長が急に憤懣ふんまんを述べだしたとき、院長の左右の手首に無数の注射の痕あとがあるのを、辰弥は認めた。

注射の痕はうす茶色で、そばかすかと思えるほど数が多く、白衣の袖の奥までびっしりと皮膚の表面を埋めていた。おそらく腕のほうから始めて、手首にまで及んだものであろう。なんの注射かはわからないが、そのように数多く打つとすれば中毒性の薬に相違ない。新聞社に勤めている辰弥の頭には、幾種類かの禁制薬品の名がうかび、この医者には信用できないぞと思った。

その病室にはベッドが二つ並んでいた。それ以上は一台のベツ

ドも入れる余地もない狭さで、窓のくもり硝子の多くはひび破れており、そこに紙を貼つて保たせてあつた。あにきは手前のベッドで、窓のほうへ頭を向けて寝ていた。カバーなしの垢じみた毛布が掛けてあるため、胸から下は見えないが、頭部は眼と鼻と口が覗いているほか、すっかり包帯で巻かれているし、毛布の上に出ている両手も包帯で巻いてあり、どちらも滲み出た血で染まっていた。

「これが本人の所持品です」院長はサイド・テーブルの上にある物を指さした、「見るだけ見てもいいが、係り官が来るまでは手をつけないように、ああ、これは係り官の命令だから」

辰弥は頷いた。

母はあにきの枕まくらもと許へ走り寄り、頭の上へのしかかるようにして、おろおろと名を呼び、話しかけていた。院長は形式的に脈をみようときえせず、ぶつたくらない病院の経営がいかに困難であるか、とぐちを並べたり、こんどの治療費が意外に高くついたりとか、なにになにという新輸入の注射薬を使つてみたいのだが、あまり高価なので考えている、などということをくどくどつぶやと呟つぶやいていた。

辰弥はサイド・テーブルの上にある品を見ていて、その表情を静かに硬ばらせた。外国製の万年筆とシャープペンシル、腕時計、革表紙の手帳、革製の横に長いがまぐち、上等な麻のハンカチーフ、洋銀にしゃれた模様を彫つたコンパクト、櫛くしなどの脇わきに、自

分の貯金通帳と認印があるのをみつけたのだ。

まさかと、初めは信じられなかった。手をつけてはいけないと云われているので、顔を近づけてよく見ると、住所氏名が自分のものであること、認印も自分の物であることがわかった。

———そうか、これで住所がわかったんだな。

そう思ったとき、抑えがたい怒りと悲しさがこみあげてき、われ知らず振向いて母に問いかけた。

「ここにぼくの貯金通帳があるけれど」と辰弥は云った、「どうしてこれをあにきが持ってたんだらう」

母はあにきを覗きこんだまま、それまでなにか云い続けていた口をぴったりとつぐみ、軀ぜんたいをちぢめて、なにか異常な事

がおこるのを待ちでもするようになり、じつと呼吸をころしていた。いけなかった、と辰弥はすぐに後悔した。きくまでもなかった、悪いことをした、と彼は思った。

母がとつぜん身をおこして、辰弥のほうへ振向いた。それはまるで、辰弥の考えたことを、その耳で聞きつけたかのようなのであった。

「貯金帳はあたしが遣ったよ」と母はふるえ声で云った、「兄さんがあんなに困っているわけを話したのに、おまえは黙って出ていってしまった、血を分けたじつの兄さんが、よつぽど困ればこそ相談に来たんじやないか」

辰弥は蒼あおくなり「おつかさん」と云った。院長は気まずそうに、眼をそむけながら出ていった。

「それなのにおまえは、話をよく聞こうともしなかった」と母は云い続けた。彼女の顔も蒼そうはく白になり眠尻めじりがつりあがるようにみえた、「自分はこそこそ貯金なんかしていたくせに、親のあたしにさえ隠して、自分だけは貯金なんかしていたじゃないか、おまえには親きようだいより、貯金のほうが大事なんだろう」

そうじゃないんだよ、あれは自分のためじゃない、おつかさんや弟たちといっしょに、もう少しましなところへ移りたかったんだ。それでも考え直して、あにきに遣ろうと思つてうちへ帰つたんだ。ぼくは自分だけのためなんて、考えたこともありやあしな

いよ、辰弥は心の中でそう訴えた。しかしそれは心の中のこと、口には一と言も出さなかつた。

「兄さんがこんな姿になつても、貯金さえ無事ならおまえは本望だろう、え、そうなんだろう」母の声は半ば叫びになり、その眼から涙がこぼれ落ちた、「兄さんはおまえのように薄情じやなかつた、伸弥は心のやさしい、親おもいな子だつた」母はベッドの上の、もの云わぬあにきを覗きこみ、おえつ嗚咽しながら云つた、「いつもあたしのことを気にかけて、おつかさんおつかさんつて、そんなにこんを詰めると疲れるよ、肩を叩こうか、少しは休まなくつちや毒だよつて、——こんなにあたしのことを心配してくれた子はなかつた」そして母は辰弥のほうへ振向いた、「おまえなん

か一度でもそんなことを云つてくれたためしがあるかい、一度でもあたしのことを心配してくれたことがあるかい、こそこそ隠れて貯金なんかするときに、一度でも親きようだいのことを考えたことがあつたかい」

辰弥は力なく、静かに、黙つて頭を垂れた。

「伸弥。伸弥ったら」母は泣き声であにきに呼びかけた、「死なないどくれ、なにか云つとくれよ、おつかさんはおまえだけが頼りなんだからね、お願いだから死なないどくれよ」

辰弥はそつと廊下へ出てゆき、手の甲ですばやく眼をぬぐつた。「そうだな」彼はたんば老人とさしていた将棋のことを思いだそうとした、「あの桂はねのところで落手をしたんだ、——あれは

銀を引けばよかつたんだ、4七へ銀を引いて、次に桂頭を叩く手
だった」

彼の顔がみにくく歪^{ゆが}み、涙がその頬を濡らした。

牧歌調

増田益夫は三十二歳、妻の勝子は二十九歳であつた。

河口初太郎は三十歳、妻の良江は二十五歳であつた。

増田夫妻は東の長屋に住み、河口夫妻は北の長屋に住んでいた。

この二つの長屋が、ほぼT字形に接するところに共同水道があり、

まわりが空地になつていて、水道端はかみさんたち、空地は子供たちで、どちらもそうぞうしく賑にぎわつていた。

増田と河口は日雇い人夫に出ていた。特に仲が良いわけでもないが、でかけるときいつもいっしょだし、酔つていっしょに帰ることも稀まれではなかつた。——増田は河口のことを「初つあん」と呼び、河口は増田を「あにき」と呼んだ。

かれらの妻たちも、共同水道で毎日のように顔が合い、他のかみさんたち同様に、ぐちをこぼしあつたり、人のうわさや蔭口や、そのほか数え切れないほどの話題について、おしゃべりの快樂ふけに耽ふけるのであつた。——だからといって、二人が特に親密だというわけではない。

「まあ聞いとくれよおよっさん、あんただから話すんだけどさ」

勝子は良江にこう呼びかける。そして、けいぼう 閨房の秘事までうちあけたうえ、誰にもないしよだよ、と念を押す。その口ぶりや表情には信頼と、深い親近感とがあふれていて、だから親きようだいいにも話せないことを話せるのだ、というふうに感じられるのであるが、実際には相手が良江でなくともいいのだ。そのとき話したい衝動がおこり、適当な相手がありさえすれば、どのおかみさんにも話せないようなことを話すのに、少しも差支えはないのであつた。

これは良江に置き替えても同じことであるし、他のかみさんたちの多くにも当ては箒まるだろう。たまたまそうでなく、二人だけ

特に親しいとか、水道端のパーティーを好まないような者がいれば、「おへんじん」とか「おきちさん」などという悪評から^{のが}れるすべはないのであつた。

十月末の或る夜、九時ころのことであるが、河口初太郎の家へ増田益夫が酔つてあらわれた。

その日は二人とも、近来にない日当の仕事があり、帰りはいつしよに一杯やつた。そしていま、河口は妻の良江を相手に、またぐずぐずと飲んでいるところだったので、増田の顔を見るなり勇気づいて「ようあにい」と手をあげた。

「いいところへ来てくれた、まああがつてくれ」

「おらあそんなきげんじゃあねえ、おめえに聞いてもれえてえこ

とがあつて来たんだ」

増田はあがつて、夫婦の脇へどかつとあぐらをかいた。顔は赤いし眼も赤いし、息は腐った熟柿じゅくしのような匂いがした。

「まあ一杯いこう」と河口は持っていた湯呑を、ちゅつと啜すつてから差出した、「そのうえで話を聞こうじゃねえか、どうしたんだ」

「どうもこうもねえや」良江の注いでくれた酒を、水でも呷あおるよ
うに飲んで、増田は云った、「どうもこうもありやしねえ、うちのすべたあまのちくしよう、おらあまるでのら犬がシャツポをかぶされたような心持だ」

「ふーん」河口は首をかしげた。

「云つちやあ悪いが、めしを食らつてるときに頭から、ぱいすけ一杯の砂をぶちまけられたような気持だぜ」

「ふーん」河口はあにいの心持を推察し、推察する限りにおいて、事情の複雑さ——具体的にはまだなにもわからないにしても——に深く感動した、「いつもながら、あにいのところはむずかしいな」

「お勝さんも気が強いからね」良江は増田に酒を注いでやりながら云つた、「気性はいい人なんだけども、かつとなるとかつとなつちやうのね」

「砂をどうしたんだって」良江がしゃべりだすと諸事こんがらか

つてしまうのが常なので、河口はべつの湯呑に自分で酒を注ぎながら反問した、「ほんとに頭からぶちまけちやったのか」

「砂をぶちまけやしねえさ、まさか、そんなような心持だつてことを云つたまでだが、てんでもう話にならねえ」と増田は酒を飲んで云つた、「おめえと別れてからよ、おらあ湯へいつて帰つて一杯やつたあ、いやにつんけんしやあがるんで、なにがどうしたときいたら、おまえさんの知つたこつちやあねえ、といつてそつぽを向きやあがる、おれの知つたこつてねえならそんなにつんけんするな、つて云つてやつたら、どうしてさ、と口返答をしやあがる、どうしてつてべらぼうめえと云いかけると、べらぼうとはなんだい、と突つかかつてきやあがつた」

亭主に關係のないことで、亭主につんけんするのはべらぼうじやねえか、と云うと、それじゃあおまえもべらぼうかいと云う。おれがなんでべらぼうだ。いつもあたしに關係のないことであたしに当りちらすじやないか、番たびじやないか、そうだろうと切返した。

「亭主にやあ亭主の見識てえものがあらあ、なあ初つあん」

河口は「そうとも」と云つて湯呑の酒を呷つた。氣のせいか、いかにも見識を確証するような飲みかたであつた。

「男つてもものは外で難儀の多いもんだ」と増田は続けた、「まだけつつぺたの青いような若造の人繰りにへいこらしたり、無理な荷揚げにへたばっているのを、畜生のようにどなられたり、それ

こそ血の涙も出ねえようなおもいをしなけりやあならねえ、だからてめえのうちへ帰ったときぐれえ、つかかあにでも当りたくなるのが人情じゃあねえか」

おれのいうことが間違っているかと云つて、増田はぐつと酒を飲みほし、良江がすぐに酌をしてやった。

「あにいの云うとおりよ、いつだつてあにいの云うことは間違えなんかありやあしねえさ」

「ところがうちのあまときたら負けちやあいねえ、昔から一度だつてはいとぬかしたためしがねえんだから」と増田は新しく注がれた酒を飲んで云つた、「男が外で難儀をすれば、うちにいる女

にだつて難儀なことがあるんだ、それこそむし歯を五寸釘くぎでほじくられるようなおもいをすることが幾らもあるんだ、けれどもあたしや女房だ、疲れて帰つて来る亭主に、いちいちこうめつたあめめつたつて泣きごとを並べちやあ悪いから、黙つてなんにも云わねえでがまんしている、おまえにやあそんなことはわかっちゃいねえだろう、つてへこましやあがるんだ」

それも理屈だと云おうとして、河口は慌てて口をつぐんだ。

そこまで亭主に気を使つてくれるんなら、ついでにつんけんするのめやめたらどうだ、とやり返したところが、あたしだつて人間だから、たまにはつんけんしたくもなるさ、それとも女はつんけんしてはいけねえつていう法律でもできたのかいつてえ挨拶だ、

と増田は云った。

「おらあはらが煮えくりかえつて、はっ倒してくれようかと思つたがあのおまのこつた、長屋じゅうの騒ぎになるからとびだして来た、みてくれ、まだここんとこがどきんどきんと鳴つてるから」

彼は着物の衿えりをひろげ、黒い毛のみっしり生えた胸をひたひたと叩いた。良江の眼が、増田の胸毛を見て光った。眼球の内部からさつと閃せんこう光がはしつたようにみえ、そのまま三白眼になった。「しようがねえな、女つてもものあしようがねえもんだ」河口は唇を手の甲で拭きながら云つた、「笑つちまえば済むこつても、見識だの法律だのつて、すぐむずかしく理詰めを持つてゆきたがる、つまり暇をもてあましてるんだ、笑つちまえばそれつきりだから、

なんとかこじらしてたのしもうってえわけだ、よし、おれがいつてよく話してこよう」

「そんな厄介をかけちやあ申し訳がねえ、うっちゃやつといてくれ」

「そうはいかねえ、あにいとおれの仲でおめえ」河口は立ちあがった、「これが黙って見ていられるかって、ねえ、相手は誰だっけ」

「およしよ、ばかだねえこの人は、すっかり酔っちゃってるじゃないかさ」と良江が云った、「お勝さんのところへなだめにゆくんだろう、相手は誰だっけなんて、いったって話なんかできやしないよ」

「大丈夫だよ、これっぱかりの酒で酔ってたまるかえ」

「酔ってるよ、だめだったらおよしってばさ」

良江の口ぶりは彼を止めるのではなく、唆けしかけるように聞えた。もちろん、彼女にそんな意志はない、亭主が酔いすぎているから、いつてもむだだとわかっていたのである。

けれども、人間はいつも意志によつて行動するものではない。

良江が亭主に「ゆくな」と云つたのは、亭主が酔いすぎているのを認めたからであると同時に、そういう止めかたをすれば、亭主がやつきになつて自分の我をとおす、という癖のあることを知っていた。認識論的に知っていたのではなく本能で感知していた、そそのかというべきであろう。したがって、彼女がその亭主を唆そそのかするような

調子でなにか云ったとしても、それは完全に意識外のことであつて、彼女自身には些いささかも責任を負う必要のない問題であつた。

河口は出てゆき、良江は増田に酒をすすめた。増田はもう定量以上に飲んでいたけれども、自分では感情を害しているため、飲んだだけ酔つてはいないように思いこんでいて、すすめられるままに飲み続けた。

「あたしも一杯いただくわ」やがて良江も盃さかずきを持った、「お酌して下さいよ」

「いただく、とはござつたな」増田は酌をしようとしたが、手がふらついたので酒をこぼした、「ははあ、おれの手は酔つちまつたようだな、それっ」

「だめだめ、みんなこぼしちまうじゃないの、自分で注ぐからこ
つちへかして」

「済まねえ、済まねえな、良^よつちやん」増田はそら笑いをし、良
江の顔を見て頭を振った、「おめえ、初つあんとこの、良つちや
んじゃねえか、へえー、こいつは大きなおどろきだぜ」

「また胸が鳴りだしたかい」

「胸が、——ああ胸か」増田は衿をひろげて、胸毛のところをさ
ぐつてみ、ふしぎそうに首をひねった、「へんだぞ、ことんとも
音がしねえ、心臓も酔つちまったかな」

「どら、あたしがみてあげる」良江はすり寄って、彼の胸へ手を
伸ばし、濃い胸毛を好もしそうにまさぐった、「——搏^うってるじ

やないの、こんなに、ほら、どきんどきんって、——ずいぶん強い動悸どうきだわ、あたしの手をはね返しそうだよ」

「だよ、とござったな」増田は軀をねじった、「おめえのはどうだ」

「自分でみてみなさいな」

「めんどくせえや、心臓なんぞくたばつちめえだ」

「まあお待ちよ、乱暴だねえあにさんは、待ってったら」

増田は「あ——っ」といつて、そこへごろつと横になった、

「あにさん、か」

「どうしたの、そんなとこへ寝ちまつちやだめじゃないの、風邪ひくわよ」

「あにさん、ときたか」

増田は眼をつぶつたまま、くすぐられでもしたように含み笑いをし、よせやいと云つた。

河口は帰つて来なかつた。良江は酒を冷やのまま、暫く独りで飲んでいたが、やがて立ちあがると、戸納から夜具を出してそこへ敷きはじめた。

明くる朝はやく、増田の妻が河口の住居へ来て、自分の亭主の仕事着を差出し、河口初太郎の仕事着を受取つて帰つた。

「男つて酔うとしようのないもんだねえ、ほんとに」と増田の妻の勝子が云つた。

「ほんとにねえ、男は酔っぱらうと子供も同然なんだから」と河口の妻の良江が答えた。

二人の会話はそれだけだった。心になにか思っているが口にはだせないとか、話し合えば気まずいことになるとか、そういう心理的な回避があったわけではない。彼女たちにはそれ以上になにも云うことはなかった。慥たしかに、なにも云うことはなかったのだ。

いつもの時間になると、仕事着に着替え弁当の包をぶらぶらさげて、河口初太郎と増田益夫が水道端で顔を合わせた。

「よう」と増田が云った。

「よう」と河口が答えた。

「おてんとさまが眩まぶしいや」と増田が云った、「ゆうべは飲みす

「ぎちまった」

「飲みすぎちやったな」と河口も云った、「なんだかまだふらふらすらあ」

そして二人は稼かせぎにでかけた。かれらもまた、そのほかにはなにも云わず、云いたいことを隠しているとか、相手の気持をさぐっている、などというようすは微塵みじんもなかった。それだけならさして驚くほどのことではないかもしれない、人間の云うことや行動は、かなり桁けたはず外れにみえても、たいていどこかでつじつまが合っているものだ。増田と河口との二た組の夫妻が、或る夜酒に酔って、それぞれ良人と妻をとりちがえて寝た、という出来事なら、このわれらの「街」では決して珍しい例ではないし、都市と

町村の差別なく、巧みにかぶった仮面をぬげば、同じような冒険がどこにでもみつけだせる筈だ。

けれども、この二た組の場合は少しばかり異例であつた。朝いつしよに日雇い稼ぎに出た二人は、その夕方帰つて来ると増田は河口の住居へ、河口は増田の住居へと、なんのためらいもなく、極めて自然に、あつさりと別れていつたのである。どちらにも抵抗感やぎこちなさや、気まずい感じなどはなかつた。それぞれがもともと自分の住居へ帰るような帰りかたであつた。

その翌朝も、二人は水道端で待ち合せ、いつしよに仕事へでかけていつた。どちらも平生と變つたところはなかつた。きげんがいいというふうでもなく、ふきげんだというふうもなかつた。

「天氣が続いてめつけもんだ、これが半月も続いてくれればな」
「うん、半月もこの天氣が続けばなあ」と河口が答える、「そうすりやあめつけもんだがなあ」

こうして、肩を並べて二人はでかけていった。

勝子と良江もまえの日と少しも変わらず、水道端でいつしよになると、水仕事をしながら会話をたのしんだ。

「こう物がたかくなる一方じや困ったもんだよねえ」と勝子が云う、「おどろくじやないかお良っさん、塩引が一と切いくらしたと思う」

「そうなんだよまったく、あき呆れ返ったもんさね」と良江が答える、

「これっぱかりの人蔘にんじん一本でさ、一本でよお勝さん、あたしやまあ値段を聞いただけでつんのめりそうになっちゃったわ」

いつものとおり、この種のおしやべりが続くだけで、亭主たちのことを口にしないほかは、話しぶりにも態度にも、まったく変化はみられなかった。

この状態がなんの支障もなく続いた。近所の人たち、特にかみさん連中が知らずにいたわけではない。相当とつぴないろ恋沙汰に慣れているかみさんたちも、この二た組のやりかたには胆を抜かれたし、そのうえなんの騒ぎもおこらず、亭主たちも細君たちも従来どおり仲良く、平和につきあっているという事実を慥かめると、さらに深い驚きを感じ、ここの住人として例のない、道徳

論までもちだして非難しあつた。

「どつちもどつちだけどき、まああんな夫妻つてあるかねえ」

「こんにちさまが黙つちやいないよ、こんにちさまがね」

「あたしや子供にきかれて弱りぬいたよ、このごろの子供ときたらませているからね、うちでもおとつちやんと作さんのおじさんが取つ替ればいいだつてさ、あいた口が塞がりふさぎやしない」

「子供は眼が早いからね」

この会話にはデリケートな含みがあつた。つまり、左官の手間取りをしている松さんの細君と、若い土方の作さんとは、かなり以前から親密にしており、松さんのいないときにその親密の度がぐつと高くなる、という事実が相当ひろく知られていたのだ。

「眼が早いのは子供だけじゃないけどね」と松さんのかみさんは平然とやり返した、「人目を憚はばかってする浮気ぐらいなら、にんげん誰だって覚えのあるこった、あんまりきれいな口のきけるにんげんはいやあしまいと思うけどさ、あの夫妻たちのようにおーっぴらでやるなんてひどすぎるよ」

「おてんとさまが黙つちやいないよ、おてんとさまがね」

勝子や良江が来ればみんな口をつぐむ。もちろん、彼女たちの会話が、勝子や良江の耳にはいらぬわけではない。二人に聞きとれる程度までは話し続けているし、その効果を見る快樂を放棄する、などという贅ぜいたく沢なまねはしないのであった。

にもかかわらず、かみさんたちの期待は裏切られた。勝子も良

江もぜんぜん反応をあらわさず、平気な顔でおしゃべりパーティーに加わり、活潑に笑ったり話したりした。たまりかねたかみさんの一人が、或るとき勝子に向ってあいそよく増田益夫のことをたずねた。

「そう云われてみればそうね」と勝子はあつさり問いに答えて云った、「相変らず飲むことは飲むけれど、酔って暴れるようなことはなくなつたわ、お良っさんとはどう」

「云われてみればそうね」と良江も明るい表情で云った、「飲むことは相変らずだけれど、酔っぱらって暴れるなんてことはなくなつたようだわ」

問いかけたかみさんは業をにやし、せきこんでなにか云おうとしたが、二人のようすがあんまり恬淡てんたんとしていたため、ついに追い打ちをかけることができず、自分が辱はずかしめられでもしたような、重量たつぷりの怒りを抱えてそこを去った。

勝子と良江とが、亭主たちのことにまったく無関心だったかどうかは、判然としない。或るとき、水道端で洗濯をしながら、良江がふと手を休めて、どこを見るでもなくぼんやりと向うを見まもりながら、溜息ためいきでもつくような口ぶりゆつくりと云った。

「男なんて、みんな似たりよつたりなもんだね」

すると勝子も洗濯の手をとめ、ぼんやりなにかを考えるような眼つきで、ふと微笑しながら頷いて答えた。

「ほんとにね、みんな似たりよつたりなもんさ」

それがお互いの、現どうせいに同棲どうせいしている男についての感慨だとは断言できない。一般論としての男性観であつたかもしれないが、いずれにせよ、彼女たちの顔つきや口ぶりは、現実感のこもつたものであつた。

亭主たちのほうにも、似たようなことがあつた。増田と河口とは以前よりも親しく、往きも帰りもいっしょだつたし、仕事の現場もできる限りいっしょになるようにつとめた。片方が護岸工事で片方が荷揚げを割り当てられ、荷揚げのほうが目当が多いときでも、護岸工事なら人増しができるとなると、二人とも目当にこだわるようなことはなく、どちらも進んで護岸工事のほうを望ん

だ。

「どうしたんだ」毎朝、集まって来る日雇い人夫に仕事の割当をする、人繰りの若者が、或るときげげんそうに二人を見て云った、「おめえたちいつもくつついてばかりいるが、なにかたくらんでるんじゃないか」

二人は黙っていた。

「へたなまねをするなよ」と若者はすごんだ、「賃上げストなんてことでもたくらんでるとすると大きなまちげえだ、すぐに五躰がばらばらになるような事故が降ってくるぜ」

「大きなことをほざく若ぞうだ」

その日の帰り、屋台で一杯ひっかけながら、二人は可笑しさに

笑いあつた。

「賃上げストだつてやがる」と増田が云つた、「ピンはねストならやつてもいいが、こつちはそれどころじゃあねえや、なあ」

「それどころじゃねえ」と河口が云つた、「まつたく、そんな暢のんき気な場合じゃあねえさ」

二人がいつもいつしよにいたがるのは、明らかに、賃上げストやピンはねストとは無関係なようであつた。——こつちはいまそれどころではないと云う、そんなことよりもつと緊急な、共通の関心事があるのだろうか。——そういうことがあるとはみえないし、同じ現場ではたらいいていても、それほど親密な仲とは考えら

れなかつた。

慥かに、二人はいつもいつしよにいるが、それは急に友情にめざめたからではなく、同病者が互いに寄りあつていたがるような、または、同じ犯罪者が相手の密告を恐れるため、お互いに監視しあつている、とでもいつたような感じであつた。

次のとき仕事の帰りに、二人はまた屋台店で一杯やつていた。かれらは飲むときでもあまり親しそうでなく、相当に酔わない限り会話も活潑ではなかつた。——そのときも例のとおり、酎ちゆうのコップを啜り、つき出しの着さかなを摘つまみながら、ときたま要もないことを、うわのそらで話し、あとは黙つて、どちらもそれぞれの考えにとらわれているようであつた。やがて、増田益夫が首を振り、

コップの酎を音たかく啜つて、独り言のように呟いた。

「女なんてもなあ、へ、変りばえのしねえもんだ」

「まったくさ」と河口初太郎が云つた、「女なんてどっちへ転んでも、変りばえのしねえもんさね」

この二た組の夫婦のロマンティックな関係が、どのくらい続いたかははつきりしない、二十日たらずともいうし、三十日以上ともいわれた。道徳論をもちだして怒つた人たちも、この「街」では、興味を唆る出来事があとを断たないのと、なにより各自の生活に追われるのが急なため、まもなくかれらのロマンスに慣れ、いつ忘れるともなく忘れてしまった。そして、ふと気がついたときには、この二た組の夫婦がもとどおりの組み合わせに返っていた

ので、改めてみんな胆をつぶした。

そのいきさつはこうだ。

或るとき、増田は河口と違う仕事を割り当てられた。むろんそれが初めてではない、日によってどうしても同じ現場につけず、べつべつになることもそう稀ではなかった。それでも帰りには、ゆきつけの屋台店でおちあい、いっしょに一杯やることだけは欠かさなかったが、その日は屋台店でもおちあわなかった。

「お伴れさんはみえないな」と店のおやじが云った、「どうかしたのかい、親方」

「いまに来るだろう」と増田は答えた、「——久し振りに鬼ころしといくか」

「疲れたあとじゃあ毒だな、こんど仕入れたのはめっぽう強いんだから、それでもいいかい」

「念を押すなよ、昨日や今日飲みはじめたんじゃあねえ、疲れたあとで毒といやあ、鬼ころしよりよっほど大毒なものがあらあ」

「そのあとは聞くまでもなし」

「いいから注いでくれ」

鬼ころしと呼ぶ酒は、土地によっていろいろ違うらしい。ここでは焼酎の強いので、アルコール分が六十度もある、と屋台のおやじが自慢していた。

アルコール分六十度なら、ほかにもっと強い酒があるだろう。

しかし、その鬼ころしはどういうわけか効きめが強く、酎のコツプに二杯ぐらいまではなんとということもない、舌ざわりも匂いもふつうの酎とさして変らないが、三杯めを飲み終るころになると、たいていな豪傑でもがっくりとやられる。優秀な狙撃兵に射たれでもしたように、突然がくつとなり、しばしば地面にぶつ倒れる者もある。

増田は倒れるような初心者ではなかったが、それでも効きめのあらたかさには勝てず、その店を出たときには足もとがふらふらしていた。

「疲れてるから毒だって、べらぼうめ、誰だと思ってるんだ」あ
るきながら増田は云った、「昨日や今日飲みはじめた酒じゃあね

えんだ、ふざけるな」

「わかつたよ、親方」と誰かが云つた、「親方の云うことは尤ももつとだ、おらあ一言もねえがね、うちにやあかかあとがきが待つてるんだ」

「待たせとけよ、かかあやがきは逃げやしねえや、おめえ、——
おんやこの野郎、初つあんだと思つたらそうじゃねえな」

「たのむよ親方、おらあもう帰らなくつちやならねえんだ」

増田は相手を捉つかまえようとしてよろめき、どこかの家の戸袋へ倒れかかった。

「静かにしておくれ、誰だい」と女の声でどなるのが聞えた。それみろ、かかあは逃げやしねえや、ちゃんとうちにけつからあ、

と呟いた。そうして戸袋からはなれ、頭をひねって考えた。

「待てよ、まあ待ってくれ」と彼はあたりを見まわした、「あの屋台店で鬼ころしをひっかけてよ、それから横丁へ曲つて、——どつかではしごをやったな、いや、いやそんなこたあねえ、ねえか、ねえとすると」

「誰だい」とまた女が云つた、「そこにいるのは誰だい」

「べらぼうめ」と増田がどなり返した、「そこにいるのは誰だい、とはなんだ、てめえの亭主の声を忘れるようなかあが、どこの世界にある、そんな不実なかあがどこの世界にあるかつてんだ」

障子があいて、電燈の光りが格子の外まで伸び、土間へ勝子が出て来て覗いた。

「まあ、おまえさんじゃないか、どうしたのさ」

勝子は格子をあけた。

「じゃないか、とござったな」増田は土間へよろけ込んだ、「へつ、そんなことう云われて吃びっくり驚するようなこちとらじゃあねえぞ、ふざけたことうぬかすな」

「おお臭い」勝子は自分の鼻の前で手を振った、「また鬼ころしを飲んだね、臭くって鼻が曲りそうだよ」

なにが鬼ころしだ、鬼ころしを飲んだからどうだつてんだ、そんなふうには増田がくだを巻き、勝子はなだめて部屋へあげようとし、増田は土間へ坐りこんだ。

そこへ河口初太郎が帰つて来たのである。から弁当の包を振りながらふらつと来て、格子口から中を覗きこみ、その眼を細くしたり大きくみひらいたりし、頭を強く左右に振つたのち、改めてじつと眸子ひとみを据え、なにかふしぎな物躰でも発見したかのように、勝子と増田をつくづくと見まもつた。

「あらお帰んなさい」と勝子が云つた、「このしとまた鬼ころしをやつたらしいの、見てちようだいこのざま、——今日はいっしょじゃあなかつたの」

「あにいだな」河口は顔をさし出して、土間に坐りこんでいる増田を覗いた、「こりやあおめえあにいじやねえか」

「うちのしとよ、いっしょじゃなかつたの」

「おれの現場で酒が出てよ、それがおめえウイスキーだ」河口は手の平で額を押えた、「本場物のウイスキーで一本幾らとかってえ代物だつてんだ、——あにいに飲ませたかったが、うん、今日はいっしよじゃなかった」

「済まないけれども手を貸してよ、重くつてあたし独りじゃどうしようもないわ」

「よしきた」

河口はから弁当の包を放りだして、土間へはいり、増田の両脇へ手を入れて抱き起こした。

「誰だ、おれをどうしやあがる」

「おれだよ、あにいに、すっかりしてくんな、ほらよつと」

「放しやあがれ」

「ほらよつと」

河口は増田を抱きあげ、靴足袋をはいたまま部屋へあがった。あらまあ土足じゃないか、と勝子が云い、河口はあにいを六帖の部屋へ引きずり込んで、自分もそこへぶつ倒れた。増田ほどではないけれども、本場物のウイスキーで彼も相当に酔っているらしい。仰向きにぶつ倒れるなり、酒が飲んでえ、と大きな声でどなった。

「おい、てえげえにしろ」と隣りから男の声が叫んだ、「こつちにもにんげんがいるんだ、野なかの一軒やじゃあねえぞ」

勝子は河口の肩をゆすって、初つあん静かにしておくれよ、と

耳もとで云った。

「えっ、なに」河口は頭をあげた、「初つあんだって」

「隣りからどなられたのよ」と云って勝子は手を振った、「うちのしともこのとおり、正躰のないほど酔っぱらってるし、初つあんまでがそんなじゃあ困っちゃうじゃないか」

「そいつは悪かった」河口はそう云いかけて、訝いぶかしそうに勝子を見た、「あにいがどうしたって」

「このざまだよ」勝子はまた手を振った。河口はその手のほうへ眼をやり、そこに寝ころんでいる増田を見て、ぼんやりと呟いた、「あにいだな」

河口は起き直り、もういちどよく慥かめてから云った。

「こりやああにいじやねえか」

「正躰なしなんだよ」

「じか足袋のまんまだぜ」

「初つあんにあげてもらったんじやないか、初つあんもじか足袋のままだよ」

河口は自分の足を眺め、こいつはひでえ、とんだ右大臣だと云って、這はいながら上りがまち框がまちのほうへゆき、土間へおりた。勝子もあとからついていったが、河口は暗い土間を見まわして、から弁当の包をみつけて拾いあげると、じゃあ、といって勝子に領いた。

「あにきよろしく」と彼は云った、「おやすみ」

「おやすみ」と勝子が答えた、「お良さんによろしく云つとくれよ」

河口はゆつくりあるきだし、些かの誤りもためらいもなく、まっすぐに自分の家へいって、けえつたよ、と云いながら格子をあけた。出て来た良江も、驚いたりまごついたりするようすはなかつた。

「お帰んなさい、おそかったじゃないの」と云つて弁当の包を受取つた、「また酔つてるのね、お臭い、なにを飲んできたのさ」

「ウイスキーだよ、現場でごちになつたんだ、一本幾らとかつて本場物のウイスキーだったよ」河口は云つた、「——匂いだけでしろとのおめえなんかにわかつてたまるかい」

「それにしちやあいやな匂いだね、本当は、また、鬼ころしでもやったんじやないの」

そいつはあにいのこった、などと眩きながら、彼は靴足袋をぬいであがり、「水をくんな」と云つてどっかり坐ると、さもくたびれたように、背中で壁によりかかった。

以上が事のなりゆきであつた。このほかにはなにごともおこらなかつたし、どちらの夫婦のあいだにも、また、増田夫婦と河口夫婦とのつきあいにも、変つたようすはまつたくなかつた。

毎朝はやく、二人は水道端でおちあつて、仕事にでかけた。よう、と増田が呼びかければ、よう、と河口が答えた。

「今日はぱらつきそうだな」と増田が云う、「あの雲があやしい

ぜ」

「そうよな」と河口が云う、「少し天気が続きすぎたからな」

そして、いっしょに歩み去るのであった。また、それから幾時間かのち、水道端で勝子と良江の顔が合うと、これまた平生と同じように話がはずんだ。

「お良つさんところ、ゆうべはどうだった」勝子がきく、「うちのときたらどろがめさ、呆れ返っちゃうよ、まったく」

「おんなじことよ」良江も洗濯の水をはねかしながら答える、

「飲む半分でも持って帰ってくれば、ちつとはこつちも助かるだけねえ」

「男ってどうしてああ飲みたいんだろ」

「腹の中にうわばみでもいるんじゃないかしら、つくづくいやんなつちやうよ、ねえ」

近所の人たちは、かれらがいつ元どおりになったか、はつきりとは知らなかったし、元どおりになった以上、もう興味もないし、云うこともなかった。したがって、その二た組の夫婦のあいだには、主観的にも客観的にもなにごとものなかつた、というよりほかはないのであつた。

プールのある家

小雨のけむる六月の午後、その親子が街をあるいてゆく。父親は四十歳ぐらい、子供は六歳か七歳であろう。六歳にしても並よりは小さいし瘦せているが、父親との話しぶりを聞くと、少なくとも七歳にはなっているように思えた。

親も子もぼろを着て、板のように擦り減った古下駄をはいている。着ているぼろは袷あわせとも綿入とも区別がつかない。俗にいう虎刈りのまま伸びた頭の毛や、痩せた不健康な顔つきは、極めて普遍的な乞食姿こじきであり、実際にもこの父と子は乞食同様の生活をしていた。

乞食同様といったのは、生活のかたちがそうなのであって、内容にはかなりへだたりがあるからなのだ。食物も衣類も他人から

貰うし、犬小屋のような住居で寝起きをしているが、道傍に坐つて銭乞いをするようなことはない。中通りとか本通りなどで、女の人がときどき子供に幾らか呉くれることがあると、子供は「ありがとう」とおじぎをして受取るが、世間の子供と変つたところはないし、物欲しそうな感じはまったくなかつた。——それはまた、父と子の会話にもあらわれている、いま小雨のけむる街を、傘もささずにあるいてゆきながら、二人はいつか建てる筈である自分たちの家について語っていた。

「場所は丘の上がいいな」と父親が云う、「日本人は昔から山の蔭とか谷間とか、丘のふところとかね、低いところばかり好んで家を建てる癖があつた」

「そうだね、ほんとだ」と子供は考えぶかそうな顔つきで頷く、
「ハマへいったときもさ、けとうの家はみんな丘の上とか、中ぐ
らいの高みにあるけれど、日本人の家はきまつて谷みたいな、低
いところにあつたね」

「それにも理由はあるんだな」と父親は続ける。日本は地震が多
いし台風も多い、木造家屋はそれらに弱いため、なるべく風あた
りの少ない、天災に際して危険度の低い土地を選ぶようになった。
「だが、それだけでもない」

日本人は「陰影」というものに敏感で、直射光よりも間接光、
あけひろげた明るさより、遮蔽物しやへいによってやわらげられた光り
を好んだ。生活の中に静寂の美をとりいれ、ぎらぎらした物は避

けるという習慣があつた。

「だからけとうのように石で建てた家の中で、靴をはいたままどかどかくらす、つていう生活にはなじめないんだな、なかなか」

「ふーん」と子供は仔細しさいらしく首をかしげる、「そうだね、ぼくも石の家なんか好きじゃないな、寒いしき、石の家なんかいやだな」

「それもさ、そうばかりも云えないんだよ、これが」父親は反省するように云う、「たしかに日本人には木造建築が合つてるけれども、こういう、木と泥と紙で出来てる家にばかり住んでるとき、長いとしつきのあいだには、民族の性格までがそれに順応して、持続性のない軽薄な人間ができてしまふんだな」

父親はそこで欧米人の性格について語り、かれらの能力を支えてきたものは、石と鉄とコンクリートで造った家とか、靴をはいたまま、テーブルに向つて食事をし、大きな宴会もする、という生活であると云つた。

子供はその一語一語を注意ぶかく聞き、あいづち相槌を打つべきところへくると、さも感じいつたように頷いたり溜息をついたり、うな唸つたりした。父親の口ぶりも自分の子に話すようではなく、子供のほうもまた父の話を聞いているようではない。いつもそのようなだが、二人は父と子というよりは、少しとしの違つた兄弟か、ごく親密な友人同志といったふうであつた。

「それにしてもさ、さていよいよ自分の家を建てるとなるとね、これはこれで問題がべつなんだな、自分たちがそこに住む家となるとき、民族性は民族性だけれども、現実の問題はまたね」

「みんぞくせえはたいしたことないと思うな、ぼくは」

「そう云うけどね、これはきみたちの将来に関係するんだよ、ぼくたちおとなは先もそう長くはないんだしさ、これから性格を立体的に持ってゆこうとしてもむりだろうがね、きみたちやきみたちの子や孫のことも考えなければならぬとするとさ、やはり一概に個人的な好みばかりも云ってはいられないんだな」

「そうだね、うん、ほんとだ」

街は雨のうちに黄昏たそがれかかってき、往来はタクシーや通行人た

ちや、トラックなどでそうぞうしくなっていた。けれども、その親子にとつてはまったく無縁なことのようにだつたし、タクシーの運転手や通行人や、街筋の商店の人たち、それらの店頭で買い物をする人たちにとつても、この親子はそこに存在しないのと同じことのようにあつた。

日が昏くれるとその父子は住居へ帰る。それはわれわれの「街」の八田じいさんの家に添つてあり、つまりじいさんの家の羽目板にくつつけて、古板を合わせて作った物であつた。高さ一メートル五〇、幅が一メートルちよつと、長さ二メートル弱の、犬小屋そつくりの手製の寝小屋で、中には板を重ねた床と、藁わらと蓆むしろがつくねてあり、それが父子の寝具であつた。

小屋の外にビール箱があり、中には丼どんぶりが二つと箸はし、ふちの欠けたゆきひらと、でこぼこにへこみのあるニュームの牛乳沸しが入れてあった。ビール箱の脇に、針金で巻いた七厘があるが、針金を解けばばらばらになること間違いないしというほど、使い古したこわ毀れ物であった。

父子は小屋の外で食事をする。ゆきひらと牛乳沸しの中に、めしと汁などがはいついて、それはパンとシチューであったり、チャーハンとコーヒーであったり、肉と野菜と魚と、パン屑や米のめしの入り混った、なんと云いようもない食物であったりしたが、父も子も、それがどんな料理であるかについては、無関心であった。

無関心だというより、実際にはその物自体から注意をそらし、
嗅^{きゆうかく}覚や味覚や視覚を、できる限り他の方向へ集中すること
つとめているようであった。

だがこれは通例ではあっても、不変なものではなかった。とき
にその汁、またはめしやパンのあいだに、二人の味覚をよびさま
すような物の出て来ることがあった。

「ほう、これはこれは」と父が肉の小片を箸ではさみ出す、「珍
しいな、ロースト・ビーフらしい、それも上手にレアーに仕上げ
てある、このまん中のところを赤いままで焼き止めるのがこつなん
だな、おまえ食うか」

「いいよ、とうちゃん喰べなよ」と子供は眉をしかめる、「ぼくは生焼けの肉は嫌いなんだ」

「牛肉つてもものはおまえ」父親はその食い残しのロースト・ビーフを口に入れながら、まじめな口ぶりで云う、「ドイツやフランスでは生のまま食うんだぜ、ドイツだけだったかな、バイエルン地方だけのやりかたかもしれないがさ、玉葱たまねぎと月桂樹の葉をレモン漬けにしてさ、その中へ入れておいたのを出してさ、玉葱みじんぎの微塵切りとスパイスをのせてさ、生のまま黒パンといっしょに」

「粉チーズもね」と子供が口を添えると、「——それは違うか」
「好き好きだが、それは味がくどくなるだろうな」父親は噛かんでいた肉をのみこんで、ちよつと想像してみてもからおもしろく首

を振る、「うん、この場合粉チーズはいらないだろう、粉チーズはむしろ」

こうして二、三の肉料理について、父親はゆっくりと説明する。彼の話は、それぞれの専門家が聞くと、読みかじりか聞きかじりに、自分の空想で色付けをしたものだど、すぐにわかるかもしれない。反対に、彼にそれだけの経験と知識があり、しかも或る程度まで恵まれた才能をもっていたのが、運の悪いためにどの方面でもうまくゆかなかつた、というのが事実かもしれない。

彼はずいぶん広範囲にわたる話題の持主であり、子供はそのもつともよき聞き手であった。夕めしが済むと、あたたかい季節には小屋の外でくつろぐ。子供が道で拾っておく巻タバコの吸い殻

を、手製の竹のホールダーに差込み、それを大事そうにふかしながら、また父親が話し、子供がそれを聞くのである。——子供が話し手にまわることも稀^{まれ}ではないが、二人とも現実的なことにはふれない。九分九厘までが観念的なことであり、空想や作り話と思えるものばかりであった。

もつとも判然としているのは、子供が母の話をせず、父親が妻とか家族関係の話をしないことだ。どんな事情があるにせよ、七歳ぐらいの子供なら、生死にかかわらず母のことが頭にある筈である。男もむろんそうだろうが、子供にとつては特に、母のイメージは心に深く刻みこまれているものなのだから。

だが、子供は決して自分の母のことを口にしないし、よその子の母についても話したことはない。小屋の中で寝ていて、夜なかに眼ざめたとき、あるいは父といっしょに街をあるいているとき、子供の顔にふとかなしげな、人恋しげな表情のあらわれることがある。子供はそのとき母のことを回想し、思慕の衝動を感じているのかもしれない。そうして、それをしいて抑制したり、がまんしたりするようすもないが、口に出して云うということもなかった。

父子がどこから来たのか、まえにどんな生活をしていたのか、この「街」の住人たちは誰も知らない。二人の名さえも知らないのである。父と子が小屋をそこに作ることを許した八田じいさん、

——正確には八田公兵というのだが、初め男に姓名をたずねたところ、男は渋いような笑いをうかべ、頭のうしろを搔かきながら、改まって名のるほどの者ではないから、と答えただけであつた。

八田公兵も独身者であり、自分では事業家であると信じていて、休みなしに大きな事業をもくろんでは失敗する、ということを繰り返していた。事業家ともなれば太つ腹な人柄を備えなければならぬから、八田はあえてなにごとも追及せず、小屋の地代もいらないと云つた。

八田公兵は云いすぎをした。この「街」の住人の中に、土地や家の所有者はいない。地主もほかにちやんといたし、それを知っているのはヤソの齋田先生と、ごく少数の人たちであろう。いち

どならず、家主と住人たちのあいだで、「家賃」についてごたごたがあり、斎田先生があいだに立って交渉した結果、ようやくおさまりをつけたのだが、要するに八田じいさんが「地代」もいらない、と云ったのは、腹の大きいところをみせただけのことであった。

近所の人たちが名を知らないばかりでなく、父と子のあいだでも名を呼びあうことはなかった。父は子供の名を呼ばないし、子供もとうさんとか、おとつちゃんとか呼ぶことはない。どちらも漠然と「ねえ」とか「なあ」と呼びかけるだけであり、それがいつそう二人の関係を、親子というよりも親友か兄弟のように感じさせるようであった。

夜十時をすぎると、子供は小屋からぬけだして、一人で柳横丁へでかけてゆく。それは中通りの南のはずれにある裏通りの一画で、小さなレストランやおでん屋、小料理屋、中華そば、すし屋などが並んでい、べつに「のんべ横丁」とも呼ばれていた。

子供はまず「すし定」の裏口をたずねる。これは、すし屋がどこよりも早く店を閉めるからだし、そこに容れ物が預けてあるためでもあった。

「あいよ、寒いね」とおかみさんなら云う、「今日はよく出ちやっつたんでね、そこにはいつてるだけしか残らなかつたんだよ、勘弁しとくれ」

「よう、来たな小僧」とおやじなら云う、「そこにあるから持つてゆきな、生ま物は火をとおして食うんだぜ」

子供はおじぎをし、ありがとうと云う。それ以外には口をきかない、すし定のおやじはよく、うちへ小僧に來ないかと、まんざらからかいでもなさそうな調子できくが、子供はそれに対して一度も答えたことがなかった。預けてある容れ物というのは、ニームの古鍋ふるなべを三つに重ねたもので、下から上まで針金の枠わくが付けてあり、重ねたまま提げられるようになっていた。その鍋の一つは汁物、一つは野菜や肉や魚、残りの一つはめしとかうどん、そばなどを入れることにしていた。もちろんそれらがいつぱいになるようなことはたまにしかないし、野菜とか肉とか、めしうど

んなどが、その原形を保っていることは殆んどない、汁物と形はややわかる物とに大別できればいいほうであつて、かなり経験を積まなければ、それら内容物を判別することもたやすくはなかつた。

すし屋の次には小料理屋、次にレストラン、おでん屋、中華そば屋となるのだが、レストラン二軒、小料理屋四軒、おでん屋三軒、中華そば屋二軒とあるうち、店をしまいかけているところが優先する。これは時間をまちがえると、「まだ客がいるのに縁起でもないね」とか、「お客を追い出す気かい」などと云われる危険があるし、一度そんなあやまちをしでかすと次に貰えるまできげんの直るのを待たなければならぬし、しばしば競争者に権利

を奪われる危険さえあった。

断わるまでもないかもしれないが、残飯を貰いに来るのは、その子供だけではない。われらの「街」からも、稼ぎがなくて困ると、ひそかにこれらの店の裏口を叩く者があつたし、よそから定期的によつて来る者も幾人かいた。——おかしな話だが、八田公兵もあらわれたことがあるのだ。尤も八田じいさんの場合は困っているからではなく、それを彼の「事業」にしようというもくろみからであつた。信じがたいほど多彩な彼の事業欲の中でも、それはもつとも有望であり、現実性も高い一例であつたけれども、おでん屋の「花彦」という店のかみさんの反対声明で、残念ながら軌道に乗らなかつた。

「乞食までしなければならぬのはよくせきのことだよ」と花彦のかみさんは、「のんべ横丁」の同業者たちに云った、「それを一人で掻き集めて、銭儲けをしようなんてのは人間じゃないね、そんなやつにやるくらいなら、あたしはどぶへ捨てちまうよ」

その子供はこれらの危険をよく知っていた。残飯を呉くれる店の人たちも、特に彼だけをひいきにしているわけではない、店を閉めようとしてあと片づけをしているときに、呼吸よくあらわれる者があれば、相手は誰でもそう差別はつけない、一と足おくれただけで、馴染みの店を他人に取られることも少くないのだ。

さらにもう一つ。それらの店がいつもこころよく残飯を呉れる

わけではない、ということを知っていなければならぬ。

かれらもまた、多くは経営が楽ではなく、苦しいやりくりをして店を張っている者が、——外見にかかわらず相当にあつた。これらを一般に「水しようばい」というらしいが、水しようばいになるとにんきが大切だそうで、どんなにふところが危機に直面していても、そんな内情はけぶりにもみせないのがこつであり、また危機を脱するちから杖づえともなるという。——したがって一握りの残飯をやるにも、慈善の満足感ばかり味わっているわけではなく、「こつちもそれどころじゃないよ」と云いたいときが少なくないだろう。——ことに、それがすし定とか花彦とかいう、主人か主婦とじかな場合はいいけれども、使用人、なかんずく女給さ

んなどのいるところでは、スムーズにいかないことがしばしばあった。どういう心理作用か不明ではあるが、レストラン、またはバーを兼ねている洋食屋の女給さんの中には、客の喰べ残した料理の皿でタバコを揉み消したり、ルージユの付いた塵紙ちりがみを突込んだり、マツチの棒、爪楊枝、涙はなをかんだ紙、その他もろもろの物品を投げ入れる癖がある。ひどいになると、残飯をあけているところへ、わざわざやって来て、タバコの吸い殻を放り込む佳人さえあるのだ。

子供はいま「リザ」というレストランの裏に来ていた。その硝子戸ガラスドはあいているが、いつものコツクの姿は見えず、二人の女給が高声に話しながら、流し台によりかかってタバコを吸つてい

た。

「あら、また来たよあのちび」と女給の一人が裏口にあらわれた子供をみつけて云う、「だめだよ来たって、なんにもありやあしないんだから、帰んなさい」

子供は片隅へ眼をやる。そこにはドラム罐かんの半分くらいの、ホーロー引きの罐があり、中には喰べ残した洋食の屑が八分めほど溜まっていた。いつもなら主人であるコツクが、子供のため他のソース鍋に残り物をとっておくのだが、いまはそれらしい物は見あたらなかった。

「なにうろうろしてんのさ」とさきの女給が云う、「そんなところで立ってたってなんにも出やあしないよ、帰んな」

子供は振向いてそこを去る。

彼はまったく無表情で、いまの女給の不当な侮辱をどう感じているか、うかがうことはできない。そういう侮辱に慣れているともみえるし、反対に、それを感じないことで、相手に侮辱を返上している、というふうにも思われた。

ほぼ七歳とみえる子供ながら、彼のようすはおちついていて、その表情や口のききかたには、どことなく達観したような、または多難な生活をしてきて疲れたおとなのような、枯れた柔和さが感じられる。

彼が「のんべ横丁」の歴訪を終るまでに、まずくすると他の強敵に出会うことがあった。

敵の一はまるといふ名の犬。他の一は三人組の少年たちだ。犬のほうはまるなどというやさしそうな名にもかかわらず、四十キロもありそんな巨軀きよくと、ゴリラも恥ずかしがるだろうようなものすごいつら構えをしていて、その子供をみつけると、歯を剥むき出して唸りながら、のそりのそりと近よつて来るのである。

そのように軀からだが大きく、ものすごいつら構えの犬は、むしろ温お和となしくて無害だと、犬好きの人はよく主張する。慥たしかに、まるも平生は温和というえに臆病者で、自分の半分もないような犬ににらまれても、しおれた顔で眼をそらすか、物蔭へ隠れにゆくというふうであった。他の犬と喧嘩けんかをしたこともないし、怪しげな人

間に吠えかかるといふこともない。——にもかかわらず、その子供を「のんべ横丁」でみかけるとたんに、唇を捲まくつて歯を剥き出し、重量感のある巨軀を誇示するかのよう、のそりのそりと寄つて来るのであつた。

人と毛物のあいだにも、合性のよしあしとか、にが手とかいうものがあるらしく、まるには子供が気にいらぬようだし、子供のほうでもまるにはかなわないのだらう、提げている古鍋に残飯がはいつているときには、それをすつかり地面にあけて逃げるし、まだなにも貰つていないときには、三つの古鍋を一つ一つ、中になにもないことをまるによく見せてから、その夜の貰あきらいを諦めて帰るよりほかはなかつた。むろん、まるは残飯などには眼もくれ

ないのであるが。

三人組の少年たちは、一般にちんぴらと呼ばれる連中で、なんの必要も理由もないのに、弱そうな者を見つけると威おどしたり、殴ったり、持ち物を奪ったりすることに英雄的快感を覚え、それだけが生きるたのしみだと信じているらしい。としては大きいのが十五歳くらい、あとの二人は十二か十三だろう。ちゃんとした家庭の少年とみえて、シャツもズボンも流行の品だが、それをわざと崩して着こなし、威嚇的な、というのはどこか関節が外れたような、ぎくしゃくしたあるきかたでのしまわるのだが、われらの子供を発見するとインディアンのような叫び声をあげ、インディアン踊りをやりながら子供の周囲を踊りまわり、彼の小さな軀を小

突いたり、頭の毛や耳を引っぱったり、提げている古鍋を奪って、中の残飯をぶちまけたりする。

子供は決して反抗しなかった。力の差を比較したからではなく、反抗するのがまったく無意味なことだと、よく理解しているかのように。また、それが避けられない災厄であつて、この世に生きている以上、すべての者が耐え忍ばなければならぬことだと、承認しているかのように。

ギャングどもがその遊戯に飽きて、彼を最後に突きめすか、もう一つ殴りつけるかして去ると、初めて、子供は涙をこぼすのであつた。

投げとばされた鍋を拾い集めながら、彼はなにも云わずに涙をこぼす。涙は子供の頬をぐしやぐしやに濡らす、口でなにか云ったり、泣き声をもらしたりすることはない、そんなことは一度もないし、家へ帰ってから父親に告げるようなこともなかった。

子供は家へ帰ると、鍋を持って小屋へもぐり込む。父親はたいてい気持よく熟睡していて、そのときは子供も注意ぶかく、父親の眼をさまさせないように、そつと眠りにつくのであるが、早く寝ついた父親はすでに眠り足りていて、子供が帰ると眼をさますことが珍しくはなく、そのときはいつものような話が展開して、明けがたに及ぶことも覚悟しなければならなかった。

「寝ながら考えたんだがな」と父親は話しだす、「家を建てるに

はさ、まず門というものが大切だ、門は人間でいえば顔のようなものさね、顔を見ればあらし、その人間の性格もわかるんだな、あらしだけれどさ」

「そうだね、うん、ほんとだ」

「尤も、人はみかけによらないということわざもある、が、まあそんなふう云つちまえば、——きみはねむったいんじゃないか」
「ねむくなんかないさ」子供は眼をこすりながら、たのしそうに答える、「大丈夫だよ」

彼は欠伸あくびをする。のんべ横丁をまわって、神経をすりへらし、軀も疲れていた。足はだるいし、眼はいまにもくつつきそうである。けれども彼は力の限りそれらとたたかい、父親の話し相手に

なっている。父親は気づかないのだろうか、それとも気づいてはいるが、話し続けていなければならぬ理由があり、もしそれを中断すればなにか異常なことがおこる、とでもいうのだろうか。

——どちらにもせよ、父親は各種の「門」と、その風格や美感について語り、子供は辛抱づよく相槌を打ち、感動して唸り、熱心に同意したりした。

食事のために炊事をすることは殆んどない。寒い季節には湯を沸かすが、食事は残飯をよりわけ、それぞれの井に移して冷たいまま喰べる。

「冷食は健康のためなんだな」と父親はしばしば云う、「犬に例をとってみても、ブルジョワに飼われてるやつは大事にされて、

却^{かえ}つて軀が弱くなつてしまふ。ところが拾い食いをして地面の上で寝るようなのなら犬はさ、虫歯もなければ胃弱にもならないだろう」

「ほんとだ、うん、ほんとだ」

「生物はほんらい冷食していたんだな、——これはポーク・カツらしい、きみ喰べるか」

「いいよ、喰べなよ」と子供は首を振る、「ぼくのほうにもあるんだ」

父親はポーク・カツレツの切れっ端を喰べ、暖衣温食が、いかに人間の肉軀を弱め、非力多病にしたか、ということ、それに反して、冷食と戸外生活が、どんなに自然であり健康に役立つか、

という理論をくりひろげるのであった。

つめたい食事と戸外生活、それが人間のもっとも自然で、健康なありかただと主張しながら、同時にかれらの空想上の家は、空想の中で幾たびとなく建てたり改築されたりしながら、しだいに豪壮な邸宅となつていった。

門はそうひのき総檜のかぶきもん冠木門にきまり、へい塀は大谷石。洋館は階上階下とも冷暖房装置にし、日本間のほうは数寄屋造り。庭はいちめんの芝生であるが、これはイギリスからエバー・グリーンを取りよせる。約二千平方メートルの庭の、西側三分の一はくぬぎ林にし、あいだに杉の若木を配するが、花の咲く木はいつさい入れな

いことにした。

以上は父と子とで、念入りに、繰り返し検討し、試案が出され、欠点が補われた結果であり、ほぼ満足すべきものとなったのだ。

かれらにはその邸宅の外観が、現実に存在するもののように、どの角度からでも、いかなる細部をも、即座に指摘し、説明することができるといった。

「いよいよ家具を入れる段になったな」子供といっしょに街をあるきながら、父親は慎重な口ぶりで云うのだ、「洋館のほうはさ、おれはスコットランドふうにしたいんだがね、こう、——」と彼は手でなにかの形を空に描いてみせる、「どっしりと厚いオーク材を使ってさ、すべてハイ・ランド地方の古い領主の館か、いや、

狩猟地の別邸だろうな、農民の素朴さを活かした、しかも気品の高い、おちついた調度をそろえるんだな」

子供は頭をかしげるが、相槌を打つ言葉がみつからないのだろうか、右肩をゆりあげたり、頬ぺたをこすつたりするばかりで、なにも云わなかった。

「問題は台所なんだな」父親は眼を細めて、自分の想像に具体性を与えようとする、「つまり日本式にするか」彼はまた手でなにかの形を空に描く、「それともガス・レンジやフライ用の鉄板を備えた調理台のある、洋式のものにするかさ」

「うん、そうだね」子供は用心ぶかく眉をひそめて云う、「それはまだ、いそがなくなつてもいいんじゃないかな」

「それはそうさ、べつにいそいでるわけじゃないんだよ、そんなわけじゃないが、建物や庭はすっかり相談がまとまっちゃったしさ、そつちはもう出来ちやったのも同様だからな」

「そうか、ほんとだ」子供はなにか重い物でも背負いあげるように答える、「——じゃあ、やつぱり台所だね」

父親はぶしよう髭ひげの伸びた頬をぼりぼり搔きながら、台所を日本式にするか、それとも洋式にするかについて語る。それはまた当分のあいだ、というよりもできる限りながく、父と子のたのしい話題となるにちがいない。——二人はぴったり寄り添って街をゆき、或るときは草原に腰をおろし、夜はまた狭くて暗い小屋の中で、空腹をまぎらかしながら語りあうのであった。

父親にとっては残念だったろうが、室内調度が洋館の応接間まで進んだとき、子供が死んだ。

九月はじめのもっとも暑い夜、犬のハウスよりみすぼらしい小屋の中で、一週間ほど激しい下痢をしたのち、嘘のようにあつてなく子供は死んでしまった。

死因がなんだったか、はつきりとは云えない。或る朝、食事のとき子供が七厘で火を焚いた。拾い集めた雑多な木片や、木の枝などを燃やすので、寝ていた父親が煙にむせ、小屋から顔をだして、なぜ火を焚くんだ、湯はいらないじゃないかと云った。食事のときに湯を沸かすのは寒い季節だけで、そのほかはいつも水で

済ましていたからである。

「湯じゃないんだ」子供は眼のまわりの黒くなつた顔を振向けて云つた、「生ま物があるから煮るんだよ」

「生ま物だつて、へー、どれ見せてみな」

子供は牛乳沸しを持って、父のところへいつて中を見せた。

「なんだ、しめ鯖さばじゃないか」父親は鼻をうごめかし、唇を手で横撫よこなでにして云つた、「これはおまえ塩と酢でしめてあるんだ、これはきみ生ま物じゃないよ」

「すし定のおじさんが、火をとおして喰べなつて云つたんだ」

父親は首を振つた、「まちがえたんだな、きつと、しめ鯖を煮たりなんかしちやあ食えやしないよ」

「だけどね」子供はなお云い返そうとしたけれど、父親がゆつくり首を振るのを見ると、ベそをかくように笑って、牛乳沸しを下におろした。

その日の午後から、親子は腹痛と下痢で苦しみだしたのだ。しめ鯖の中毒かもしれないが、そうではなかったかもわからない。しめ鯖はうまかったし、匂いも変っているようではなかった。喰べた物はそれだけではなく、区別するのが困難なほど、雑多な食品が入り混っていた。

「これはしめ鯖じゃないな」父親は自己弁護というのではなく、症状を医学的に内省する、というふうな口ぶりで云った、「——
もしもしめ鯖にあたったんならさ、まずじんましん蕁麻疹が出るか、おうと嘔吐

がおこるかするんだな、ところがおれもきみもそんな症状はなかった、これはだから、食中毒じゃないな、おれは冷えだと思っうね」
子供は腹痛のため顔をしかめながら、そうだね、うん、と頷いていた。

西願寺の崖^{がけした}下に、殆んど毀れかかった共同便所がある。ずっと以前から使われなくなったので、朽ち乾いた板切れをつくねたようにしかみえない。いま使っているのは、その父親と子供だけで、下痢が続くあいだ、二人は小屋からそこへかよっているのであった。

三日めになると父親の症状はおさまった。彼の腹痛は一と晩すぎると治り、三日めには下痢も止った。子供のほうは腹痛も下痢も弱まらず、三日めをすぎるとすっかり衰弱して、崖下まである

いてゆくことができなくなった。

「だいじよぶだよ、心配しなくつてもいいよ」子供は父を力づけるように云った、「ぼくはもうすぐ治るよ」

「そりやあそうき、そんなことは心配なんかしてやしないがね」父親は自分の腹を撫でた、「こういうときは絶食がただ一つの治療法なんだが、——それにも度があるんでね」

子供は済まなそうな眼で父を見た。父はもう治ったから、なにか喰べなければならぬのだ。おそらく腹がへって耐えられなくなったのだろう。そしていま自分に、そのことを訴えているのだ、ということが子供にはよくわかった。

「ぼく、あるけるといいんだけどね」と子供は云った、「もうすぐあるけると思うんだけどな」

「おう、おう、とんでもない」父親は手を振った、「きみにのんべ横丁へいってくれなんていうわけじゃないさ、どうしてもなかか喰べなくちゃならないとしたら、おれだつて自分でいって来るよ、そうじゃないんだ、それほどまだ腹はへつてやしないんだ、この下痢というやつには、絶食するしか療法はないんだし、絶食は長く続けるほどあとのためにいいんだ、空腹といったって、人間は十日や十五日飲まず食わずでいても、死ぬもんじやないんだな」

子供は皺しわだらけになった顔をすどく歪ゆがめ、腹を押えながら軀

をくの字なりに曲げた。腹が痛みだしたのか、下痢が始まろうと
しているのだろう。呻うめき声を出すまいとして齒をくいしばり、軀
ぜんたいが円になるほど身をちぢめた。

父親にはそれが見えないのだろうか、彼は眩まぶしそうに子供から
眼をそらし、入口の垂れ布を捲つて小屋を出た。——子供の容態
はもう尋常ではない、軀はすっかり肉がおち、皮膚は老人のよう
に皺たるんでいる。便には血が混りだしたし、間隔は短くなるば
かりであつた。それが父親である彼には見えないのだろうか、知
つていて見ないふりをし、自分を自分でごまかそうというのだろ
うか。——小屋から出た彼はちびた下駄をはき、脇にあるビール
の空箱に腰を掛けた。彼の顔はまったく無表情で、眠っているよ

うにとろんとした眼で向うを眺めながら、音をさせないように長い太息をついた。

「洋館の応接室だがね」と父親は小屋の中の子供に話しかける、「スコットランドふうにするというアイディアは考え直すことにしたよ」

彼は自分の腹がくうと鳴ったので、いそいで声を高くしながら、応接室の新しい構想について熱心に語った。

さあきみ、すぐにその子を抱いて医者へゆきたまえ、治療代のことなんかあとでどうにでもなる。とにかく医者へゆくんだ、そんな地面になんぞ寝かしておいてはいけない、すぐに病院のベッドへ移さなければだめだ。わからないのかきみ、手おくれになる

ぞ。

父親はのそつと立ちあがり、大きな欠伸をした。

飼い犬が主人の顔を見ると、まず尻尾しっぽを振るまえに大きな欠伸をする、あれはどういうことだろうか。——子供の父親である彼も、いまそんなときでもないのに、大きな口をあいて欠伸をした。これはどういうことだろう、退屈したのだろうか、途方にくれたのだろうか。——云うまでもなく、それは飼い犬のする欠伸と似ているところはない。彼の欠伸は、主人を見てよろこびの情をあらわすようなものとは、まったく反対な感じをもっていた。

発病してから五日めの午後、子供は殆んど意識不明になった。

ときたま云ううわ言も、なにを云うのか聞きとれなかったし、話しかけても答えはなかった。

父親は小屋から出たりはいったりするばかりで、子供には手を触れようもしなかった。

彼は一人の子の親ではなく、むしろ親に捨てられた幼児のように見える。見知らぬ街の中でとつぜん親に捨てられ、これからどうしていいか、誰に頼ったらいいか見当がつかなくなり、まさに泣きだそうとしている幼児のように。――

夜の十時ころ、小屋の外でうずくまっていた父親は、よくよく思案したうえのように、三つ重ねた古鍋へ手を伸ばした。

「そうなんだな、人間は食わずにはいられない」彼はぶつぶつと

眩いた、「病人だつて、いつまで食わせずにおけるわけではないんだ」

それでもなお迷っているようすだったが、やがて決心をしたといたげに、重ねた古鍋を提げて立ちあがった。

「ちよつと行って来るよ」

父親は小屋の中へ呼びかけた。

「のんべ横丁までな、すぐ帰つて来るからね、なにかうまい物を貰つて来てやるよ」

彼は子供がいつも話している、すし定とか、花彦などの名を、記憶の底のほうから拾いだしながら夜の街へでかけていった。――

――そして約一時間のちに、口の中でなにかを噛みながら帰つて来

ると、古鍋を下に置いて、小屋の中を覗きこんだ。

「いま帰ったよ」と彼は云った、「きみが腹をこわしてると云つたらさ、花彦のマダムがそれはいけないって云って、うまい物を呉れたよ」

「ねえ」と子供が云った、「忘れてたけどさ、プールを作ろうよ」
 はつきりそう云ったのだ。声にはちからがなく、少ししやがれてはいたが、きみの悪いほどはつきりした云いかたであった。父親は泣くような表情で微笑した。

「そうだな、うんそうしよう」と彼は大きな声で云った、「なんでもきみの好きなようにするよ、やれやれ、これでようやくおさまったな」

子供の病気は峠を越したのだ。子供というものは生命力の強いものだからな、彼は明るい顔色になり、珍しいことに、鼻唄をうたいながら、七厘に火を焚きはじめた。

彼はニュームの牛乳沸しで、残飯の粥かゆを作り、それを喰べさせようとして小屋へはいつてみると、子供はもう冷たくなっていた。その翌朝、ヤソの齋田先生が小屋の前を通りかかったとき、彼はビールの空き箱に腰を掛けたまま、ぼんやりと空を見あげ、手に牛乳沸しを持って、なにかぶつぶつ独り言を呟いていた。

「お早う」と齋田先生が呼びかけた、「坊やは元気かね」

彼は齋田先生を見あげたが、まったく知らない人を見るような

眼つきで、けれども口では「ええ元気です」と答えた。

病氣だとか聞いたようだが、もう治ったのか、と斎田先生がきくと、ええおかげさままでと答え、うるさいな、とでも云いたげに顔をそむけた。

彼は子供を抱いて、西願寺の崖下と小屋のあいだを、ひんばん頻繁に往来したのだから、近所の人たちが見なかつた筈はない。斎田先生は誰かからそれを聞いたのであろうが、彼のそつけない態度を見ると、それ以上なにを云う気にもなれず、今日も暑くなりそうだね、などと云いながら去っていった。

その後ずつと、誰も子供の姿を見なかつた。初めに八田公兵がそのことに気づき、坊主はどうしたのかとたずねた。母親のここ

ろへ返した、と彼は答えた。

「へえー、あの坊主に母親があつたのかい」

八田じいさんは信じられないというふうに問い返した。

「あんたにはおふくろさんはなかつたのかね」と彼は反問した。

「わしにだつておふくろはあつたさ、母親もなしに生れてくる子なんかありやしないだろう」

「だろうね」と云つて彼は顔をそむけた。八田公兵はもつとなにか聞きたそうだったが、彼のようすがひどく冷淡であり、むしろ排他的であると思ひ、そのまま話を打切つてしまった。

そのうちに誰が云うともなく、或る日の早朝、まだあたりがまっ暗なじぶんに、彼が子供を背負つて、西願寺のほうへ歩み去る

のを見た、という噂うわさが広まった。病気の子供をもてあまして、どこかへ捨てにいったのだろう、と云う者もあるし、本当に母親がどこかにいて、そこへ返しにいったのだろう、と云う者もあつたが、そのどちらにせよ、かれらには関係のないことなので、まもなく噂さえもしなくなつた。

九月の暑さが終り、十月もすぎた。彼は毎夜十一時ころに、「のんべ横丁」へゆき、残飯を貰い集めて帰ると、小屋へもぐり込んで独りで寝た。朝になると、小屋の外で独り食事を済ませ、例の三重の古鍋を洗つて、「のんべ横丁」のおでん屋「花彦」のかみさんに預けたのち、一日どこかあるきまわつたり、小屋へ帰つてごろごろしていたりした。

そのうちに、子供の代りができたのだ。

十一月にはいつていつのころからか、足の小さな犬の仔が、彼についてあるくようになった。生れてほんの四、五十日経ったばかりだろう、黒と白のぶちで、雑種だが四肢が太く、こまっちゃくれた利巧そうな顔つきをしてい、彼のゆくところにはどこへでもついていったし、小屋へ帰るといっしよに寝るようになった。

「そうだ、そういうわけだ」彼は街をあるいてゆきながら、無意識に独り言を云う、「——待てよ、そうとばかりも云いきれないんだな、うん、そうでないこともある、簡単じゃないさ」

仔犬は彼の足に身をすり寄せるようにして、ついてゆく。とき

どきそのこまっちやくれた顔をあげて彼を見、そうですね、ほんとにそうですよ、とでも云いたげに尻尾を振る。そして、彼が振向いて見たりすると、ええ、ぼくはここにいますよ、心配しないで下さい、大丈夫ですよ、という意志を教えようとするような眼つきをし、もつと大きく尻尾を振る。——彼はごくたまにしか声をかけない。振返つて仔犬を見るとときには、なんともいいようのない表情が顔にあらわれる。それはなにか話しかけたいようでもあるし、話しかけても相手には聞えない、ということを知つて、「かなしいな」と呟くようでもあつた。

きみ、子供をどうしたんだ。死んだ子供をきみはどうしたんだ。あの子のことは思ひださないのか、もう忘れてしまったのか。き

みのために残飯貰いをし、それをあたためて食事の支度をし、きみのでまかせな話、なんの役にも立たない非現実的な話を、いやがりもせず聞いたり、雨に濡れるのも構わず、いつもきみといっしょにあるきまわり、きみのために休みなく気を使っていたあの、幼い子のことを哀れだっと思ったし、やりさえもしないのか。きみ、いったいあの子をどうしたんだ。

「たいしたことはないな」彼はあるき続けながら、声を高めて云う、「どつちにしろたいした違いはないんだな、五十歩と百歩じやあずいぶん大きなひらきだけどき、でも世間じやあ五十歩百歩と同じくらいに云つてき、自分の問題となれば九十歩と百歩でも、相当むずかしく考えるだろうけれど、それにしても、まあたいし

たことはないらしいな」

つめたい雨が降りだしてきた。もう十二月に近い午後、の街は、いつとき人の往来もまばらになり、道はゆつくりと濡れだして、小石がつめたそうに光ってみえた。仔犬は尻尾を垂れ、首を垂れて、濡れてゆく毛が重たそうに、それでも彼の側からはなれず、ちよこちよこについてゆき、街の或る角へさしかかると、いかにも勝手知ったというふうに一方へ曲る。——彼はいつもそつちへ曲るとはきまつていない、しばしばまっすぐにゆくか、反対側へ曲るかするが、仔犬が立停つて、不審気に見まもっているのに気づくと、黙つてあと戻りをし、仔犬の曲つたほうへあるきだすのであつた。

その道を二丁ばかりゆくと、勾配こうばいのゆるい坂になって、登り口の右側に交番があり、そこからほんの三十歩ばかり上の右側に、西願寺の山門があつた。

仔犬を伴れた彼はその山門をはいり、本堂の前庭を横切つて、まっすぐに墓地へはいつてゆく。雨はつよくもならないが、やむけしきもなく降つていて、裸になつた木々の枝に溜まつた滴が、彼と仔犬の上へ、しきりにこぼれ落ちた。

墓地にも地区別があり、高級住宅地と中産階級とは、下級住宅や長屋階級とかなりはつきり地区を別にしてゐる。そして、前者には五十年とか百年とか、稀にはそれ以上も供養の絶えない墓が

あるのに、後者の地区には三十年以上というのは珍しい。ちよつと古いのになると、掃除もされず荒れたままになつてゐるし、その多くは無縁墓で、いつ片づけられるかわからないというものであつた。

彼は墓地の西端まであるいてゆき、うしろが竹藪たけやぶ、左右を枯木林で塞ふさがれた二メートル四方ほどの、空地の前で立停つた。――そこは赭土あかつちに雑草がまばらに枯れているだけで、なにも變つたようすはなかつたが、彼はその前にしやがみこんで、じつと赭土の一点を見まもつた。

「プールを作るのは賛成だね」彼は口の中で云つた、「――庭の芝生のまん中がいいかな、エバー・グリーングリーンのまん中に、白タイ

ル仕上げのプールがあるのは悪くないよ、ちよつとしたブルジョ
ワ気分じゃないか」

仔犬は雨に濡れて寒くなつたためか、彼の脇にぴつたりより添
つて坐り、軀をこまかくふるわせながら、彼の顔を見あげたり、
ときどき「帰りましょうよ」とでも呼びかけるように、低い鼻声
でないたりした。

彼の蓬ほうはつ髪もぶしよう髭も、その着ているぼろ布子も、絞るほ
ど濡れてしまつたし、蓬髪からたれる雨のしずくが、額から頬、
そして顎あごや頸くびへとしたたり落ちた。

「注水と排水設備にちよつと難点があるんだな、そう」と彼は顔
ぜんたいを手で拭き、眼のまわりを拭きながら云う、「地所が高

台だからさ、濁水期のためにタンクを備えなくちゃならないし、排水のほうもなにしろプールいっぱいの水となるとね、ちよつとした下水くらいじゃまにあわないんだな」

仔犬が鼻声でないた。

彼は片手で、空間になにかを描くような手まねをしたが、すぐにその手をだらんと垂れ、同時に頭も低く垂れた。そうして、誰かそこに人がいて、その人間に語りかけるような調子で云った。

「大丈夫、きつと作るよ、きみがねだったのは、プールを作ることだけだったからな、——きみはもつと、欲しい物をなんでもねだればよかつたのにさ」

雨のしずくがたれるので、彼はまた顔を手で撫で、眼のまわり

をこすった。空はかなりくらくらくなり、仔犬はふるえながら、あまえるようになき声をあげた。

箱入り女房

徳さんが結婚した。

徳さんは高名な親分「築正」一家の身内だそうで、プロの博奕ぼく打ちだちうということをつねづね誇りにしていた。どこまで信じていか、誰にも見当はつかない、けれども、賭けかごとの好きなことだけは明白な事実であった。

徳さんは時と処ところとに頓とんちやく着せず、相手さえあれば賭けを挑いどんだ。

「よう、一丁いこう、よう」と徳さんはせがむ、「次に来る市電の番号、丁か半か、よう、あれで一丁いこうったら、よう」

「なあ、一丁いこうよ、なあ」と彼はせがむ、「おめえの歯でいこう、上の歯で一丁、下の歯で一丁、それとも上下合わせてでもいいや、丁か半か」

「おっと待った」と彼はいそいで相手を押えるような手まねをする、「その口を閉めちやあだめだ、口を閉めるとべろで歯の勘定ができるからな、口をあいて、それからべろを出しててくんな、さあ、丁か半か」

羽目板のもくめの数。通行ちゆうの老人のとし。繩の切れつ端。柑橘類かんきつるいの實の袋数。マツチの本数。花の花卉。電車のレール。橋はしげた桁。茶碗一杯のめし粒。——このように数えてもきりはない、つまり数の限定した事物以外なら、どんなものでも即座に賭けの材料にするのであった。

彼は三十二歳だと自慢しているが、本当は二十八か九であるらしい。筋肉質ではなく、ぼてつと中太りの軀に、夏も冬も洗いざらした浴衣一枚で、冬にはほころびだらけの半纏はんてんをひっかける。縞目もよくわからないほど古い、女物の半纏であるが、——女物じゃないかなどときくと、たいてい一時間ぐらいは、それを着ていてくれと泣いて頼んだ彼女について、よもやと思われるような

のろけを聞かされる。もしも「その話は聞いたよ」とでも云えば、逆にもう一人べつの彼女をひきだしてきて、それこそ二、三日は気が沈むほど聞かされるのがおちであつた。——顔はおもながのようでもあり、まるいようでもあり、また、そのどつちでもないようでもあつた。眉もはつきりせず、眼は細く、唇は厚く、鼻は蜜柑みかんの皮のように穴だらけだし、顔いちめんつぶにきびを潰した痕あとだらけである。一メートル六〇そこそこの身長を、「五尺七寸たつぷり」だと自慢し、それを証明するためだろう、人を見るところではいつも背伸びをしていた。

或るとき、この「街」の真吾さんについて、一人の警官が徳さんの家をおとずれた。まだ若い警官で、初めに隣りの島悠吉にき

き、それから徳さんの家へ来た、ということがあとでわかった。

「なんですか」警官の姿を見るなり、徳さんはがたがたふるえだした、「なんの用ですか、あつしは竹家のことには関係なしですよ」

「あんたのことじゃない、あんたには関係のないことなんだ」警官は手帳を繰りながら、彼のほうは見ずに云った、「きみは戸部真吾という者を知ってるかね」

自分のことではないと知ったとき、徳さんの硬ばった表情がゆるみ、軀のふるえが止った。そして眼尻をさげて微笑したとたん、つい平生の癖が出た。

「あつしが戸部のことを知ってるか知らねえか」と徳さんは云つた、「それで一丁やりませんか、旦那」

警官は不審そうに彼を見た。そして「なにをやるんだね」と反問した。

「わからねえかな、賭けですよ、賭け」

警官の口がゆつくりとあいた。

「旦那が先に賭けるんです」と彼は巧みな口ぶりで云つた、「あつしが戸部のことを知ってるか知らねえか、どっちへ賭けるのも旦那の勝手だ、賭けだからいかさまなし、あつしは正直なところを云いますよ、ねえ、一丁やってみませんかい」

旦那にとってこんなに割のいい賭けはない、と云つたそうだ。

若い警官がそれにどう答えたかわからない、怒ったともいうし、笑ったとも云うし、なんにも聞えなかったように黙っていたともいう。——明くる日の夕方、彼は家の前で隣の島さんにつかま

った。

島さんには顔面神経痙攣けいれんというデリケートな持病があり、片方の足がちよつと短い。けれども性質は明るくて人づきあいがよく、誰とでもすぐに親しくなり、いつもあいそがいい笑顔をみせた。徳さんとは隣り同志であるが、殆んどつきあわないし、口をきいたこともごくたまにしかなかった。

「きみ、やったね」島さんは彼に向つて、にっと笑いながら云つた、「なにか大でいりでもあつたのかい」

「なんのことです」

「隠すなよ、ゆうべおまわりが来ただろう」

「知ってるんですか」

「ぼくのうちへ先に寄ったんだ、きみも相当な顔らしいな」

「云わないで下さいよ」彼は得意になり、それを隠そうとして頭を搔かいた、「ときどきようすをみに来るんです、うるさくつてし
ようがねえんだが、まあ警察としても役目でしょうからね」

「それほどの顔だとは知らなかった、み直したよ」

「云わないで下さいよ」彼はプロの博奕打ちらしくてれてみせた、
「あつしなんざ、まだほんのかけだしなんだから」

徳さんはこの話を、知っている人たちみんなに語った。島さん

にとんだところを見られちゃってね、とか、下っ端ならこんなことではないんだが、とか。おれが幹部になるってことを警察でもう勘づいてるらしい、などとさえ云うのであった。

その徳さんが結婚したのだ。彼は或る夜、結婚したというその若い女を伴^つれて、近所の家をずっとまわった。

「こんど女房を貰いましてね」と彼はその妻を紹介した、「としは十八、名めえはくに子ってえんです、どうかよろしく」

くに子は一メートル五〇くらいの背丈で、小太りの、かなりなきりようよしであり、眼も口も鼻もちまちまとしていた。

「くに子って柄かね」と近所のかみさんたちは云いあつた、「と

しだつてはたちを二つ三つ越してるよ、十八だつて、——ふん、きつとどこかのインチキバーの女給か、小料理屋からでも攫さらつてきたんだろうさ」

「それならまだしもさ、夜になるとどこかの街の角にでも立つてたんじやないのかい」

「やさしそうなお面めんをしてえるけど、一と皮剥むけばあれで相当なばくれんだよ」

例の如きもので、かくべつ悪意があるわけではない。よそからはいつて来る者は、例外なしにこの種の評をあげせられるのだ。もちろん根拠のないものだから、四、五日も経つか、口でもききあうようになれば、これらの評はすぐに逆転するばかりでなく、

たちまち親類以上のちかしいつきあいになるのであった。

だが、この場合はそういうふうにははこばなかつた。細君であるところのくに子が、隣り近所とつきあわず、水道端へも出て来ず、買い物にでかける姿もみせないのである。——これまで同様、そういうことは徳さんがぜんぶやった。風呂敷や手籠を持って買物にもゆくし、水道端で洗濯もする。しばしばくに子の肌着や下の物なども洗うので、かみさんたちはのぼせあがつた。

とし古い夫婦で、細君が弱いような場合にはゆるされるが、徳さんのように新婚そうそうであり、かくべつ新妻が弱いわけでもないのに、大の男がそんなことをするというのはタブーであつた。

——特にこの「街」のかみさんたちは、それぞれ亭主や子供たち

のために苦勞させられているから、こんな不徳義なことを見せつけられては黙っているわけにはいかない。

「なんだいあのおしやもじは、どこのなにさまだい」おしやもじとは云うまでもなくくに子のことだろう、「嫁に来たばかりだつてえのに、亭主に腰巻まで洗わせる罰当りがどこの世界にいるかさ」

「水しようばいの女にきまつてるよ、めしも炊けず針も持てない代りには、きつとあのほうが巧者なんだろうよ」

「徳さんも徳さんだ、築正親分の身内だなんて云つてながら、あのさまはなにさ、こつちで恥ずかしくなつちまうわ」

これまた例によつて、徳さんの耳には筒抜けに聞えてしまう。

「うちのくに子は箱入りでね」と彼はにやにや笑いながら攻勢に出た、「あいつはまだ世間ずれがしてねえし、恥ずかしがりやな
んで、当分は箱入り女房つてことにしとくつもりですよ」

「夫婦となればね」と彼はまた云う、「亭主が女房の物を洗うのは情愛つてもんで、悪口を云う人もあるようだが、それはいらねえお節介、^{うらや}羨みのあげくのそねみてえものさ」

かみさんたちの怒りは頂点に達した。自分たちの評を「羨望^{せんぼう}のあまりのそねみ」だと、面と向つて云われようとは思わなかつたし、そんな暴言を聞いた例もないし、さらにがまんがならないのは、それが「事実」だったからである。かみさんたちは徳さん

のことを男の屑くずだと罵り、かの袋の中身はきんどころか銀でも鉄でもなく、どぶ泥でも詰っているのだらうとわらった。

徳さんはなんと云われても平気だった。こんなにもいい女房をもてば、悪口を云われるくらい当然のことだ、と自認していた。彼はこの「街」ではたんば老人ともっとも親しくしていた。たんば老人だけは、彼の話をまじめに聞いてくれるし、ときたま困つて少額のむしんをすれば、こころよく貸してもくれるのであった。しぜん、新妻くに子の自慢がしたくなると老人のところへいつてたつぷりと話して聞かせる。

「じつに信心ぶかいやつでね」と彼は老人に云う、「寝る段になると毎晩その、蒲団を敷く向きでひともんちやくさ、初めはあつ

しもめんくらがつちやつたね、なにしろ蒲団を敷く段になつたとき、いきなりあつしの顔を見て、たいしやく帝釈さまはどつちの方角に当りますかつて云いだした」

彼はぎよつとした。この場に及んでたいしやくさまをどうしようとするのか、証人にでも呼び出そうというのかと思ひ惑つた。

すると彼女はうやうやしい口ぶりで、今日は帝釈さまの日だから、そつちへ足を向けて寝ると罰が当るのだ、と説きあかしてくれた。「それで安心はしたものの、あつしはまた困つた、たいしやくさまがどつちの方角に当るかなんて、こつちはてんで知りやあしねえ、たんばさん知つてますかい」

「そうさな、まあ、——まあ、知らないようだな」

くに子は眉をしかめて考えこんだが、やがて、それでは自分のもと知っている方角でまにあわせようと云い、西南のほうを枕にして寝たのであった。

「次の晩はおめえ不動さまだ」と徳さんは云った、「こいつはあつしも縁日で知ってるから迷うこたあなかつた、こんぴらも見当はついたし山王いなり稲荷もすぐにわかつた、かんのんさまのときにやあまごついたつけ、なんしろおめえかんのんとくりやあ四方八方にあらあ、これにやあくに子のやつも匙さじを投げたね、さんざん考えたあげく、本山さままで勘弁してもらおう、ということをやつとおちついた、つて始末よ」

「それは毎晩のことかい」

「毎晩のことさ」と徳さんは云った、「そのうちにおめえ、とんでもねえ日にぶつつかった、くに子のやつあ妙な暦みてえな本を持っていて、それを繰つちやあ今日はなにさまの日に当るか、つてえことを調べるんだが、その、とんでもねえ日つてのがおめえ、どつちを頭にしても、足の向く方角にはみんなそれぞれの神だからだかがあるってんだ」

たんば老人の顔にゆるやかな微笑がうかび、ゆるやかに消えた。それはたいへんだつたらうな、と老人は同情するように云った。

「くに子のやつは寝ることができねえって泣きだした」と徳さんは続けた、「東西南北、どつちのほうにもなにかが頑張ってるし、

どいつもこいつも記念日みてえな日に当たっていて、どれ一つ失礼していいようなやつがねえってんだ、つまり寝るのに足の向け場がねえわけさ、あつしや云ってやったね、ようくその曆みてえな本を繰ってみなってさ、東西南北、どつかに隙のねえ筈はねえ、警察の非常線にだつて隙はあるんだから、つてね、そうでしょうたんばさん」

それがだめなのだ、とくに子は云つた。どつちの方角もぜんぶ塞がっていて、一センチの隙もないという。徳さんは痺れしびを切らして寝てしまつたが、夜なかに眼をさましてみると、くに子は古ふる箆へん筒すずに凭たれて、坐まつたまま眠ねつていたそうであつた。

「なんでも年に一度か二度はそんな日があるんだそうです」と徳

さんは云った、「——女の身で、そうてえした学があるわけでもねえのに、くに子つくれえ神さまや仏さまの数をふんだんに知つてる者もねえもんだ、あんなに信心ぶけえ者もめつたにやねえだらうな」

たんば老人はゆつくりと、「若いのに珍しいな」と云った。

「いやもう、おつどろいたよ、たんばさん」と次のとき徳さんは云った、「——くに子のやつが、また信心の話なんだが、十五のとしだつてえが用達しにいった、なんの用だったか忘れちやつたそうだがね、こう、ずっとあるいてゆくてえと、おつそろしく立派な、柱や欄干なんぞまつ赤に塗つた、べらぼうにでつけえ建物の前へさしかかった、それがあんまりきらびやかでこうごうしい

から、くに子のやつあ肝をつぶして、われ知らず両手を合わせておがんじまった、それから通りかかった人に、これはなに神さまのお社かつてきいたところ、その人のほうでもびつくりして、これはあんた歌舞伎座ですよって云われたんで、くに子のやつあもういちど肝をつぶして逃げだしたんだそうです、ええ」

そんな、十五くらいのとしから、くに子はそれほど信心ぶかかったのだと、証明するような口ぶりで云って、徳さんは誇らしげに顎を撫でた。たんば老人はつつしみぶかく、感心したともしないともつかない、あいまいな、しかし決して笑いたいような顔はみせず、ゆつくりと幾たびも領うなずいた。

三十日経ち、五十日経った。新妻を迎えてからおよそ七十余日

経ったところ、徳さんは別個の問題について、たんば老人の意見をききに来た。

「その、あれなんだがよ、ちよつと云いにくいことなんだがよ」
彼はしきりにうしろ頸を掻いたり撫でたりした、「こいつはたんばさんだから云えるんだが、くに子のやつはまあ箱入り女房さね、世間ずれのしていねえ、うぶなこたあ、これまでなんども話したとおりなんだが、それにしてもげせねえことがあるんだ」

老人は黙って、膝ひざの前にある詰め将棋の盤を見まもりながら、徳さんのあとの言葉を待った。

「それってえのがおめえ、なんだあ、つまりあのときのことよ」

と徳さんは口ごもりながら云った、「あのときつてえばわかるだ
ろうが、あつしがよ、その、なんだあ、つまり汗だくんなつてつ
とめてるさいちゆうによ——くに子のやつはいきなりへんなこと
を云いだすんだ、ねえあんた、秋になると木の葉はどうして枝か
ら落ちるんでしようつて、——あつしやあびつくりしちやつたよ、
ほんとにさ、おめえそんなことを考えてたのかつてきくと、いま
急に気になりだしたんだつて、こんなときにまたどうして気にな
りだしたんだつてきいたら、どうしてだかは知らないがとにかく
気になってしようがないつて、——よせやい、いまそれどころじ
やねえじやねえかつて云つて、あつしやあまた馬力をかけたが、
いけねえんだたんばさん、秋になると枝から木の葉が落ちらあな、

なるほど、どうして秋になると落ちるのかつて、こつちも氣になりだしちまつたら、馬力がまるつきり抜けちまつたつてわけよ」

「その次にはおめえ齒だ」と徳さんは続けた、「あつしが汗たくさんなつてるさいちゆうによ、ねえあんた、人間の齒はなんで出てるんだらうねときた、齒はおめえ齒じゃあねえかと云つたら、だつてさ、骨でもなし肉でもないんだから、なにかほかの物で出来てるに違いないじゃないのときた、——よせやい、いまそれどころじゃねえじゃねえかつて云つて、あつしはまた馬力をだしにかかつた、ところがいけねえんだたんばさん、待てよ、そう云われてみれば人間の齒は肉でも骨でもねえ、とするといつてえなんが出来てるんだらうつてね、そいつが氣になりだしてまた途中下

車だ」

その次はおさつ（紙幣）のことで、百円さつがあつて千円さつがあるのに、どうして百五十円さつとか千五百円さつがないのか、ときたそうである。政府のすることだからわからないと答えたら、新聞の身の上相談へ投書してみようかと云つた。百五十円さつと身の上相談とどんなひっかけがあるのかと考えたら、徳さんは頭がこんぐらかつてしまつて、同じく途中下車になつたそうであつた。

「ものを考えるのはいいつてんだよ、ねえたんばさん」と徳さんは云つた、「秋になるとなせ木の葉が落ちるかなんて、ふつうの人間なら思いつきもしねえだろう、そいつはおめえくに子のやつ

がいい頭を持つてる証拠だから、あつしやあなにも反対はしねえ
てんだ、けれどもよ、どんなにいい考えにしろ、なにも選よりに選
つてそんなときに云いだすこたあねえやね、そうでしょう、たん
ばさん、あつしやあだから云つてやったよ、おめえ時と場合を考
えて云えつて、にんげん誰だつてこういうときには身を入れてや
るもんだ、こつちは気が散つて続かねえじゃねえかつてよ」

たんば老人は詰め将棋の駒の一つを、慎重に動かしてから、な
んということもなく呻うなつた。

「くに子のやつあ温おとな和しい性分だから、あつしに口返答はしねえ、
はい、といつてこつくりをするんだが、——忘れるのか生れつき

の癖かどうか、あつしが汗だくんなつて馬力をかけだすと、ねえあんたをまた始めるんだ、ねえあんた、七福神は誰と誰だつてくる、また始めるのか、そんなこたああとの話だつてえと、だつて気になつてしようがないから教えてよとくる、神や仏はおめえの領分じゃねえかつてえと、七福神はべつだつて、どうもしょうがねえ、弁天さまにじゅうろうじん寿老人にびしやもん天にほていに大黒にえびつさまに、そこでつかえちまつたら、くに子のやつあ指を折つてやがつて、まだ一人足りないよつてやがる、それからあつしやあ初めからやり直してみたが、どうしてもあとの一人がわからねえ、さあこつちも気になりだしちやつて、はてもう一人は誰だろうと考えると、また馬力はすつこ抜けよ、——笑いごつちや

ねえよたんばさん」

「笑やあしないよ」

「あつしやあしんけんなんだから、ほんとに」と徳さんはきまじめに表情をひき締めて云った、「ゆうべもゆうべで、ねえあんたを始めやがった、タクシーの運ちゃんはどうして車に酔わないのつときた、そりやあおめえあたりきじやねえか、車に酔うようじやタクシーの運ちゃんができやしねえや、つてあつしやあ云つてやった、するつてえとくに子が云うにはよ、あたいがお店にいたときセーラーのお客がいたけれど、セーラーには船に酔う者が相当にいるつてつたよときた、セーラーが船に酔うんだから、タクシーの運ちゃんや車が酔わないとはきまつちやいないでしょつ、

ときた、あつしやあ呻ったね、呻ってから云つてやった、よしよし、こんどタクシーの運ちゃんに会つてきいてみようつてよ」

「それでまた中折れになったが、あつしやあ気分をととのえて、やつとこ取直しにかかった」と徳さんは続けた、「ところがいけねえ、ホームストレッチにかかろうとするとたん、またくに子のやつがねえあんたときた、それがまたとんでもねえ、首をくくるのと身投げをするのと、鉄道自殺をするのとどれがいちばん苦しむだろうときた、えっ、そのときあつしがどんな気がしたと思う、たんばさん」

老人は手の甲で口を押え、それからつぶやくような声で、その、ホームスとかつてのはなんのことか、と反問した。徳さんはそんな

ことは耳にもはいらないらしい、たいそう深刻な眼つきで、あたかも老人に責任でもあるようなふうに老人の顔を凝視した。

「あつしやあねえ、胃袋がここんとこまで」彼は自分の喉を指さした、「——このへんまでとびだしてきたように思ったよほんとに、ほんとだよたんばさん」

「あつしもがまんが切れた」と徳さんはすぐに続けた、「こんなことを放つといちやあ一家のおさまりがつかねえ、そうでしょう、だからあつしやあ起き直つて、この際なんだつてそんなことを考えだすんだ、いまやつてることと、首つくくりや身投げや鉄道自殺となんの関係があるんだ、ふぎけるなつてよ、——くに子のや

つあ考えてた、よつく自分の胸の中を考えてたつけが、あたいが
お店にいたとき、お夏ちゃんがお客と二階へあがつてさ、お客だ
けがおりて来て帰つちやつて、お夏ちゃんのかんばんまでおりて
来ないでしょう、そいだもんだから彼氏がいつてみたら、お夏ち
ゃんは首を絞められて死んでたじゃないの、だからあたいがさぞ
苦しかつたらうねつて云つたら、まあ子が首をくくるよりも身投
げのほうが千倍も苦しいつて云うし、リリイはそうじゃない鉄道
自殺のほうがよっぽど苦しいらしいつて、あらいやだ、いつか新
聞に青線女給殺さるつて出てたじゃないのつ、ときた」

「まあいい、その話はそつとしとけ、つてあつしは云つた」徳さ
んはなにかを推えるような手まねをした、「おれが云つてるのは

お夏ちゃんのことじゃあねえ、こういう場合に限ってなぜそんなことを考えだすんだってこつた、ほかに幾らも考えだす暇はあるだろう、どうしてこうやってるときに限ってよけえなことを考えだすんだ、こつちだって感情害しちゃうじゃねえか、どういうわけだつて云つてやった、そうでしよう、たんばさん、——おめえ」と彼は急に驚いたような眼で老人を見た、「おめえ競馬を知らねえのかい」

「競馬、——いや、知らないね」

「それじゃあホームストレッチなんてつても、そうだ、そのホームストレッチなんだ」彼は話を戻した、「あつしがそう云うと、くに子のやつあ首をかしげて考えたつけ、やがてまた首をこつち

へかしげて、自分でもわからないが、お店にいたじぶんマダムに云われたことがある、そういうときには気をそらして、なにかほかのことを考えるんだって、さもなければからだ躯が続かないよってさ、念を押しして云われたのが癖になったのかもしれないってんだ、そんなことがあるのかな、え、たんばさん」

「さーてね」老人はちよつと考えてから、いたわ労るように云った、

「——あるかもしれないな、世間ずれのしていない、箱入り女房ともなればな」

「世間ずれがしなすぎよ、ほんとに、十八のとしから七年の余もバー勤めをしていてそれなんだから、まったくうぶってつたって限界があらうじゃねえか、そうでしょうたんばさん」

「大事にしてやるんだな」と老人は云った、「いまにいいかみさんになるよ、きつと」

そのくに子は、家で仰向きに寝ころんで「ひとのかかをすれば極めて多忙である」という意味の唄をうたっていた。

枯れた木

平さんは独り者で、手作りの小屋に住んでいる。古い材木の柱を四本立て、まわりに古板を打ち付け、屋根も古板の上へ古トタンを張ったものだ。出入り口はひらき戸だが、軀を躡めなければ

ならないほど小さく、南側に一メートル四方ばかりの窓が一つ、それも手作りで、くもりガラスが箆はめてあつた。

人の住んでいる家は生きていくようにみえるものだ。住んでいく人によつては、その家が性格を備えているようにみえる場合さえ少なくない。——平さんの「小屋」は平さんの手作りだから、もつとも単純に彼の性格をあらわしている筈である。その筈であるのに、小屋はまったく無性格で、些いささかかの特徴もなく、古材木と古板を寄せ集めた「小屋」という以外には、なんらの意味もふぜいも感じられなかつた。

こういう「街」の住人たちは、その貧しい住居のどこかを、なにかのかたちで飾ろうとする。釣つり忍しのぶを吊つるとか、欠けた鉢で

朝顔を育てるとか、軒先の僅かな地面に草花を植えるとか、または朽ちかかったような自分の住居の、柱や敷居を拭きみがきしたり、羽目板や戸袋を飽きずに水洗いするとか、その人その人の美的感覚と好尚によつて、それらから謙遜けんそんな慰安とくつろぎを得ているようであつた。

平さんはそんなことはしなかつた。そこはどの長屋からもはなれていて、まわりは不毛の空地であり、地面は砕けた瓦や瀬戸物や、コークス殻などで蔽おほわれているため、草も満足には生えないし、平さんの足でできた踏みつけ道が、道ともいえないほどかすかに、その空地を横切っているだけであつた。小屋の窓の外に一本、高さ一メートルばかりの細い枯木が立っているが、枯れてか

ら幾年も経つのだろう、いまではなんの木であるかもわからなかった。

平さんの小屋とその周囲には、生命というものが感じられなかった。そこに見られるのは、人にかえりみられなくなった荒廃ではなく、不毛と枯死そのもののようであった。

平さんは誰ともつきあわず、日常の挨拶も殆んどしなかった。本当の名もとしもわからない。見たところ五十歳から六十歳のあいだらしいが、ときによると七十ちかい老人のように、力なくやつれてみえることもあった。軀は小柄で瘦^やせているけれども、筋肉はひき締って、陽にやけた皮膚にもつやがあり、いかにも健康そうだし、眉の濃い細おもての顔も、よく見るとなかなか品があ

った。

「若いころはきつといい男ぶりだったろうね」とかみさんたちは云いあつた、「いまだつて捨てたもんじやないだろう、このあいだ誰かさんが、夜なかに這い込んでつたつていうじやないか」

「なま睡の出るような話じやあないの、誰かさんつて誰よ」

「およしよお吉さん、云いだしつぺつてこと知らないの」

云いだしつぺといわれたかみさんはふんと鼻を鳴らし、それからすました顔で続けた。

「誰かさんは誰かさんさ、こう云えばご本人にはわかるだろ、自分たちで思い当らないんなら、他人のことで気を揉むんじやない

よ」

「それはいいけどさ、肝心なことはうまくいったのかい」

「ほんとか嘘かわからないけどもね、平さんは小屋の中で、ろうそく 燭をとぼして坐ってたって」

眼が落ちくぼみ、頬がこけて、乏しい蠟燭の火がゆれると、その顔が骸骨のようにみえた。そうして、はいつていつた女を見た彼は、低いしゃがれ声で、「お蝶か」と云った。それは墓の下からでも聞えてくるような声で、女は骨の凍るほどそうけ立ち、そのまま夢中で外へとびだしたという。

「嘘かほんとか知らないけどね、その道にかけちやあ腕っこきの誰かさんだし、狙つてもものになかったためしのない人だから、

案外そのとおりかもしれないよ」

「お蝶つて誰だろう」

「この長屋うちのどこかにいるかもしれないね」

「それとも別れたか死んだかした、もとのおかみさんかもしれないしね」

こういう噂話が、平さんの耳に届いたかどうかはわからない。彼は石のように無くちで、そっけなく、頑固に自分の孤独を守っていた。

平さんのしょうばいは、マットレスを作つて売ることだった。

廃品回収業者のたて場から、ぼろ布を買つて来る。小屋の外に煉瓦んがと石で組んだ即席竈かまどがあり、煮炊きをするようになっていたが、

そこに石油せきゆかん罐を掛け、買って来たぼろ布を入れて煮る。脂や汚れをおとすのだらう、煮あげたぼろは陽に干したうえ、二センチ幅くらいに裂き、それを縫よって、——自分で工作したらしい原始的な織り機にかけ、丹念にマットレスを編みあげる。風呂場の足拭きとか、火鉢の下敷くらいの用にしかないのだらうが、丹念に、しっかりと編みあげるから、平さんの品は好評で、かなりとくいも多いようであつた。

平さんは無くちで、近所づきあいもせず、日常の挨拶もしないことはすでに記した。もつと尤もそれまでに一人だけ、ときたまたずねる知人があつた。ボス猫のとらの飼い主である半助がその相手だが、たずねていってもあまり話はしなかつた。半助は臆病で気の

弱そうな、絶えず人に殴られるのを恐れているような男であり、これまた人嫌いで、飼い猫のとらにだけはものを云うけれども、人間とは口をききたがらない性分だったから、平さんと二人では話のはずみようがないのだ。——平さんがたずねていって、半日くらい坐っていても、話し声は殆んど聞えない。ときたまどちらかが、今日は天気がいいなどと云えば、うん、よく晴れたなどと片方が答える。かなり時間が経ち、もう忘れたころになって、世間の景気は相変わらずだなと片方が云えば、相変わらずだと一方が答え、それつきり声はとだえる、というふうであった。

そのうちに、その半助もいなくなつた。

半助は人に連れ去られたのである。連れ去ったのは刑事だともいうし、半助がいかさま賽さいを作っていたため、プロの賭博者たちが掠さらつていったのだともいわれた。どちらにもせよ、平さんはたった一人の友達——ともいえないだろうが、ともかくただ一人の知人を失い、また自分ひとりのくらしに戻った。

朝はやく、平さんは小屋から出ると、手拭を入れた洗面器と、古バケツを持って水道端へゆき、顔を洗い、バケツに水を汲くんで帰ると、次に蜜柑箱みかんばこの一つから米、他の一つから麦を量り出して、ニュームの鍋へ入れ、もう一つのバケツといっしよに持って水道端へゆく。米をとぎ、水を汲んで小屋へ戻り、めしを炊きにかかると、——この「街」の住人はその日稼かせぎが多いので、みな朝

は早いから、水道端にはたいてい人が来ていて、中には平さんに呼びかける者もあるが、彼はなま返辞をするばかりで相手にならない。いつか気の荒い男が怒って、挨拶ぐらいしろとどなりつけた。平さんは静かに向き直って、その男の眼をみつめた。男は突っかかってゆく気だったらしく、拳こぶしをにぎって前へ一歩出たが、平さんの動かない眼と仮面のように無表情な顔を見てうしろへさがり、そっぽを向きざまにか捨てぜりふを云い、いそいでその場を去っていった。

「きびがわりいのなんのって」とあとでその男が云った、「あいつの眼は生きた人間の眼じゃあねえぜ、ありやおめえしんだんじんの眼だ、おらあ賭けてもいいが、あいつの軀に流れてる血は

氷みてえにつめてえぜ、きつと」

平さんは三度のめしに、漬け物と味噌しか喰べない。味噌は買
うが漬け物は自分で漬ける。しかも醤油しょうゆだる樽五つに、それぞれ違
つた物を違つた方法で漬け、年じゆう絶やすことがなかつた。――
――ぼろ布を買いにでかけるときは大きな麻の袋を持ってゆく。そ
して小屋の窓は中から、開き戸は外からと鍵かぎを掛ける。この「街」
で戸閉りをする家は、ほかに二軒しかないし、その二軒は戸閉り
をするために、なにかうしろぐらいことをしているのだらうとそ
しられ、幾たびか家の中を荒されたものだ。つづめていえば、こ
この住人たちにとって、家に戸閉りをしなければならぬような
物を持っている、ということとは徳義に反するからである。――平

さんの小屋も幾たびか襲われたが、開き戸も窓もあかなかった。どういふふうがしてあるのか、いろいろと攻撃したようだが、いちども成功しなかった。もとよりいたずら半分のごとなので、小屋を打ち壊すほどの乱暴はしなかったし、やがて、平さんが大切にしているのは、五個の漬け物樽だということがわかってからは、もう誰も関心をもつ者はいなくなつた。

平さんはこれらのことを知っていたであろうか、それともまったく勘づきもしなかつたらうか。

いずれにせよ、彼のようすは少しも変らなかつた。彼はいつも動いていた。はたらいている、というのではなく「動いている」

という感じであった。——大きな麻袋を背負って帰ると、中のぼろ布を出して選り分け、即席竈に火を焚いて、石油罐の湯を沸かし、粉シヤボンを混ぜて、より分けたぼろ布を入れ、木の枝でかきまわしながら煮る。よそ見をすることもなし、鼻唄とか独り言を呟くこともない。必要に応じて軀や手足が動作するだけで、意志のはたらきとか、感情のあらわれというようなものは少しもみられなかった。——小屋の南側に、二本の杉丸太を立て、麻繩を三段に張った干し場がある。平さんは煮あげたぼろ布を、水道端で水洗いすると、その干し場へ掛けてぼろ布を干す。顔は無表情であり、眼も二つの穴のようにうつろだった。干したぼろ布を一枚ずつ手でひろげながら、その眼はぼろ布をも麻繩をも見てはい

ないようだ。空洞がなにも見ていないように、平さんの眼はいつもなにも見ていないように感じられた。

「平さんのマツトレスは評判がいいんだって、常とくいがあつて注文がまにあわないんだってさ」かみさんたちのお饒舌しやべりパーティーではたびたびそんな噂が出た、「よつほど貯めこんでるんだよきつと」

「なんのためだかさ、独り者で身寄りもなさそうなのに、貯めたってどうしようもないじゃないか」

「なにがたのしみで生きてるんだろう、映画を観にゆくじやなしラジオを買うじやなし、それとも隠れてパン助にでも入れあげてるんかしら」

「この長屋うちにやあ、いつでも御用をたしたがってる者がやまといふのにさ」

或る年の十一月、——五十がらみとみえる一人の女が、小さな風呂敷包を抱えて、平さんの小屋へあらわれた。女はほっそりと小柄で、顔もちまちまとしていた。肌は白く、髪の毛や眉はまっ黒で濃く、つまんだような小さい唇はしつとりと赤かった。としては五十がらみらしいが、ぜんたいの感じはずつと若わかしく、いくらかなまめいてさえみえた。

平さんが留守だったので、女は小屋の外で待っていた。彼女は小屋の周囲をまわってみたり、閉めた窓の外に立っている枯れた木を眺め、その枝に触ってみたりしたうえ、羽目板に背を凭れ、

しやがんでそつと眼をつむつた。——ここはどの長屋からもはなれているから、口うるさい人の眼につく心配はなかった。のら犬が二度ばかり通りかかったが、彼女を見ただけで、なんの関心も示さずに去つていった。

二時間ほど待つたとき、平さんが帰つて来た。ぼんやりしていたらしい女は、小屋の戸をあける物音を聞きつけるなり、急に息の止つたような顔で立ちあがつた。

白いきれいな女の顔が、さつと硬ばり、それが刷毛はけで塗るやうに赤くなつた。いちど止つた呼吸が、しだいに荒くなつて、小さな包を抱えた手に力がはいつた。女が開き戸をあけると、平さん

はこちらへ背を向けて、古外套ふるがいつうをぬいでいた。女は開き戸を閉めてから、あたしです、と呟くように云った。

平さんは外套の片袖をぬぎかけたまま振返った。女は包を胸に押しつけ、それで身を守ろうとでもするような恰好で、おじぎをした。女を見る平さんの眼が動かなくなり、女の表情が変わった。色の白いちんまりとした顔から、静かに赤みが消えてゆき、若わかしくなまめいてみえたのが、つめたく乾いて、みるまにしばみあがるように感じられた。

平さんはなにも云わず、向き直って外套をぬぎ、くたびれた茶色のピケ帽をぬいで、板の間へあがった。女はそつと土間びんの中を見まわした。洗面器や粉シャボンの罐や、なにかの壘びんの並んだ台

の下に、バケツが二つあり、その台の反対側に低く棚が吊つてあつて、そこには食器をいれた籠や、安全剃かみそり刀やシャボンの箱などが、きちんと置かれてい、下の段には蜜柑箱が三つと、ニユームの鍋などがあつた。

女は包を板の端に置き、その中からしごきを出して襻たすきにかけると、二つのバケツをしらべ、からになつている一つを提げて、小屋の外へ出ていった。

そして、女はそのまま小屋にいついた。

平さんは女に口もきかず、眼を向けようとしなかつた。それは女の存在を無視するというのではなく、彼女が来たことも、同じ小屋にいることも、ぜんぜん現実ではないかのようであつた。

——女は水を汲み、めし^{ごしら}拵えをし、掃除も洗濯もし、買い物もした。平さんは彼女の炊いためしを喰べるし、洗濯してくれた物を着、のべてくれた夜具で寝た。——これらはいつもの「ただ動いている」という感じのもので、めしを喰べるときでさえ、めしを喰べる、という意識なしに、箸^{はし}を使い物を噛^かみそれをのみこんでいる、という動作があるだけのようであつた。

平さんの生活は少しも変らなかつた。ぼろ布を買いにゆき、それを石油罐で煮て干し、裂いてマツトレスを編む。女がそばから手伝おうとすれば、黙つて女のしたいようにさせる。その品が好評なのは平さんの丹念な仕事ぶりにあるので、それには彼が情熱をつぎこみ、ほかの者には手も触れさせないだろうと、いちおう

誰でも考えるところであるが、平さんにはそんな気持はないよう
で、女が手を出せばそれを女に任せ、自分は次の仕事にかかるの
であつた。

幾枚か編みあがると、平さんはそれを包んで売りにでかける。
あとに残つた女は休もうともせず、小屋の中を片づけたり、小屋
の周囲をきれいに掃いたり、地面にちらばっている瓦や瀬声物の
かけらを拾つて、捨てにいたりした。

女が平さんの小屋にいついたことは、すぐ近所の人たちにみつ
けられた。初め水道端でみかけたときは、新しく移つて来た人だ
と思ひ、こんなところに住むような人柄ではないとか、可愛い顔

をしているとか、小さくて軽そうなあの軀つきを見ると女のあたしでも抱いてあやしてやりたくなるなどと、かみさんたちは云いあった。しかしそれは二日ばかりのことですぐに事実がわかると、かみさんたちの評は逆転した。

「おどろいたね、押しかけ女房だつてさ、いいとしをしてなんてこつたらう」

「平さんも平さんだ、あんなおばあちゃんに入れあげてたとは思わなかったよ」

「あの顔つきを見な、あの軀つきを見な」とあるかみさんは云つた、「あたしの昔よく知つてた人にああいうふうな人がいたけれども、あれは人並はずれているぶかい性分だよきつと、五十にな

つても六十になっても、からだはいろざかりでちつとも衰えない
つていうくちさ、よく見てみればわかるよ」

「それだもんであんだ、抱いてあやしてやりたいなんて云つたんだね、いやらしい」

「へえ、いやらしいって」とそのかみさんは反問した、「おまえさん知ってるのかい」

意味は違うが、かれらは知らないのだ。平さんの小屋では、かみさんたちの想像するようなことはなにもおこらなかつた。

晩めしが済むと、平さんは少し食休みをしたあと、およそ十時ころまでマツトレスを編む。必要があるからではなく、時間つぶしのようで、仕事はあまりはかどらない。蠟燭の火で眼が疲れ、

涙が出てくるようになる、織り機を片づけて寝る。——女はあと始末をし、平さんの脇で、薄い蒲団一枚にくるまって横になる。むろん蠟燭は消してしまふから、月夜でない限り小屋の中はまっ暗になる。平さんはときどき寝返りをうつが、いびきをかくようなこともめつたにない。そしてやがて、女がすすり泣きをはじめなのだ。

草原を風が吹きわたるような、ひそかな声ですすり泣き、喉になにか詰つてもいるような、かすれた囁きささや声で、とぎれとぎれに話しだすのであった。

「店のほうはうまくいってます、婿がよく働いてくれますから」と或る夜は云った、「よくできた婿で、あたしにもよくしてくれ

ます、いまでもあなたの話がでると、うちへ来てもらおうって云うんです」

「あたしどうしたらいいの」と或る夜は云った、「家付き娘に生れて、わがままいっぱいに育ったから、罪なことも罪だとは知らなかったんです、とくべつに好きだからあの人とそうなったんで
もなし、生んだのがあの人の子だということも、自分ではよくわからなかったんです、——それだけは信じてもらいたいんです」
平さんは身動きもしなかった。

「あなたがこんなになってしまつて、もう二十五年以上にもなるのに、あたしはどうしたらいいんでしょう」

また或る夜、彼女は細くつきつめた声で訴えた、「あなたも苦しいおもいをしたでしょうけれども、あたしもずいぶん辛いおもいのしどおしでした、亡くなった母はあなたに申し訳がないって、死ぬまであたしを許してくれなかったし、母が亡くなったあとは、自分で自分を責めたり憎んだりしてきたんです」

これらの言葉は、幾十たびとなく繰り返して覚えたせりふのように、順序よくすらすらと語られるのであった。苦しいとか、辛いとか、死ぬまで許されなかったとか、自分を憎んだ、などという強い意味のある言葉が、あまりによどみなく語られるため、その強い意味を失って、しらじらと平板な感じしか与えないようであった。

「人殺しのような重い罪を犯した者でも、事情によつて、苦役が終れば許してもらえらうっていうじゃありませんか」或る夜はそう云つた、「もしもこうすればあなたの気が済むということがあつたら、そう云つて下さい、あたしどんなことでもしますから」

平さんはなにを云われても答えなかつた。女の嘆きや訴えを無視するのではなく、その声がまったく聞えないかのように。それはちやうど、しきりに吹く風の中にあつて、石がその風と些かのかかわりもないのと似ているようでもあつた。

女は平さんの小屋に十二日いたが、十二日めの夕方に去つた。その日、マットレスを売りに出た平さんが帰つて来ると、女は小さな風呂敷包を膝の上にのせ、小屋の中で板の間の端に腰をかけ

ていた。——冬の日の午後四時すぎ、戸外もたそがれているし、小屋の中はもつと暗く、肩をすぼめた女の小柄な姿は、その深い暗がりの中でいまにも消えてしまいそうにみえた。

平さんはいつものとおり、外套をぬぎピケ帽をぬいで、女の脇から板の間へあがった。

女はうなだれたまま、土間の土を見ていた。ちまちまとした顔は白つぽく乾いて、ちぢんだようにみえ、膝の上にある両手も灰色に皺立しわだって、指先は力なく垂れていた。彼女はなにかを待つているのだろうか、うしろでは平さんの動きまわる物音がしている。いまになつてもまだ、平さんがなにか云ってくれるだろうと、期待しているのだろうか。——そうではないらしい、女はやがて、

右手をあげて髪に触り、細い力のない溜息ためいきをついた。

「どうしてもだめなんですか」と女は云った、声は囁くように低く、そして喉にからまってかすれた、「——勘弁してはもらえないんですか」

平さんは土間へおり、棚にあるニュームの鍋をあげてみた。それはからであつた。女はめしを炊かなかつたのだ。

からつぽの鍋を見た平さんは、すぐに米と麦を計りはじめた。女が今日に限つてめしを炊かなかつた、ということにも気づかず、これまでずっと自分でしてきたことを、いまも変らずにやっているのだというふうな、極めて自然な、慣れきつた手順で、——二

つの蜜柑箱から、米と麦を定量ずつ計って鍋へ入れ、それを持って、彼は小屋から出ていった。

女は平さんを見なかった。平さんが水道端へ半分くらいいったと思われるじぶん、膝の上の小さな包を持って、疲れはてた人のように立ちあがり、小屋の中をぐるつと眺めまわした。すっかり神経をすりへらして、感情の動かなくなったような眼つきであった。

女は不決断に小屋を出、開き戸を閉めた。空には僅かに残照をうつした雲があり、それが地上の昏くらさを際だてていた。——女は小屋をまわつて、窓の外に立っている枯木のところへいった。そして片手でその木の枝に触り、口の中でそつと呟いた。

「そうよ、きつとこれは菜菔ぐみの木だったのよ」

菜菔の木は枯れても菜菔の木だというのはなくて、枯れてしまえばもうなんの木でもない、というような、はかなげな口ぶりであった。そうして、女は身をちぢめるようにして去っていった。

水道端にはかみさんたちが三人いて、平さんが来たのを見ると、みんな急に口をつぐんだ。平さんは黙って、鍋の中の米を洗った。水を三度とり替えながら、米と麦を手で揉むように洗い、それから水かげんをすると、黙ったままそこを去った。

「どうしたんだらう」かみさんの一人が、平さんの遠ざかるのを待って云った、「珍しいじゃないか自分で米とぎに来るなんて、あの女のひと病気にでもなったのかね」

「そうかもしれないね」と他の一人が云った、「謙ちゃんと誰かさんの話じゃ、毎晩のようにあの女の泣き声が聞えてたつていうからね」

「また謙ちゃんか、あのしとの聞きにゆくも悪いやまいさ」

「あんたも聞かれた組かえ」

「むかし語りさ、もうこのとしになつちやあそんな精はありやあしないよ」

平さんの小屋の外で、即席竈に火が燃えだした。

夕宵の中に青白い煙がひろがって、まもなく赤い炎が鍋の底をなめながら、ゆつくりと周囲に明るみをひろげ、そこに跼んでいる平さんの半面を浮き彫りにした。平さんの顔は硬く、無表情で、

瞳孔どうこうの散大したような眼は、なにを見るときもなく、前方にひろがる暗い空間を見まもっていた。竈の火が揺れると、平さんの顔もゆらゆら動くようにみえるが、その表情は少しも変らなかつた。風が少しつよくなり、竈の焚木がいぶりだした。平さんは焚木のぐあいを直し、煙にむせながら二、三本の木切れを取って、火の中へ加えた。

ビスマルクいわく

寒藤清郷先生が云つた。

「きみはロータリー・クラブのかくれたる意図を知つとるかね」

八田忠晴はちよつと考えて、膏あぶらの浮いた額を撫なでながら答えた。

「よく知りませんが、国際的な社交団体じゃないんですか」

「それはカモフラージだ、かれらが諸外国の民族独立精神に対するめつぶし的金看板にすぎない、ぼくのきいているのは、その金看板の裏に、かれらがどんな野望をたくらんでいるかということだ」

「かれらはなにかたくらんでいるんですか」

「べいこくの世界征覇せいだ」

八田青年は胃弱患者がせんぶりをのむときのような顔をした。

それは毎日三度、きまつてのまなければならないのでうんざりす

るが、のまなければ胃弱が治らないのでやむを得ずのむ、といったような顔つきであつた。

べいこく人は初めヤソ教という隠れ蓑^{みの}で日本征服をこころみた。いわゆる宗教による民族奴隸化をたくらんだのであるが、徳川氏によつてこの野望は壊滅し去つた。そののち、——というふうに、先生の極めて独創的な議論が展開し、八田青年は涙ぐんだ。

これは八田忠晴が、憂国塾の塾生になつて、一週間ほど経つたときのことである。——初め、八田青年がたずねて来て、塾生にしてもらいたいと云つたときには、塾頭である寒藤清郷のほうでびつくりした。

寒藤先生は、まっ黒な濃い眉の下の、すばらしく大きな、威嚇

するような眼を糸のようにほそめ、疑わしげに八田青年の顔をみつめながら反問した。

きみはからかいに来たのか。

なにをですか、と青年は直立不動の姿勢で云った。

塾生になりたいということさ。

していただけないんですか。

ただかさないことはないが、と云って先生は考えた。慥たしかに、

その貧しい長屋の門口には、「憂国塾」という看板が掲げてあるし、塾頭の名もはつきり記してある。そしてまた長い年月、——どれくらいかの年数かは不明であるが、その肩書によって先生は生活を支えてきた。それは紛れもない事実だけれども、塾生を志望

する者があらわれようなどは夢にも思わなかつたし、これまでにかつてそんな例もなかつた。

ふん、と先生はすばやく考えをまとめた。塾生志望とはいまどき感ずべき青年だ、こういう青年は純真であり朴ほくとつ訥であり、たぶん親からの仕送りもあるだろうし、かたがた愛国的情熱のもちぬしであつて、資金集めの役にも立つことだろう。いよいよわが憂国塾も軌道に乗るときが到来したのかしれぬ、よかろう、と寒藤先生は肚はらをきめた。

よかろう、と先生は云つた。きみを塾生として採用しよう。

なにか資格試験のようなものがあるんですか、と八田青年はそ

のとき質問した。じつを云うとぼく試験のようなものはお齒に合わないんですが。

そんな愚劣なことはぼくもお齒やに合わんさ、と先生はらいらくに答えた。一度や二度の試験なんぞで人間の価値がわかるもんじやない、人間はここだ。先生は瘦やせたひらべつたい腹を叩いてみせ、するとそこはもの悲しげな、空虚な音をたてた。

人間の値打は肚できまる、という先生の判定で、八田青年はその日から塾生になった。この師弟の関係は単純ではなかった。

先生のご郷里はどこですか、と八田青年がきく。すると先生は、日本だと答える。きみ、日本のようなこんな蚤のみのくそみたいなよいうなちっぽけな国で、出身地がここだここだなんというつまらな

いことに拘泥するようじゃだめだぞ、生れはにっぽん、それでいいじゃないか、というのであった。

また、先生がふと、きみのくにはどこだときく。すると八田青年は非常に重大な秘密でもきかれたかのように、膝ひざを固くして坐り直し、頭をふかく垂れて、その問題にふれてはただきたくない、と答える。ぼくの一身は国家に捧ささげたものであり、皇国万代のためにはこの身をよろこんで犠牲にする覚悟であるが、親きようだい、一族縁類に迷惑をかけるのは本意でない、と云うのであった。

寒藤先生がにっぽん蚤のくそ説を提唱したとき、八田青年は顔面の一と皮下でほくそ笑んだようであるし、八田青年が一身犠牲論で一族縁類を庇かばったとき、先生はなにかに蹴けつまずいて、舌打

ちをしたいような顔つきをした。

憂国塾には夜具が一と組しかない。先生は八田青年に、荷物はいつ着くのかときいたら、そんな物はなに一つない、と青年はあつさり答えた。着替えとか蒲団くらいはあるんだろうときくと、八田青年は先生のことを非難するように見て、憂国塾では些細な物まで塾生が賄わなければならないのか、と反問した。

この問答では寒藤先生は一本とられた。国家的観点に立脚した啓蒙道場であり、特に皇道学的な真理を究明し、これを実践的にプロパガンダする使命、というおごそかな先生の主張からすれば、八田青年の云うとおり、そんな些細なことは問題にならない筈であった。よかろう、先生は折れた。貸し蒲団を借りてきたま

え。

八田青年には、塾生として精神修養のために日課がきめられた。食事の支度、清掃、買い物、走り使い、皇居遙ようはい拜、先生の身辺の世話、その他の雑事、等、等であつた。そんなことはさして苦にならなかつた。どの一つにせよ、手を抜きたければ先生の眼をごまかすくらい、極めて簡単なことだつたから、——しかしそれとはべつに、もう一つ避けがたい重労働があつたのだ。

避けがたい重労働といえ、それだけで説明の要はないだろう、さよう、寒藤清郷先生の講話を聞くことがそれであつた。

ロータリー・クラブが日本侵略の意図をもつものである、とい

う理由から、日本支部が解散を命ぜられたことはさして古い話ではない。そのころ日本にも幾らか金持がいて、国家将来の経済的みとおしが信用できないため、資産を外国に移すという操作が行われたか、行われようとしたかしたらしい。金持ならどこの国でも同じことをするようで、日本に限った話ではないが、ロータリーアンは国際的な貴族・金持の友好機関だから、資産の国外逃避などにも便宜があつたかもしれない。実際の理由はわからないが、少なくとも寒藤先生の講話のように、キリスト教の布教活動とは関連性がないであろう。

八田青年が涙ぐんだのは、先生の講話がいつも独創的に飛躍しすぎるためではない、また、冗長すぎて退屈だからでもなく、精

神の高潔さに感動するためでもなかつた。はつきり云つてしまえば、——この二人の関係をみているとわかるとおり、——要するになにも仔細はないらしい、先生の講話を聞いていると、その内容と理路とにかかわりなく、しぜんと涙ぐましくなり、現実にも涙ぐんでしまうというようすであつた。

尤も、先生の講話が一つの問題に傾注することは稀まれであつて、たいていの場合AからSへとび、BからKへとびCからD、そして急にAとかBに戻る、というあんばいであつた。ロータリー・クラブのときも同様で、とつぜん「きみは神皇正統記を読んだか」と話を変え、それはなんですかと反問されると、「ちよつと使いにいって来てくれ」と云つた。

「資金の調達でね」と先生ははにかんだような笑いかたをして云った、「これからはきみに頼むわけだが、なに簡単なもんだよ」

先生は壁へ掛けてあるモーニングのポケットから、使い古した大きな名刺を出し、こぼのめくれを指で直しながら、A、B、Cと三新聞社の名をあげ、Aは局付きのなに某、Bは社会部デスクのたれ某、Cはこれこれと教えた。

「みんなぼくの後輩なんだ」と先生は云った、「この名刺を見せればわかる、金のことは云わなくとも話はわかってるんだ、いいな」

八田青年はあいまいに「はい」と答えた。

「それから、この名刺は持って帰るんだよ、みんな気ごころの知

れた男たちだから心配はないだろうがね、名刺というものはとかく悪用される危険があるんだ、忘れずに持って帰ってくれ、いいな」

八田青年は三新聞社の住所と、訪問する相手のことを確かめてから、不安そうな顔つきででかけていった。——高さ一〇メートルの跳び込み台に立って、初めてダイビングをしようとする人間のような顔つきであった。

八田青年の危惧きぐにもかかわらず資金調達はうまくいった。

「そうだろう、みんなぼくの子分同様のやつばかりだからな」

寒藤先生はおうように云ったけれども、調達のうまくいったこ

とに自分で驚いたようすを隠すことはできなかつた。

「大ビスマルクいわく、将たるものは戦術よりおのれの兵を知れ、さらば勝利はついにその手に帰すべし」先生は集まつた資金を数えながらそう云つた、「ぼくはあの三人には特別にめをかけてやつたんだ、ちかごろのジャーナリズムは人情を軽視するというが、まだこういう人間がいるあいだは大丈夫だ、プレスキャンペーンはバックボンを失つてはいないぞ、——きみ、今日は祝杯だ」

その夕方、寒藤先生は八田塾生をともなつて、中通りの「のんべ横丁」へ遠征し、屋台の鰻^{うなぎや}屋で鰻の頭を焼いたのを肴^{さかな}に、したたか焼^{しょうちゆう}酎^{ちゆう}を飲んで酔つた。先生がいうには、蒲焼^{かばやき}なんぞは、しろうとの喰^たべる物で、鰻っ食いは「頭と肝に限る」のだそ

うであつた。

「大きな声では云えんがね」と先生は云つた、「蒲焼にするほうはなきみ、養殖物を多く使うんだ、だからきみ、蒲焼はしばしばさなきつ臭いことがあるだろう、ところが頭だけはそうはいかないんだ、頭はきみごまかしがきかないんだ、てんねん物はきみ^{はり}鉤がはいつてるからな、これはどうしたつてごまかせないんだ」

そらこのとおりと云つて、先生はつけ板の端に並べた三本の鉤、すなわち先生がそれまでに喰べた頭から出たところのそれを、八田青年に指さしてみせた。

「けれどもですね、先生」と塾生は囁いた、「それは鰻屋がそつと入れておくんだという説もありますよ」

「俗説だね、問題にならん」

「じつはぼくも鰻釣りのことを知ってるんですが」塾生はもつと声をひそめた、「鰻を釣るには鉤が違うんです、こういう鉤で一本ずつ釣っていてはてまにならないし、釣れてもはずすのに暇がかかるからしようばいにならないんですよ」

「しようばいになるのならんときみ、男子たる者がそんなけち臭い精神では大事は成らんぞ、——鉤といえばきみ、この寒藤がA紙の政治部にいたときだな」

どういうことがきつかけになったのか判然としないが、やがて寒藤先生と一人の労働者とが殴りあいの喧嘩けんかを始めた。いや、殴りあいとは云えない、殴ったのは労働者のほうで、先生は殴られ

る立場だったが、それでも軒昂けんこうたる意気に衰えはみせなかつた。

「さあ、もつと殴れ、きみは自分がなにをしているか知らないのだろう」と先生は地面にぶつ倒れたまま叫んだ、「いいか、きみはいまにっぽんの運命を殴っているんだぞ」

これは実際に先生の口からほとばしり出た言葉なのだ。労働者はそこでさらに二つ殴った。

「ゆうべはなにがあつたんだ」明くる日、先生は八田塾生にきいた、「どうしてあの男はあんなに怒つたのかね」

先生はそつと頭を撫で、瘤こぶに触つてみて眉をしかめた。左の頬骨のところと額にも、紫色の痣あざができていた。

「ぼくはよく知りません」八田青年は頸くびのうしろを手で叩きながら云った、「ぼくは酔い潰つぶれちやつて、屋台の脇にあつた防火槽ぼうかその中で寝ていたんです、すると先生が、——聞け万国の労働者だとか、祭壇のなきがらはだとか、大きな声でうたいだされたのが聞えました」

「それは違うな、それはきみの思い違いだよ。だつてきみ、そいつはどつちも共産党の唄だろう」

「それで労働者が怒つたんです」

「違うなそれは、それはまったくあべこべだ、ぼくは仮にもきみ憂国塾の塾頭だぜ」

「ともかくあの労働者が怒つたのは事実です、ぼくはからの防火

槽で寝ていたんで、詳しいことはわかりませんが、あの労働者は怒って、アカの国賊野郎とどなっていましたよ」

寒藤先生はゆつくり首を振り、片手で口から顎のまわりを擦り、
仰向いて天床を見た。

「大ビスマルクいわく」と先生はくたびれたような口ぶりで云つた、「兵を心服せしむるには兵と寝食をわかつにしかずと、ぼくは兵を間違えたらしいな、きみ、——ぼくは考えるのにふつか酔いのようだが、ひとつ耐ちゆうを少し買つて来てくれたまえ」

先生の顔に苦しげな表情がうかんだ。それは単に「苦しげな」などというものではなく、実際に先生の胸中をうかがえば複雑でおもくるしい、自己否定と悔恨のあらわれだといわなければなら

ないだろう。

ここの住民たちのうちで、古参者の幾人かはまだ覚えているだろうが、先生はこの「街」で二度、かなしい失恋の経験があつた。その一人はまだ健在で、ともらいマダムとか、おきちさんなどと呼ばれ、一人の男の子と長屋の一軒でくらしている。他の一人はよそへ引越してしまつたが、お富さんという後家で、としは三七、八、かなりなきりようよしで独りぐらしだつた。

お富さんはなにをして生活しているのか、内職をするでもなく、よそから仕送りがあるようすもないのに、いつも暢のんびり構えていたし、暇さえあれば隣り近所のかみさんたちを集めて、賑にぎやかにティー・パーティーをひらいた。それが喫茶の会などという気取

ったものではないことは断わるまでもないだろう。かみさんたちの亭主どもはこのパーティーを大いによるこんだ、というのには、自分たちのかみさんが、このパーティーで珍しい風流譚ふうりゆうたんをいろいろ仕入れてくるからである。それらは男たちには想像もつかない生理的な、また心理的であると同時に物理的な要素を備えたもので、研究心の強い亭主たちが思わず実験してみたくなるような例も少なくなかった。

これらの亭主たちから、お富さんの話を聞いた先生は、そういう女は良風をみだすと怒り、将来をいましめなければならぬ、と云って訓戒のためにでかけた。どこにでもある話だが、その初

めての訪問から帰るとき、寒藤先生はだらしもなく笑っていたし、近所の人たちにも却^{かえ}つて誉^ほめたものだ。なに、あの婦人はごく純朴な女性であるにすぎない、女がもつとも女であることを証明する年齢であり、経験者であるというにすぎない。それからもう一つ、なにかであるにすぎないと云つて、豪傑笑いをした。

先生がお富さんに初対面でいかれた、という評判がたち、それをみずから裏書きをするように、先生はしげしげとお富さん訪問に精をだした。いやどうも、と先生は近隣の人たちに云つた。かの女性ほど男性のために生れてきたという女性も珍しい。男見たる者がしんそこ^{こうぜん}浩然の気をやしなえるというのはかの女性のごときを措^おいて他にはないだろうな。

先生もながい独りぐらしだ、と近隣の人たちが云った。ちょうど相手も後家のことだし、いつそいっしょになったらどうです。としごろも似合いですぜ。うん、もう少しつきあつたうえで、これによつたらそうなつても悪くはないと考えておる、と先生は答えた。

事実、寒藤先生はそう考えていたし、プロポーズしようとひそかにその機会をうかがつてもいたのだ。けれどもそれは成功しなかった。お富さんは先生に対しても、はなはだしく実験欲を^{そそ}唆るような風流譚をする。ときには自分の肢態で或る種のポーズを演じてみせることさえあり、それはお富さんがきっかけをつくつていのだと推察されるため、先生の情熱はまさに沸騰点にまで達

し、衝動に駆られて求婚の態勢にはいる。すると先生の舌は先生の意志にそむくのだ。

大ビスマルクいわくだな、お富さん、と先生の舌は動きだす。たたかって勝たざるはすなわち敗北なりと、またいわく、敗北せざらんと欲すればたたかわざるにしかずと、またいわく、——またいわくというふうに、めんめんとビスマルク（だか誰だか、あるいは誰でもないか）の金言が続くのであった。どういきばつてみても、その舌はこちら側へひき戻すことはできないし、お富さんがうんざりするのを防ぐ方法もなかった。

先生つてばおかしなひとだよ、とお富さんはティー・パーティーのときかみさんたちに云った。こつちがせっかく面白い話をし

始めると、きまつてビスちゃんがどう云ったとか、やれビスちゃんならこうするとかつて、うぬも知らなきやわれも知らないような寝言を並べだすんだもの、誰だつてお座がさめちやうじやないの、とんだ朴念仁ほくねんじんだよ先生は。

この言葉が先生の耳に伝わるまでに、さして時間はかからなかつたし、同時に先生の恋も終りのゴングを鳴らした。

ともらいマダムのおときも、殆んど同じ経過をたどり、同じような結果になつた。

ともらいというのはもちろん葬式の意味であり、マダムというのは例の蔑べっしょう称で、本当の名はせい子であるが、また「おきち

さん」というかげの呼び名もあった。——亭主は本田政吉といつて、どこかの港で舟八百屋をしているそうだが、月に一度か、二た月に一度ぐらいしかあらわれない。小学三年生のじんといい男の子があり、せい子はその子と二人の生計を自分でやりくつていた。

昔ほど普遍的ではないようだけれど、葬式には施餓鬼せがきということが行われた。つまり弔問客にとむらい菓子とか、菓子の代金だけの切手を配るのである。信心ぶかい金持の葬式だと火葬場で貧乏な人たちに投げ銭もしたものだそうで、沿道にはその施与を求める貧児や老人たちが、列をなすこともあつたということだ。

せい子は葬式の弔問客の中にまぎれこんで、菓子の箱とか、切

手などを貰い、それらをすぐに菓子屋へ持つて行って金に替える。杉板の箱にはいった菓子でも、その代価に相当する切手でも、およそ二割引きくらいで菓子屋は買い戻すから、一日に五回も葬式があれば、日雇いなどより割高な稼ぎになった。——もちろん元手なしにはできない、弔問客として黒の紋服も必要だし、髪かたちもきちんとしていなければならなかった。せい子は木綿ではあるが黒の紋服と帯があるし、髪も自分で毎日きれいに手入れをしていた。

この黒紋服と髪かたちを崩さないことで、せい子は「マダム」などと呼ばれるようになったのであるが、そればかりでなく、彼女は言葉つきも態度も山の手ふうであって、「ざあます」をつか

い、「おほほ笑い」ができた。

子供のじんは奔放な無政府主義の信奉者であつた。彼は母を嫌い学校を嫌い、腕力の強い相手は避けるが、弱い者や女の子を見ると暴力をふるい、犬猫はみかけしだい虐待した。殆んど自分の家へはよりつかず、よその物置とか縁の下などで寝、空腹になれば他人の家の勝手をあさつた。——着ているものはぼろぼろ、顔も手足も垢あかと泥まみれで、側へ寄るとどんなに低級な乞食よりもひどい匂いがした。ごくたまに、せい子が彼を捉つかまえることがある。するとせい子は家へつれ戻して、夏と冬の差別なく裸にして、水とシャボンで彼を洗い、頭の毛を刈り、爪を切り、着物を着せ替えてやる。

このあいだじゆう、せい子はやさしい「ごあます」口調でじんをたしなめ、じんも温和しくはいとあやまる。めざめて帰った放^ほ蕩息子と、あたたかく迎える親との図を思わせるような、美しい感動的な一瞬である。だが、これらの改装作業が終るとたんに、鞭打^{むちうち}ち教的な行事が始まるのだ。

それは「どうしてあなたはそうお悪いんですの」という、やわらかな叱^{しっせき}責で幕があく。

どうしてなの、外で寝るような子は人間ではないことよ。どうしてそうなんですの。ご近所の方たちがなんと仰しやつてるか自分でもよくご存じでしょ。なぜ悪いことばかりなさいますの。ね

え、どうしてお直しなさないの。

その声はやわらかにやさしく、蜜みつをたっぷり掛けたプディングのように甘ったるいひびきをもっているが、言葉と言葉のあいまに、ぴしり、ぴしりと凄すこいような音の伴奏が聞える。近所のかみさんたちの話では、お尻を裸にして、物差で打つのだという。蜜をたっぷり掛けたプディングのような甘やかな声と、骨まで凍るような折せっかん檻かんの音とは、そのまますさまじい和音となって、聞く者の耳を突き刺すのであった。

ごめんだよう、とじんの悲鳴が聞える。もうしないよう、痛いよう。勘弁だよう。ぴしりっ、ぴしりっ。嘘じゃない、学校へいくよう、あれ死んじゃうよう。ぴしりっ、ぴしりっ。そんな大き

なお声をだすとご近所のご迷惑になることよ、ぴしりっ。もっと静かになさいな、ぴしりっ。泣きまねなんかすつてもだめ、ぴしりっ。そんなに痛いものですか、かあさまは騙だまされませんわよ、ぴしりっ。

やがて、いつもそうなのだが、じんは母の手をのがれて外へとびだし、そこでたちまち叛はんぎやく逆のろしの狼火をあげる。鬼ばあ、く

たばつちまえ——、という第一矢しでそれは始まり、相当な無頼漢でも思い及ばないような、豊富な語彙ごいを駆使して呪のろいと悪罵あくばと嘲ちようろう

弄ようろうをあびせかける。むろん隣人のことなどへとも思わないし、もしも好奇心をおこして、その騒ぎを見に来るような者があれば、じんは少しのためらいもなく石や棒切れを投げつけるのだ。

外でそんなに騒いではいけないでしょ、と家の中からせい子が、大事な物を真綿でくるむように呼びかける。はいつていらつしやいな、ご近所のみなさんに笑われることよ。なにつてやんだい、くそばばあ、とじんは嘲笑する、へっへっへだ、死んじまえ——。そして当分のあいだ家へは近よらず、どこかの納屋とか物置で寝たり、ぬすみ食いをしたりしているのであった。

寒藤先生はこの母と子のトラブルを、なんとか好転させようと決心し、幾たびか訪問したうえ、要するに父親の不在ということが問題だと力説した。いったい父親はなぜ別居しているのか、ごくたまにしか来ないのはなぜか、そう話を進めてゆくうちに、せい子はしだいにうちとけて、じつは亭主には女があること、競輪

に凝つて少しも稼がず、よくよく困つたときだけ金をせびりに来るのだが、なん年もまえから夫婦関係は切れているし、自分も適当な相手があつたら、もういちど家庭をもつてもいいと思つている。亭主がほかに女を持って勝手なことをしているのに、あたしだけ苦勞するのまつまらないはなしだから、——そう云つてせい子は、横眼づかいに、じいつと寒藤先生の眼をみつめたそうである。

寒藤先生の心臓は十八歳の少年のようにふくれあがり、かつ激しく肋膜ろくまくの裏を乱打した。せい子がそれを確認したことに疑いはない、なぜかなら、彼女はその貧しい稼ぎにもかかわらず、

顔におしろいを刷はき、口紅を塗り、寒藤先生が来る日にはご馳走を作つて、その膳ぜんの上に酒さえも出すようになった。

焼酎はおからだに毒だから、とせい子はじつのもつたことを云い、先生をながし眼にみつめた。また、酌をするときには左手で右の袂たもとを押えるという芸のこまかいところを演じてみせ、先生がすすめれば、羞はにかみながらも杯を受けた。

たとえ寒藤先生が朴念仁であるにせよ、こうまでされて安閑としてはいられない。先生は自分になにか云いださなければならぬ立場に立ったことを悟り、まず「そんな亭主とは離婚すべきである」こと、そしてじん少年の将来のため、誰か教養のある、しっかりした人物と再婚すべきこと、などから説きはじめ、せい子

がいちいち尤もであると頷き、先生に突撃路をひらいてやるためだろう、手を伸ばして先生の膝をやんわりと押えた。すると、先生の舌がまた自己主張を始めた。

大ビスマルクいわく、勝つて奢らおござるは将の将たる者なりと。

せい子は次を待った。いよいよ先生が突撃を開始するものと思つたらしい。なるほど先生はそのつもりだった。けれども現実はず常に散文的なものだ、先生の心臓が十八歳の少年のようにときめいているのにもかかわらず、舌は頑として譲歩しないのであった。ビスマルクまたいわく、敗走する兵は落花の如し、これを戦線に戻さんとするは、落花を枝に返さんとするに似たりと。

せい子はそれでもなお次を待った。まさか大ビスマルクだけが

ねばるとは思わない、次にはいろっぽい言葉が出てくるだろうと
考えたから。けれどもビスマルクは強情であり頑迷であつた。

先生の額に汗の粒がうかび、その眼は涙ぐんできたのに、舌は
さも得意げに「ビスマルクいわく」をもてあそんで飽きなかつた。
せい子にはつきあうかみさんたちがなかつたので、先生のこと
をなんと評したかわからないが、先生を見る表情から察すると、
朴念仁より点数がよくないことは確かなようであつた。

あの「のんべ横丁」で労働者と喧嘩になつたのも、おそらく先
生の意志とは無関係に、舌そのものが勝手な自己主張をしたのだ
ろう。さもなければ、先生たる者が共産党の歌をうたいだす、な
どという道理がないからである。

「けしからんですね、先生」買って来た焼酎で、先生とふつか酔いに活を入れながら八田塾生は云った、「いま酒屋でちらつと新聞を見たんですが、右翼団体の全国大会が公会堂で開かれてるそうじゃありませんか、先生のところへ招待が来ないのはどういうわけですか」

先生はちよつと考えてから、憐れあわむように青年の顔をみつめた。「きみはもつと自分の立場をよくみななければいけないな」と先生は云った、「いま公会堂へ集まっているやつらは小物だ、右翼団体などとせんしょう僭称せんしょうしておるが、人物らしい人間は一匹もおらん、みんな木っ端きずのようなやつばかりなんだ」

「しかしですね、大義公平先生とか国粹純一先生とか」

先生は頭を振り手を振った。

「また神州男児先生などという人たちの名もありましたよ」

「それがどうした」寒藤先生は唇をへの字なりにした、「公平も男児も純一もぼくは知っている、かれらは葦原瑞穂あしはらみずほの門にいたが、みんな破門同様になって放逐されたやつらだぞ、真に国家万代のために思うより、権門富貴に媚こびて虚名を偽り、良民を威おどして金銭をむさぼり」

八田塾生はさも感じいったという顔つきで、先生の旺さかんな慷こうが慨がいに聞き惚ほれていた。

「ぼくはあえてきみにきくがね、八田くん」と先生は終りに云つ

た、「ナチスの党大会ごときに大ビスマルクが出席すると思うかね」

八田青年は反射的に口をあき、なにか叫ぼうとしたが、あぶないところで思い止った。眼に見えない手でぴたりと口を塞いだよ
うな感じであり、その反動で咳せきの発作におそわれた。

「ぼくは自分を誇りたいと思いますね、いまさらのようですが」
咳きこんだため顔を赤くしながら塾生は云った、「これでぼくにも多少ひとをみる眼があるということがわかりましたよ」

「人生は深遠なりだ、まあ飲みたまえきみ」先生は考えぶかそうに云った、「人生は深遠であり変転はかるべからざるものだ、乾杯」

乾杯、と八田塾生も云った。

憂国塾とはいったいなにをする場所であろうか。字づらから推察すれば、国家の将来を憂うる塾であつて、これを思想の左か右かといえ、まず右派に属するとみるのが一般であろう。煎じ詰めたところ、極端な破壊思想に対して、国家の伝統を守ろうとする立脚点に立っているわけだから、左派に属する人士の活動と正対して、なんらかの活動を致さなければならぬ筈である。もちろん、先生のいう「小物たち」であるところの右翼派諸氏は、しかるべく活動を致しているようであり、その動静はしばしば諸種のジャーナリズムに報道されるようである。

けれども、わが憂国塾ではそういう動きはみられなかった。と

きにそれらしい議論の出ることはあるが、それも先生の一方的な主張の展開であり、八田塾生は傾聴するだけであつた。先生の主張はたいていの場合おそろしく飛躍的であり、信じがたいほど独創的であつて、さすがの塾生も自分の耳を疑うようなことが稀まれではなかつたが、それでもなお、決して反論を述べるようなことはなかつた。

これを俗にいえば、塾頭も塾生ものらくらと時間をつぶし、資金のあるあいだはもっぱら飲食と、怠けることをたのしんでいるだけのようであつた。

そんなことが現実により得るとしても、なが続きをすることが

考えられるだろうか。念を押すまでもなくそんな可能性はない。

八田塾生は三回めの資金調達で、その事実突き当たった。寒藤先生がかつてめをかけてやったという、新聞数社のデスクや、局付き某その他の人たちが、じつは寒藤清郷という人物を知らず、顔も見たか見ないか記憶がないこと、カンパをしたのは一種のつきあいと、そのときの気まぐれと、ふところぐあいによるものだったこと、しかも自分がカンパを投与したことさえすぐに忘れてしまっていること、などがはつきりした。

八田青年はそれを取りつくりうだけのおもいやりもなく、事実そのままを報告した。先生もまたかくべつ恥じたり弁明したりするようなことはなかった。ふん、と鼻を鳴らし、不満そうに青年

の顔をじろじろと見た。

「本人に会ったのか」

と先生はきいた。

「会いません」と青年は答えた、「給仕くんが取次いでくれるんです」それからすぐに付け加えた、「これまでもそうでしたよ、みんないそがしいんだそうです」

「この名刺はちゃんと見せたんだろうな」

ほかにどうしようがありますか、とでもいいたそうに、八田塾生は両手をひろげてみせた。

「やむを得ん、こういうことはよくあるんだ」先生は八田青年を慰めるように云った、「かれらジャーナリズムは清貧だからな、

そこにかれらの存在価値があるんだ、報道のためにはなん十万という金を惜しみなく使うが、自分のふところのことはいつさい構わない、だからこそ大ビスマルクはいわくだ」

「晩めしをどうしますか」と八田塾生はきいた、「米がもうないんです」

先生はビスマルクを引込めた。飲食に関しては先生は塾生以上に即物的であり現実論者である。米がないと聞いたとたんに、先生の腹の中でくうくうという音がし、三日も食わずにいたような、激烈な飢餓感におそわれた。

「そういうことは事前に云ってくれなくては困るじゃないか」
「今日も資金の調達ができると思っただもんですから」

「やむを得ん」先生はちよつと首をひねり、顎髯あごひげをいじつてから云つた、「——じゃあきみ済まんが、たんば老人のところへいつて来てくれ、寒藤清郷が米を拝借したいと云えばわかる、明日はぼくが調達にでかけるが、きみ、こういうことも人格構成の重要な経験だ、おろそかに思つてはいかんぞ」

八田青年はビスマルクのやつが出て来ないうちに立ちあがつた。先生にはべつに資金源があるらしく、翌日は自分で外出し、日が昏れてから泥酔して歸つた。

「これは泥酔なんてもんじやないぞ、きみ」と先生は云つた、
「泥酔なんていう俗なもんじやない、これはそのあれだ、その、

なんだ」

「裏から、裏から」と八田青年が声をころして云った。

「きみはなにをねぼけてるんだ」と先生はひよろひよろしながら塾生をにらんだ、「失敬じゃないか裏からとは、なんだ」

「いや、猫がですね」と八田青年は右手の甲で口をぬぐいながら云った、「猫のやつがいま勝手にいたもんですから、晩めしの支度をしますか」

「どうしてまた猫に晩めしを食わせるんだ」

「晩めしは先生ですよ」

そう云いながら八田青年は、手をうしろにやってひらひらと振った。すると勝手の戸がごとと動き、八田青年は慌てて大きく

咳きこんだ。

「めしだなんて、主義者みたようなことを云うな、きみ、酒だ」
先生はそこへあぐらをかき、縞ズボンの膝を摘つまんで皺しわを直しながら云った、「ぼくはこれから本式に飲むんだ、酎を買って来たまえ、きみにも奢おごる」

「お金を下さい」と云って八田青年は手を出した。

「か、ね、かね、かね」先生はモーニングの上衣の内ポケットからさつ入れを出し、中から紙幣を一枚抜いて八田塾生に渡した、
「——国家将来について憂え金銭について憂う、寒藤清郷また多忙なりか、かつて大ビスマルクいわく」

八田青年は勝手へ徳利を取りにゆき、そちらからいそいで出て

いった。そして、外の暗がりですわってた誰かと、なにか囁きあう声があったが、むろん寒藤先生には聞えない。先生は独りでビスマルク將軍と論争しながら、古畳の上に落ちていた細いヘアーパーンを拾いあげ、それがなんであるかも気づかずに土間へ投げやると、仰向けにひっくりかえってしまった。

明くる朝、八田青年は先生とめしを喰べながら云った。

「ぼくはやっぱり青二才なんですわ、ええ、自分でもそれがよくわかりましたよ」

「謙遜は美德の一だ」

「ぼくはずいぶんねばったんですが断わられた、先生が出馬なさると資金調達はつうかあじやありませんか、脱帽します」

これは人格の問題であり、自分はもつともつと修業しなければだめだ、と主張した。裏返すまでもなく、資金調達を先生に押しつけるつもりなのだろう。先生はそんな言葉の裏などに気づくよ
うな小人ではないから、塾生の告白を尤もであると認め、当分の
あいだ自分が奔走しようと受けあつた。

或る日、先生はまた古畳の上から、いつかと同じヘア―ピンを
拾いあげ、こんどは不審そうに、つくづくとそれを眺めた。

「ちよつと、きみ、八田くん」と先生は塾生を呼んでそれを見せ
た、「これはなんだね」

さあといつて、八田青年は首をかしげた。眼の中に狼^{ろう}狽^{ばい}の色

があらわれたけれど、先生はそんなことには気がつかなかった。

「このあいだも、これと同じ物が落ちていたんだが」

先生は二た股またになった細いその物を、おやゆび拇指と食指で持って、

なにげなく匂いを嗅かいだ。

「あぶらっ臭いな」と先生は云った、「いったいなんだろう、誰がこんな物を落していったんだろう、なんに使うのかなこれは」

「猫かもしれないよ」

「猫だって、——こんな物をか」

「このごろときどき、うちの中を通りぬけていく猫がいるんです」と八田青年は唾をのんで云った、「ずうずうしいやつでしてね、或るときは表から勝手へ、或るときは勝手からはいつて来て表へ

というぐあいには、ゆうゆうとうちの中を通りぬけてゆくんです」

「近みちに当るわけか」と先生はへアーピンを土間へ投げやりながら云った、「こんどそんなことをしたらだな、猫鍋ねこなべにして食つちまうぞと威してやれ、人をばかにしたやつだ」

そしてまた或る朝。ふつか酔いのため食欲がなく、味噌汁ばかり啜すすっていた先生は、しきりに首をひねったり、上眼づかいに天床を見あげたりしたあと、きみはゆうべうなされてたか、と塾生に質問した。八田青年はこんどは狼狽の色もみせず、静かに先生に向つて首を振った。

「すると夢かな」と先生は呟いた、「なんだかそのう、苦しうなうに唸うなるんだな、ほそいう声で唸うなるんだ」

「猫ですよきつと」

「いやそうじゃない、きずげになりそだつて云うのを聞いたよ、いや猫じゃないな、あれは」

「さかりのついた猫はおかしななき声を出しますからね、ぼくの田舎で本当にあつたことですが、赤ん坊が死んだ赤ん坊が死んだという泣き声でするんですね、薪屋の裏のところで毎晩なんです、薪屋にはちようど赤ん坊がいたんで、誰か恨みのあるやつが呪つてるんじゃないかって、大騒ぎになつたんですが、結局さかりのついた猫のなき声だとわかつたんです、その次には俵屋の横でまた」

「いや猫じゃない」と先生は頭を振つた、「きずげになりそだつ

て、そこだけははつきり耳に残っているんだ、それから細うい唸り声とな」

「それなら夢ですね、先生はたいへんないびきをかいてたし、寝返りばかり打ってましたよ」と八田青年は云った、「一度なんかぼくは横腹を蹴られました、本当ですよ」

「そうかもしれん」先生は眉をしかめた、「うん、そうかもしれん、失敬した」

また或る日。先生が資金調達から帰って来ると、格子戸が閉つてあかなくなっていた。

鍵かぎがあるわけでもなし、突交い棒がしてあるわけでもない。そ

んなことをした例がないので、先生は格子戸をゆすりながら、八田くん八田くんと呼びたてた。

八田青年の慌てたような返辞が聞え、なにやらがたぴしと物音がし、そして八田青年が出て来た。

「お帰りなさい、いまあけます」八田青年はズボンのバンドをしめながら云った、「今日はお帰りが早かったですね」

「格子をどうしたんだ」

「ちよつとくふうしたんです」八田青年は格子戸をあけ、先生のために軀からだを脇へよせながら、一本の古い五寸釘くぎをみせた、「これを差しておいたんですよ」

「なんでまたそんな妙なことをしたんだ」

「猫のやつが不用心だからです」

「猫って、——あの近みちをするというやつか」

「なにしろはだしでずかずか通りぬけてゆくんですから、うちの中がよごれちやっつてしようがないんです」

先生はモーニングをぬいで、あわせ裕と羽折に着替えながら、鼻をひくひくさせた。

「なにかへんな匂いがするな」と先生は云った、「誰か来ていたのかな」

「人間がですか、いいえ」八田青年は首を振った、「先生のお留守に人をあげたりなんかしやあしません、それにぼくにはそんな者はいやあしません、お茶を淹いれますか」

先生はなお鼻をひくひくさせたり、首をかしげたりしていた。そうしてまた、それから幾らもたたない或る夜中、先生は誰かの唸り声と、おら、も、わがねわがね、というのを夢うつつに聞き、ああまた夢をみているんだなと思い、朝起きてから考えてみてやっぱり夢だったのだと合点した。

世間の不景気はひどくなり、事業界のゆき詰りとか中小企業者の倒産とかいう噂うわさが、しきりに人から人へと語り伝えられた。これは日本では流行性感冒のようなもので、或る不定の期間をおいて襲来し、当局は慌ててそのときしのぎの対策をたて、中小企業者、低賃銀所得者などの犠牲によって景気の恢かい復ふくを計るが、根本的な治療法を考えないから、ひとおさまりしたと思うとまたや

つて来る、という仕組になっているようだ。たんば老人の遠慮がちな意見によれば、これは日本のさいとり経済を救うための、必要な政治的操作なのだそうで、これを聞いた寒藤先生は肩をいからせ、たんばくんは赤じやないのかと非難し、そんな危険思想の持ち主だとすると、将来からきめにあうだろうと云った。

ところが、どんな危険思想をも持たない先生自身が、たんば老人より先にからきめにあうことになった。というのが、或る日の昏れがた、先生が資金調達から帰って来ると、待っていたように治助がどなりこんで来た。

「やい先生、よくもおれのかかあを取りやあがったな」

そして彼は腕まくりをした。

治助はこの「街」ではたらき者に数えられている。としは四十か八、子供は六人いたが、五歳になる末っ子のほかはみな、どこかへとびだしてしまった。おはちといういまの女房は三度めで、としは治助より二十歳くらい下であろう、東北の生れだというが色白のきりようよしで、けれども子供たちの母親ではなく、治助と夫婦になってから、まだ二年そこそこにしかならなかつた。

治助は平生おちついた男で、たんば老人の話によると、「めしを食ったものかどうかと、よくよく思案してみたうえで、初めてめしを食うことにきめた」そうであるが、典型的ともいうべき律儀者であり、人のうちへどなりこむとか喧嘩をする、などという

ことは、博奕ばくちきちがいの徳さんでさえ、賭かけの対象にはしないだろうと信じられるくらい、治助には縁のないことであつた。

それがいま、彼は怒りのために拳こぶしをふるわせ、ぶしよう髭だらけの黒い顔をつき出し、古い印半纏しるしばんてんの袖をまくつて、いまにも先生に殴りかかりそうな氣勢をみせた。

「なにをどなるんだ、なんだ」と先生はまごついて、治助の拳を防ごうとでもするように、片手を前へ出しながら云つた、「——
ぼくがなにか悪いことをしたのならあやまる、まあおちついて」「おれのかかあを返せ」と治助はどなつた、「おれの女房のおはつを返せとおれは云つてるんだ」

「おはちさんのことか」

「それはお国なまりだ、おはつというのが本当なんだが、そんなことはどっちでもいい、先生はいまおれのことをまるめようとして、こうしているうちにもその頭を使つてるだろうが、おれのほうには証人て者が幾人もいるんだ、その証人たちは頭は使われないが眼を使つて現場を見ているんだ」

「まあおちついてくれ、とにかくぼくにはわけがわからない、まあ治助くんおちついて」

先生がそこへあぐらをかき、縞ズボンの膝をつまんで皺を伸ばすのを眺めながら、治助はまだ怒りのおさまらない顔つきで、他人の女房を横取りするようなことは、仮にも先生と呼ばれる人間のすることではあるまい、と責めたてた。ぼくはそんなことは知

らない、それは誰かの悪意から出たざんそにちがいない、と先生は答えた。

「先生がまずそんなふうにしつぺ返しをくらわせて、おれの出鼻をひつ叩くだらうとは、証人たちもいつていたよ、だがな先生、みんなが現に見ているんだ」と治助はいった、「おはつのやつがこのうちの裏からもぐりこんだうえ、一時間ぐらいするとこそそこそ出て来て、頭の毛かなんかいじりながら、こそこそ帰ってゆくところをよ、え、先生、これでも知らねえつていい張る気かえ」

「待ちたまえ、まあ待ちたまえ」先生は顎髯を撫なでた、「——そうか、うん、そういうことか、なるほどありそうだな」

「なにがなるほどだ」

「これはだな、治助くん」と先生はおちついていった、「証人が見たとか見ないとかという問題じゃなく、当人のおはちさん」

「おはつだといったろうが」

「その人にだ、いいかね」先生は切札を出すような口ぶりであった、「その本人に来てもらえば黒白がはつきりする、ということじゃないかな、ぼくはそれがもつとも簡単明瞭な収拾策だと思いがどうだろう」

「だからその本人を返してくれていってるんだよ、先生」

「返してくれて、ぼくがおはちさんをどうかしてでもいるっていうのかね」

「いづのかねつたつて」治助はじれつたそうに頭の毛を掻きむしつた、「おれはね、こんにち唯今ここへ来たわけじゃねえんだよ、おはちの、いや、おはつのやつのようにすがおかしいと気がついたのは二た月もめえのことで、おれとしちやあじつくり思案した、おれは眠れるかな、と幾十たびも考えてみたが、おれは眠れねえようなことはなかつた、けれどもおかしいなと気がついたこともたしかで、おれが眠れねえようなことがないにしろ」

「まあきみ、治助くん」と先生が制止した、「話を簡単にしようじゃないか、え、きみがいうのはおはちさんを返せということだろう、ぼくはまたぼくで、おはちさんを」

「おはつだつてばな」

「その人を伴れて来れば簡単明瞭だといってるんだ、え、だからその本人をここへ伴れて来るのがいちばん先のことじゃないか」

「先生はおれの頭をどうにかしようっていうんだな」

「きみの頭をどうするんだ」先生はついに声を尖^{とが}らせた、「きみのいう本人はきみの妻だろう、自分の妻のふしだらをぼくのところへねじこむのなら、その本人である妻をだ、亭主であるきみが伴れて来るのは当然じゃないか、そうじゃないか治助くん」

この問題が中心議題の周囲をからまわりしていることは、断わるまでもない。しかし、からまわりをしているうちに二人の思考は、求心力の作用でやがて問題の核へぶつつかることができた。そしてそれは先生のいうとおり、じつに簡単明瞭なことなのだった

た。

「うちの塾生だ、それは」と先生はいった、「八田忠晴といつて、三月ばかりまえに入塾した青年だ」

「先生じゃねえつてか」

「ばかなことをいうな、この寒藤清郷は痩せても枯れても国士だ。そんなことはさつきから繰り返しているとおり、おはち本人にきけばわかることだ」

「それがうちにはいねえんだよ、先生」治助は上りがまち框へ腰をおろし、厚い唇を指でつまんだ、「ゆうべ夜なかにとびだしたらしい、朝起きてみたらいなかつたし、いまになつても帰つて来ねえ始末なんだ、ほんとだよ先生」

「ぼくの塾生もゆうべからいなくなつた、ぼくが気がついたのは
 やつぱり朝になつてからだ、——するとこれは、駆落ちかもし
 れないな」

「かかあのやつは、自分の物をいっさいがっさい持つてつた」と
 治助は独り言のように云つた、「どうしてだろう、先生、おれと
 おはちは承知づくで夫婦になつた仲だ、そこにある石をおれが自
 分の独り思案で持ちあげて運んで来たようなもんじゃなかつた、
 おはちのやつも自分で思案をして、このおれと夫婦になるほうが
 ゆきさき心丈夫だと思つたからこそ承知していつしよになつた、
 そういうわけなんだよ先生」

先生は治助の云うことは聞いていなかった。その朝早く、八田塾生の姿がみえないのを知ったとき先生はそれを一時的なものだと思つた。入塾して以来まだ個人的理由で外出したことはないから、誰か友達でもたずねにいったのだらうと。だからいま治助の話聞き、おそらくおはちとしめし合せての駆落ちだらう、と推察したとたん、自分の信頼が紙屑かみくずのように無視され、裏切られたことを悟つて絶望した。

「そんなぐちを云つてもへのたしにもならん」と先生は云つた、

「きみはその本人のたちまわる先に心当りがあるんだらう」

「それがあればと思うんだが」

「心当りはないのか」

治助は首を振った。おはつとは埋立て工事の現場で知りあい、そのとき女は飯場の炊事をしていたが、工事が終わると飯場は移転せず、そこで解散してしまった。したがってその関係をたぐることはできないし、おはつとは夫婦になったものの、まだ入籍していないから、本籍も寄留地もわからない——こういう「街」の住民たちの大部分は、子供が生れるまで入籍のことなどに関心をもたないのが通例のようであった、——だっておめえ、とかれらは云うのだ、おれたちのかかあときたら、いつ誰とくつついてとびだしちまうか見当もつかねえからな。

「そいつは困ったな」

「先生のほうはどうだね」と治助が反問した、「そのじくせえと

かいう若ぞうの親もとはわかつてるんだらう」

こんどは先生が首を振った。

「なら保証人は」

先生は同じ動作をした。八田忠晴が入塾したときの問答を思いだして渋い顔をし、治助はいきりたつた。親もとも保証人もしらずに人間いつびき雇うのは、先生にも似あわない非常識なやりかたではないか、と責めた。

「そいつは法律違反だぜ」と治助は云つた、「犬一匹飼うんだつて鑑札を届けなきやならねえつていうのによ、仮にも人間を雇うのに保証人もなしつてちよぼ一があるかえ——先生なんてつても人はみかけによらねえもんだな」

「あれは雇い人じゃない」と先生は云い返した、「この憂国塾の塾生なんだ」

治助は溜息ためいきをついた。深くてばかげたほど長い、力のない溜息であった。塾生は雇い人ではないという先生の答えが理にかなったものかどうか、治助にはわからなかった。彼は溜息をつき、唇を指でつまみ、頭の毛を乱暴に掻き、また溜息をついた。

「で、その——」と治助は先生を見た、「先生はそのじくせえをどうする気だね」

「どうもしないな」と先生はおちついて云った、「大ビスマルクいわく、敗走する兵を戦線に返さんとするは、落花を枝に戻さん

とするに似たりと、——ぼくは去る者は追わず主義だ」

「おらあむずかしいこたあ知らねえ、むずかしくねえことも知らねえかしらねえがね、はー、どうしたらいいもんだか」

「するとすれば、警察へ搜索願いを出すだけだな」

「そんなこたあだめだ」治助は激しく頭を振った、「そんなことうすれば、かかあのめえの亭主や、めえのめえの亭主から搜索願いが出てるかもしれねえし、三つも四つも搜索願いがち合つたら、たとえおはちのやつをみつけたつて警察でも途方にくれるばかりじゃねえか、そんな突拍子もねえことは話にもならねえ」

先生は「へえー」といい、詮せんさく索するような眼で、治助のまっ

黒な顔をつくづくと見まもつた。

「とすれば」とやがて先生が云った、「そこにそうしていてもしようがないだろう、帰ったらどうだ」

「ここにこうしていても」と治助は思いあぐねたように答えた、
「しようがねえことはわかつてるが、さて、帰るかかってええ帰る気持ちもおこらねえ、いつまでここにいてもつもりもねえが、帰るつて気にもならねえ、おはちのやつがいまごろ、どこでのたばつてるかと思うと、おらもうきずげになりそだ」

先生は眼を剥むいた。治助が暫くのち帰って行ってからも、そしてまた晩めしの支度をしながらも、その眼は大きく剥きだされたままであった。——ほぼ一週間ほど経った或る日、八田忠晴から先生にハガキが届いた。

——ぼくは憂国塾の空理空論をダンガイする、男子すべからく
実行的であれとは古人の金言、ぼくあえて先生に宣言しよう、ぼ
く八田忠晴は身をもつて女性解放運動の旗手とならん、嗚呼。ああ忠
晴生」

という文面であつた。先生は読み終るとすぐに、ハガキをこま
かく千切つて放りだし、顔をくしゃくしゃにし、顎髯を搔いた。

「えーと、さて、と」先生は周囲を眺めまわした、「さてとりあ
えず、——くそつ、こんなときこそ耐をぐつとひっかけられれば
いいんだが、二杯でも一杯でもいいんだが、のんべ横丁のごーつ
くばり共どいつもこいつも実行的なやつばかりだからな」

先生は立ちあがり、ちよつと考えてから、「まずたんば老かな」

と^{つぶや}呟き、決意のある表情で、しかし確信なげに外へ出ていった。

とうちゃん

沢上良太郎には五人の子供がある。太郎、次郎、花子、四郎、梅子。殆んどとし児で、上が十歳、次が九歳、八歳、七歳、五歳。そして妻のみさおは妊娠していた。

この「街」の人たちは、それら五人が沢上良太郎の子ではなく、一人ずつべつに、それぞれ本当の父親があり、その父親たち五人がこの「街」に住んでいることも、かれらが自分じぶんの子を判

別していることもよく知っていた。

妻のみさおは自分の腹をいためたのだから、むろん誰よりも熟知していたであろう。それを知らないのは子供たちと沢上良太郎だけだと信じられていた。

沢上良太郎は「良さん」と呼ばれていた。背丈はさして高くないが、よく肥えていて、まるまるとした顔は見るからに人がよさそうだった。太い眉毛も、小さくまるい眼も尻さがりで、唇が厚く、頬骨のところこぶに肉が盛りあがっているため、小さくてまるい眼は、その肉瘤こぶのかけから覗のぞいているように感じられた。

良さんの顔はお人好しの条件をぜんぶ揃そろえている、とけちんぼの波木井老人が云った。眼も口も鼻も頬ほぺたも耳もぜんぶ、お人

好しの部分品ばかり集めてこねあげたものだ。

良太郎の顔をよく見ろ、とヤソの斎田先生は云った。あれはかみさんに催眠術をかけられて、その術からさめることができずにいる顔だぞ。

冗談じゃねえぞ、あのひとの眼をよつく見てみな、とおがみやのお常さんはまじめに云った。あれはしんから人をこばかにしている眼だ、人も神も仏も、てんからばかにしている眼だ。

かみさんのみさおは痩せた小づくりな軀で、顔も細く、頬骨が尖り、落ちくぼんだ眼はいつも、きらきらと、好戦的に光っていた。肌の色は黒く、髪は茶色でちぢれ、額が抜けあがっていた。としては良太郎より三つ下の三十二歳であるが、見たところは逆に

四つくらいもとし上のようであった。

みさおは殆んど家にいない。食事の支度とか、子供たちの着物のつくりなどにはするが、あとは長屋のどこかで、かみさんたちとお饒舌しやべりパーティーをしたり、つかみあいの喧嘩けんかをしたり、その仲裁をして酒を飲んだり、そうかと思うとしばしば、半日もどこかへ消えたりしていた。

「あーあ、まったく女なんてつまらねえもんだ」彼女は一日に幾たびか、きつとこう嘆かないことはない、「——男は勝手にしたいことをして、亭主関白だなんておだをあげていられるが、女は腰の骨の折れるほどはたらいでも、たのしみに芝居ひとつ見にいけやしない、考えてみるとなんのために生きているのか、つくづ

くわが身が衰れになっちまうよ」

良さんはやんわりと微笑しながら、せつせと、しようばいの刷毛作りに精をだしていた。

良さんは腕のいい刷毛作りで、刷毛といつてもヘア・ブラツシなのだが、問屋でも彼の作った物は高級品として扱い、一流化粧品店とか洋品店、百貨店などへ納入していて、けれども仕事へのろく、数があがらないので、「ごうがにえる」と云われた。確かに、彼の仕事のおそさには妻のみさおもごうがにえるとみえ、仕事ばかりでなく、箸^{はし}のあげおろしにまで、露骨な非難をあげせかけた。

「おまえのすることを見ているとあたしや足の裏がむずむずしてくるよ」とみさおは云う、「まったく、どうすればこんなぐずな男が生れるんだろう、おまえのふた親が生きてたら、あたしや押しかけていつてきいてみたいくらいだよ」

良さんは小さくてまるい眼を細め、唇のあたりにかすかな微笑をうかべながら、黙って仕事を続けるだけである。——あめいろ 飴色になつた仕事台の上の、ちよつと右寄りに、厚さ三インチばかりの板が立ててあり、豚の毛を入れた筒とか、ブラツシの台木、ごくぼその針金、にかわの鍋などの材料が、良さんの左右に並んでいた。彼は左手で、筒の中から豚の毛をひよいとつまみあげる。一つの穴に入れる数は、およそ三十本ときまっているが、彼は一度

でそれだけつまみ取れたためしがなかった。つまみあげてから、そのたびによく数えて、二本足すとか、一本引くとかするのである。

「なんだね一本や二本」とみさおが咎^{とが}める、「そんな細っこい毛の二本や三本、多くったって変りはないじゃないか」

「そうかもしれないけれどね」良さんは頬笑みながら、舌が重くて動かないような口ぶりで、ゆっくりと答える、「三十本にしないと、あたいの気が済まないんだよ」

数が揃うと、立ててある厚板の側面へ、毛の根元のほうをとんとんと当てて、根揃えをし、右手に持ったごくぼその針金できりきりと根元を巻き、針金の一端を、ブラッシの穴に通して引き、

毛の根を穴に引き入れて固定し、針金の余りをはさみ鋏で切る。穴は中の三列が二十、左右の一行が十七、ぜんぶで九十四あり、その一つ一つへ三十本ずつの毛を植えてしまうと、固定した針金を叩いて平らにし、にかわを塗って裏木をかぶせて染める。

にかわはいつも溶けていなければならぬから、夏冬とも火鉢に掛けてあり、——したがって家の中にその刺戟しげきせい性の強い匂いの絶えることはなかった。

「この匂いを嗅いでいると、あたしや世の中がはかなくなってきたやうよ」とみさおは大げさに顔をしかめながら云う、「世間いやちつとはあたまのいい人もいるんだらうに、にかわからこの匂いを抜く知恵ぐらいはたらかせる者はいないのかね、えっ、臭く

つてとてもうちになんかいられたもんじゃありやしないよ」

みさおは亭主の手伝いなど決してしない。仕事ぶりののろさをそしり、にかわの匂いにけちをつけると、自分はさっさと外へでかけてしまう。夜の食事にはたいてい帰るが、ひるめしには帰らないことの方が多し。良太郎も子供たちも慣れているため、彼女が帰らなくともべつにふしぎはないようすで、父親が膳立てぜんだをすると、みんな温和しくめしを喰べる。子供たちはみな従順で、四郎までの四人は小学生であるが、成績はどの子も上位を占め、太郎はずっと級長を続けていた。

「あの子たちはこの街の七ふしぎの第一だね」とここの人たちは

云った、「どつちから考えてもあんな子供たちの生れるわけがないんだから」

子供たちは五人とも、母親にあまりなじまない。生活の大部分が父親だけでまかなわれているためか、それとも幼い神経で、本能的に父を哀れと思うためか、母が家にいてもあまえるようなこととはなく、なんでも父に相談し、父の手助けをしようとした。――ここの住人たちの着物は、殆んど洗い返し縫い返した品である、新調するときにも古着屋から買うのがせいぜいで、そのため半端物や古着を背負って、定期的にまわって来る商人が二人いるが、持って来た品を売るよりも、反対にぼろを買わされるほうが多い、とぼやくくらいであった。

良さんの家族も例外ではなく、子供たちの着ている物はみな誰かのお古で、シャツもズボンも、ブラウスもスカートも、なにもかも継ぎはぎだらけであり、絶えず洗濯したり解いて縫い直ししたり、継ぎを当てたりほころびをつくろつたりしなければならぬ。——むろんみさおも黙って見ているだけではないが、八割がたまでは良さんがやらなければならぬ。職業の関係で、こまかな手仕事には慣れているためだろう、根気仕事ならお手のものも云えるが、一日じゅう家において子供たちを見ているから、よごれた物を着ていたり、ほころびが切れているのを見たりすれば、つい手が出てしまうようであった。

ちかごろでは子供たち自身が、自分たちでできることはするよ

うになった。花子はまだ二年生であるが、つくろい物をなんとかやつてのけるし、太郎と次郎は洗濯を担当した。そのうえかれらは、少しでも暇があれば、ブラツシ作りの手助けまでしようとした。

「みつともねえ子だよ、おめえたちは」とみさおはよく云つた、「男の子のくせに洗濯なんかしてさ、そんなこせこせした根性じやろくな者にはなれやしねえよ」

子供たちは黙っている。学校の先生が、自分のことは自分でしろと云つた、などと云い返せば、学校の先生までが嘲笑の的にされるからだ。

「あたしやただの軀じやないんだからね」とみさおは主張する、

「あたしのおかずはべつにするよ」

たとえこまぎれ肉にしろ鮪まぐろのあらにしろ、みさおだけは一と皿べつにおかずをつける。つまり妊娠ちゆうだから、それだけ栄養をとらなければならぬのだという。ほかの者は見もしないが、末っ子の梅子はまだ五歳だから、肉を煮たときなどは匂いがするし、どうしてもそつちへ眼がいつてしまう。するとみさおが敵を見るような眼で睨にらみつける。

「なんだいその眼つきは」とみさおはどなる、「かあちゃんはその軀じやないんだって云ってるだろう、二人分は喰べなきや身がもたないって、——世間へいつて聞いてみな、沢上さんとこの

おかみさんはよくあれで辛抱してるもんだって、そ云ってるから
「こんな臭いこまぎれ肉でさえおちおち喰べられやしない」と泣
き喚くこともある、「そんなに喰べたきやおまえ喰べな、かあち
やんなんか妊娠脚気で死んじやつたっていいんだろう、さあ喰べ
なったら喰べなよ」

そしていきいきい声で泣き、皿の物をお梅の顔へぶちまけたりす
るのだ。

みさおが妊娠していることは確かだし、その相手も近所の人た
ちにはわかつていた。一年ほどまえに、米村五郎という若者がこ
の「街」へ移って来た。とたんにみさおが眼をつけ、同時に後家
のお富さんも眼をつけ、二人とも五郎にのぼせあがった。後家の

お富さんは独りずまいで暇もあり、五人の子持ちであるみさおより優位な立場だったから、先取得点はお富さんのものだったらしい。或るとき、五郎がお富さんの家へはいり、三十分ほど経つてみさおがその家へとび込んだ。五郎のはいるのを見てい、ほぼ時間をはかつてそうしたのだろう、帯ひろ裸のお富さんとかみあいの大喧嘩になり、近所のかみさんたちが集まって来て、ようやく二人をひきわけたが、五郎はいつどうやって逃げたか、もうそこにはいなかった。——そのときみさおが、わたしから絞るだけ絞つてこんな女とできあつていたのか、という意味のことを叫んだので、かみさんたちの疑問の二つが解けた。すなわち、みさおのような女に、どうして次々と男ができるかということ、また、

良太郎がいい腕の刷毛職人なのに、なぜ貧乏からぬけられないのか、ということである。

良太郎の仕上げたブラッシを問屋へ届け、賃銀を受取つて来るのはみさおの役であり、財布を握っているのも彼女であった。良さんは賃銀の高もきかず、みさおの持っている財布に、いま幾ら金があるかもきいたことはない。みさおは亭主の稼かせいだものを、好きなように使うことができるのである。そうはいつても、収入の高は知れているから、男に貢いだところで些細ささいなものだろう。他の社会のように、背広を作つてやるの自動車を買つてやるのと、というような話とは千マイルもひらきのあることだが、この「街」では一杯の焼酎が、他の社会の背広一着にも当たる場合が珍しくな

いのだ。

みさおが五郎にどれほど貢いだか不明である。五郎は田浦さんという仕事師の家に同居してい、たまには日雇い人夫に出ることがあつても、すぐに飽きてしまい、月のうち十日もはたらけば、あとはぶらぶらしているだけ、というふうであつた。

お富さんは強敵だが、物質的にはみさおが優勢で、五郎もその点をよく心得て、巧みに両面策戦をやつていた。それが今年の春、お富さんがよそへ引越していったため、みさおが五郎を独占することになり、休戦ラツパが鳴つたというしだいであつた。

良さんの五人の子供の、それぞれの実父は、まだこの「街」に

住んでいて、かれらもまだみさおとの仲がまったく解消したわけではない、という噂であった。

「おい、たあ坊のおふくろ」と太郎の実父は云う、「おめえ若いのができたっていうが、このごろ女つぷりがあがったぜ」

「よう、花子のかあちゃん」と花子の実父は云う、「おめえこのごろすつかりごぶさただな、あんまり若いのばかり可愛がらねえで、たまにはこつちへもお裾分けを頼むぜ」

「乙にすますなえ、みの字」と四郎の実父は云う、「めつきりあぶらがのつちまつて、若ぞう一人じゃあとてもおかつたるいだらう、どうだ久しぶりに、やつとここでござり——といかねえか」

次郎の実父はなにも云わない。なにも云わずに黙って、実力行

使にでるそうである。これらの呼びかけや行動は、近所の人たちの眼があり耳のあるところで公明正大に演じられるのだが、みさおは決して羞はにかんだり怒ったりするようなことはない。むしろ近所の人たちの眼や耳に対して、自分をみせびらかし、羨せんぼう望感を唆そそるような態度をとるということであつた。

これほどあけすけな妻のふしだらを、良太郎はぜんぜん知らなかつたのであろうか。住民たちは知らずにいると信じ、かげで笑うだけでなく、ときには面と向つてあてこすりを云いさえするが、良さんは小さくまるい眼尻をさげ、柔和に微笑するばかりで、いかなる反応も示さなかつた。

「につぽんかいびやく以来、あんなお人好しのおたんこなすは見

たこともねえ」と男たちは云った、「おれつちがかいびやくこのかた生きて来たわけじゃねえにしろさ」

けれどもときたま、良さんはつくづく子供たちを眺めることがあつた。食事のとき、子供たちと膳を囲んで坐りながら、とつぜん茶碗と箸の動きを止め、びっくりしたような眼で太郎を見、その眼を次郎に移し、花子、四郎、梅子と見まもるのである。

「なにさ、とうちゃん」父の眼に気づいて、どの子かがきく、「どうかしたの」

良さんはゆるやかに頭を振り、やさしげに微笑する。

「どうもしないさ」と良さんは答える、「みんな大きくなつたな、
と思つてね」

或る日の夕方、次郎が泣きながら帰って来た。みさおは例によつて留守だったが、父やきようだいはみないた。次郎はときたま外で喧嘩してくるから、初めは誰も気にしなかった。

良さんはブラッシを作つてい、太郎はその脇で、ブラッシの柄のつやだしをしていた。次郎の泣きようがいつもとは違うのに、花子がまず気づいた。

「どうしたの、次郎ちゃん」花子が運針の手を止めて次郎を見た、
「梅ちゃんが心配するじゃないの、泣くのやめなさいよ」

「とうちゃん」

次郎は父の顔を見た。彼自身の顔は涙でぐしやぐしやに濡れ、

眼のまわりから頬まで、よごれた手でこすったためだろう、鼠色の斑まだらができていた。

「なんだ、次郎」

「とうちゃん」と次郎はまた云った、「ぼくたちみんな、とうちやんの子じゃないって、ほんと」

太郎も花子も四郎も突然そこでかんしゃく玉が破裂でもしたかのように、びくつとし、そしてみんなが父親のほうを見た。そのようすには、かれらが同じことをながいあいだ疑っている、それがついに表面へ出たので、いまこそ真偽を明らかに聞きたい、という期待があらわれていた。

良太郎は仕事の手を休め、一人ずつ順に、五人の子供たちの顔

を眺めた。いつもの穏やかな微笑をうかべ、小さくてまるい眼を細めながら。そうしてまた、ゆつくりと仕事を続けた。

「そういうことは自分で考えてみるんだな」と良さんは云った、

「——自分がとうちゃんの子か、そうではないかってさ」

子供たちは黙っていた。

「とうちゃんはみんなが自分の子だということを知っている」良さんはまをおいて続けた、「だからみんなが大事だし、みんなが可愛くてしょうがない、——けれどもおまえたちがとうちゃんを好きでもなく、自分のとうちゃんだと思えないなら、とうちゃんはおまえたちのとうちゃんじゃない、そうだろう次郎」

次郎の喉のどで泣きじやくりの残りがひくつと音をたて、彼は手の

甲で眼を拭いた。

「だって、みんなが云うんだ、ずっとまえっから、ぼくたちはみんなとうちゃんの子じゃない、ほんとのとうちゃんはべつにいるんだって」と次郎は云った、「——ぼくだけじゃないんだよ、あんちゃんも花子も四郎も云われるんだよ」

父親はなだめるように笑った。

「人はいろいろなことを云うよ、とうちゃんのことだって、のろまでいくじなしって云ってるのを聞いたろう」良さんは喉で笑った、「——とんでもない、とうちゃんは力もあるし喧嘩もうまいんだ、小さいときには次郎の倍も喧嘩をしたし、一度だって負けたことなんかありやしないんだよ」

良さんは左手のシャツの袖をまくって、二の腕を子供たちにみせ、そこに長さ十五センチほどの、茶色になった傷あとを示した。

「これはね、友達にナイフで切られたあとだよ」と彼は云った、
「とうちゃんが小学校六年のときだったが」

そして彼は、受持の先生まで威す^{おど}というクラス一の乱暴者を、
どうやって叩き伏せたか、ということをししかたばなしで語った。

ナイフで腕を切り裂かれながら、相手の鼻柱を殴りつけるところでは、子供たちは唇をひき緊め、身ぶるいをした。その中で太郎だけは、父親に気づかれないうちに眼を伏せた。彼は父親の腕にある傷が、どうしてできたものか知っていたらしい。そのうえそ

それは、良さんの語っているようないさましいものではなく、子供の彼が思い出すのも恥ずかしいような、屈辱的な出来事だったということが、そつと眼を伏せた彼の表情にあらわれていた。

良さんはまた、自分がのろまでないこと、仕事がおそいのは仕事を大切にやるからで、それはおまえたち子供のため、子供たちをつつがなく育てるには、信用のある仕事をしなければならぬからだと説明した。

「これが、とうちやんの本当の気持なんだよ」と良さんは云った、「いざとなればいつでも、三人や五人は叩き伏せてみせる、弱者はだめだ、強い相手でなければやらないがね、それから仕事だつてそうだ、その気になればブラッシの二百や三百は一日で仕上

げてみせるよ」

良さんはそこで自信ありげに微笑し、子供たちの顔を順に見まわした。

「けれど長屋の人たちはこんなことは知りやしない、なんだのなんだのって、好き勝手なことを云ってるだろ、えー次郎」良さんは微笑をひろげた、「どうだいみんな、とうちゃんのことを信用するかい、それとも長屋の、なんにも知らない人たちの云うことを信用するかい」

「とうちゃんだ」と云って次郎が手をあげ、次に太郎、続いて四郎、花子が「とうちゃん」と云って手をあげた。梅子は話がよくのみこめなかったのだろう、みんなの顔を眺めまわしてから「あ

たいはねえちゃん」と云つて花子を指さし、みんなが笑いだした。「本当の親か、本当の子かなんてことはね、誰にもわかりやしないんだよ」良太郎は仕事に戻りながら、いかにもやわらかに云つた、「お互いにこれが自分のとうちやんだ、これはおれの子だつて、しんから底から思えればそれが本当の親子なのさ、もしもこんどまたそんなことを云う者がいたら、おまえたちのほうからき返してごらん、——おまえはどうなんだつて」

返辞のできる者がいたらおめにかかるよ、と云つて良太郎はごくぼその針金をきゅつと緊めた。太郎は黙つてつやだしをしていた。

がんもどき

かつ子は十五歳になる。同じとしごろの少女に比べると、背丈も低いし肉付きも悪く、胸も平べったいし腰も細かった。肌はつやのない茶色で、きめが荒く、腕や脛すねにはかなり濃い生毛が伸びていた。——きりようもよくはない、どこがどうとはいえないが、ぜんたいとして少女らしい新鮮さがなく、生活の苦しきをつぶさに経験した中年の女、といったような印象がつよかった。

かつ子は伯父夫妻に育てられ、いまでも伯父夫妻と三人で生活している。伯父の綿中京太は五十六、伯母のおたねは五十七。か

つ子は伯母の妹の子で、生れるとすぐ伯母に引取られた。詳しい事情はわからないが、その生みの母はかつ子を生んでまもなく、某商事会社の社長と結婚し、そちらにも三人の子があり、贅沢ぜいたくな生活をしているという。——かつ子を引取るとき約束したそうで、いまでも実母から伯父夫妻に、きまった額の仕送りがあるし、かなえという実母自身も、年に三度から五たびくらいは、この「街」へたずねて来るのである。

綿中京太はもと中学校の教師をしていたという。口だけは達者であるが、徹底した酒呑みの怠け者で、かなえからの仕送りはもとより、妻とかつ子の稼ぎまで、殆んど呑みしろにしてしまい、自分は仕事らしいことをなの一つしようとしなかった。

京太はなにごとにも分類学的な注を付ける癖があつた。

「ぼくの酒は遺伝学のプレゼンプルだあね」

「この魚は切身にして煮てしまったから、もはや動物学でなくして衛生学に属すらあね」

などというのである。彼は自分の容貌に大きな誇りをもっている。ことに横顔には絶対の自信があつた。彼はこれを「ジョン・バリモアズ・プロフィール」と自称し、酔っているときは、妻やかつ子にまでそれを見せようとしきりに横向きのポーズをとるのであつた。

「ぼくの鼻をみたまえ」と京太は飲み相手に云う、「これはもはや骨相学や人躰解剖学の問題ではなく、美学の対象そのものなん

だよ」

顔面神経痙攣けいれんという持病のある島さんが、この「街」へ移つて来てからまもなく、二人はかなり親しいつきあいをするようになったが、或るとき京太が自分の鼻について解説したところ、島さんはやつと敏速に笑つて反問した。

「びがくねえ」島さんは感心したように云い、自分の鼻を指さしてきいた、「つまり鼻学というわけだね、病理的鼻学か、わるくはないな」

容貌に自信のある者に向つて、容貌に関する皮肉を云つてはならない。島さんのは皮肉にもならないじぐちにすぎなかつたが、京太は感情をそこねたようで、それから島さんとあまり飲まな

いようになつた。

「本当にいやな天気だね」とおたねが或るとき云つた、「頭の芯しんまでかびが生えそうだよ」

梅雨が長びいて、古畳に青かびの生えるようなうつつとうしい日が続いていた。おたねはかつ子と二人で造花づくりの内職をしてい、京太は独りで、朝から冷酒を飲んでいたが、妻のさもなくさくさしたような言葉を聞くと、急にまじめな顔つきで問い返した。「おまえは天気がどうのこうのというが、それは気象学としての文句か、それとも天文学としての文句か」

北の長屋に付属して、二戸建ての古屋があり、あまりに古く、

手入れもしないため、ぜんたいが南へかしがっており、いまにも倒れそうにみえるため、そちら側に三本の長い杉丸太で突っかい棒がしてあった。——とところで、暴風雨がやって来ると、その家の住人たちは、いそいでその突っかい棒を取りはずすのである。これは誰でもいちおう「逆じゃないか」と疑いをもつ。嵐になるのだから、そのときこそ突っかい棒をする、というのが一般的な考えだからだ。けれどもその家の住人は、「それは常識というものでこの家には通用しない」という。もしもその家に突っかい棒をすれば、強風のため家はばらばらになってしまう。突っかい棒を取りはずしてやれば、家は風の強弱に順応してゆらゆらと揺れる。要するに風に抵抗しないことが、この家の唯一の保全法なの

だ、ということであつた。

「それはもはや建築学では論じられないな」京太は話を聞いていた。「むしろそれは、材料強弱学の問題だあね」

妻のおたねは従順であつた。亭主より一つとし上というひげめなどではない。二人ともそんなとしではなくなっているし、京太は酒が専門であり、よそで飲むにも女つけのある店へは決してはいらない。

女つ臭いのはなにより酒をまずくする、というのが彼の口癖であつた。——また、彼が中学教師だつたという感じはあつて、妻やかつ子に対しても、乱暴なことをしたりどなりつけたりするよくなためしはなかつた。——したがって、おたねの従順さは生れ

ついた性分であろうが、貧しい家計のやりくりと休む暇のない内職稼ぎに追われながら、ぐちをこぼしたこともないし、亭主にはたらいてくれといったこともなかった。

「世間にはくらしに困って、親子心中をする者がいくらもあるんだよ、可哀そうにね」おたねは仕事をしながら、かつ子によくそういった、「そういう人からみれば、生きてゆけるだけまだあつしたちは仕合せさ、ほんとに、親子心中する人の気持はどんなだろうね」

かつ子は黙ったまま、そつと聞えないくらいに低く太息をつくか、仕事の手を止めて、古畳の一点を見まもるかするだけである。かつ子ほどこまめにはたらく者もないし、かつ子ほど口かずの

少ない者も珍しかった。

生れてすぐ引取ったということだし、おたねには血を分けた姪めいだから、しんみの親子と変らない情愛がかよっている筈である。にもかかわらず、ここへ引越して来るとほどなく、近所のかみさんたちはかつ子が夫婦の実子でないことに気づいた。

それは四年まえで、かつ子はまだ十一歳だったが、学校へいつている時間をべつにすると、かつ子のはたらしい姿を見ないことがないし、その動作には少女らしい愛あい嬌きょうや明るさがなく、あまりにてきぱきとおとなめいていて、鞭むちでも躡しつけられたかと思われるくらいであった。

「なんだろう、あの子」その当時よく近所のかみさんたちは云つたものだ、「なにを云つてもあのきみの悪い眼でじろつと見るばかりで、返辞もろくさましやあしない、唾おしつんぽかね」

「いじめて育てられたせいだよ、用心ぶかくなって、誰にもなじめないし、誰も信用できなくなってるのさ」

幼いときのことは不明だが、ここへ住みついて以来、おたねとかつ子の関係は、じつの母子でないばかりでなく、親しみも愛情もない、ということが誰にでも感じられた。

おたねは亭主にだけ従順なわけではなく、身のまわりでおこるすべての事物を従順に受けいれ、聖職者が神意にさからうことを恐れるように、どんな事にも決してさからおうとはしなかった。

——かつ子が自分になつかなければ、なつかないことを受けいれた。かつ子は唾者あしやのように口が重く、話しかけても殆んど返辞をしないが、おたねは返辞を促したためしがない。返辞をされなくとも、話したいと思えば話しかけるだけで、返辞をしないかららはをたてるのかももう話しかけてはやらない、などということは決してないのだ。

「おまえは人類学的な存在じゃないな」と京太は云う、「おまえは動物学的でもない、もはや植物学的な存在だと云うほかないね」
かつ子が小学校を卒業したとき一度だけ、おたねは亭主と少しやりあつた。

京太はこれ以上かつ子を学校へやることはないと主張し、おた

ねは仕送りがあるのだから中学だけはやらせたいと云った。仕送りだつて、笑わせちゃあいけない、と京太は云った。あんなやみの子を押しつけられて、これっぱかりのはした金を仕送りなんぞと云えた義理か、酒もろくさま飲めやしないぞ。それはそうだけれど、いまは中学までが義務教育だから、とおたねはねばつてみた。そしてさらに二、三の応酬があり、京太は急に妙案をだした。じゃあこうしよう、かつ子を中学へあげるについて出費が嵩むから、仕送りをこれまでの倍にしてくれつて、そう云つてやろうじやないか、もし時岡でそれを承知したら、ぼくもまた考えることにするよ。

そうしてかなえがこの「街」へあらわれることになった。

おたねが亭主に向つて自分の意見を述べたのはそのときだけである。そしてかつ子の生みの親に連絡がとられたのだろう、かなえ夫人が初めてたずねて来た。

彼女はおたねより七つとし下だというから、そのときは四十六か七になっていた筈だが、着物も派手だし髪も化粧も、いま美容院から出て来た、というような感じで、どうふんでも三十二、三にしかみえなかつた。彼女の出現はこの「街」の人たちに一種のシヨツクを与え、空地にもろじにも、彼女を見るためにとびだして来たかみさんや子供たちで人垣ができ、それらすべての眼が、好奇心と讚美と嫉妬しつとを混えて彼女に集中し、彼女のあるいてゆく

ほうへと動くのであった。

——ほら嗅^かいでごらん、と翌日になって或るかみさんは云った。あの人の通ったところはいまでも香水の匂いがするよ。

かなえを迎えた綿中では、京太がまず大騒ぎを始めた。彼は例の如く独りで飲んでいたが、とびあがってかなえを招き入れ、すぐになにか馳走しろと、おたねやかつ子をせきたてた。

「まあ姉さん」とかなえはおたねに云った、「これがあの子？へえ」

そしてかつ子を見あげ見おろしたうえ、その顔へ眼をとめると、そのまま暫く凝視し、かつ子が赤くなつて顔をそむけると、太息をつきながら首を振った。

「やれ、やれ」とかなえは云った、「なんてぶきりような子だろ
う、まるで踏んつぶしたがんもどきだね」

かつ子は無表情にかなえを見返し、黙ったままゆつくりと立っ
ていった。おたねはかつ子を伴^つれて買い物にゆき、魚を焼いたり
煮物をしたりした。酒だけは中通りの酒屋から届けて来る。なに
をおいても、京太は酒の勘定だけはきちんとするし、飲む量も多
いから、酒屋にとってはいいとくいのはうだったらしい。こうし
て、京太にうるさく催促されながらも膳の支度をし、京太とかな
えが飲みだした。

「あら、おどろいた」おたねは妹をまじまじと見た、「あんたお
酒が飲めるの」

「パパのお仕込みですもの」とかなえは答えた、「ウイスキーの一本ぐらいは平気よ、それにうちは交際がひろいし、社交界では必ず夫婦同伴でしょ、お酒ぐらい飲めなければホステスの役が勤まりやしないわ」

「たいしたもんだな」と京太が云った、「それじゃあかつ子を女子大までやらせるぐらいお茶の子ですね」

「ばか云わないでよ京さん」とかなえは打つまねをした、「事業が大きければ大きいほど、遊ばせておく現金なんてないもんなのよ、あたしだってちよつとした買い物はみんな小切手ですもの、あんたたちの考えるようなものじゃないのよ」

「でもねえ」とおたねが云った、「この子も中学ぐらいやらなけ

れば」

「ア・ラ・パレ、だめよ」かなえは姉に半分も云わせずに手を振った、「あんな踏んづぶしたがんもどきみたいな子、中学へやるなんて勿^{もつたい}体ないわ、小学校だけでおんの字、もうその話はよし
てちようだい」

そして京太に杯をさした。

社交界とかホステスとかいう言葉のもつ概念と、かなえの口ぶり飲み食いする態度とは、まるで関連性のないものにみえた。彼女はさされる酒を呷^{あお}るように喉^{のど}へ流し込み、肴^{さかな}の皿へ片っぱしから箸をつけた。焼き魚は骨までしゃぶったし、歯にはさまった小

骨は、口へ指を突っ込んでほじり出し、ちやぶ台の上へこすりつけ、その指を平気でぺろつと舐めた。そして酔いがまわりだすとふうりゆうたん風流譚を始め、いきなり京太の肩を突きとぼしたり、大きな口をいっぱいあけてけらけら笑ったりした。

このあいだずっと、おたねとかつ子は内職仕事をしていたが、京太もかなえも二人が眼にはいらぬかのように、自分たちだけで飲み食いし、云いたい放題のことを云い、ばか笑いをしていた。二リツトルのびん壺二本を一本半以上もあけ、肴もすっかり食いあらしてしまふと、かなえはげつぷをしながら帰ると云った。

「あー面白かった、あんたは教養があるから飽きないよ」かなえは京太にそう云った、「教養のない人間なんかと飲んだつても、

それこそア・ラ・パレ、だね、ご馳走さま」

「まったくだな、うん」と京太は呟いた、「そんなやつはまったく、ア・ラ・パレだ」

おたねが荒地のどぶ川のところまで送っていった。

「ねえ、かなえちゃん」別れるときおたねが云った、「女の顔の悪口なんか云わないでおくれよ、可哀そうじゃないか」

「がんもどきかい、ふん」

「そんなこと云わないでおくれたら、あんたはきりようよしだからいいだろうけどね」

「そんなこと云うまでもないわ」かなえは鼻を反らせた、「あたしはパパに一眼惚れされたんですもの、じゃさよなら」

それからこの「街」の人たち、ことに子供たちはかつ子のことをがんもどきと呼ぶようになった。かつ子は小学校を出ると、そのまま家にいて、内職をしたり家事の手伝いをしたりした。ちよつとでも手があけば、家の内外の掃除をし、隣り近所の方まで紙屑みくずを掃いたり草を抜いたりするし、誰もいやがって手をつけないどぶ掃除も、月に一度はすすんでやった。

「あのとで珍しいね」とかみさんたちは云った、「ちつともじつとしてないんだから、あれでもうちよつと愛嬌があれば文句はないんだけどね」

その後も年に一度か二度、かなえは豪華な姿でたずねて来た。そしてかつ子を「踏んづぶしたがんもどき」と呼び、京太と酒を

飲んで、芝居でする馬子か駕籠かごかきの女房のような口ぶりで、い
かがわしいことを饒舌しゃべりちらした。

かなえの婚家が相当な事業家だということは確からしい。だが、
どんな種類の事業をやっているのかも、その家庭がどんなふうで
あるかもわからない。なにがし商事会社と云うとか、またそこで
自分が生んだ三人の子たちが、ピアノの先生についているとか、
家庭教師が二人ずつ付きつきりだ、などと話すときも、会社その
ものや、子供たちについて語る、というのではなく、かなえ自身
をひきたて、かなえ自身をひけらかすためのように感じられた。
なにかという外国語を口にするが、それもないがいは使いかた

がちぐはぐだし、おトイレ式の、なに語とも判別のつかないものが多かった。

おたねとかなえがどんな生いたちをし、どんな親きようだいをもっているか、また、いまでも親きようだいがいるのかどうか、

——これらのことは、この「街」の他の住人たちと同様、すべてがあいまいでつかみどころがない。ここでは常に現在があるだけで、過去のことは関知されないのが通例であり、たまたま語られる過去の話は、九割まで粉飾され、誇大に歪められるのが常識のようになつていた。

興味ふかいはのは、こういう誇張された話になると、語り手は自分で嘘と知りながら昂奮し、それがもし哀話であれば、その哀

れさに自分で涙をこぼした。聞いているほうも、ああこれは作り話だなと思しながら、それでもなお身につまされて、もらい泣きをするというのが珍しくないことだ。但し、これが虚栄心に関連した問題になるとまったく事情が変る。明らかに嘘とわかっていても、必ず反感をかい、こつぴどい悪口を云われるし、実際にむかし金持であつたり、現にそれをみせつけたりすれば、それこそ仇がたきあだのようにそしられるのであつた。

かなえは後者の例に属するだろう、豪華に着飾り、香料の匂いを百メートル平方にまでふりまきながら、鼻たかだかとやって来、鼻たかだかと帰ってゆく。人垣をつくって見迎え見送る住民たちには眼もくれず、もちろん挨拶するなどということもない。にも

かかわらず、かなえの評判はここでは悪くなかった。口の悪いことではひげをとらない一群のかみさんたちでさえ、かつ子のことをがんでもどきと云いながら、かなえに対しては羨望とあこがれの眼を向け、せいぜいのところ女らしい嫉妬を感じる程度のようにであつた。

或るとき、社会意識にめざめた有名夫人たちが団体で、この住民に古衣類や菓子、粉乳や家庭薬などを、無料配給するためにやつて来たことがあつた。住民たちにとっては大きなよろこびだつたろう、まるで餓えた野獣が獲物にとびかかるように、それらの物資に襲いかかり、すべての物をあつというまもなく奪い去つてしまった。そして、有名夫人たちがあつけにとられていると、

——もうねえのか、これっぽっちしか持って来ねえのか、と男たちが喚いた。

こんなけちな物を持って来てえらそうなつらをするな、と他の男がどなり、さっさとけえれ、まごまごするとただじや済まねえぞ、と威し、^{おど}子供たちは石ころを投げつける、という結果になった。

そういうかれらが驕^{きょうまん}慢^{まん}そのものようなかなえには、反感や悪意よりも、むしろ畏敬^{いけい}に似た態度を示すのはなぜだろうか。

——慰問団がやられたのは、住民たちの貧窮に触れたからだな、とヤソの齋田先生は評した。あの有名夫人団は施与をすることに

よつて、自分の贖しよくざい罪意識と優越感を満足させようとした。貧乏人ほどこういうことに敏感なものはない、かれらは自分たちの貧窮が利用されたことを知つて怒つたのだ、聖書にちやんと書いてある、右の手でほどこしをするとき、自分の左手にもそれを知らせるなど。

——なに簡単な話さ、とたんば老人は評した。かなえ夫人に反感をもたないのは、この人たちにとって、夫人が、同種属の者だということを感じているからだろう。

ではかつ子はどうなのだ、例をみないほどのはたらき者で、隣り近所の前まで欠かさず掃除をし、ぶきりようなうえにぶあいそではあるが、誰に意地わるするわけでもないし、誰の邪魔にもな

らない。呑んでくれの怠け者で、一円の銭も稼がない京太を抱え、伯母と二人の内職仕事で生活に追われながら、中学にゆけないことさえ不平を云わない。

——そのかつ子をこの人たちは「がんもどき」と呼んで嘲笑する、しかも、かつ子に聞えてはわるいという遠慮さえもせず。

——わるぎはないんだ、と人は云うだろうがね、とたんば老人は評した。わるぎどころか、みんなは憎んでいるんだな、どんなにはたらいても酬われない自分たちの境遇を、あの子がかたちにしてみせているように感じるからね。

かつ子はこうして満十五歳になった。そのとしの冬、おたねが婦人科に属する腫瘍しゅようを手術するために、三週間ほど病院へはい

った。その費用はかなえにまかなってもらったが、同時に「仕送り分は差引きだ」と宣告され、京太は窮地に追い込まれた。

「なあかつ子、ひとつよく考えるんだぞ」京太は酒臭いおくびをしながら云った、「生みの母も及ばない、深い恩のある伯母さんの病気だ、ことによると生死にかかわるかもしれない、そうだろう」

かつ子は黙って内職の仕事を続けていた。

「だから、伯母さんの恩を忘れない証拠にも、ここは精いっぱいはたらくときだ、伯母さんがなにを心配しているか、病院にいてなにをいちばん気に病んでいるか、おまえはよく知っている筈だ」

京太は自分の言葉の意味を、かつ子が理解したかどうか、慥か^{たし}めるような眼で少女の顔をみつめた。かつ子はなんの表情をもあらわさず、ただ内職仕事の手を早めただけであつた。

「おまえがもう少ししましなきりようで、^{からだ}軀つきもおとなびていればいいんだがな」と京太は独り言のようにつぶやいた、「そうすようがない、まあ内職でもするほかに手はないだろう、その代り伯母さんの分までやるんだぞ、わかつたな」

かつ子はわかつたというようにそつと頷^{うなず}いたが、やはり口はきかなかつた。

ほぼ三週間のあいだ、かつ子は自分の能力の限度を知りたいと

でもいうふうに、ひるも夜も休みなしにはたらいだ。内職というものは常にあるとはきまつていない、二倍も三倍も重なることがあるかと思うと、十日の余も途切れることがある。かつ子はその「途切れる」ことをなによりも恐れた。それには仕事をよそより早く、しかも他の人たちより巧みに仕上げなければならぬ。つまり、「あの子の仕事なら確かであるし早い」という評価を取る必要があった。ひるも夜も、休みなしにはたらくかつ子の頭は、絶えずそのことを考え、その考えに支配されていた。

京太は酒呑みにも似あわず、三度の食事を欠かしたことがない。外で飲んでいるときでも、めしの時間には必ず帰って来て喰べる。そのうえお菜には三食とも魚か肉を要求し、味噌汁もなくてはな

らなかつた。

「だめだね、この鯖さばはいかれてるよ、この皮を見な」京太は皿の煮魚を箸で突つきながら云う、「いきのいい魚は皮がちゃんと付いてる、これを見てみな、こんなに皮がびらびら剥はがれてるじゃないか」

「またこまぎれか」京太は鼻に皺しわをよせる、「屋台の牛めしじやあるまいし、いつもいつもこまぎれじや鼻についてちまうよ、これは食品調理学じやなく食品衛生学の問題だな」

かつ子はなにも云わない。十五歳の腕と頭で、できる限りのことをしているのだ。魚のいきのよしあしを選んだり、こまぎれでない肉を買ったりする、金もなし知恵もなかつた。そしてまた、

伯父の苦情に耳をかすゆとりもなかつたのである。——かつ子ははたらきどおしにはたらき、伯母と二人で稼ぐときと殆んど同じくらいの賃金を稼いだ。彼女は夜半の一時よりまえに寝たことはなく、午前四時すぎまで寝ていることもない、睡眠時間は多くて三時間、そのあいだは失神した者のように、寝返りもうたず、いびきもかかずに熟睡した。

或る夜半、——というよりも、午前二時ちよつと過ぎたころ、京太が眼をさまして手洗いにゆき、戻つて来て寢床へはいろいろとしながら、ふとかつ子を見た。

かつ子は仰向きに寝て、片方の足を夜具の外へ出していた。い

つもはそんなことはなかった。仰向きに寝ればその姿勢のまま、横向きに寝れば横向きのまま、眼がさめるまで動かないのである。それがそのときは片足を夜具から踏み出してい、だいた大腿上部までがあらわになっていた。

京太は夜具を掛けてやろうとして跣かんだ。発育のよくないかっ子の軀は、少女らしい魅力さえどこにも感じられなかった。胸も腰も少年のように骨ばっていて、ふくらみや柔軟さなどはまったく眼につかなかった。——ふだんは確かにそのとおりののだが、ひびのいったガラス戸を透して来る、夜のほの明りのいたずらだらうか、京太の眼にうつったかっ子のあらわな足は、特に大腿部でやわらかい厚みと、重たげな張りをもって、おどろくほど誘惑

的にみえた。

すぐに、かつ子は眼をあいた。眠りからさめたというより、眠っていないかった者が眼をあいたような感じで、そのまま眸子ひとみも動かさずに伯父をみつめていた。

「なんでもないんだよ」と京太は云った、「あたりまえのことなんだ。じつとしていればいいんだよ」

かつ子は例によつてなにも云わず、ただ伯父の顔をみつめるばかりであった。その眼には驚きの色もなし感情のかけらもなかった。ガラス玉のように冷たく、透明なままであった。

「眼をつぶるんだ、かつ子」と京太が云った、「じつとして眼をつぶってればいいんだ、なんでもないんだから」

けれどもかつ子の眼は伯父をみつめたまま動かなかった。そこで京太自身が眼をつむつたのだが、つむつた眼の裏にかつ子のみひらいた眼がみえるというようすで、すぐに眼をあき、眼をつぶれ、とするどい声できめつけた。

かつ子の唇がゆっくりひろがって、歯がみえた。微笑したようでもあるし、あざけているようにも感じられた。京太は骨まで凍るほどぞつとし、慌ててまた眼をつむつた。かつ子はいいに眼をあいたままでいたし、一と言も口はきかなかつた。

「女つてもものはなあ、おやじ」京太はのんべ横丁の、おでんの屋台店で飲みながら、店の老人にそういった、「——十五でも三十でもおんなじようなところがある、三十四、五にもなるのに、或

るときひよいと見ると、十四、五の娘つこのようなあどけない顔つきをしていることがあるし、また、十四、五の娘のくせにひよつとすると、三十五、六の女みたような眼で、じろじろ男を見ることがもある、——魔ものだねあれは」

「たいしようが女の話をするなんて、珍しいじゃありませんか」
「女つてもものはな、おやじ」京太はなお云った、「あれは人類学で論ずべきもんじやないぜ、あれは博物学、——いや、妖怪学、でもねえか、むしろあれは、うん、やっぱり妖怪学の対象だぜ」

おたねが退院し、かつ子はさらにいそがしくなった。退院はしたが、あと二週間の安静を命じられていたからだ。かつ子はこれ

までの仕事と雑用のほかに、おたねのための病人食、——それは医者が献立表に書いてよこし、起きるようになるまでは、この食事表を必ず守ることと云われた、——を作り、身のまわりの世話をし、薬を取りにゆく、という用事がふえた。

「あたしにも運のいいことがあったんだね」おたねは病床でゆつくり手足を伸ばしながら、自分の幸運に酔ったような顔つきで云った、「——病院でしりつされるときは恐ろしかったけれど、なに、死ぬなら死ぬでそれもいい、死ねばあくせく稼ぐことはなし、ゆつくり休んでいられるんだからってさ」

「それがしりつがうまくいって」とおたねは続けた、「二十日の余も暢のんびり寝たうえ、まだ半月ちかくも寝ていろつていうじやな

い、あたしやものごころがついてこのかた、こんな仕合せなめにあつたのは初めてだよ」

そういう言葉ではあらわしきれないような、深い人間味のある幸福感が、おたねの眼にいきいきと溢あふれていた。けれども、留守ちゅうのかつ子の労をねぎらったり、これから世話になることの感謝の気持は一と言も口にしないし、そんなことを心に思っているようすさえなかつた。

かつ子が伯母からそういう労りや感謝を、期待していないことも明白であつた。伯母が退院してからの労働過重で、眠る時間がさらに短縮されたため、ひるま仕事をしながらもときたま居眠りするようになり、そのたび伯母に呼び起こされる結果、やがて眼

をつむらずこつくりもせず居眠りができるようになった。意識的なうそ眠りではなく、呼び起こされるのを避ける自衛本能のようなものだったろう、しかも仕事をまちがえるようなことはごく稀まれにしかなかった。

「あんた、なにしてるの」或る夜半におたねが、声をひそめて呼びかけた、「そこでなにをしてるの」

「いま鼠がね」と京太のとぼけたような答えが聞えた、「ここに鼠がいたもんだからね、あぶないから」

「ねぼけてるのね」

「いなくなつたよ」京太はぐずぐずと云つた、「いま鼠がちよろちよろとここを、——そうなんだ、こつちからこつちのほうへさ」

「あんだねぼけてるのよ」

「おれが、——ねぼけてるって」

「こないだの晩もねぼけてたわ、おかしな人、子供みたい」

やがておたねは床ばらいをし、生活は平常に戻った。この期間かつ子は一と言のぐちも云わず、不平らしい顔つきもみせなかつたけれど、近所の人たちは彼女がおどろくほど瘦せ、顔にもやつれのみえるのに気づいた。

そして五十日ほど経った或る夜のこと、おたねは姪の軀の異常に気がついた。

ここの住民たちは殆んど銭湯へゆかない。例外はあるけれども、

四季をとおしてたいがいは行水を使う。その日おたねは、仕事の賃銀を受取ったし、ずいぶん久しいことゆつくり入浴したことがないので、かつ子と二人で中通りの草津温泉という湯屋へいった。——そしてかつ子の裸姿を見てどきつとした。肉の薄い骨張った軀の、乳房がふくらみ、乳首とそのまわりが黒くなっていた。そして腹部もいくらかふくらみ、臍^{へそ}から下へかけての縦の筋も、はつきり黒みを増していた。

おたねはなにも云わずに、姪のようすを観察した。かつ子の日常には変ったところはなく、ただ食欲にむらが出て、ときどき一食ぬかしたり、一度に二食分も喰べたり、朝起きぬけに嘔吐^{おうと}したりするのが眼につきだした。

おたねは亭主に注意し始めた。夜半すぎに「鼠がうろうろしていた」などと、ねぼけたことが幾たびかあったのを、思いだしたからである。おたねが注意していることに気づいたのか、あれからは京太もへんなねぼけかたはしないし、かつ子に対しても妙なそぶりをするようなことはなかった。

或る日、おたねは黙ってかつ子を伴れだし、本通りから電車に乗って、中橋の仁善病院へいった。そこは建物も古いし医者もへぼだが、診察料が安いので知られていたのだ。——病院では、いま婦人科の担任がいないのでと、院長がざつと診察をし、妊娠に紛れのないこと、二カ月めの終りごろだろうこと、母身に異常のないことなどを告げた。おたねはそれとなく、人工流産がしても

らえるかどうかと、さぐりを入れてみたら、院長もさりげなく、まだ成年未満であるし、親や良人の承認と、しかるべき費用が出るなら不可能ではない、というような返辞をした。しかるべき費用とはおよそどのくらいかと、おたねがさしさわりのないようにきくと、院長もさしさわりのないような調子で、およその金額をもらった。

おたねは病院を出て、かつ子と裏通りをあるいて帰りながら、相手は誰だときいた。かつ子は診察のあと待合室にいて、伯母と院長の会話は聞かなかつたから、相手は誰だという質問が、すぐに理解できないようであった。

「隠してもしょうがないよ」おたねは事実を話してから云った、

「おまえ自身のことだからね、あたしには関係のないことだし、どんなわけだったにしろあたしはなんとも思やしないからね、本当のことをお云いな、相手は誰だったの」

自分が妊娠していると聞かされたとたん、かつ子の全身が固くちぢまり、髄液がしぼり出されて骨だけになるようにみえた。かつ子は口をあけ、歯のあいだから呼吸しながら、両手の指を力いっぱい握り緊めた。

「隠しておけることじゃないんだよ、どうにか始末をしなくっちゃやならないんだよ、かつ子、誰だか相手を云つとくれ、え」

かつ子は答えなかった。伯母の言葉などは耳にはいらぬのか

もしれない。うつろになった眼で、前方の一点を凝視したまま、ふらふらと、伯母についてあるくだけであつた。

おたねには相手の見当はついていた。日を繰ってみると、そのことのおこつたのは自分の入院ちゆうであるらしい、そして夜なかの鼠騒ぎ。かつ子は夜も昼も休まずにはたらいっているから、外でそんなあやまちをする隙はないが、家の中でなら機会はいくらでもある。ただ一つわからないのは、このところ五年以上も、京太が自分に触れず、女そのものを嫌い、避けとおしてきた点である。五十になるまではうるさすぎるくらいひんぱん頻繁なうえに、安あそびをしたり、つまらない女にひつかかりして世話をやかせたものだが、その反動のようにぴったりと沙汰やみになり、呑み屋で

も女つけのある店へは近よらないようになった。

酒呑みに女は不用だと、自分でもいばっていたし、それを裏切るような例はなかった。かつ子は生みの親でさえ、「がんもどき」と云うくらい、きりようも悪いし、軀つきにも娘らしきなどまったくなかった。それをどうして、京太が手を出すような気になったか、そこに少なからず疑問があった。尤もおたねにはそれは重大でもなんでもなかった。たとえ相手が京太だとしても、口惜しいとかねたましいなどという気持はおこらないのである。古風な考えかたかどうか知らないけれど、毎月の面倒が終って以来、自分は今もう女ではない、ということを漠然と感じ、なまぐさいような感情からはすっかり解放されていた。ましてこんどの腫物はれものの

切除で、実際にも女であることを喪失したため、そういう問題にはいつそう淡泊になったようであった。

だがそれで済むことではなかった。かつ子の躰内では一日ごとに育っているものがある、そのまま産ませるか、それとも中絶するかきめなければならぬし、いずれにせよ、費用は妹のかなえに頼む以外に手はないので、まず亭主に当つてみた。

日の昏くれかかる時刻で、かつ子を酒屋へ使いにやり、二人だけになるとすぐ話しだした。

京太は吃びっくり驚きした。驚きのあまり彼は自分の軀からすりぬけてしまい、そこにあるのはもと京太であつたが、いまはただなにかの脱け殻にすぎない、というふうな印象を与えた。——尤もそれ

はごく短い時間のことだ。彼はおたねが冷静そのものであり、問題は赤児を産ませるか中絶するかという、二つの点にしぼられていて、ドラマティックな感情など匂いもしないのに気づくと、いまずりぬけた自分の脱け殻の中へ、いそいでまたもぐり込んだようにみえた。

「おまえは、まさか」と京太は反問した、「かつ子をなにしたのが、まさかぼくだと思ってるわけじゃないだろうな」

「あたしはどっちにするかってことを、きいてるだけですよ」

「それもそうだな」京太はわざと渋い顔をした、「二カ月の終りともなれば、どっちにするかをきめるのが先決議題だ、相手の詮

索などはあとのことでいい、しかし断わっておくが、おまえは疑っているかshれないがおれじゃないぞ、冗談じゃない、伯父姪というより親子同様、戸籍だつてはいつているのに、まさかぼくがそんな」

「どつちにしますか」おたねは亭主に云つた、「産ませますかおろしますか」

「それはおまえ産ませる手はないな、としも若すぎるし世間でもあるし、ここは倫理学よりも犯罪医学、いやその、あれだ、つまり法医学的な処置をとるほうが、合理的だと思うね」

「わかるように云つて下さい、おろすんですね」

「おまえは三面記事のようなことしか云えないんだな、そうだ、

おろすんだよ」

おたねはそこで資金の問題をとりあげ、しよせん妹に頼むよりほかはないこと、だが自分の入院手術で借りのできたあとだから、頼みかたがむずかしいこと、断わられないためにはどんなふう交渉すべきか、よくよく案を練る必要があること、などを熱心に話しかけた。

戸口に人のおとずれる声でしたので、夫婦は話を中断し、おたねが出ていってしてみた。戸口には制服の警官が立っている、綿中かつ子の家はここかときいた。

おたねはそうだと答えた。

「中通りの伊勢正へすぐに行って下さい」と警官は云った、「か

つ子くんが傷害事件をおこしたんです、ぼくが同行しますから」

「かつ子が、なにをしたというんですか」

「傷害事件です傷害」と警官は云った、「ことによると傷害致死か、殺人事件になるかもわからない、それは取調べの結果を待たなければならぬが、とにかくすぐに同行して下さい」

そのとき京太が出て来た。

「ご苦労さまです」と彼は警官におじぎをし、それからおたねに云った、「いま聞いていたが、そのままでもいい、おまえすぐに伴れてっただきなさいすぐに、支度なんぞいいから」

早くしろとせきたてた。警官が京太を見て、あなたがかつ子の父親であるかと質問し、京太はなんのつもりか、メリケン粉をこ

ねたあとで汗を拭くように、指をだらんとさせた手の甲で額を撫なでながら、かつ子は妻のおたねの実の姪であると、口ばやに答え、すぐに調子を変えて、傷害事件と聞いたけれども、かつ子はどんな暴行を受けたのかときき返した。

「いや、かつ子は被害者ではなく加害者です」と警官は云った、

「魚銀の店先から出刃でばぼうちよう庖丁を盗みだして、隣りの伊勢正という

酒屋の、岡部定吉という小僧、いや、小店員を刺したのです、小
店員は重傷です」

おたねは顎あごが外れでもしたように、だらつと口をあけ、眼をいっぱいにみひらいた。京太は頭の中で事態の意味するものを解明

しようとするがどうしてもとぐちがみつからないので、自分がいかに対処すべきかわからないため、さしあたりどっちつかずの立場をとることにきめた、といったげな表情で立っていた。

「早くして下さい」と警官は云った、「自分は犯行現場の担当ではないので、同行したらずぐ派出所へ戻らなければならぬから」

おたねは襟えりに掛けていた手拭を外し、それを京太に渡すと、両手をこすり合せながら、土間へおり下駄を突っかけた。いちどはシヨックを受けたらしいが、殆んど瞬間的なことで、おたねのようすにはとりみだすとか、感情の昂奮などというものは少しも認められなかった。

伊勢正の店には制服警官や私服や、白い上っ張りを着てはいるが、明らかに警察関係の者とみえる人たちが六、七人もいて、おたねにはわけのわからないことを、ひどくいそがしそうにやっていた。かつ子は警察へ護送され、被害者の岡部定吉は応急手当をしたうえ、近くの草田病院へ運び去ったあとであった。

おたねを同行して来た警官は、そこにいた私服の男に彼女を渡して去った。私服の男は堀内という刑事だそうで、簡単におたねからメモを取ると、いっしょに署までゆこうと云った。

「わたしそのまえに、伊勢正さんの小僧さんのおみまいがしたいんです」おたねはそう云い張った、「かつ子は警察に捉つかまってるから、いそがなくなっても間違いはないでしょう、小僧さんの傷が

「どんなだか心配です、お詫^わびもしたいと思えますから」

堀内刑事はちよつと考え、もう一人の髭^{ひげ}をはやした私服の人に相談したのち、それなら自分がいつしよにゆこう、と云つた。――酒屋の付近には、大勢の人たちが騒がしく往来したり、こそこそ話をしたりしていた。おたねのことを指さす者もいたが、彼女はなにも見ず、なにも聞かなかつた。

草田病院にも警官がいて、おたねの希望を聞き、医者と相談をしたのち、面会はできないと断わられた。

「いま輸血していると、当人は失神状態だから」と病院付きの警官は云つた、「あんたの来たことは伝言してあげるよ、こつちはそういうわけだから先に署のほうへゆきなさい」

「傷はどなんぐあいなんですか、いのちにかかわるようなことはないんでしょうか」

「いまはなにも云えないね」とその警官は答えた、「被害者は出血多量だということと、失神するまえしきりに加害者の名を呼んでいたということぐらいだな、それ以外のことは係り官の責任になると困るからね、とにかく署へゆきたまえ、加害者の親という立場を忘れるんじゃないよ」

おたねが家へ帰ったのは、夜の八時をすぎたころであつた。京太は独りで飲んでいたので、まっ蒼さおな顔になつて、焼酎の匂いが鼻をついた。

「どうだった、どんなぐあいだった、かつ子はどうした」坐ったまま上臑をぐらぐらさせながら京太は問いかけた、「酒屋の小僧をやったってえのは本当か、本当に出刃庖丁でやったのか」

おたねは勝手へいって手を洗いながら、いま話しますよ、と云って食事の支度にかかった。

「おれはずっと考えていたんだがなあ、かつ子が本当にあの小僧をやったとすれば、理由はただ一つだ、なあ、おまえもそう思うだろう、理由はただ一つ、あの小僧がかつ子をあんな軀にした相手だからだなあ、なあそうだろ」

「あの小僧さんはまだ十七になったばかりですよ」

「かつ子は十五だぞ」

「女と男とは違います」

「人軀生理学では違わなくなつたんだよ、アメリカなんかじゃおまえ、子供の成長が早くなつちやつて、結婚年齢をぐつとさげなくちやならない状態だつてことだ、日本だつておまえテインエー ज्याの問題が、倫理学や解剖社会学で頭痛のたねになつてるんだ」

京太は意味もない饒舌じょうぜつを続け、おたねは独りでめしを喰べた。

京太の饒舌は無意味にみえながら、じつは或る主体を隠すため、煙幕を張っているかのような印象を与えた。

「ゆうゆうたるもんだな」京太はおたねを見て云つた、「自分の血を分けた姪が傷害罪で捕縛されたというのに、まず食欲を満たそうというのはあつぱれなもんだ、女というものは心理学的であ

るより常に生理学的存在なんだな」

おたねは黙つて食事を済ませ、あと片づけをした。諄くどいようではあるが、彼女のようすにはここでもまた、激しいシヨツクのため口がきけないとか、姪のために悲しみのあまり、感情の整理がつかない、などというけはいはまったく認められなかつた。時間がおそくなつて空腹だからまずめしを喰べる、それが終つたら話すことは話す。なにも変つたことはない、とでも云いたげな態度であつた。

「かつ子はなにも云いません」坐つて内職仕事にかかりながらおたねは話した。「出刃庖丁は隣りの魚屋の店先から取つたもので、定吉さんを刺したのも自分だということだけは云つたそう

ですけれど、どうしてそんなことをしたか、なにか恨みでもあるかどうか、いくらきいても返辞をしないんです、ええ、刑事さんに云われたもんで、あたしもかつ子にきいてみました、わけがあつてしたことなら、まだとしも十五のことだしあまり重い罪にはならないだろうからつて」

「いや、はらました相手にきまつてるさ」京太は主張した、「ほかのことなら云えるだろうが、恥ずかしい話だから云えないんだ、それにきまつてるよ」

云いつのる亭主の言葉を、おたねは黙つて聞くだけであつた。

警察から呼び出しがあつても、おれは関係がない、かつ子はおま

えの姪だ、と云つて京太はそつぽを向く。おたねはさからおうともせずでかけてゆき、父親はどうしたときかれれば、京太に教えられたとおり、病気で来られないと答えるのであつた。

かつ子の調べは少しも進まなかつた。どう手をつくしても、犯行の理由を云わないのである。

「きみのわるい子だよ」と刑事の一人は云つた、「なにをきいても黙りこんだままでね、ときどき齒を剥むきだすんだ、笑うのかと思うとそうでもないんだな、唇がこうゆつくりとひろがつて、そうすると齒が見えてくるんだがね、よく観察すると笑うんじやないんだな、猿を怒らせるときーつといつて齒を剥きですが、あれでもないんだ、笑うんでもなし怒るんでもないんだ、見ていると

ぞーつとするね、ああ、きみのわるい子だよ、まったく」

おたねは草田病院へもみまいにいった。岡部定吉は幸運にも死なずに済み、全治三週間と診断された。刺し傷は胸であったが、僅かに心臓をそれたのが幸運で、輸血もうまくゆき、刺傷部の状態もおおむね良好ということであった。

「どうしてこんなことをされたかわからない、ぼくはかつちゃんが好きだったんです」岡部少年は刑事の訊問じんもんにそう答えたという、「ぼくはかつちゃんが可哀そうでしょうがなかった、はたらしきどおしにはたらいで、食う物もろくに食わされなかつたんじやないでしようか、いつも痩せて眼をくぼませてましたよ、だからぼくはかつちゃんが来ると、大饅頭まんじゅうを買ってやった、ときに

はいっしよに妙見様へいって、話しながら喰べたこともあるんで
す」

少年はかつ子の気持がわからないと繰り返した。かつちゃんはみんなから「がんもどき」とからかわれていたが、少年は決してそんなことは云わないし、誰かがそんなことを云っているのを見ると、中にはいってとめるくらいであった。かつちゃんも少年が好きだったようだ。大饅頭を貰うとうれしそうな顔をしたし、妙見様へさそうといっしよに来て、少しは話もしたのである。それなのにどうしてこんなことをしたのか、どう考えてみてもわからない。かつちゃんはなにか間違えたのではないだろうか、きつとそうにちがいない、と少年は云い続けた。

「ええ、ぼくはなんとも思いません、かつちゃんのしたことであつちやんを憎らしいとも思いませんし、恨めしいともくやしいとも思いません」少年はそう云つた、「ぼくがなにかしてかつちやんが罪にならないなら、ぼくはどんなことでもします、あんな物で突かれたのはぼくですし、本人のぼくがなんとも思つてないんですから、かつちやんを罪にすることはないんじゃないでしょうか」

おたねからその話を聞いたとき、京太はそれみろと云つた。自分に悪いことをした覚えがあるからこそ、こんなことを云うんだ。わけもなく出刃庖丁で殺されそくなつて、憎くもうらめしくもな

いなんて、おまけに罪にしないでくれなんてばかなことを云う者が、どこの世界にいるものか、それだけでもう自分の悪事を白状したも同然だぞ、十六や十七でふとい小僧だ、などと罵^のつた。

おたねは内職仕事に追われながらも、伊勢正へいつたり警察へいつたり、草田病院へみまいに寄つたりした。伊勢正とは岡部少年の治療費と、かつ子を貰いさげにする相談であつた。金のほうは妹のかなえに、およその事情を書いて頼みの手紙をやつたが、貰いさげのほうはかつ子が頑強に沈黙したままなので、警察のほうで心証を悪くし、すぐには事がはこびそうもないようなくあいだつた。

こうして、十幾たびめかに警察へ呼びだされたおたねは、帰つ

て来ると京太に向つて、十八歳未満の娘と関係した者は、事情によつて暴行罪になるそうだと、という意味のことを云つた。

「そりやあそうだろう」と京太は横にねそべつて、酒臭いおくびをしながら云つた、「あの小僧は十七でも男だからな、戸籍上の親であるおれたちが告訴すれば、暴行罪になるのは当然だ」

「警察ではあんたに出頭するようにつて、云つてましたよ」とおたねは仕事にかかりながら云つた、「病氣じゃないつてことは刑事さんが知つてるようです、出頭しなければなにかの罪になるんだそうですよ」

「おれが、警察へ、——だつて」京太は不審そうにおたねの顔を見まもつた、「なんのために」

「かつ子が話すことがあるんですって、刑事さんの前で」

「おれになんの関係がある」

「知りません」おたねは仕事の手を動かしながら云った、「十八歳未満のことになにかひっかかりがあるんでしょ、伊勢正の小僧さんが死なずに済んだとわかったら、かつ子がそれじゃあ話すことがあるから、伯父を呼んでくれて云いだしたんですって、——刑事さんはもうなにか聞いたような口ぶりでしたよ」

「でたらめだ」京太ははね起きた、「あの不良少女がなにを云ったか知らないが、そいつはみんなでたらめだ、そんな中傷を信じるばかがあるか、おれには初めからわかってた、あの恩知らずの不良娘は、いつか飼う犬が脛すねを噛かむようなまねをするにちがいな

「いつてな」

おたねは亭主のけんまくに少し驚いたようすで、仕事の手は休めずに、ゆつくり京太のほうを見やった。それは事実だが、彼女の顔はいつものとおり砥石といしのように平静で、感情を動かされたようなけはいはまったくなかった。

「だがでたらめはでたらめだ、ふん、でたらめでなにが証明できるか、え、なにが証明できるんだ」

京太はどなり続けた。

おたねが初めて反問した。

「かつ子が、なにかでたらめを云ったんですか」

「きまつてるじゃないか、そうでなくって警察に呼び出されるわけがないだろう、あの不良娘め」と京太はどなり返した、「生みの親に捨てられたも同様なやつを、乳呑み児から苦労して育ててやったのに、その恩をいまになって仇しやがる、ちくしょうにも劣ったやつだ」

だが証明はできない、あいつになにが証明できる、と独りでどなり続けるのであった。

明くる朝、残りの酒をあるだけ飲んで、京太は家から出ていったが、警察へはあらわれなかった。彼は妻が内職仕事をもらう、三軒の間屋をたずね、三軒から前借した金を持って、行方を昏くらましたのであった。

かつ子が家へ帰ったのは三カ月のちのことであつた。保護施設のようなところへ入れられ、そこで中絶も済ませた。かつ子が未成年であつたのと、自供の内容によつて、法律的に中絶の処置がとられたのであろう。この事件は一部の新聞に発表されたが、ごく短い記事であつたし、かつ子が妊娠していたことや、中絶手段がとられたことなどは、発表もされず誰も知らずに済んだ。

岡部少年の治療費はかなえが払つてくれた。彼女は例によつて豪奢な姿であらわれ、——そのときかつ子はまだ留置されていたが、——独りで活潑に饒舌しゃべりたてた。その舌鋒ぜつぼうの的になつたのは京太で、彼はかなえのところへも金をねだりに寄つたらしい。「あたしや一と眼で臭いなど思つたわ、一と眼でよ」とかなえは

鼻を反らせた、「肝の浅い人間はなんでもすぐ顔に出ちやうからね、あの人つたら右と左の靴をとちがえにはいたまま、これから百マイルも走らなきやならない、つていうような顔をしていたよ、あたしや十円一個やらなかった、アデイオス、あんなことじや生れたばかりの赤んぼだつて騙だまされやしないよ」

かつ子のことには触れたくなかつたのか、彼女は饒舌りたいたけ饒舌ると、金を置いて去つた。

帰つて来たかつ子は、なにごともなかつたように、その日からもとどおりこまめにはたらきだした。伯母に対しても平常と変らず、礼も詫びも云わなかつたし、伯父がどうしていないのかとききもしなかつた。——近所の子供たちは、たぶん親になにか云わ

れたのであろう、かつ子が通ると脇へよけるだけで、もうがんもどきとからかうようなことはしなくなつた。

誰が彼女に乱暴したのか、彼女がなぜ岡部少年を刺したのか、彼女自身がなにも云わないので、おたねにさえわからなかつた。係りの刑事にはかつ子がなにか話したようすであつたが、職務規則でもあるのか、警察方面から話のもれることもなく、傷害事件の内容は闇の中で始末された物のように、誰にも知られずに終るようであつた。

京太がいなくなつたから、しぜん酒屋にも用なしで、味噌や醬油は十日に一度、ほかで安売りをする店があるため、伊勢正とは

縁が切れたようになった。

岡部少年は予後もよく、退院したという噂うわさも聞えたが、おたねはもちろんなにも云わないし、かつ子も自分には関係のないことのように、伊勢正へ近よろうともしなかった。

そして或る日、使いに出て帰る途中、かつ子は岡部少年に呼びとめられた。少年はデニムのズボンにジヤンパーを着、酒の名を染めた前掛をしめ、ゴムの半長靴をはいていた。

「どうしたの、かつちゃん」と少年は停めた自転車を、片足だけ地面におろして支えながら、明るい調子で呼びかけた、「ちつとも店へ来ないね、あ、そうか、おじさんがいないんだね」

かつ子はおちついた眼で少年を見あげ、その眼をゆっくりと伏

せながら、ごめんなさいね、とよく聞きとれない声で云った。岡部少年はかろうじてその言葉を理解したらしく、眸子をきらつとさせながらかつ子の顔を凝視した。

「ぼく、わかんないんだけど」と少年はしんけんな口ぶりで囁くささやようにきいた、「どうしてかつちゃんあんなことしたの、ねえ、どうしてなの」

かつ子はまた少年を見あげ、その眼をまた伏せながら、死んでしまうつもりだったと答えた。

「死ぬ気だったって、かつちゃんがかい」

かつ子は頷いた。岡部少年は首をかしげた。

「わかんないじゃないか、自分で死ぬ気で、それでぼくにあんな

ことをするなんて、どうしてさ」

かつ子はじつと考えてから、うまく云えない、と云った。いま考えてみると自分でもよくわからない、と云った。ただ死んでしまいたいと思ったとき、あんたに忘れられてしまうのがこわかった、自分が死んだあと、すぐに忘れられてしまうだろうと思うと、こわくてこわくてたまらなくなった、本当にこわくってたまらなくなつたのだ、と云った。

「ふーん」岡部少年はまた首をかしげ、地面におろしたほうの足をペダルに戻し、反対側の足を地面におろした、「シヨツクだなあ」

かつ子は眼をあげた。岡部少年は口笛を吹き、上眼使いに向う

を見たが、急に振向いて云った。

「また饅頭たべようか」

かつ子は頭を振り、あたし喰べたくないと答えた。

「じゃあまた、いつかね」少年はにこつと笑った、「ぼくこんどスケート始めたんだよ、ローラーじゃなくアイス・スケートなんだ、うまくなったら見においでよな、かつちゃん」

かつ子は黙っていた。岡部少年は自転車を起こし、手を振って、ペダルを踏みながら、しだいに速力を早めながら去っていった。かつ子はそのうしろ姿を見送りながら、「ごめんね岡部さん」と口の中で呟いた。

ちよろ

本名は土川春彦という。五年ばかりまえにこの「街」へ移つて来たが、それ以来ずっと、三十七歳だと自分では云い張っている。近所の人たちで四十五、六歳よりも若いとみる者はないが、当人はいつきかれても三十八だと答えた。

妻は幾人あつたかわからない。この土地へ来てからでさえ三人変り、三人めが出ていったあと、すでに一年以上も独身ぐらしをしていた。

彼は一メートル六〇ぐらいの背丈で、筋肉質の痩せた軀つきに、

顔も痩せて小さく、眼だまと口だけが際立って大きかった。——彼はおちつきのない男であつた。春彦という自分の名を恥ずかしかる程度に神経質で、愛他精神と利己主義を兼ね備えた即物的セントリーメンタリストで、そうして事業家であつた。

土川春彦の頭脳の中には、いつも大きな事業計画がすし詰めになつていた。この点では、同じ住人である八田公兵と共通しているようだが、そういう見かたは一知半解で、実際にはここの住人の過半数が、——たとえば空想だけに終るとしても、みなひとかどの事業家であり企業家なのであつた。

真偽のほどはさだかでないが、土川春彦は株屋街に關係があり、しばしばぼろい儲けもうをするといわれていた。ここの住人で株屋街

へ出入りするような者はいない、とすればその噂は当人の口から出たと考えるほかはないし、彼の日常のくらしぶりを見ると、ときどきどこかで、幾らかずつ儲けて来ること、それも日雇い労務や、臨時仕事ではなく、手をきれいにしたままで儲ける、ということとは確かなようであった。

彼がどれくらいおちつかない人間であるかを証明することはむずかしい。詳しく知っているのは、彼の妻であった幾人かの女性と、さらに幾人かの同居人たちだけであろう。いや、そのほかにこの街の子供たちがいる。彼には「ちよろ」という渾名あだながあり、それは海岸にいるふな虫のことだそうであるが、あのいつもちよろちよろと右往左往しているふな虫を、土川春彦に当ては籤めたと

ころは、子供の観察の正確さとするどきにおどろくばかりである。彼の家にはつねに同居人がおつた。まだ妻がいたじぶんにも、必ず一人は同居人がおつたのである。不定期の同居人でどれも長くはない、三十日でいなくなる者もあるし百日以上いる者もあった。彼がここへ来てからいつしよになつた二人めの妻は、そういう同居人のひとりと逃亡したのであるが、その男は同居人になつて七日しか経つていなかったのだ。

これらの同居人は、すべて土川春彦自身がつれて来るもので、どこからつれて来るのか、どういう縁故があるのか誰にもわからなかつたが、ふしぎなことに、それらは軀つきとか性分とか、または口のききかたなどにどこかしら似たところがあり、子供たち

はかれらに「かぼちや」という共通の渾名を付けた。

かぼちやという渾名は、代々の同居人たちの風貌と人柄をかなりよくあらわしていた。かれらの躰格たいかくには大小があり、顔だちや年齢もまちまちだったが、のっそりと鈍重なところや、口べたで怠け者だという条件では、多少の差こそあれみな同類に属していた。

そしていま、七代目のかぼちやが同居しているのだ。土川春彦は彼のことをばんくんと呼ぶが、どういう字を書くのかわからない。としては三十から四十のあいだであろう、中肉中背で、固太りのいい軀つきをしているが、動作はのろくさいし口がおもく、一

日じゅうごろごろして、団扇うちわを動かすのと、めしを食うとき以外には、殆んどなにもしないのであつた。

「きみは英氣をやしなつていたまえ、いまにぼくが事業を始めたらはたらいてもらうからな」土川春彦であるところのちよろはそう繰り返した、「きみの役はいまのところ聞き役さ、ぼくは話し相手なしじゃあ十分もがまんのできない性分だね、きみはただぼくの話の聞き役になつてくれればいいんだよ」

ばんくんの眼尻がさがつて眼が細くなり、厚い唇がごくかすかに動く。おそらく微笑したのであろうが、しんじつ微笑したのかどうかを判別するのは、困難なことだらうと思う。——この七代目かぼちやの無口さと、動作のたとえようのない緩慢さには、さ

すがの土川春彦も内心おどろいたようであつた。これまでのかほちやと同じのろまな怠け者でも、なにか一つ二つは家事の手助けをした。食事のあと片づけとか、掃除とか、火をおこすとか、水を汲むとか——完全にやらないとしても、とにかく手助けをするというかたちだけはみせたものだ。尤も一長一短で、かれらは七代目のように、春彦の饒舌をおとなしく聞く能力はなかつた。話が自分の関心事に及ぶと、黙っているだけの忍耐力を失い、口べたは口べたなりについ自分の意見を述べる、ということになつた。しかしそれには春彦も、不本意ながら一步をゆずつた。がまんがならないのは、異論を述べることさえもせず、卑怯ひきようにも眠つたふりをするような者がいたことで、むろんそんな男は同居人とし

ても長続きはしなかったのだ。

ばんくんは徹底した無為徒食主義者ではあるけれども、聞き役としては満点に近い資格の保持者であり、したがって春彦は、從來のどの同居人よりもこの七代目が気にいっていた。

「人間には合性というものがあるんだな、きみ」とちよろが云う、
「ぼくは女房を八人、——いや、正確には十人持ったがね、みんな合性がなかったんだらう、長いので二年、これは一人つきりで耳の遠い女だった。塩鯖しおさばの焼いたのが大好物で、或るときなんか味噌汁にまで入れて喰べたんで仰天したつけ、その女のことを思うといまでも塩鯖を焼く匂いが鼻につくくらいだ、耳が遠いと鼻や舌なんでも幾分かなまるんじゃないかな」

土川春彦が十人の妻について語るのを、七代目は辛抱づよく聞いていた。辛抱づよく、というのは客観的に云ったままで、実際に彼の内部へはいつてみればそうではなく、軀がそこに坐つて、ちよろの話を聞いているようにみえるだけであり、本当の彼自身は、その肉躰の中で睡眠をとっているか、または、その肉躰からぬけだして、どこかしら静かなところで欠伸あくびでもしているかわからないのであった。

「その女房、——というのは塩鯖の好きな女のことだが」と春彦は云つた、「そいつとは半年くらいで別れたかな、その後ほぼ二年ちかく経つてから、前触れもなしにひよいと戻つて来た、ぼく

は事業のもくろみで東奔西走、南船北馬というありさまだったから、まだあとを貫う暇さえなかつたんだな、これはこあみ町にいたじぶんのことさ、——どうしたってきくと、その女が云うには、塩鯖を焼いてたらどうにもたまらなくなつたんだという」

彼は効果を慥たしかめるようにばんくんの顔を見た。ばんくんは修行ちゆうの禅坊主かなんぞのように、眼を半眼にしたままゆつたりとあぐらをかいていたが、春彦に見られたとたん、左の頬肉をかすかにぴくりとさせた。

「きみはユーモアがわかるからうれしいね」ちよろは満足そうに眩つぶやいた、「まったくさ、もとの亭主がなつかしくなつて、とでも云うのならいいが、塩鯖を焼く匂いで思いだすとはひでえ話さ」

そこで話題は事業のほうへとぶのだ。いったいに土川春彦のすることや云うことは持続性がなく、いま木材について愚見を述べているかと思うと、急にシナ料理ではなにがうまいかと問いかけ、自分がもつとも好きなものはめしで、めしを胡麻塩ごましおで握ったものくらいうまくて精力のつく喰べ物は世界じゅう捜してもないだろう、と断言しながら、現在なにが有望かといえばセメント以上の事業はない、などと云いだすのであった。

こういう話題や、話題からジャンプする次の話題、さらに次の話題へとリレーするものが、聞き手にとってはべらぼうに退屈で、ばかばかしくて、生きているのがいやになるほどであった。塩鯖女史が復歸したのも、耳が遠いという器官の利があったからだろ

うし、居眠りをした何代めかのかぼちや氏を卑怯だというのも当
っていないかもしれない。

土川春彦がちよろといわれる理由はもう一つある。彼はただ話
しどおしに話すだけでなく、そのあいだ少しもじつとしていない
ということだ。七代目になってからはそれが特にひどくなった。
つまりなからななまで自分がしなければならなくなつたからだ。

たとえば朝、勝手に火をおこし、土釜どがまでめしを炊き、味噌汁を
作り香の物を切る。ちやぶ台を出し食器を並べ、残り物があれば
それも出した。——この、火をおこす作業と同時に話が始まり、
作業の進行と相交わりながら、そして自由奔放に飛躍し、横すべ

りをし、とんぼ返りをうちながら、断絶することなく、話がめんめんと続くのであった。

「この味噌というやつは」と彼は七厘の前からばんくに話しかける、「栄養価の点でも応用のひろさから云つても、食品ちゅうの王様なんだな、ばんくん」

そして日本人なら一日も欠かせない味噌汁から始まって、あえ物、煮物、練り物、漬け物、焼き物などについて、またそれらの料理法の、誰にも思い及ばないようなバリエイションについて語ったのち、長大息をして嘆くのだ。

「ああ、もしもぼくが先にこいつを発明していたらなあ、そうすればいまごろは日本産業界を左右するほどの大事業家にのしあが

つていたんだろうに」

これを聞いて笑ったり、大きな興味をいだいたり、新しい人生観にめざめたりする者があるだろうか。いかなる話題でも、話す当人が自分で昂奮こうふんし、自分で面白がっている場合には、聞き手は興がさめ、退屈してしまう。ましてその物が味噌などという、極めて陳腐な日常食品であり、料理法の応用価値などについて、しかも熱心に詳細に語られては、聞き手はたまったものではないだろう。

「米のめしというのもたいしたもんなんだぜ、ばんくん」と話は続く、「原子爆弾さえ出来なかつたら戦争は日本が勝つてたんだ、わかるかね、きみ」

七代目は眼をゆつくりと細め、次にゆつくりとひらいた。それは写真機のレンズ・シャッターの開閉を、高速度撮影で映しているようなくあいであった。

なぜ戦争に勝つか、とちよろは続けた。戦力の基礎は兵であり、兵に戦力を与える基礎は糧食である。日本人は幸運にも炊飯といつて、米と水さえあればどこでもめしが炊けるが、外国人はパン食であるがゆえに、どこへゆくにもパン焼き竈かまどや専門職人を同伴しなければならぬ。おかずも同様、日本人は梅干でもたくあんでも、また、必要な塩か味噌でもめしが食える。ところがけとう兵はそうはいかない、シチューだとかコロツケだとかメンチボールだとか、オムレツだとかテキだとか、これまた専門コックが

いなければならぬし、それを料理するためにはシチュー鍋だとか、大小さまざまなフライパンだとか、ナイフやスプーンやホークや、なんだのかだのと荷物になってしまふ。だから日本軍がちやちやつとはんごうすいさんをやって、胡麻塩かなんかでちやつやつと片づけて戦線へ出るじぶんは、やつらはようやくパン竈から焼けたパンを出し、片一方ではシチュー鍋なべをかきまわしているという始末さ、と春彦は云つた。

「これじゃあきみ戦争にならない、そうだろうばんくん」とちよろはちやぶ台を出しながら続ける、「かれらがべんべんとパンの焼けるのやシチューの煮えるのを待つてゐるあいだに、こっちはは

んごうすいさんでちやちやつ、梅干でちやちやつと済まして、さつさと戦線へつん出てつてさあ来いだ、——ずっと昔のことだったが、米英の観戦武官が大演習を見に来た。富士の裾野の営舎で日本の兵隊のくらしっぷりを見て、なにより驚いたのはこの食事のことだったそうだ、——このハムの匂いはちよつとおかしかないかな、ばんくん、ちよつときみ嗅いでみてくれないか」

七代目かぼちやがその物の匂いを嗅いでいるうちにも、彼の舌はいきいきと活動していた。——米英の観戦武官たちは、はんごうすいさんの実態を見、土木工事の飯場よりひどく、藁わらの上に毛布で寝る寝台を見、牛肉の罐かんづめ詰めが日清戦役のときからの貯蔵品であることを認めて、これは造兵機構の驚異であり、特に即席兵

食においてはいかなる文明国軍隊も敵すべからざるものだと言を巻いたそうだと、と熱をこめて云った。

「だから原子爆弾なんていう野蛮な発明さえなければ、日本軍の勝利は確実だったんだが、米英諸国は侵略主義に凝り固まっているから自分たちの弱点をわる賢く、——そのハムはだめかね」

ばんくんの大きな鼻翼がひろがり、ゆつくりと元に戻り、ばんくんはその皿を畳の上に置いた。

「ハムを拵こしらえたのは偶然じゃないんだってこと、知ってるだろうなばんくん」ちよろはハムの皿をちやぶ台の下へ押し入れ、勝手から土釜を持って来ながら云う、「これはきみガラスの製造と切つても切れない関係があるんだ、なんでも古いことだが、西暦で

紀元前かな、そうじゃないな、ガラスはもうエジプト時代にあつたんだが、エジプト時代にハムはまだなかつただろう、あ、——
きみの腕がないな」

春彦はちやぶ台の上を眺めながら、すばやく横眼をはしらせてばんくんを見た。自分の腕だから取りにゆくだろうと思つたらしい、だがこの七代目かぼちやは動くけはいもみせない。ちよろは相手が立つのを待ってやろうと思うのだが、それより早く軀のほうが自由行動を始め、反射的にとびあがつて勝手へゆき、ばんくんの腕を取つて来てしまう。

「そうそう、そのときの観戦武官の中にドイツ将校がいたんだ」
彼の話ほとんどぼ返りを打つてみせた、「かれは他の観戦武官たち

よりもするどい観察眼と批判性をもっていたんだね、帰国したときに詳しい報告をしたんだろう、それがヒトラーに黄禍論を書かせる原因になったんだ、米英軍部にとってはこの兵の食糧問題はつねに頭痛のたねだったわけさ」

ちよろはばんくんがめしを三杯に味噌汁を二杯半、香の物を独りで八割がたかつ込むのを認め、こころぼそいような気分になる。

わが七代目はめしを食うことが早かった。一日じゅうのつそりとして、徹底的になにもしないのは、めしを食うためのエネルギーを溜^ためておくかのようで、一旦ちやぶ台に向ったとなると、両手と口とにすべての機能が集中し、まるで全開にされた発動機の

ように、みごとな速度でかつ込み、噛み、のみおろし、かつ込み、噛み、のみおろす、というあんばいであり、どのくらいが一人の分量かなどということもまったく気にするようすがなかった。

めしは三杯ずつ、味噌汁は二椀ずつ、おかずや香の物は二人分を皿へ盛るのが、春彦の習慣であった。したがって、速度がおそれればおそいだけ、彼は自分の割当てまでばんくに食い込まれるわけで、そうはさせまいとりきむのだが、悲しいかな彼には会話を休止するということができない。ここはちよつと黙って、めのほうを片づけようなどと思うと、逆に取っておきのすばらしい話が押し寄せと出てきて、食事の速度を大幅にさげる結果になった。

「きみ、めしはよく噛まないと毒だよ。お互いのとしになつてこんなことを云うのはおかしいがね」と春彦は或るとき暗示するよ
うに云つた、「たしかグレシヤムも云つてゐるが、食事は一口
を百回以上噛まないと、充分に栄養が吸収されないそうだよ」

ばんくんは片方の眉だけ、かすかにぴくりと動かし、ちよろの
云つた言葉が口からはいつて、喉から胃の中へおちついたと思わ
れるころ、ゆつくりおくびをし、一と言ずつ区切つて慎重に云つ
た。

「めしはね、あんまり噛むとうまくないんだ、二、三度ぐらい噛
んでね、ぐつとのみ込むときに、半搗はんつきぐらいのめし粒が喉をこ
すつておるとき、匂いと味がね、たまらないんだ」そして、

実際どのくらいたまらないかを表現しようとするかのように、下^し顎^{たあご}を前方へせり出させ、それからまた云った。「そうでないにしても、そんなに嘯むのはいやだな、——くたびれるからね」

土川春彦は事業家だと自負していたし、これまでに無数の事業をもくろんだ。彼自身の言葉を信ずることが誤りでなければ、その内の幾つかの事業は実現し、相当なところまで軌道に乗ったということだ。しかし結局のところ、小資本の企業は大資本にくわれてしまう。その事業がおもわく違いなら云うまでもなく潰^{つぶ}れるし、将来有望で発展性のあるものなら、たちまち大資本の手がのびてきて掠^{さら}われてしまうのだ。

「なになにコンツェルンなどといってね、日本の財界なんてけつ

の穴の小さい、ガリガリ亡者の寄り集まりだよ、きみ」と彼は慨嘆する、「新しい事業が有望だとわかると、それを育てようとはしないで 掠奪りやくだつしにかかるんだ。まるで泥棒か強盗みたいにさ、日本の財界なんてきみ、まだ戦国時代そのままだぜ、未開国そのものだからね、まったく」

ばんくんはそんな話でも従順に聞いている。ちよつと信じられないことだが、彼ほどの怠け者であらゆるものごとに関心を持たない男が、春彦の話を聞く段になると、りっぱに責任をはたすのでおどろかさされる。むろん話の内容が面白いとか、興味があるとこのものではなかった。彼は自分が聞き役であること、その役目さ

え忘れなければ、寝食にこと欠かずに済むこと。こういう条件を肝に銘じてい、銘じたことを守るだけの良心、あるいは必要があるようであった。

ちよろはしばしば日本の財界と財界人、経済組織などに非難をあげせ、ちようろう嘲弄し軽侮した。たとえば海外に進出する商社にし

ても、同一地区に五社の商社が開店する場合、五社ともよろず屋の如くあらゆる商品を売ろうとする。これが外人商社だと反対に、その社の専門とする品しか取扱わない。陶器店へ陶器を買いに来た客が、「釣針はないか」ときくとする。と、その店のクラークはいちゆう一揖して、それならここから一ブロック先のそれがし商会で扱っているし、その店ではおよそ世界にありとあらゆる釣針がそ

ろえてあり、必ずあなたを満足させるであろう、といったぐあいにP・Rまで付け加える。それがし商会でも同様であつて、要するに相互扶助、利益ブロックの共同支持という、国家的商行為の責任觀念がゆきわたっている。したがつて五社の商社は、それぞれの専門を守ることによつて、お互いに繁栄するわけである。ところが日本ではみんながよろず屋的經營をし、あらゆる客を独占しようとするため、お互いが共食い競争となり、ついには共倒れとなるのが歴史的通例である。

「これはだね、日本がまだ資本主義国ではなく、かろうじて自由經濟にまでたどりつき、そこでうろろうろしているにすぎない、ということを証拠だてているんだ」

日本には欧米流の財界人などはいない、みんなけちくさい商人、十円百円の利を奪いあう夜店あきんどに毛の生えたような連中だ、と春彦はきめつけた。

「いま国鉄で継ぎ目なしのレールを使い始めたね、きみ、なにを隠そうあの継ぎ目なしレールのアイディアは僕のものなんだよ」
ちよろはこくつと大きくうなず頷いてみせた、「それも戦争前、第二次大戦の始まる五、六年まえだったかね、ぼくはそのアイディアを国鉄、いや当時は鉄道省だな、鉄道省の次官に示して大いに演説をぶった、それに対して次官はなんといったか、きみ想像ができるかね、え、ばんくん」

七代目はごく緩慢に眼を左へ向け、それを正面に戻し、じつく

り右へ向け、また正面に戻した。

「想像はつくまいな、うん」ちよろは満足そうにいった。「次官はこう答えたね、土川くん、日本はね、きみ、いま大変な時代に当面しているんだよ、詳しいことは機密だからいえませんが、日本はまもなく鉄飢饉^{ききん}にみまわれる、きみのアイデアはだめだね」

「だめとはなんですか、とぼくはきいたね」春彦は続けた、「次官が答えて云うには、国策上の最緊急物資は鉄だ、鉄道省ではきみ、いまレールの継ぎ目を二ミリ拡げること考えているんだ、レール一本につき両端一ミリずつの鉄を削って、それを国策の緊急資材にまわそうというわけさ、きみの継ぎ目なしレール案は国

策に逆行するものだと言っほかなしだね」

「確かに次官はでたらめを云っているのではなかった」すぐにまた春彦は続けた、「まもなく統制経済になり第二次世界大戦になった、市電のレールまで外していくほど鉄不足になったんで、さすが次官ともなれば先見の明のあるもんだと感心したね、それはいいんだが、敗戦になってさ、こんどは国鉄だろう、それがきみ能率増進か合理化のためか知らないが、継ぎ目なしレールを採用することになった、ぼくのアイディアの盗用さ、戦前の事は戦後政府は責任をとらないたてまえだつて云うがね、世界的に知られた日本の大国鉄ともあろうものが、ぼくのような貧しい、弱い、孤立無援の者のアイディアを盗用して、それで良心に恥じないも

んかね」

七代目は六法全書をすっかり調べあげてから云うように、極めて慎重、かつ正確な口ぶりで、「特許局へ訴えたらどうか」と云った。ちよろは首を振った。

「特許がとつてあればだがね」とちよろは答えて云った、「あの次官が採用してくれそうだったら申請か、いや出願かしようと思つたんだが、次官に云われてみるとそれもむだなような気がしたし、なにより先立つものがなかつたからね」

ばんくんの眼が静かに細まり、そのうしろへ彼自身が引込むようにみえた。

土川春彦は口も八丁であり手も八丁であり、頭脳までが八丁で

あつた。彼は絶えまなしに動きまわり、舌を回転させながら、夢の中でさえ事業をもくろんでいた。

「おどろいたね、きみ、われながらゆうべはおどろいたよ」朝めしを炊きながら春彦は、しんそこ驚嘆にたえないような表情で云う、「夢で新事業を思いつくのは珍しいことじゃないが、ゆうべはきみ、もくろんではいけない事業の夢をみたんだぜ」

七代目かぼちやの眼がそろそろと上を見あげ、そろそろと正面に戻り、ゆるやかに下を見おろし、それからまた正面へ戻った。

「これまでは資本家どもにすぐ眼をつけられるか、小資本ではまかなえないような事業ばかりもくろんでいたんだな、こいつはきみばかりでたよ、うん、どうしてもっと早くそこに気がつかなか

つたのか、自分で自分が疑わしくなつちまうよ」

もくろんではいけない事業とはなんであるか、例をあげては語らなかつたが、土川春彦がたいへん昂奮し、勢いづいていたところをみると、彼はついになにごとかをつかんだようであつた。

「つまりこうだ」と春彦は云つた、「初めはごく小さくて平凡にみえる、誰でも気がつくが、それが事業になるとは思えない、へ、あんなものがなんだつていうくらいの仕事なんだな、そのうちにこつちはじりじりと手を拡げていって、世間のやつらが気がつくじぶんには、大事業に発展していて手が出せない、大資本で吸収しようにも、あまりに発展しすぎているので、つい二の足を踏ん

でしまう、という種類のものなんだ」

「みていたまえばんくん、こんどはぼくも当ててみせるよ」春彦は拳こぶしで胸を叩こうとして、思い返したようにそれを中止して云った、「そしてきみにも、いよいよ活躍してもらおう時期が来るだろうと思うね」

ばんくんの鼻翼がちぢまり、そしてもしも彼が犬だったとすればの話だが、尻尾をりようまた両股のあいだへ巻き込むように感じられた。これを一言で云えば、おそれをなした、というふうにみえたのだ。

土川春彦は二日ばかり、いつもより長く外出した。例の株屋街へでかけたものか、それとも新事業のために奔走しているのか、

ばんくんには見当もつかなかったが、またばんくんとしては見当をつけようなどもしなかったろう。この、もつともかぼちやらしいところの七代目は、むしろちよろが事業などをしないこと、仮に始めたとしたら失敗することを祈ったに相違ないのである。

ちよろの八丁頭脳はなにを思いついたか、彼は市電の北の終点へいって、川魚の間屋をしらべ、生きた鮎ふなと鯉の卸し値や、その供給状態を慥かめた。

「いまは諸事インスタント時代になったね」と一軒の間屋で彼は云った、「冷凍食品も流行で、たいていな魚肉が冷凍され、ビニール袋に入れて販売されている、ところで日本人ほどたやすく流行にかぶれる者もないが、飽きるのも世界一だ、このインスタン

ト時代にはまもなくたびれるだろうし、そうならないまでも山の手の屋敷町などの階級は、生きた川魚なんぞふだんでも手にはいらなから、持ってゆけばとびつくこと間違いなしだと思いがね」

「山の手ねえ」と問屋のおやじは云った、「ああいう人種はいつたいに川魚なんかは嫌いだって聞いたがね」

「そりやあ戦前のこつたろう」春彦は確信のない調子で、だがはつきりと云い張った、「そりやあ戦争まえのことだな、きつと、なにしろきみ」そこで彼は急に元気づいた、「なにしろいまはきみ、さげにしん鮭やしこうひん鯨が高級嗜好品になつちまつた時代だからね」

問屋のおやじは、そう云えばまあそんなものだが、と煮えきら

ない返辞をした。

「しめたぞ、これは」その店を出た春彦は自分に云った、「専門の問屋でさえあのとおりだ、みんな知らないんだな」

「どうしてみんな、このことに気がつかないんだろう」あるきながら彼はつぶやいた、「海産食品は幾つも大会社が経営しているし、中には発展したあまりにプロ野球のチームまで持っている社さえあるじゃないか、それなのに川魚専門の事業に手をつける者がいない、というのはふしぎじゃないか、もつとも、だからここそこのおれにチャンスがまわってきたんだが、いやどうして、こいつは間違いなしに当るぞ」

春彦はまず自分で売り子になって、着実に客をつかんでから、しだいに売り子をふやしてゆき、販売網を確保する一方、近県に養魚場を作つて、立体的経営に乗りだそうと決心し、その秀抜な着想と确实な成功率とを思いながら、独りでわくわくし、さも誇らしげに幾たびも首を振るのであった。

さてその日の午前十時ごろ、土川春彦は山の手にゆき、中級住宅街のバス・ストップの脇で荷をひらいた。——彼は熟考のうえ、近県から来た農夫かとみえるような服装をし、言葉にもなまりを付け加えることにした。古着屋で買ったふるはんでん古半纏ももひきに股引、ゴムの長靴、手拭のほお冠りという拵えで、背負い籠の中から、生きた鮎のはいったホーローびきの四角な容器と、やはりホーローび

きで、生きた鯉のはいった桶おけがた形の容器を取出し、その二つをプラタナスの並木の下へ並べて、客を待った。

彼は問屋とうまく交渉をまとめたことで満足していた。売れゆきがよければ、その店とだけ長期契約をするといい、鮎と鯉と、二つの容器と背負い籠とを、かなり安価に手に入れたのだ。

「関西のなんとかっていう大資本家の先祖は」と彼は両手を擦り合せながらつぶやいた、「道に落ちている繩の切れ端むしろや蓆むしろを拾い、それを刻んで左官屋へ売ることからしようばいにとりついたそう
だ、要するにだ、人の気づかないところに眼をつけるってことが、
——おい気をつけろ、あれは客になりそうだぞ」

一人の中年の婦人が、バス停留所の標識のところから、彼のほ

うへ歩みよつて来た。かなり高価らしい衣服に、ハイ・ヒールの革草履をはき、金糸の縫いのある帯をしめ、その帯の表面に、細い金鎖でつないだ瓢ひょうたん箆形へらの真珠がぶらぶら揺れていた。俗に「さげ物」というアクセサリーだろうが、四十六、七とみえるとしごろにしては、あまりに娘つ子じみっていて不調和にみえた。長さ七十センチ幅三十センチもありそうな、金箔きんぱく入りの型模様の革製のハンド・バッグを抱え、厚いグラスのめがねをかけていて、ちよろの側まで来ると、そのめがねのふちをつまみ、グラスを前方へ押し出して、二つの容器の中をのぞいた。

「珍しい魚だこと」とその中年婦人はいった、「これなんていう魚なの」

ちよろは田舎なまりで、こつちが鮒であり、こつちが鯉であり、どちらも自分がのら仕事の片手間に捕ったものである、と答えた。

中年婦人はめがねを直して、土川春彦を凝視した。

「あなた田舎から来たの」

春彦はそうだと答えた。

「そのなまりは知ってますよ」と中年婦人はいった、「このあいだまで宅にいたお手伝いのよのつていう娘の言葉と似ているもの、あなた宮城県でしょう」

ちよろは唾をのんだ。

「県のこたよう知んねがす」と彼は吃りながら答えた、ども「親が宮

城島のへえちよつと脇であつたんねげすけえ、おらもうずつとちつこいときに遠くへやられたもんでねがす、これ買つてくだせえすねが」

中年婦人はめがねのふちをつまんで、なにか珍しい昆こんちゆう虫でもみつけたように、つくづくと春彦の顔を見まもり、あんたの田舎はどこかときいた。

「近県でねがす」とちよろはいつて、額をすばやくぬぐつた、
「このびなもごいものとおり捕つたばかりですねが、このとおりぴんぴん生きてるんでねがすけ、買つておくんながす」

「へんななまりだこと」中年婦人は首を振り、なまりの詮せんさく索は諦あきらめたように、また二つの容器をのぞいた、「見たことのある魚

だけれど、なんというのかもういちど聞かして下さいな」

「こつちのちつこいのがふな」と彼は答えた、「こつちの大きいのがこいでねがす」

「まあ、鮎と鯉ですって」

「そうでねがす」

「まあいやだ」中年婦人は袂からハンカチーフを出して鼻を押えていった、「鮎だの鯉だのつて、きみのわるい、おーいやだ」

そしてバス・ストップのほうへ去つていった。

「ちえつ、田舎者が」と土川春彦は鼻柱へ皺しわをよせ、脇のほうへ唾を吐いた、「ああいうのを典型的なざあます人種つていうんだろうな、知りもしないくせにきみがわるいだつてやがる、てめえ

のほうがよくぽどきびがわるいや、へっ、なんだ、めがねなんぞひけらかしやあがつて、あんなめがねなんぞにびつくらするような、——へえ、おいでなせえまし」

彼はあわてて独り言をやめ、おじぎをした。五十年配の紳士が近よつて来、二つの容器をのぞきこんだのだ。肥えているときに作つた背広が、当人の痩せたためにサイズが合わなくなつたのか、上衣もズボンも生地は高価らしいのにだぶだぶに皺だるみ、ヒツプのところなどは袋のように垂れていた。紳士は左手に持つていたペしやんこの手提げ鞆かばんとステッキを右手に持ち替えて、鞆はきだけ脇はきに挟み、ステッキの先端でペーブメントをたたきながら、容器の中の魚類を見、その眼で土川春彦を見た。

「これはきみが釣ったのかね」と紳士はきいた、「それとも投網かやなでも捕ったのかね」

「おらあ近県のものでねがす」春彦はたじろぎながら答えた。

「これはへえ鮒と鯉で、わしが百姓仕事のあいさに捕ったねがす」

「この鯉はたんぼ飼いだな」

紳士はちよろのいうことなど聞きもせずに行った。実際には、ちよろの言葉がまだ終らないうちに、独りで首をひねりながら発言したのだ。たんぼ飼いとはなんのことか、春彦には理解できなかったが、ほめているのではなく、どうやらけちをつけているらしいので、彼はむっとした。

「冗談いっちゃいけませんよ、旦那、冗談じゃねえ」と彼はいい返した、「よく見ておくんなさい、こいつはれつきとした天然ものですよ」

「こっちは鮒か、まるで金魚みたようだな」紳士は構わず続けた、「この魚には見覚えがある、印旛沼いんぼぬまか手賀沼てがぬまだな、こいつも飼った鮒だ、近ごろは百姓もしやれたまねをするようになったからな」

「旦那はお詳しいね」ちよろは戦法を変えた、「旦那のような方にあつちやかないませんや、そのお眼の高いところでひとついかがです、初あきないだ、お安くしときますぞ」

「ぼくはね、きみ、このほうで専門家なんだ」と紳士はいった、

「しょうばいじゃない、釣るほうだがね、うちの庭の池には釣ってきた鯉が、いつでも四、五十尾は放してあるんだ、よけいなことかもしれないがね、きみ、こんなたんぼ飼いの鯉なんか臭くつて食べやしないぜ」

そういうと紳士は鞆とステッキを持ち直し、ちようど来かかったバスのほうへ去っていった。

「きいたふうなことをいうやつじゃないか、なにがたんぼ飼いだ」
ちよろはあざ笑ったが、それでも気がかりになり、鯉の容器の中をのぞいてみた。そつと手を入れてそいつを突ついてみ、その指を鼻へ持って行って嗅いでみた。

「さかな臭いだけじゃないか、知ったようなごたくをぬかして、

へ、うちの庭の池だつて、印旛沼か手賀沼か、へ、ああいうのが三百代言かなんかやるんだな、きつと、なんでも人を吃びっくり驚させればいいと思つてやがるんだ」

彼は問屋のおやじのいったことを思いだした。山の手の人種は川魚が嫌いらしい。とぼけたような口ぶりだったが、あのじじい案外よく知つてたのかもしれないぞ。こう考えると、にわかにかこころぼそいような、この世ぜんたいが苦難に満ち満ちた、将来性のない、わる賢い人間だけしか生きられない世界のように思えてき、彼は大きくて長い溜息ためいきをした。

三番目に寄つて来たのは、二十七、八になる若夫人で、こまかい豎縞のはいったウールのツーピースにトルコ帽に似た赤い小さ

な帽子をかぶり、シヨルダー・バッグを左の肩にかけていた。細おもての顔もきれいだし、化粧もあつさりしていて、側へ寄ると上品な香水の匂いがひろがった。

錆色のパンプスのハイヒールがあんまり細くて高いのを、春彦はあぶなっかしいなと思いつつながら、誠意をこめてあいそ笑いをし、容器のほうへ手を振った。

「これ、なあに」と若夫人は容器の中をのぞきながらきいた、
「おさかなね」

「へえ、こつちが鮎でねがす」とちよろは答えた、「ふな、ご存じねがすか」

「あらこれが鮒つていうの」若夫人は身をかがめ、眼をかがやかしてその魚に見入った。「まあきれいな、まるで生きているようじやないの」

「そのとおり、持ってくるまで生きていたつげが、持って来るについて水から揚げたんへえ、田舎がちつと遠いもんでねがす」彼はあいそ笑いをし、鯉の容器へ手を振った、「その代りにやあ、こつちの鯉は生きてるでへ、こんとおりぴんぴんだあ」

「あらほんと、鯉だわ」若夫人は熱心に見まもつた、「鯉は覚えてるわ、まあうろこが金色に光ってるわ」

「突つつくとはねるでへ」

ちよろは鯉の一尾を指で突いてみた。そいつがはねるけしきを

みせないで次を突つき、次を突ついてみたが、やつら口をぱくぱくさせるばかりで、なにが不満なのかどれ一つとして元気よくはねてみせるやつはいなかった。

「おら百姓でねがす」ちよろはばかげた高ごえでいった、「のら仕事のあいさにこいつらを捕って持って来たですへ」

「きれいだわね、本当にきれい、鮒を見るのは初めてよ」若夫人は嘆賞の眼をかがやかせながら、鮒を見、また鯉を見ていたが、やがてちよろのほうへ眼を戻すと、急に事務的な声になって問いかけた。「あんた塩鮭持ってない？」

土川春彦の眼がかつと大きくなり、なにかいおうとして口をあいて、言葉が出てこないので閉め、また口をあいてなにかいいか

けたが、若夫人はもうバス・ストップのほうを見やっていた。まるで突然、春彦や二つの容器の中の鮎や鯉の存在が、そこからかき消されでもしたように。そうして、こっちへ進行して来るバスを認めたのであろう、優雅な動作で腕時計をちらと見、ゆつたりした足どりで去っていった。

土川春彦は荷を片づけた。背負い籠の中へまず鯉の容器を入れ、その上に板をのせてから鮎の容器を入れ、竹で編んだ蓋をかぶせて紐ひもを掛けた。

「塩鮭持ってないの、ときた」彼は籠を背負いあげながら口まねをした、「あんた、しおじやけ持ってない、へっ、ここいらの山の手人種ときたら、へっ、あれで日本人かね」

「こつちは川魚を売りに来た」市電に乗ってからも、黙視しがた
い不正に怒りを抑えかねた、といわんばかりな口ぶりで彼はつぶ
やいた、「だからちやんと説明したじゃないか、これが鮎、こつ
ちが鯉つて、すると、あの女のすつとぼけが、まあきれい、ほん
とにきれい、うろこが金色だわ、なんて、さんざつぱらとぼけた
ことをぬかしたあげくが、あんた塩、——」

土川春彦は宙をにらんだ。

その夜ちよろは、夕めしのあとで壮烈にしやべつた。例によつ
て面白くも可笑しくもないことを、独りで上きげんにまくしたて、
独りで膝ひざをたたいたり、ひっくり返つて笑つたりした。七代目か

ぼちやであるところのばんくんは臆しもせずめげもせず、ま正面からその攻撃を受け止め、半歩も後退したり脇へよけたりしなかつた。

「屋敷町の道みちばた傍でね、一人の百姓がきみ鮎と鯉を売ってたんだ」とちよろは話した、「そこへね、しゃれた洋装のマダムが通りかかってね、それなーにどのぞきこんだ」

百姓はこいつはうまい客だと思ったようすで、熱心にその鮎と鯉の説明をした。マダムはそれをしまいまで聞いてから、けろつとした顔で百姓に問いかけた。

「あんた塩鮎持ってない？」ちよろは誇張した作り声でいった。「いやきみ、そのときの百姓の顔ときたら」彼はとつぜん笑いだ

した、「生きた鮒と鯉を眼の前にして、さんざつぱら説明させておいて、あんたしおじやけ持つてない？」とまでいえず、ちよろははじけたように笑いだし、ついにはまたひっくり返つて笑つた。七代目の唇がほんのわずかに動いた。ちよろは笑いの鎮静しかかる中で、その七代目の唇のあるかなきかの動きを見てとり、笑いおさめながら坐り直した。

「きみ、この話聞いておかしくないかい、ばんくん」

ばんくんはじっくり内省してみしてから、おかしいと答えた。そこで春彦はまたきいた。

「しかし笑うほどじゃないのか」

ばんくんはこんどは考えなかつた。彼はそのことでは常に自戒

していたようであった。

「ぼくは笑うのは好きじゃない」と彼はいった、「——くたびれるからね」

その翌日、土川春彦は出ていったまま、家へ帰らなかつた。

ちよろはおちつきのない空想家で、飽きっぽい饒舌漢なのだ。

十人の——正確にいえば九人の妻が去つたのも、話し相手であるかぼちやが六人まで逃げだしたのも、春彦のそういうちよろ的性質が、耐えがたく忍びがたかつたからであろう。春彦は自分で

「話し相手がいなくて一時間もすごせない」といつている。それと同時に、どこから引張つて来るのかわからない話し相手にも、

——すなわちかぼちやであるかれらにも、相手が逃げだしてくれ

なければ、春彦のほうで飽きてしまったらしい。従来は彼が飽きるまえに、みんな相手のほうで退散してくれた。したがって七代目であるところのばんくんも、当然その例外ではない、と考えていたのであろう。人間はこの種の慣性にしばしば欺かれるものだ、例えばゆきつけのバーかなにかで、いつも勘定はこのくらいだからと安心して、そのくらい持つていつてそのくらい飲んだにもかかわらず、いや、——要するに、七代目かぼちやは、春彦の予想をまんまと裏切ったのである。

ばんくんは他の六人のかぼちやとはまったく違っていた。あらゆる点で違っていたし、もつとも本格的なかぼちやであった。

そこで両者の立場は逆になり、土川春彦のほうで逃げだした。

渾名のとおりすばやく、ちよろちよると消えてしまったのだ。――そして八十日ほど経った或る日、荒地のくぬぎ林のところで遊んでいた子たちが、一人の男に話しかけられて吃驚した。

「あ、ちよろさんだ」

と子供たちの一人が叫んだ。

それは土川春彦であった。新しいけれども軀に合わない背広に、ぺらぺらの安っぽいソフトをかぶり、左の脇に革の折鞆を抱え、そして素足に下駄をはいていた。

「ぼくだよ」と彼は子供たちにあいそ笑いをし、追われでもしているように、おちつかない眼であたりを見やりながら云った、

「——うちにいたばんくんはどうしたか知ってる？」

「知ってる」と子供の一人が答えた、「かぼちやだろ」

「ああかぼちやだ、どうしてる」

「どうもしないよ、まだもとの家にいるよ、なあ」

その子がなかまに同意を求めると、みんな頷いたり、いるさ、とか、もとのまんまだよ、などと云った。ちよろは一瞬どきつとし、またきよろきよると、あたりに警戒の眼をはしらせた。

「もとのままだつて」と彼はきき返した、「ずっと一人でいるのかね」

「おばさんといっしょだよ」

「おばさんだつて」

「そうさ、知ってるだろ」と一人が答えた、「せんにちよろさんのところにいた、ほら、あのおばさんだよ、ほらあの、怒ってばかりいる」

「でぶの、な」と他の子供が注を加えた。

春彦は考えてから、口の中でぶつぶつなにか呟いた。怒りっぱいでぶ。子供たちが知っているかみさんとすると、——彼は首を捻^{ひね}り、ここで自分の妻になった女たちのことを、一人ずつ思いだそうとするようだったが、それよりも七代目かぼちやに発見される危険のほうが大きいと思つたか、あるいはまた頭の中が新事業のもくろみで充満しているため、その他の思考がうまくはたらかないのか、まもなく鞆を持ち直すと、子供たちにあいそ笑いを

した。

「じゃあ坊やたち、またな」と彼はソフトの底をちよつと摘んだ、

「ぼくの来たことはないしよにしておくれよ」

「どうしてさ」と一人がきいた、「うちへ帰んないの」

「うん、いそがしいんでね」彼は笑つてみせた、「とてもいそがしいんだ、二時に登記のことで人に会わなくちやならないんだ、じゃ坊やたち、元気でな」

彼はすばやく、あたりに眼をくばりながらあるきだし、だんだん歩速を高めながら、たちまち遠くさらに遠く、中通りのほうへ去つていった。

肇くんと光子

福田肇くんは二十七歳、なにがし私立大学中退だそうだが、いまはこしかけに廃品回収業をやっている。痩せていて小柄で、顔色の冴えない男で、下顎のほうが出ているため、いつも下の歯が上唇を噛んでいるようにみえた。

彼の妻は光子という、としは二十三だと自称しているが、近所のかみさんたちは三十五歳より下ではないと判定していた。これは福田くんよりも背丈が低く、痩せていて、かみさんたちに、「鼠そっくりだ」といわれる顔つきに、ゆだんなさそうな、よく

動く眼がなによりも人の注意をひいた。いつもまっ白におしろいを塗り、濃い口紅をさして、常識外れにはでな色柄のワンピースを着て、これまたかみさんたちの言葉を借りれば、「朝から晩までじやらじやらして」いた。

この夫婦は相沢七三雄という、屑くず鉄専門の廃品回収業者の二階に住んでいた。相沢家は夫婦のあいだに七人の子があり、長男が十一で末っ子が二歳。妻のますさんがまた妊娠ちゆうという、賑にぎやかな家族であった。

福田くん夫妻は、引越して来て五日か六日めに、その存在を長屋じゆうにはつきり印象づけた。——或る朝、およそ八時ころのことだったが、二階でなにか云い争いを始めたと思うまもなく、

福田くんが梯子段はしごだんを駆けおりて来、土間にあつた誰かのサンダルを突っかけてろじへとびだすなり、振返つて、いま自分の出て来た二階を見あげながら、黄色いようなきんきん声で叫びだした。「やい、光子、出ていけ」彼はじだんだを踏み、どぶ板がはねあがつた、「光子のやろう、ぼくはもう別れるぞ、——やい、出ていけーっ」

ろじを挟んだ左右の長屋から、なにごとかと思つて、住人たちがとびだして来た。福田くんは寝衣ねまきゆかたに細紐をしめただけで、前がはだかり、貧弱な胸と、生氣のない足があらわに見えた。

「顎のところは歯形があつたよ」あとでかみさんたちがそう話した、
あつた、「あれはおかみさんに噛みつかれたんだよ、きつと」

「よけいなお世話かもしれないけど、あたしやあんな夫婦喧嘩げんかを見たのは生れて初めてだよ」とべつのかみさんはいった、「夫婦喧嘩で出ていけはいいけどさ、亭主がうちの外へ逃げだして、うちの中にいるかみさんに向つて外から、出ていけーつてどなるなんて、いったいあれはどういう勘定になつてるのかね」

「わる気はないのさ」年増のかみさんの一人が面白そうにいった、「たまにはあのくらいの人がいってくれなくつちやあね、長屋の空気が浮き立たなくつていけないよ」

こういうわけで、福田くん夫妻は一遍に、この長屋のにんきをさらつたのであつた。——毎朝、相沢七三雄が階下から呼び起こし、朝めしが済むと、二人はつれだつて仕事にでかけ、夕方もい

つしよに帰つて来た。

福田くんに廃品回収業の世話をしたのは、相沢七三雄であり、同時に自分の家の、空いている二階を提供したのであった。相沢は福田くんに好意をいだいているようだし、細君のますさんや、子供たちも同様らしいが、福田くんの妻の光子に対しては、嫌いである以上に反感をもっていたようであった。もつとも、この「街」で厚化粧をしたり、ばかげてはでな着物をひけらかしたりすれば、反感をもたれるか「おきちさん」と呼ばれるか、いずれかの難はまぬがれないのだが、光子の場合は相沢の四歳になる子にまで嫌われ、白い眼で見られるというめぐりあわせになった。

光子は福田くんを、「は、じ、めさん」と、飴あめを引き伸ばすよ
うなあまつたるい声で呼ぶ。福田くんは「みつ子」と呼び、する
とそのたびに光子は、なーに、は、じ、めさんとあまつたるい声
で返辞をする。相沢の細君のますさんは頭痛持ちだということだ
が、そういう光子の声を聞いたたびに、久しく砂糖をきらしたまま
だったことを思い出して頭痛がおこる、と苦情をいうのであった。
「うちの福田は大学の文科へいったんですのよ」と光子は初めて
ますさんと話したときにいった、「私立ですけれど有名な大学で、
入学率は東大よりむしろかしいんですって、家庭の事情で中退した
んですけど、教頭先生がとても惜しがって、月謝が足りないのな
らはくぼくになっても学問をしろって、しまいには校長先生まで

がたびたび勧誘しにきたそうですわ」

もちろん、ますさんは学制のことなど知らないから、大学に教頭とか校長などの名称があるかどうかも関知しないし、白墨という物は小学校で知っているが、学僕などという存在は聞いたこともないから、白墨になれとはどういうことか、校長が勧誘しにきた、とはどういう意味であるか、——おそらく話す当人の光子がちんぷんかんぷんであるだろうより以上に、まるつきり理解がつかないようであった。

光子のような性格の女性に共通する点は、相手に類教養的知識があるかないかを感じする能力に長じていることと、そういう相手をけむに巻く適当な、——というよりそのときばったりの融通

無碍むげなボキヤブラリーを駆使する神経をもっていることであろう。

「あたし小さいころ弱かったでしょ、アギレルー性躰質っていうんですって」と光子はいう、「それだもんで小学校の三年までばあやの里で育てられたのよ、それこそ真綿で包まれて乳母車で送り迎えされるほど大事に育てられたわ」

「へえー、乳母車でねえ」とますさんはいう、「小児麻痺まひでも患ってたんかね」

「あらいやだ、おますさんたら、乳母車というのは言葉のあやじやないの、意地わるねえ」と光子はいう、「本当は蝶よ花よっていうところよ」

ますさんは十九のとき長男を産んで以来、三十になるその日まで、生活の砥石ややすりで磨かれたり削られたりしたあげく、不愉快な隣人ともどうにか折り合ってゆく、知恵と忍耐力を身につけていた。

「あたしの実家はね、伊勢の古市にあるのよ、そら、芝居でする吉原の百人斬り、なんとか貢つていう侍の出てくるところ」と光子は語った、「実家は木場といって、六百年も伝わる旧家なのよ、あたし小学校四年のときにはあやの里から実家へ帰ったんだけど、その屋敷の大きいのと広いのには、子供ながらたまげてしまったわ」

そうして、そのとおり書くとすれば、どんなに寛大な読者でも

怒りだすに相違ないような、とんでもない描写を始めるのだ。十分の一くらいに縮小して例をあげると、大名屋敷のような門から玄関まで二キロ以上あるとか、自家用水道の貯水池があるとか、その水を利用して自家用電力をおこす発電所があるとか、使用人たちの住宅が十幾棟あつて、かれらの子弟のために幼稚園や特殊学級の小学校があるとか、屋敷の広さときたらそれこそ、——なぞという類の、空想的というよりまったく現実ばなれのした話を、さもまことしやかにめんめんと話し続けるのだ。

「あたしうちで温和おとなしくしていれば、どんな大金持のところへもお嫁にゆけたのよ」と光子は云う、「それなのにさ、女学校三年のとき福田とれんあいしちやつて、身分が違うから親は反対する

し、親類も騒ぎだしちやってさ、五たびも家族会議をひらくって騒動でしょ、あたしめんどくさくなくなったから福田と駆け落ちして来ちやったのよ」

「へえー、それじゃあ」とますさんが反問した、「福田さんも伊勢の人なんですか」

「あらいやだ、そこはいわく云い難しよ」

「あんたが女学校三年のときだとすると、福田さんはそのときはもう大学生だったのね」

「疑ぐりぶかいのね、あんた」光子はますさんのことを打つまねをした、「それもいわく云いがたしつ、人のローマンズの詮索なんかするもんじやないことよ」

ますさんは子供のシャツの繕いに全神経を集中することで、辛うじて自己克服に成功した。

光子はすべてがこの調子であつた。彼女の話には年代の差別もなければ、東西南北、前後左右、四季も、昼夜も、老幼の差もまったくなかつた。

「福田がいまあんな仕事をしているのを、世間じやなんと思つてるかしらつて考えると、あたしほんとに可笑しくなるのよ」と光子は云う、「あの人文科でしょ、文学をやつてゆくには貧民階級の生活を経験することが第一なのよ、だつてさ、貧民階級のほかに人権問題をぜんめつするみちはないじやないの、あたしがお茶の水の女学校にいたときは」

光子は自分のかよつた学校を、或るときは虎ノ門だと云い、或るときはお茶の水だと云い、また津田英学だと云つた。原則的に故郷である伊勢古市の女学校ということになっているが、そのときの都合によつて自在にどこへでも変るし、ときには音楽教師とか、語学教師の名まであげてみせた。

虎ノ門女学校が高名だったのは相当に古いことで、さよう、筆者の記憶に誤りがなければ、大正十二年の大震災までであり、その後は渋谷かどこかへ移転し、しぜん虎ノ門なる名称は、女学校に関する限り死語になつていた筈であるし、お茶の水は師範系であつて、女学校ではなかつたと思うのであるが、そんなことはこ

の「街」の住人たちにとって、一と摘みの塩の有無ほどの関心をもひかないはなしであった。

そういう女性を一般に虚栄心が強いというが、光子の場合は人にひけらかすというより、自分で自分の造話に酔っているようであった。相手に感銘を与えたり、せんぼう羨望の情をそそ唆つたりするのが目的ではなく、自分で作りあげた自分の幻像に、自分で感じいつたり羨望したりしているというようすなのである。彼女はこれをますさんだけでなく、福田くんにも応用するらしい。ますさんは他人だから、落語でも聞くつもりで面白がつていればいい、現にますさんは亭主に向って、半分以上もわけがわからないことばかりだけれども、それでも独りで内職しているよりは気がまぎれて

いい、と云ったくらいである。

だが福田くんはそうはいかなかった。光子は彼にとって妻であるし、夫婦になってどのくらい経つかわからないが、ことによると生涯をともにしなければならなくなるかもしれないのである。だとすれば、抑制を知らない光子の、突拍子もない造話をいつもいつも、おとなしく聞いてばかりもいられないだろう。そこでほぼ週に一回くらいの割で、ねつとりと陰気な喧嘩が始まるのだ。

「おい、そのへんな英語を使うのはよせよ、なにを云ってるんだか意味をなさないぜ」

「いいじゃないの」光子は甘ったるい鼻声で囁くように云う、

「夫婦の仲ですもの、そんな他人行儀なこと云うもんじゃなくつ

てよ」

「他人行儀、——きみはいつもへんなところへへんな言葉を持ってくるが、いいよ、それじゃあきくがね、いま云ったナツチャリ—てのはなんのことだい」

「ナツチャリ—はナツチャリ—じゃないの、大学中退までいったくせしてあんた知らないの、は、じ、めさん」

福田くんは階下の人たちに気がねして、喧嘩をするにも高い声はださない。光子も同様であつた。

光子も同じように、大きな声はださなかつたが、まるでとろとろに溶けた黒砂糖が流れ出るような、ねっとりとしたわる甘い鼻

声だから、階下の相沢七三雄はしばしば誤解し、妻のますさんの肩を突ついた指で、天床を示し、「しっ」と云つて耳をすますように、手まねで教示することがあつた。

「ちがうよ、いやな人だね」ますさんはそんなことにまつたく興味を示さない、夜なべの内職をしながら無関心に亭主をたしなめる、「ただ喧嘩をしているだけじゃないか、あんたとききたらすぐへんなふうにはかりとるんだから」

「おめえはまた勘がにぶいときてらあ、なんにも感じねえんだからなまつたく」

「おなかのが産れると子供は八人になるんだよ」ますさんはやり返す、「あたしやもうごめんだよ、へんなこと感じちやつてぐず

ったって、あたしやもうまっぴらだからね」

「わかったよ、なにも二階の喧嘩に張りあうこたあねえやな、いいよ、わかったってばなあ」

「諄くどいかもしれないがね」と二階では福田くんが辛抱よく云っていた、「その、は、じ、めさんっていうのもよしてくんないかな、なにも一字一字はなして云うことはないじゃないか、呼ばれるたんびにおれは胃がむず痒かゆくなっちゃうよ」

「あなたっててれやなのね、苦勞はしたけれど愛されたことがないのよ、本当に愛しあってれば呼びかたにだって心のこもるものなのよ、お、ば、か、さん」

福田くんは首をすくめる。背骨の関節をつなぐ軟骨が溶けて、

背骨ぜんたいが縮むように、からだ軀がすつと小さくなつた感じである。「いちど古市のあたしの実家へいつてみましょ」と光子は口癖のように云う、「木場の家は弟の代になつてるけど、あたしはおじいさまやおばあさまには誰よりも可愛がられたし、それに長女でしよ」

祖父母が彼女を溺できあい愛のあまり、一度ならず彼女に媚を取つて木場家のあととりになつたし、そのため親類じゅうの騒ぎになり、家族会議が幾たびもおこなわれた。自家用発電所を設けたのも、じつをいえば彼女があとりになつたときのために、祖父母が一族の反対を押しきつて建造したものであつた。

「だからあたし、いつでも大いばりで古市へ帰れるのよ」光子は

うっとりしたように眼を細めて云う、「財産のことでなにか云われやしないかと思つて、弟たちの騒ぎはそれこそたいへん、少し大げさに云うと、楽隊付きで駅へ出迎えるような騒ぎだわ、ねえいいでしょ、は、じ、めさん、いちどいつしよに帰りましょうよ」

相沢七三雄はごくときたま、少しよけいに儲けもうのあつた日に、福田くんをさそつて酒を飲む。彼は酒にはめのないほうだが、家族が多いからどんなに稼かせいでも、なかなか酒を飲むほどのゆとりはなかつた。

そのうえ、飲むといつても九割までは焼酎しやうちゆうであるし、特に、ブドー酒を混ぜた「ブドー割」という焼酎は早く酔いがまわるの

で、多くはそれを常飲するのであった。

「世間にやあおめえ」と相沢は少し酔うときまつてそう云った、
「まいにち晩酌をする者もあるつて云うぜ、まいにちだぜ福田くん、——おらあ死ぬまでに一度でもいいから、そういう身分になつてみてえと思うね」

「ぼくはあんたにだけ云いますがね、ここだけの話だけれど」と福田くんは或るとき思い切つたように云つた、「まいにち晩酌なんかしなくつてもいいが、光子のやつと別れられたらな——つて、ただそれだけが望みですな」

「簡単じゃねえか、民主主義の世の中になつたんだ、別れたければさつさと別れればいいさ」

「だから、それができたらな—っていうんですよ」

「できたらな—って、できねえわけでもあるんかい」

相沢は世にも訝いぶかしいことを聞くものだという表情で、まじまじと福田くんを見まもった。

「相あいさんは光子のことを知らないんだ」と福田くんは云った、

「光子のやつはね、なにか憑つきものでもしているような、へんにきみのわるいところがあるんですよ、たとえばあいつは決して大きな声をださないでしょ、喧嘩けんかになってもにやにや笑って、しず—かな声でなにか云うんです」

「そうだな、そいつは確かだ」と相沢はブドー割すずを啜すする、——
たまにちよつとした声が聞えるなつて思うと、——まあいいや、

で、静かな声がどうしたんだい」

「こつちで考えてることをずばつと見ぬいちやうですよ、はら
 の中で別れたいなとぼくが思うとしますね、すると光子のやつは
 にーつと唇で笑つて、あんたあたしと別れなくなつたのねつて、
 しずーかな声で云いながら、ひとみ眸を凝らしてぼくの顔をじーつとに
 らむんです、こんなふう^にね」福田くんはそんなような眼つきを
 してみせる、「また今日は軀がだるいから、稼ぎにゆくのはいや
 だなと思う、するとあいつは唇でにーつと笑つて、たまには休ん
 だほうがいいわつて云つて、眸を凝らしてじーつとぼくの顔をに
 らむんですよ、ええ、ぼくぞつとしちやつて稼ぎにでかけるん
 だ」

「にーつと笑つて、じーつとにらむかね、へえー」

「初めっからそうなんです」

彼は郊外の大衆食堂で光子と知りあつた。彼は昼のあいだ某電機会社ではたらきながら、或る私立大学の夜間部へかよつてい、日曜に一度、その大衆食堂へめしを喰べにいった。お光はそこに勤めていて、多く酒を飲む客の担当であつたが、或るとき彼の眼とお光の眼が合ったとたん、お光は例の唇でにーつと微笑し、眸を凝らしてじーつと彼の顔を見つめた。

「するとぼくは頭がぼーつとなつちやつて、身動きもできなくなつちやつたんです」

次にも同じようなことがあり、三度めにはお光が、めしを喰べている彼の前へ来た。爛かんどくり徳利を一本と、ウイスキー・グラスを二つ、彼の前に置いて自分も腰をかけ、二つのグラスに酒を注ぐと、一つを彼に渡し一つを自分で持つて、よ、ろ、し、くと云いながら、例の微笑と凝視とを、彼の内部のもっとも深いところへ、リベットを打ち込むようにしつかりと打ち込んだのであつた。

「あたしがこんなところではたらいているつてこと、ないしよにして下さいね、つていきなり云うんです、いきなりですよ」福田くんは力をこめて云つた。「よろしくつて云つたあと、すぐにその云われたんです、——あたしのうちは格式がやかましいから、わかつたら伴つれ戻されて座敷ざしき牢ろうへ入れられるかもしれない、座

敷牢といつても十帖と八帖の二た間で小間使と下男が付くのだけ
れど、それでもあたしわがままだからいやなの、つて云うんです」

このあいだずっと、彼はなにを云うこともできず、出されたグ
ラスを拒むこともできなかつた。そのうえふしぎな話のようだが、
お光の言葉を聞いているうちに、格式のやかましいという彼女の
家や、その家族や、二た部屋に小間使と下男のいる座敷牢などが、
昔からよく知っていることのように思われてきた。

「いっしょになるきつかけも、光子のやつがつくつたんですよ、
五たびか六たびめでしたが、ぼくがその大衆食堂でめしを食つて
帰ろうとすると、あとからお光のやつが追っかけて来て、——は
じめくんそつちじゃないわよ、こつちへゆくのとつて、ぼくの手

を掴^{つか}んで引つ張つてくんです」

伴れてゆかれたのは、或るしもたやの三帖間で、ほかに六帖と四帖半があり、その家の家族は四帖半を占め、六帖には中年の夫婦がいた。光子の借りている三帖には、薄い蒲団が二枚と、風呂敷包が二つあるだけで、家財らしい物はなにもなかった。

——あたしいやな結婚をしいられたから家出をして来たの、と光子は云った。箱入り同様に育てられたので、生活をするのになにが必要なのかまったくわからない、まるで河童が木から落ちたみたようなものよ。

——でも愛しあつていればお臍で茶も沸くつていうでしょ、当分これで新婚気分満足しましょ、と光子は云った。

こうして同棲生活にはいったのであるが、彼は勤めながらの夜間大学生であり、光子は大衆食堂のウェイトレスであつて、たしかに、家財道具はなくとも茶ぐらいは飲めた。お臍へそで沸かせるかどうかはためしたことはないが、夜間大学から帰つた彼が、ノートの整理などをしてしていると、大衆食堂の勤めを終つて帰つて来る光子が、客の食い残した料理や酒などを、ちやぶ台の上に並べて、二人の慎ましい深夜の饗宴きょうえんをひらくのであつた。

饗宴はたしかに慎ましやかなものだったが、光子の口から奔流のようにほとばしり出る奇つ怪な作り話は、その不断連続性と、内容のとらえがたき飛躍性とで、極めて多彩な伴奏効果をあらわ

し、早くも福田くんをがっちり絞めおとしたのであった。

「伊勢の古市に実家があるという話、相さんも聞いたでしょう」

「うん、うちのやつからね」

「初めはもつと簡単だったんですよ、貯水池だの発電所などはなかった、猟犬が十二匹にペルシア猫が何匹とかいることを自慢にしてみました、屋敷の広いことはいまと同じくらいでしょう、なにしろ生れた家でありながら、全部の座敷を見たことがないって、——そんな落語がありましたよね、屋敷の中をすっかり見てまわるには、弁当持ちの泊りがかりでなくちやだめだっていう、あれよりもつと広いようなことを云うんですから」

彼が信じかねていると、あんた嘘だと思ふのねと云って、あの

微笑とあの凝視とで彼を釘付けくぎづけにする。いいわよ、嘘だと思つてらつしやい、いまにわかるから。女学校の話のときは、夜間大学の図書館でしらべてみた。すると虎ノ門女学校というのはべつに校名があり、校舎が芝の虎ノ門にあつたのでそういう通称があつたこと、またお茶の水は師範学校であつたこと、などがわかつた。津田塾のほうは光子の使うでたらめな単語で、通学したかどうかは疑う余地もないが、これらのことを彼が知つたとたんに、光子はそれを感じとつて例の微笑と凝視を突き刺し、いいわよ、そう思つてらつしやい、と云うのである。

「相さんにはわかるわけではないが、そう云うときの光子の微笑と眸には、なんともいえない力、——というかな、その、人間じや

なくつて、もつとほかの、なにかえたいの知れないものの力、と
いったようなものがあるんだな、それはぼくを雁字搦がんじがらめにし、
身動きもできなくしちまうんです、仮に眼をつぶるとするでしょ
う、それでもまぶたをとおしてそいつははつきり見えるんですよ」
「へんなことをきくがね」と相沢がひよいと福田くんを見て云つ
た、「——きみはいつか、喧嘩をしたとき外へとびだして、外か
ら二階に向つて、出ていけーつてどなつたそうだな」

「がまんがしきれなくなつたんですよ」

「そうだろうがね」相沢は福田くんの顔を、仔細しさいに眺めながら云
つた、「それにしてもさ、男が外へとび出して、中にいる女房に
外から出ていけーつてどなるのは、ちよつと柵けたはず外れじゃあねえ

かな」

「だって、ほかにどうしたらいいんです」と福田くんはきまじめに反問した、「あのにーつと笑って、じーつとみつめる顔の前では、ぼくは声なんか出やしない、声を出すどころか身動きもできなくなるって、いま云ったばかりでしょう」

「なるほどね、うん、なるほど」相沢は深く頷き、それからブドー割を啜^{すす}って、よく考えてから云った、「——たんばさんが、…：そうか、きみはまだたんば老人を知らなかったんだな、まあいや、この長屋内にたんばさんという老人がいるんだが、その老人が或るときね、世の中に夫婦が千万組いるとしても、同じよう

な夫婦つてものは一と組もない、千万の夫婦がみんなそれぞれ違うんだ、つていうようなことを云つてた、そして中には、組み合わせさつてはいけないどうしが組み合わせさつてるような夫婦があつて、そういうのは早く別れちまわないと、強いほうが弱いほうを食つちまうんだ、つていうようなことも云つてたが、——そう云つちやあなんだが、きみなんぞはその組み合わせさつちやあいけない者どうしの組み合わせりじやねえかな、掛け値のねえ話がさ」

福田くんはまだ一杯めの焼酎のグラスを、唇でちよつと啜りながら、どこを見るときもなく、前方の一点をじつと見まもつた。

「ぼくが初めて相さんに会つたのは、あの職業安定所でしたね」

「そうだったな、おれはちよつと嵩かさばる出物があつて、手を貸し

てくれる者が欲しかったんだ」

「焼け跡にあつた屑鉄を運ぶ仕事でしたね」と福田くんは云つた、
「あのときぼくはもう学校をやめちやつて、そのまえに電機会社
のほうに倒産しちやつたんですが、光子のやつも大衆食堂をよし
ちやつて、それが光子のやつが云うには、主婦は家庭を守ること
が夫婦生活の本筋である、この本筋というのを、あいつはメイン
・トラップだつて云いましたよ、どう聞きかじつたかしれませんが、
日本語では本筋と云うんだつて、——メインをちよつと変え
ると、まあいいですがね、——というわけで大衆食堂をやめちやつ
つたでしょう、どうしたつてぼくが生活費を稼がなければならな
くなつたんですが、あのとき職安の前でぼんやりしていたとき、

「いつそのままだつかへ逃げちまおうかって考えてたんです」

「なぜ逃げちまわなかったんだ」

「相さんが声をかけたんですよ、事務系の仕事はないかってきたら、そういう仕事は千分の一ぐらいしきやないっていう、それでもう、これが逃げだすいいチャンスかな、と思つてたら」

「おれが呼びかけたってわけか」相沢は笑つた、「いんねんだな、ああ、にんげん一生のうちには、そういう因縁にぶつかることが幾たびかあるそうだ」

「そうかもしれないが、ぼくはもうがまんが切れそうですよ、このごろじゃもう夜になると、——」

「夜になるとどうした」

「いってもしようがない」福田くんは頭を振った、「光子といっしよになってから、そろそろ五年になるんですよ、そのあいだずっと休みなしに、じーっと見てにーっと笑われて、いや、——こうやって相さんと話していることも光子はちやんとみとおしているんですからね」

「きびのわりいこと云うなよ」相沢は福田くんからちよつと身をひき、屋台のおやじにブドー割のお代りを命じ、そうして、つとめて客観的になろうとつとめながら、そつと福田くんに質問した、「——いったいお光つあんの生れはどこだい」

福田くんは黙って首を振り、焼酎のグラスを舐めた^な。それじゃ

あ本当のとしては、と相沢がきき、福田くんはまた黙って首を振った。

「そんなこと、誰が知るもんですか、結婚届けだって光子が独りでやって、ぼくには見せもしなかつたんですからね」

相沢は仰天して眼をみはり、きみたち正式に結婚してるのかいと大きな声できいた。福田くんは右手をあげ、それを力なく下へおろして太^{ふともも}腿を叩いた。

「そんなことは問題じゃないんですよ、お光のやつが」

福田くんの言葉はそこでぶつと切れた。あげている^{たこ}凧の糸が

切れたようにとつぜん口をつぐみ、すると、あとに続く言葉は、糸の切れた凧がどこかへ飛んでゆくように、彼の口から飛び去っ

てしまったというふうにみえた。

「ぼくは殺されるんじゃないかと思うんです」福田くんはべつの話題をつかみ出した、「夜なかにひよいと眼がさめるでしょ、見ると光子のやつが片^{かたひじ}肱を突いて半身を起こして、ぼくのことを上から見おろしているんです。そしてぼくが眼をさましたなとみると、唇だけでにーつと笑い、眸を凝らしてじーつとみつめるんです」

相沢は身ぶるいをし、「お岩さまだな、まるで」と呟いた。

「は、じ、め、くん、って光子は云うんですよ、あんたいま夢の中で、きれいな女の子を抱いてたわね、あれはどこのだーれって」「きみはそんな夢をみてたのか」

「みていたかもしれない、自分じゃ覚えていないが、光子にそう云われるとそんな夢を見ていたような気がしてくるんですよ」

「それからどうする」

「ぼくのことを押しつけて」福田くんは睡をのみ、焼酎のグラスを舐める、「その人こんなふうにはじめくんのこと可愛がってたわねって」

相沢は上を見あげ、聞き耳を立てるような表情をした。まるで彼は自分の家において、いまが夜半であって、二階の物音にひきつけられている、とでもいったような顔つきであった。福田くんはざつとなりゆきを話してから、両手をそろそろと自分の首へ押しつけた。

「そうしてこうするんです」と彼は云った、「ぼくの眼をじーつとみつめたまま、唇でにーつと笑ったままですよ」

「あのときでも眼をあいたままなのかい」

「ずーつとです、ぼくにも眼をあいていろつて云つてきかないんですよ、いやだなぼくは」福田くんは頭を振り、唇を閉じてぐつと横にひろげる、「まったくいやだ、はんにやみたい顔になるでしょ、ぞつとするな」

「はんにやだつて」

「ちよつとのまだけど、そんなようなもの凄^{すご}い顔になるでしょ、はんにやのお面そっくりだな、あれは、ぼくはいやだ、ぞーつと

しちやいますよ」

「ああ、ああそうか」相沢はようやく事理を解いたように大きく頷いた、「——はんにやねえ、人によつて違うだろうが、そいつはぞつとしそうだな」

「だからぼくは眼をつぶつていようとするんですが、光子のやつは眼をあけ、つて云つてきかないんです」

「好きずきだな、ああ」相沢は首を左へひねり、右へひねりしながら、複雑な微笑をうかべた、「好きずきだ、人間てやつは千差万別だつていうからな、おれのかかあなんざ、——まあいいや、ま、とにかく、そういうことだとすると、早く別れちまうよりほかに手はねえな、さもねえときみ、本当に生き死にの問題になる

かもしれねえよ、ああ」

「——できればなあ」福田くんは大きく深い溜息をついた、「それができたらなー」

以上の会話は一度に交わされたものでなく、二人でときたま酒を飲むたびに交わされたのを、総合し整理したものであって、実際にはもつと微妙で、刺戟的な細部がたくさんあった。けれども夫婦間の心理葛藤^{かつとう}や肉体的な消息は、単に言葉だけ追求しても役には立たない。現に、これらの会話がとり交わされた合間あいまにも、——それはほぼ五、六日から十日くらいの間隔を保ちながら、福田くんは突如としてろじへとびだし、二階を見あげて叫びだすのだ。

「やい、出ていけーっ」と彼はしんけんな顔で、右手の拳こぶしを空に突きあげる、「光子のやろう、出ていけーっ」

しかもそれから数時間のちにはもう、二階から光子の、は、じ、め、さん、ねーえ、というあまつたるい囁き声が聞えてくるのであった。

「さ、ここにこれだけある」と或る夕方、相沢は幾枚かのさつを福田くんに差出しながら、友情をこめて云った、「——これを持ってどこかへ消えちまいな、きみは大学までいったそうだし、いわば前途多難なからだだ、おれがすすめたようなものの、廃品回収業まですればどこへいったって生きてはいけるよ、ああ、あとのことはなんとかなる、きみはたったいまここから逃げだすんだ、

た」

相沢は「た」と云いかけて絶句した。おそらく彼は、たったいまからと繰り返すつもりだったのだろうが、そのとたんに、屋台店の外で声がしたのだ。

「は、じ、め、さん」相沢はあぶなく腰掛から転げ落ちそうになり、するとのれんをあげて光子が顔を見せた。

「肉屋へ来た帰りなの、あんたの声が聞えたもんだから」と云ってお光は相沢のほうへ振返った、「あら、相沢さんもいらしたんですか、ちつとも気がつきませんでしたわ」

「ね、ぼくがそ云ったでしょう」と次のとき福田くんは焼酎のグ

ラスを舐めながら云った、「光子のやつはなにもかも見とおしないでですよ、あのときだつて本当は肉屋へいったんじゃない、ぼくたちの話を見とおしてやって来たにちがいないんです」

「おらあんなに吃びっくり驚したこたあなかつた、生れてこのかた初めてだな」と相沢がいった、「おや、相沢さんもいたんですかって、振向かれたときには、ぎゅーつと力いっぱい眼をつぶったよ」

「眼をつぶったんですって」

「ああつぶった、あの人が眸を凝らしてじーつとみつめ、唇だけでにーつと微笑でもしたらって思うと、もうおっかなくてとても眼をあけてなんぞいられやしない、——思いだすといまでも」そこで相沢は口をつぐみ、自分の背後に人のけはいでも感じたよう

に、息をひそめながら福田くんに囁いた、「この話はよしにしよ
うぜ、ああ、軍師あやうきに近よらずつてえからな、きみ」

福田くんはグラスの焼酎を一と息に飲み、いそいで幾たびも領
いてみせた。

「あたしと福田のローマンズはたいへんだつたのよ」と相沢家で
は、ますさんを相手に光子が話していた、「なにしろあたしは女
学校二年生で、法律上はまだ未成年者でしょ、どこでクスープし
たものか新聞では書きたてるし、そうそ、いつかあんたにその記
事みせてあげるわ、あたしみんなクスラップして取つてあるのよ、
ほんとにいつか見せてあげるわね、田舎の新聞だつてそうばかに
はできないような記事よ」

ますさんは内職の手を休みなしに動かしながら、よく赤ちゃん
がでしなかつたのねと、感情のかけらもない口ぶりで云つた。

「それは女の責任じゃないの」と光子は答えた、「女さえその気
になれば、妊娠なんかしないような方法が幾らだってあるわ」

ますさんは突然おどかされでもしたように、ぎくつとして振返
つた。そうして溺れおぼかかっている者が、つい眼の前に浮き袋のあ
るのをみつけたときのよ様な表情で、それほんと、ときき返した。
「だって現の証拠、あたしには子供がないじゃないの」とお光は
云つた、「あんたそれ知らないの」

「知らないわ、そんなこと」

「一つも知らないの、——へえ暢のんき気なものねあんたたち」光子は

坐り直した、「いいわ、あんたのとこだつて子供はもうたくさんでしょ、とし上のあんたにこんな話するのはなまいきなようだけれど、簡単なやりかたを二つ三つ教えてあげるわ」

それから約二十分、光子が各種の姿態と動作を示しながら、呼吸と力のいれどころなどについて語り続けるのに、ますさんは幻滅した人のような顔で欠伸^{あくび}をし、また仕事を始め、「じゃがへびを呑むみたいなことを云う人だ」と口の中で呟いた。光子はまだ熱演を続けていた。

儉約について

東の長屋の、水道端に近い端の一軒に、塩山慶三の家族が住んでいた。妻の名はるい、娘が三人あつて、長女のはるが十二歳、二女のふき子が十歳、三女のとみ子が八歳であつた。——これは一家が長屋へ移つて来たときの年齢で、塩山は四十がらみ、郵便局の配達をしていた。

塩山一家は、妻女るいさんの采配さいはいよろしきを得て、勤勉、儉約、質素、温順、清潔などの美德をそなえた、善良な市民の典型のような生活を実践していた。

ここの住民がまず驚いたのは、おるいさんの物持ちのいいことであつた。天気さえよければおるいさんは一日じゆう、いや、殆

んどといふべきだろうが、いつも水道端にいて、なにかかにか洗い、器物類は家の横に並べて乾した。ほ——それらは古い箱膳はこぜんや、椀や、箸はし、おはち、下駄、足駄、傘、ゴム底の足袋、古いゴム長靴、ゴム引きの雨外套あまがいとに、ゴム引きの雨天用帽子、などといった類であるが、その中には三、四十本の杉の割箸がめだっていた。この「街」の人たちはてん屋ものなどを取る例は稀まれだが、そば屋とか大衆食堂などで、杉の割箸を出すぐらいのことは知っていた。けれどもそういう店から割箸を持って帰るようなことはない。もし割箸があるとすれば、そばとか丼物どんぶりものとか、なにかを家へ取ったことがあるのだろう、長屋のかみさんたちはそうにらんだ。「みせびらかしてるんだよ」と一人のかみさんは云った、「昔は

いにくらしをしていて、毎日のようにてん屋ものを取って喰べてたんだからねって、きつとそれにちがいないよ」

そして或るとき、おせつかいなかみさんの一人が、そのことをおるいさんにほのめかしてみた。

「いいえとんでもない」おるいさんは謙遜けんそんな顔でしんけんに否定した、「うちのような切詰めたくらしでそんな贅ぜいたく沢たくができるもんですか、これは貰い物なんですよ」

まえに住んでいた家のすぐおもてに小さなそば屋があり、しよ**う**ばい**が**う**ま**く**い**か**な**く**な**つ**て**世帯**じ**ま**い**を**し**た。そのとき売れない物をまとめて捨てている中に、一と束の割箸があり、それをももつたいい勿体ないから貰い受けた。そのあと、客のあるときに出して使

つたが、割ってしまえば、もう客には出せない。けれども役に立つことがあるかもしれないし、「それを作った人のことを考える」と「むぎむぎ捨てる気にもなれない、とおるいさんは云うのであった。

「どんなつまらないようなものでも、それを作る身になってみれば粗末にはできませんよ、ねえ、あなた」とおるいさんは云った、「たとえ紙一枚だって、それを漉すくにはいろいろな手数や、辛いおもいをするんだっていいいますもの、ほんとになに一つだって、形のある物は大事にしなければねえ」

これでおるいさんは、この街のかみさんたちのにんきを、一遍に集めてしまった。

主人の塩山慶三は酒もタバコもたしなまず、勤めを休むようなこともなかった。はる、ふき、とみの三人姉妹は、痩せていて顔色こそわるいが、温和しくてあいそがよく、親にさからったり、口答えをするようなことはなかった。

「ええ、おかげさまで」とおるいさんは水道端で、例のように洗い物をしながら、かみさんたちに答えて云う、「みんなよく云うことを聞いてくれますよ、それだけがとりえですけれどね、なにかわるいところがあつたら、構わないからどしどし叱りつけてやって下さいな、他人さまに叱られるのがなによりのくすりですからね、お願いしますよ」

こうして洗いあげた物を、自分の家の横に戸板を置いて、その上にきちんと並べて干す。なにになにが並べられるかはこの章の初めに記したから参照していただくが、それはまさしく清潔好きと物持ちのよさを示す点で壯観とさえいえただろう。——或るとき、通りかかった中年の女性が、この展観物を認めて立寄り、つくづく感じ入ったように眺めていたが、やがておるいさんに向つてこうきいたものであつた。

「あの、失礼ですが、これは売り物ですか？」

塩山一家の生活は、時計の針のようにきちんとしていた。慶三の出勤時間、帰宅時間、娘たちの登校時間と帰宅時間、食事、入浴も物差で計つたようにきつちりときまつていたし、この「街」

ではかなり稀な例だが、家族の衣服も季節によって変った。もちろんそれらは幾たびも洗濯し、縫い直されたものだつたし、色も柄もじみな品で、あわせ 袷ひとえから単衣に着替えても、さして人の注意をひくようなことはなかつたが、中に眼のするどいかみさんなどがないて、はら立たしげに耳こすりをすることがないでもなかつた。

「おまえさん見たかい」と眼のするどいかみさんは云う、「おるいさんとこじや今日つから袷を着てるよ、へっ、あてつけがましい、なまいきじやないかほんとに」

こういう長屋に住む以上は、長屋どうしのつきあいというものがある。てめえのうちでは袷を着られるからいいわで、勝手に袷を着るといふのはつきあい知らずのみえつ張りだ、とその眼のす

るどいかみさんはきめつけたものだ。

おるいさんは敏感にこういう蔭口を聞きつける。そしてすぐに巧みな手を打つのだ。

「あんたのところではみなさんお丈夫でいいわねえ」おるいさんは眼のするどいかみさんに向つて、あいそよくこう話しかける、

「あたしんところはみんな弱いんで困つちまうのよ、あんたのところみたいがいい稼ぎがあればいいんだけど、うちじゃあ配達の仕事だけでたかが知れてるし、あたしが内職したつてろくな物も喰べられやしないわ、だから子供たちの軀にも精が付かないんでしようね、秋ぐちになるともう風邪をひいちまうんですよ」

そして袴を着るのは必要上やむを得ないのだ、ということを手
手に納得させ、同時に、そんなことに気を使わなくても済む人た
ちのことが、どんなに羨ましいかと繰り返すのであった。

これでも相手が降参しないとみると、一と摘みの塩とか、小皿
に半分の醤油などを借りにゆき、くらしの苦しいことをしみじみ
と嘆いてみせ、「恩にきるわ」と心をこめて云うのである。返す
ときにはいずれも倍量くらいにし、味をたっぷりきかせた札の言
葉をふんだんに浴びせかけるのだ。

「口にもとではかからない」というのがおるいさんの口癖であつ
た、「人間は口のききかたさえ知ってれば、どこへいったつてく
らせるもんだからね、ようく覚えとくだよ」

と彼女はよく娘たちや、また亭主の慶三にも云うのであった。

慶三の収入が幾らあったか、おるいさんが内職でどのくらい稼ぐのかわからない。内職は娘たちも手伝うので、みんなを合わせればちよつとした額になると思われるのだが、くらしぶりは驚くほど質素であり、毎日の生活のどこを捜しても、これがむだだというものは一つもなかった。——おるいさんは五日に一度、食糧の買い出しに大市場まででかけてゆく。

それは本通りから市電に乗って、停留場を五つほど北へゆき、そこから五分ほどあるいた町なかにあった。米麦からそば、うどん、野菜も魚も肉も、味噌、醤油、漬け物となんでもあり、五十の日には三割引きの大安売りがある。おるいさんはつまりその

日にゆき、五日分の物資をまとめて買うのだが、そうすると三割引きがさらに一割がた値引きされるので、ときにより品物によっては、半値を割る場合さえ珍しくはなかった。

「電車賃と暇を計算すれば、却^{かえ}って高くつくつていう人もありませんよ、ええ」とおるいさんはいう、「それも嘘じゃありませんけれどもねえ、一日じゅううちにばかりいては軀のためにもよくないでしょう、五日に一度ぐらい外へ出て、世間を見たり運動するのはそれだけでも身のくすりだと思ふんです、おまけに安い物が手にはいるんですからね、——うちのような貧乏世帯では貧乏人相応の知恵をはたらかせなければやっていけませんよ」

漬け物などを多量に買うときには娘を伴^つれてゆき、分割して背

負うのだが、それでも市電の乗車を拒絶されることがある、そういうときには母子であるいて帰るよりほかなく、もともと痩せて細っこい軀の娘たちは、まっ蒼さおな顔にあぶら汗を流しているというふうであった。

買ってきた食品は徹底的に使った。大根の葉はいうまでもなく、人蔘にんじんの葉から尻尾しっぽ、ジャガ薯いもの皮や、芹せり、三つ葉の根、蕪ふきの葉まで捨てることはなかった。殊に人蔘と蕪の葉はビタミンCを豊富に含有しているそうで、「これを捨てるのは高価薬を捨てるよ
うなもんですよ」といつていた。

ビタミンCなどというからには栄養についても多少の知識があ

と思われる。むろんこの「街」の住人たちは低収入で家族の食事を賄わなければならぬから、本能的に食物の栄養価のバランスをとっている。現代的栄養学にまなんだのではなく、親の代から口伝くでんされた経験による知恵なのだ。おるいさんは新しい知恵をもっているらしいのに、鰯いわしなどを買うと、水道端で頭や骨を抜き、身だけにひらいたのを丹念に洗う。水道の水を出しっぱなしにして、一尾ずつ繰り返し洗うのだ。

「あんだ、そんなに洗ってどうするの」と近所のかみさんが注意する。「それじゃあせつかくの味も滋養もなくなっちゃうじゃないの」

「そうなんですけどねえ」おるいさんは答える、「うちじゃあみ

んなが鰯のあぶらを嫌うんですよ、ええ、ちよつとでもあぶら臭いと喰べないんですから」

困つちまいますよといつて、ざぶざぶ洗い続けるのであつた。

二年すぎ三年すぎた。中学を出た長女のはるは、父親の勤めて
いる郵便局へ就職し、夜は定時制高校へかよいだした。そのすぐ
あとのことだが、近所のかみさんの一人が驚くべき事実を発見し、
この街の住人たちに大きなショックを与えた。——というのは、
そのかみさんが小為替こがわせを金に替えるため、中通りの郵便局へいっ
たところ、塩山家で貯金をしていることがわかつたのだ。

「あの髭ひげを立てた人、郵便局の主人公だろ？」とそのかみさんは
いった、「あの人がさ、事務をとつてはるちゃんを呼んでさ、

利息の書き入れが済んだから、帰りに持つてゆきなさいって、貯金通帳を三冊はるちゃんに渡したじゃないの、いいえさ、あたしもよもやと思つたんだよ、ところがあんた髭の主人公がよ、きみのがだんだん減るねっていうだろ、するつてえとはるちゃんが、あたし学費がいりますからつてはつきりいつたんだよ」

「まあどうだろ」とそのかみさんはゆうれいでも見たような顔つきをした、「あたしやまあ肝がつぶれて、うちへ帰るのにどこをどう通つて来たかもわからないくらいだったよ」

「このご時世に貯金とは」と他のかみさんがいった、「世の中にはとんだ罰当りなことをする人がいるもんだね」

このとき、おるいさんはにんきを失い、塩山一家はなにか悪い

病氣持ちかなんぞのように、近所づきあいからそれとなくはずされたようであった。——けれども、おるいさんはもうびくつともしなかった。こういう「街」では住人の移動がはげしく、三年も定住すれば古参のほうだから、おるいさんとしては近所の人たちに気がねをしたり、不必要なきげんとりをしなくともよくなつていたのだ。——そこで彼女は秘し隠しせずに、徹底した儉約ぶりを遠慮なく実行してみた。

貧しい人たちが儉約するとすれば、その第一は食費を削ることになる。娯楽費などはむろんだめ、暇があれば手仕事をやる。はるちゃんも夜間高校へかよっているから、帰りは十時ちかくにな

るが、高校へゆく代りに一倍内職をしなければならぬ。主人の慶三も例外ではなく、勤めから帰って夕食を済ませると、一と休みする暇も与えられず、内職にと追い立てられるのであった。

二女のふきや三女のとみについて述べることはないだろうし、ここではいかなる強制も圧迫もおこなわれない。おるいさんが采配を振るといったが、彼女は亭主や娘たちに向つて、ああしろのこうしろのとしいるようなことは決して云わないし、自分が誰よりもよくはたらいだ。意地のわるい表現が許されるなら、おるいさんは自分がはたらいてみせることによつて、一家を奮起させているともいえるようであつた。

五人の家族は黙々としてよくはたらいだ。それは流れ作業のベ

ルト・コンベアーの前に腰掛けた、五人の熟練工に似ているようであった。仮におるいさんを職長とすれば、そのうえになお彼女は、炊事と水道端の仕事と、家事のこまかい勤務を抱えていたのであった。

二女のふきも、中学校を出るとすぐ就職した。某運輸会社の給仕で、朝が早く、退社がおそく、出勤のほうは七時ときまつていたけれども、退社時間は早くて六時、おそいときには帰宅すると夜の九時すぎになることがあった。労働基準法というものがあり、すべての労働者はその法によつて守られていると聞くが、「法」というやつは守られるよりも悪用されるためにあるのではないかと疑われる場合が稀ではないので、どうか読者諸氏はここで「労

基法」を盾に筆者を攻撃しないでいただきたい。

ふきは現実にそのような勤務をし、超過勤務の手当さえない代りには不平もいわず、また姉のように進学の望みももたず、運命論者が運命に従順である如く従順に通勤し、帰宅すれば内職にはげむのであった。

貯金はふえていった。これほどの勤労と、粗衣粗食と、ぎりぎりまでの儉約をして、それでも貯金がふえないとしたら、銀行業の経営はずいぶん難渋することだろうと思う。だが、塩山一家の貯金は確実にふえていった。同時に、反対方面からこの一家をめざして、眼に見えない或るものが忍び寄って来たのだ。

ふきが就職して半年のち、郵便局に勤めていたはるが倒れた。

初めは風邪をひいただけと思われ、三日ほど休んで勤めに出たが、次に倒れたときは高熱が続き、病院へ伴れていったら結核だと診断された。入院するほうがいいと云われたが、ひとまず家へ帰って寝、入院について家族会議を開いた。

まだ健康保健医が少なかったうえに、患者数とベッド数とのひらきが大きいところで、入院治療の望みは極めて困難であった。

効果のある新薬もぞくぞく売り出されていたが、塩山家の経済では手の届かない高価なものばかりだし、それで決定的に治療するということ保証もなかった。

「昔はこの病氣のことをな」と父親の慶三が云った、「催促病氣

といつて、若い娘が一度はかかるもんだとされていたんだよ」

慶三が自分の意見を述べるなどということは例が少ないので、みんなが彼の顔をみつめ、やはり一家のあるじであることを認めると同時に、この危急を救う妙案が出るものと信じて息をひそめた。だが、慶三はみんなの注視の的になってまごつき、ぐあいわるそうに顎あごを撫なでるだけで、妙案らしいものを提出しそうにはみえなかつた。

「それで」とおるいさんが待ちきれなくなつてきいた、「——だからどうだつていうんですか」

慶三は顎を撫でていた手を頬からこめかみのほうへすべらしながら、「べつに」と口ごもつた。つまり、と彼はまた口ごもつて

から、確信のない口ぶりで云った。催促病気とはつまり、娘がとしごろになって嫁にゆきたい、どうか嫁にもらつてくれますようにと、心の中で催促するようになる。そのおもいが凝つて病気になるので、かくべつ治療をするより、嫁にゆくあてができればそれだけで治る、という意味らしいのだ、と説明した。

「いやだわ」はるは青白くなつた頬を染めながら眼をそむけた、
「あたしお嫁にゆきたいなんて思ったことはないわよ」

「はるちゃんのことじゃないのよ昔の人の話」とおるいさんが云つた、「おつかさんもそれは聞いた覚えがあるわ、ほんと、嫁にゆきたいと思うか思わないかはべつとして、としごろになるとこの病気にかかる者が珍しくはないんだって、つまり麻疹はしかみたよう

なもんだつていうのよ」

すでにお察しのとおり、夫婦は結核を治療するという本題から、どうしたら金を使わずに済むか、というほうへ思考がそれていったのだ。だから娘の病気を治したくないのではない、夫婦は娘のはるを愛していたし、どうか丈夫にしてやりたいと思う情に変わりはなかった。けれども儉約と愛情は共存しないらしい。入院費用の安いベッドはまったく空あきがないし、新薬は高価で手が出ないうえ、効果も確実ではない。とすれば、昔の云い伝えをいちおう信じて、家庭療法をこころみるのもやむを得ないではないか。世間でも「結核恐るるに足らず」とか「結核は必ず治る」などと、責任ある人たちが宣伝しているのだから。

はるは自宅闘病にはいった。彼女が勤めに出ず、定時制高校にゆかず、家で寝ていたことだけは確かであった。けれども、どんな療法が実行されたか、安静が保たれたかどうかは、第三者にはまったく不明であつたし、はるを除いた家族の生活には、些いささかかの變化も認められなかつた。

「ええおかげさまで」と水道端で割箸を洗いながらおるいさんは明るい表情でかみさんたちの問いに答える、「——もうね、来月になったら床ばらいをしようかなんて相談しているんですよ、貧乏していると病気がいちばんこたえますよねえ」

だがはるはまもなく死んだ。病みだしてから半年とは経ってい

なかつたらう。通夜にいった人たちは、はるが人間のようにではなく、かさかさに干しあがった枯れ木の、細い枝のようになっていのを認めた。

「あたしや田舎にいるとき、お盆にお寺まいりをして、地獄の絵を見たことがあるけどさ」とかみさんの一人が通夜のあとで云つた、「その中に餓鬼地獄とかなんとかいつて、骨ばかりみたいに瘦やせた亡者の絵があつたよ、はるちゃんはその亡者にそっくりだつたね」

「あれは病気で死んだんじゃない、飢え死にだよ」とべつのかみさんは云つた、「肺病だつてのに卵一つ食わせたようすもないんだから」

たまに鰯を買えば、半日も水洗いをするんだから、身にも皮にもなりやあしない、と他のかみさんも付け加えた。

「さあ」と初七日が済んだとき、おるいさんは亭主と二人の娘に向つて云つた、「これではるちやんのことは忘れるのよ、はるちやんのために貯金をずいぶん使つちやつたからね、その分を取返すためにもうんと稼がなきや、ふきもとみもわかつたね」

慶三がまずうなず頷き、娘二人が頷いた。おるいさんはまじめだった。近所の人たちがなんと云おうと、はるのためのできるだけのことをしたのだ。日に一個の卵は欠かさなかつたし、中通りの鳥九という店へいって、鶏をつぶすときに絞る生血を貰つて来て、これも日に一度は飲ませていた。けれども、そんな食物よりも大切な

のは、愛情だということ。愛情をもって当人に「自分は治る」という自信をもたせること。それが新薬より食しよくじ餌より大切だと、おるいさんは信じていたのだ。

「天皇さまの赤ちゃんだつて寿命がなければ亡くなるんだよ」とおるいさんは云つた、「喰べ物や薬や医者さえあれば、病気が治ると思うのは迷信だからね、とうちゃんにきいてごらん、いまの天皇さまの何番めかの赤さんは、につぽんじゅうの博士を集め、金に飽かせて療治をしたけど、やっぱり寿命には勝てないでお亡くなりになった、人間ていうのはそういうものなんだよ」

塩山一家は立ち直り、いさましく生活の平常性をとり戻した。そして年があけ、とみが中学を卒業すると、彼女もまたすぐに就

職した。父の慶三が配達人をしてい、亡きはるが勤めていた郵便局である。とみは三人姉妹の中でもいちばん痩せていて小さく、就職試験のとき、髭の老局長はとみのことを、小学生ではないかと疑ったそうであつた。

とみは勤め始めてみ月めに倒れた。近所の人たちはまったく知らなかつた。隣りの片沼二郎のかみさんは、この「街」きつての情報通で、他のかみさんたちから放送局という渾名あだなを付けられて、いるくらいだったが、或る夜、塩山家がにわか騒がしくなり、おるいさんが「とみや、とみや」と呼びたてる声で、吃驚びっくりしてとんでゆき、初めてとみが病びょうが臥ふししていたこと、いま急に吐血し

て気を失った、ということを知った。

医者が来たときには、とみはもう死んでいた。生れつき心臓が弱いのに、勤めをし内職をするという過労が重なって、心臓のどこかが破裂したのだと医者が診断したと、片沼二郎のかみさんは放送した。彼女はおるいさんに頼まれて医者を呼びにゆき、その診察にしぜんと立会うチャンスを儲けたのであった。

「でもさあ、はるちゃんより孝行もんだよねえ」とかみさんの一人は云った、「はるちゃんは半年くらい寝たつけ、とみちゃんはあつというまもなかったじゃないの、あのけちんぼ一家の損得勘定じゃよっぽど儲けものだったにちがいないよ」

かみさんたちは知らないのだ。——おるいさんは損得勘定など

は、——少なくとも意識的には、考えもしなかった。むしろはるの前例があるので、必要以上に神経を使ったようであった。けれども、おるいさんが使い減らす神経の消耗率よりも、とみの病勢のテンポのほうが優勢であつて、——とうてい追いつけなかつた、というのが実情のようであつた。

「あの子は脂っこい物ばかり喰べたがっていたね」おるいさんは云つた、「お医者が云つてたけど、心臓の弱い者には脂っこい物がなにより悪いんだつてよ、丈夫な者でもそうだつて、脂っこい物は血を濁らせて、濁つた血が軀じゆうに廻つてかすを溜めるから、癌がんになつたりよいよいになつたりするんだつてよ」

おるいさんは自分の言葉だけでは信用されなれなかつたのだらう

うか、新聞紙から切抜いた「医療相談」の記事を亭主と娘に読んで聞かせた。要約すると、食事は低カロリーに、野菜を多く、米飯は少量、果物は好ましい。という内容であったが、その記事は高血圧に悩んでいる読者の投書に、なにがし博士の答えたものでおるいさんはその部分は省いて読んだのであった。

「牛や馬をみてごらん、草だのわらを喰べるだけで、あんな立派なからだをしてるじゃないか」とおるいさんは云った、「——そうだ、象だつて河馬だつて草しきや喰べやしないだろ、それであんな大きなからだをしているし、みんな癌やよいよいになんかなりやしないじゃないの、ね、そうでしょ、よいよいの象なんて見たことがあつて？」

内職の手を動かしながら、慶三は無表情に頷き、ふきは、やはり休みなしに仕事をしながら、欠伸をかみころしていた。

それから三年経つうちに、ふきが死に、おるいさんが死んだ。

ふきは長女のはると同じ結核であるが、奔馬性という悪質のもので、二カ月の自宅療養ののち、あつけなく死んでしまったのだ。

おるいさんも結核で、これは肺と腸と淋りんばせん巴腺がおかされてい、

発見されたときには手のつけようがなかったといわれる。——こう書くと極めて単純なようだが、事実もまた単純そのものであった。悲劇は長女の死から始まったようにみえるけれども、それはかたちにあらわれた面だけのことで、原因はおそらく慶三とおる

いさんとが結婚したときから始まった、というのが正しいようだ。あらゆる生物は誕生と同時に死に向って行進する、などという安っぽい屁理屈へりくつはごめんをこうむる。塩山家では結婚したとたんにおるいさんが采配をとった。なにかの策略とか暴力によるのではなく、しぜんとそういう結果になったのであり、勤勉、質素、温順、儉約などの家風もそのときに確定したのだ。——長女のはるからおるいさん自身の死に至るまで、この家風は標準時計の針の如く正確に動き、正確にその数字を出したのだ。そこにはロマンスもなくユーモアもなく、人間味さえもなかった。

「あたしは間違ってたかもしれないね」死ぬまえにおるいさんは亭主にそういった、「——一日一円の貯金は一家の繁栄って、貯

金のない家には将来なし、なんていうことを信用してたのよ」

「いまでもそんなポスターが貼^はつてあるよ」と慶三はなぐさめた、

「新聞にも貯金しろって広告や、えらい人たちの談話が出てるよ、おまえは間違つてなんかいなかった、大丈夫だから安心しなよ」

「たとえなにか考え違いをしていたにしろ」とおるいさんはいった、
「あたしだつて人間なものね、そうなからなにまで知つてゐるってわけにはいかないじゃないの」

「おまえはよくやったよ、なにも考え違いなんかしやしなかった、大丈夫だよ」

おるいさんは亭主のいうことを聞いていないようであった。そして死ぬ瞬間まで意識がはつきりしていた証拠には、彼女がそれ

まで大事に清潔状態を保ってきた、足駄だとか膳、椀、割箸その他の器物類が、どうなるかという心配で頭がいっぱいのもようであった。

「ええ、ほんとにもういい女房でしたよ」通夜するとき慶三は、集まってくれた近所の人たちにいった、「うまい物を喰べたがるじやなし、着物を欲しがるわけじやなし、いっしょになつてから芝居ひとつ見たいともいわず、はたらきどおしにはたらいて、儉約、儉約とつましくやってくれました、ええ」

「こんなこといっっちゃあ冗談になりますか」慶三は笑つてみせながら付け加えた、「あいつは自分のいのちまで儉約したんじゃないかと思うくらいですよ、ええ」

たんばさん

たんばさんはもう六十二、三になるな、と或る者が云う。まだ五十代だと云う者もあるし、七十にはなっていると主張する者もある。当人は柔和に笑って、自分でもわからない、忘れてしまつたようだ、などと云つて話をそらしてしまふ。名前もたんばさんと呼ばれるだけで、それが姓なのか渾名なのかわからない。住民登録がどうなっているか、——ここではそういう問題に関心をもつ者はいない、ことにたんばさんはそうで、彼がなに者であるか

と疑う余地もないほど、ここの住人たちはたんばさんを頼りにしていた。困ったことにぶつつかつたとき、悲しいとき苦しいとき、癩しやくに障ったとき、うれしいとき、そしてそれらがどうしようもないとき、かれらはたんばさんをたずねる。

寒藤清郷先生もたんばさんのところへ幾たびか相談にいったし、ヤソの斎田先生でさえ、ひそかに知恵を借りにいったくらいであった。

たんば老人がいつからここに住んでいるか、覚えている者はなかった。親の代から住みついているという「いも屋そうの惣そうさん」もはつきりした記憶がない、——八年まえだったか九年まえだったか、と惣さんは思いだそうとして話す。西の二軒長屋に「くまん

蜂ばち」の吉という乱暴者がいた。女房に子供が二人。当時は日雇い労働者だったが、もとは坑夫などもしたことがあるそうで、酔つて暴れだすと手がつけられなかった。彼は日本刀を一本持つていた。柄のところさらが晒し木綿で巻いてあり、刀身に刃こぼれがある。なんとか坑山でおおげんか大喧嘩があつたとき、十幾人かを敵にまわして斬りあいをやり、幾人とかを斬つた。というのがくまん蜂の吉の自慢話であつた。——その吉が、ここへ移つて来て一年ばかりしてから、酔っぱらつて暴れだし、例の日本刀で女房や子供を「たたつ斬つてやる」と喚きながら、追いまわした。慣れているから、女房と子供たちは逃げてしまい、吉は逆上して、家の格子口の柱へ刀で切りつけた。こん畜生とか、みやがれとか叫びながら、力

まかせに切りつけるのである。どうしようもない、どんななまくらでも抜き身の日本刀は凄^{すこ}みがあるから、眺めていた近所の人たちも蒼^{あお}くなり、老人やかみさんたちの中には足が竦^{すく}んでしまつて、逃げようにも逃げられなくなつた者がいた。

このままおいてはどうなるかわからない、警官を呼びにゆこうということになつた。

「そのときたんばさんが出て来たんだよ、うん」と惣さんは語る、
「長屋のみなさんが遠巻にして、みんないまにも死んじまいそんな顔で、嵐のときの古雨戸みてえにがたがたふるえてたとき、たんばさんはゆつくりしたあるきぶりで野郎のほうへあるいていった、——てんでもう平氣の平左なんだな、うん、おれも見ていた

んだが、嘘のねえところこいつあやられるぞつと思つた」

たんばさんはおちついて吉の側へゆき、なにか話しかけた。眺めていた人たちはぞつとし、ざっくり斬られる老人の姿が見えるようで、かみさんたちは眼をつむり、お互いに肩へしがみついた。——だがそんなことはおこらなかつた。たんば老に話しかけられた吉は、刀をだらつとさげ、なにか二た言ばかりいったとみると、そのまま抜き身をさげて家の中へはいつてしまった。それだけであつた。家の中はしんとして、べつに暴れているようすもない。たんば老人は柔和な微笑をうかべながら、みんなのほうへ戻つて来、もう大丈夫ですよといつて、たち去つた。

みんな奇蹟きせきを見たように騒ぎだした。あれは剣術の名人にちがいないとか、催眠術使いだろうとかいいあい、いつたいなに者だという疑問につき当った。——たんばさんじゃないか、知らないのか、と二、三人の者がいった。もうながいこといるようだぜ、あんない人はめつたにいやしねえ、本当に知らなかつたのか、とかれらはいも屋の惣さんに問いかけた。惣さんが親の代からの定住者だ、ということはよく知られていたからであらう。惣さんはそのとき初めてたんば老人という存在を認めたのであった。

それにしても、あの手に負えない吉が、泥酔し逆上して暴れているのをどうしてなだめたか、僅か二た言ばかり話しかけただけなのに、吉はなぜ一遍でしゅんとなったのか、惣さんは不審でた

まらなかつた。

「そこでおれは、吉がしらふのときにきいてみた、いつたいあのときたんばさんはなにをいったんだ、つてな、うん」と惣さんは語つた、「するとおめえ、吉のやつ頭を搔かきながら、いまさらどうも面目ねえが、ばかなまねをしてみんなに済まねえが、いつてわけを話した」

吉の話によると、たんばさんは彼の側へ来て、少し代ろうかねといったという。吉は振向いて、へんな老いぼれだなど思い、なんだと問い返した。少し私が代ろうかつていったんだよ、とたんば老人がくり返した。そして、片手を柱のほうへ振つて、一人じや骨が折れるだろうからなと付け加えた。

——おらげっそりしちやった、と吉は惣さんに告白した。代ろ
うかなってたつておめえ、おらあなにも工事をしているわけじゃ
ねえや、たんばさんはやさしい顔で笑つてらあ、一人じゃ骨が折
れるだろうったつておめえ、骨替りをしてもらえるもんでもあり
やあしねえ、それじゃあお願いしますつてわけにいくかえ、おら
あ手に持つてる刀と、傷だらけになつた柱を見て、急にげっそり
しててれくさくなつちやつて、しようがねえからうちへえつて、
あの日はいちんちふて寝しちやつたよ。

惣さんがその話をするときには、自分がくまん蜂の吉そのもの
にでもなつたように熱を入れ、身振りや表情や声などに、可能な
限りまで実感をあらわそうとするのであつた。

たんば老は彫金師だと云っていた。若いころはたばこいれ 貰入の前金具だとかキセル、かんざし 簪などに素彫をするのが得意で、いちじは相当に名も知られたが、現在ではそういう品を使う者が稀になり、高級なコンパクト、帯留、簪、ペンダントなどを手がけている。注文は殆んどないので、自分で気の向いたときに作り、昔のお店たなへ持って行って預ける。そして、それらの品が売れば代金を貰うということであった。

「なに、身寄りもない独り者だし、こうとしをとっては欲もないからね」と老人は云う、「まあ死ぬまでの時間つぶしのようなものさ」

この長屋内で、家をきれいにしている数軒の中でも、たんばさんの家は第一の指に折られるに違いない。戸障子もすらすらあけたてができるし、羽目板に泥がはねていることもない。三尺の狭い土間は塵ちりもなく、穿はき物はいつも爪先を出口のほうに向けて、きちんと並べてある。石油コンロで煮炊すきをするから、勝手も煤すすなどは溜ためまらないし、畳も古いのだが、ふしぎにけば立つたり擦り切れたりしていない。入り口の二帖も奥の六帖も常に片づいていて、よけいな物は一つも見あたらなかった。茶ちや筆だん筒すが一つとちやぶ台。それから仕事をする頑丈な台と、道具や地金を入れる、抽出ひきだし付きの箱。それらがいつも同じ場所にあった。まるで造りつけにしてあるかと疑われるほど、一センチの狂いもない同じ場

所に。——火鉢はなかつた。朝いちど、大きな土瓶どびんに茶を少し入れ、湯をいっぱい注いで、それを少しずつ啜すする。客があるとべつに茶を淹いれることもあるが、たいていは同じ茶を出した。

「どうも腑ふにおちねえんだが」と渡わたさんが云つた、「あんな出がらしの茶なのに、たんばさんが飲むのを見ていると、よだれが出るほどうまそうなんだな、まったくだぜ」

老人は小さな茶碗にほんの少し注ぎ、その茶碗を両手で囲うように持って、尖とがらせた唇を、ゆっくりと近づけて、さも大事そうに啜るのであつた。

客に食事を出すようなことはなかつた。どんな物を喰べているかわからないが、老人の食事は朝と晩の二回らしい。着物は木綿

のこまかい縞で、縫い張りはよそへ出すようだが、いつも垢あかのつかないさつぱりした物を着ていたし、冬でも足袋ははかなかつた。

たんば老の家には、昼の客と夜の客がある。昼の客は各種の相談ごとが多く、夜の客は殆んどが金銭問題、——というよりもむしんであつた。この「街」で金銭を借りることのできるのは老人だけであるし、むしんにいって断わられたという例はないようだ。ないようだというのは、老人から借金をした者は、決して人に語らない。老人はむろん口をつぐんでいるし、借りた当人も人に饒し舌やべるようなことはない。これはないしよだよ、と老人に断わられるからだ。

「他人に知れると私が困る」とたんば老はやさしく云うのであった。「あんたに貸してほかの者に貸さないというわけにはいかないし、あたしだってそういつも持つてるわけじゃないからね」

そして、返すのはいそがなくてもいい、返せなければ返さなくともいいんだよ、とじつのこもった口ぶりで付け加える。いつ、誰の場合でも云うことは同じだった。或るとき、かみさんの一人がやって来て、うちの宿六に金を貸さないでくれ、と頼んだことがある。金を借りると呑んでくれて仕事にでかけないからだという。そのとき老人は、自分は金など貸しはしないと否定した。

「あたしは貸さないがね」と老人は微笑しながら、なだめるように云った。「男というものには、女房子にも云えないような悩み

にぶつつかることがあるもんだよ、女房子を抱えて、こんな荒い世間の波風を乗り切つてゆくのはたいへんなことだからね、本当にたいへんなことなんだよ」

「そりやあわかつてますよ、でも仕事にいつてくれなきやあ、うちの者は飢え死にしちやいますからね」

「それはそうだ、そうなるとすればことだね」老人は女房の心配に同情の意を表してから、柔和な調子でゆつくりと云う、「ひとつ考えてみよう、そうさ、これはずっと昔の話だが、大工だか指物師しものしだかの職人がいた、女房も子供もあり、たしか母親もあつたと聞いたが」

その職人がぐれだして仕事にゆかず、家にある物を売つたり質

に入れたりして、酒びたりになっていた。しかたがない、女房が自分ではたらこうとしたら、母親がそれを止めた。

「亭主がはたらいてこそ一家というものだ、亭主が呑んだくれて女房が稼ぐようになれば、その一家はこわれたも同然だ、と母親は云ったそうだ」たんば老は静かに頭を動かしてみせた、「——そのくらいならいつそのこと、一家そろって飢え死にするほうがいいじゃないか」

女房はそれを亭主に告げ、おまえさんがはたらいてくれなければ親子もろとも飢え死にするつもりだと云った。

「これは話だから、本当か嘘かは知らないがね」と老人は云った、「女房子が飢え死にをするというのに、黙って見ている亭主はな

いだろう、ものはためしだ、おまえさんもひとつその気になってみないか、人間はそうそう呑んだくれてばかりもいられないものだよ」

そのかみさんは二度とたんば老のところへは来なかつたし、その亭主がたんば老から金を借りた、という噂も立たなかつた。

これはこの「街」の伝説になつていたので、真偽のほどは確かでないが、また、今昔物語だか古今著聞集だかに、似たような話が出ていたと思うが、ここの住人たちみんなが伝えているので、あえて読者諸氏の叱しっせい正を予期のうゑ紹介すると、——ずっと以前、たんばさんの家へ泥棒がはいつた。たぶん老人が小金を貯めていたという、ひそかな噂を聞いたのであろう、当時いた段とい

う男が教唆したのだ、と云う者もあつた。

段と呼ばれる男は独り者で、たんば老の隣りに半年ばかり住んでいた。しよつちゆう老人の家に入りびたりで、さすがのたんば老も閉口したらしい。段は仕事もろくさましないし、そのくせさほど窮乏しているようすもなかつた。めしは三度とも中通りの食堂へ喰べにゆくし、ときたまではあるが、近所の子供たちにあめだ餵玉まを買つて来て配る、などということをした。

「私はね、こうして人と会話をするのがなによりたのしみでね」と段は云うのであつた、「会話というやつはいいもんだね、ねえたんばさん」

それは会話などといえるものではなかった。たいてい段が独りで饒舌るし、話の九割がたは嘘だとわかりきったものであった。老人は必要があればべつだが、どっちかというところの重いほうで、たとえば「小屋」の平さんなどがたずねて来ると、半日くらいも向きあつたまま黙つて坐つている、というふうであつた。これは平さんが世にも稀なくらい無口な性分だつたせいもあるが、だから、老人が段の訪問をよろこばなかつたことは確かであろう。老人はそんなけぶりもみせなかつたが、段のほうで気づいたのだから、やがてその訪問は少しずつ遠のき、そしてどこかへ移転していった。

段が引越していつてまもなくたんば老の家へ泥棒がはいつた。

老人の家もまた戸閉りが無い、雨戸は閉めるが鍵は掛けないから、どんな駆け出しでも楽に忍び込める。泥棒は家の中がさっぱりと片づいているのに、吃驚したことであろう。抽出し付きの箱を見て、金箱と誤認したものか、それを抱えて逃げだそうとした。老人は眼をさまして、泥棒のすることを眺めていたものか、そのとき初めて声をかけた。

「きみ、それは違うよ」老人は低い声でやわらかに囁きかけた、
「それは仕事の道具箱だ、金はこつちにあるよ」

泥棒は足を停めて振返った。たんば老の低い声と、やわらかな口ぶりが彼をひきとめたようで、それでもまだ逃げ腰のまま、
「なんだ」と凄んでみせた。

「いま出してやるよ、たくさんはないがね」たんば老はやはり囁き声で云つて、静かに起きあがり、とだなをあけて財布を取り出した。古くなつて擦り切れた革の財布であつたが、老人はそれを持つてゆき、そのまま泥棒に渡した。

「いまはこれで全部だがね」と老人は云つた、「もし困つたらまたおいでよ、少しなら溜めておくからね」

そして、こんどは表からおいで、と云つたそうである。泥棒は財布を受取り、道具箱は置いてたち去つた。

この事實は誰も知らなかつた。半年だか一年だか経つたのち、その泥棒が警察に捉つかまつたそうで、或るとき刑事に伴れられて、たんば老の家へ実地検証に来た。この家でこれこれのことをした、

という自白の裏付けである。

「とんでもない、それはなにかの間違いです」たんば老は刑事の質問に対してそう答えた。「こんな貧乏長屋へ泥棒にはいる者もないでしょうし、うちではそんなことは決してありませんでした」
「ではこの男が夜なかに侵入したとか、金品を盗んだとかいう事実はないのですな」

「ええそのとおりです」老人は刑事に微笑した、「うちには盗まれるような物はなに一つありやしません、その人は夢でもみたんじゃないでしょうかね」

この刑事との対談で、泥棒とのいきさつが知れわたったのであ

った。なるほどたんばさんならやりそうなことだ、おまけにあの泥棒は、たんばさんの一件だけ罪が軽くなるわけだからな、とこの住人たちは云いあつた。

「きつと段の野郎が吹っ込みやがつたんだな」と或る男が云つた、
「あいつはしよっちゆうたんばさんそこへ入り浸つてやがつたし、隣りどうしだつたからな、たんばさんが小金を持つてるとかなんとか、吹っ込んだにちげえねえぜ」

「段で野郎は信用できねえ野郎だつた」とべつの男が云つた、
「あいつはいつも千二百円札で涙はなをかむようなことばかり云つてやがつた」

「そうだそうだ、と賛成する者はいたが、その古くさい洒落しゃれがわ

かったようすはないので、いった当人は孤独感にとらわれたようであつた。

古物商の小田滝三が、ここへ引越して来たばかりのとき、酔つてたんば老をたずね、なかまの某を叩つ殺すのだといきまいた。事情を聞くと、大切なとくい先を横取りされたのだという。そのとくいはめつぼう払い物の多い家で、空あきかん罐かんだの洋酒やビールの壘びんだの、雑誌、新聞、ぼろ類など、一度では運びきれないほど多量な品が、月に二度ずつ出るし、それらの代価は取らず、「片つけてもらう」のだからと云つて、反対に三コ平均の金を呉くれるのだ、ということであつた。

「珍しいうちがあるもんだね」とたんば老は云つた、「よつぽど

の金持なんだな」

「それがそうじゃないんですよ、うちは借家だし、堀へいなんぞも毀こわれちやつてるしね、酒屋なんか勘定が溜まつてるっていうんです、ええ近所ではそう云ってるんです」

中年の夫婦ぐらしで、旦那というのはしよつちゆう酒を飲む。

客が絶えず来ているし、朝から夜まで酒を飲んだり、大きな声で議論したり、唄をうたったりする。或るときなどは、——と云いかけて、小田滝三は怒りのほうへ自分を引き戻した。

「そんなようなね、払い物をして逆に金を呉れるようなとくいなきぎ、めったにあるもんじゃありませんや、それをあんだ横取りしやがったばかりか、てめえがまぬけだから人に取られるんだ、

ねぼけるないってぬかしやあがつた」

「そういう人間も世間にはいるもんでね」とたんば老は云つた、
「自分でやったことが恥ずかしいもんだから、反対に毒ぐちをきくものさ、こんなことを云うと自分の悪事をひけらかすようだがね、六、七年前のことだったかな、或る年寄が死んじまいたいと云つて来たんだな、もうつくづく生きているのがいやになったからって」

親類もなし妻子もない、としは七十幾つとかで、昔は相当な商家のあるじだったが、当時は夜店で玩具を売っていた。からだ 軀は丈夫なほうだが、朝起きてめしの支度をするときに、ああまた同じこ

とをするのかと思うと、軀から精がぬけてゆくようで、七厘の前にしゃがんだまま、三十分の余もぼんやりしていることがある。なにを喰べてもうまくないし、これが喰べたいと思うようなこともない。たまには女の子の酌で一杯やりにゆくのがたのしみだったけれども、このところずっと、女を遠くから見るだけでも、胸がむかむかする。特に銭湯へいったとき、自分の裸の軀を見る不愉快さはたえようもない。痩せているとか、干からびて皺しわだらけだとかいうのではなく、軀そのものが醜悪でけがらわしくてやりきれなくなる。

「まあそんなようなことを並べるんだな、きれいさっぱり死んで、自分をこの世から消えてなくしちまいたいって」とたんば老は云

った、「そこであたしが茶筌筒の抽出しから粉薬を一服出して来て、これは彫金の地金に混ぜる薬で、一般には売っていない劇薬だが、飲んで一時間たつと頓死とんしする、ちつとも苦しまずに死ぬるから、本当に死ぬ気ならお飲みなさいと云つて、湯呑に水を注いで来て渡した」

その年寄は礼を云つて飲んだ。あんまり思いきりがいいので、こつちが吃驚したくらいだが、年寄はそれで気がおちついたものか、問われるままに身の上話を始めた。こんどの戦争まで、彼はひもの町というところで呉服屋をやっていた。妻と男の子二人、店員を五人に女中を使って、町内では顔ききのほうであった。戦争になつてから企業統制で呉服屋をやめ、国民服とか絹糸を扱う

合同会社の役員に就任した。そのころは軍関係と手を握って、うまいしようばいをし、金も流れこむし二号三号もできて、天下を取ったような贅ぜいたく沢たくな生活をした。——ところが十八年の冬、召集状を受取った長男が、他人の細君と出奔して、熱海で身投げ心中をしたのがけちのつきはじめとなり、そのまえに召集されていた二男が、大陸で戦死する。空襲できれいに焼かれて裸になるというありさまで、敗戦の四、五日まえには、妻が栄養失調のためめに死んでしまった。

「いまでも毎晩、あたしは死んだ妻子や、困った女たち二人と話をするんですよ、——とその年寄はおしまいに云うんだね、女房も二人の伴せがれも、女たちも、まるで生きているように、笑ったり話

したりするんです」

奇妙なことに、妻子も女たちもみな自分に好意をもっていて、恨んでいたり憎んだりするようなことは決してない。他人の妻と心中した長男とも、話してみると事情がよくわかるし、その関係はごく自然なもので、誰にも迷惑はかけていない、という事実まではつきりする。——本当に奇妙なことだが、みんなが生きていて、いっしょにくらしていたときより、夜なかに、いまは亡きかれらと話しあうときのほうが、はるかに現実的であり、また、なまなましいたのしさが感じられる、とその年寄は云うのであった。「生きていればこそだね、とあたしは云ってやった」たんば老は

微笑した、「——べつの言葉で云えば、おまえさんが生きているあいだは、その人たちも生きているわけだ、こういうことはそうざらにあるものじゃないらしいな」

その年寄は、なるほど、といたげに頷き、暫くじつと考えこんでいたが、やがて心配そうに、いまの薬は一時間たつと効くんだなと質問した。そうだ、あと十分もすれば効きめがあらわれる筈だ。その年寄はまた考えこんだが、顔色がしだいに悪くなり、自分の手をつくづくと見まもったのち、もう取り返しはつかないのかねと云った。

「いや、とあたしは答えた、薬というものには必ず、その効きめと反対な性質の薬がある、たとえば下痢を止める薬があれば通じ

をつける薬があるし、胃酸を中和する薬と、逆に胃酸を出すための薬がある、また」

そう云うのを遮つて、その年寄は「いまの毒薬にもそういう薬があるか」とたいそうせきこんできいた。

「むろん毒薬には解毒剤というものがあるよ、とあたしは答えた、いま手許てもとに持っているかどうか思いだせないが、——と云いかけたとき、その年寄はあたしにとびついてきたね、あんまり猛烈な勢いだったんで、あたしは絞め殺されるのかと思つたくらいだった」たんば老は片手で自分の首を押えながら云つた、「さあ、その解毒剤をすぐに出せ、すぐに出せ、つてきいきい声でどなるんだな、さもないと人殺しの罪で訴えるぞ、いや、嘘じゃない、そ

の年寄は本当にそうどなりたてたよ」

たんば老はその年寄に解毒剤を与えた。なかなかみつからないようなふりをして、その年寄に近づく死の恐ろしさを充分にあじあわせてから。薬の一つは解熱剤、一つは胃腸薬であつて、云うまでもなくその年寄は無事に帰つた。

「人殺しとはねえ」と云つて小田滝三は笑つた、「自分で死にたいと頼んでおきながら人殺しとは、ずいぶんうろたえたもんだな、やっぱり人間はいざ死ぬとなると、気取つてばかりもいられないんだな」

小田滝三はまもなく帰つた。なかまを叩つ殺すといきまいたことは、もう忘れてしまったように。

小田滝三は後日、寒藤清郷に向つてそのときの話をし、たんばさんは人をくつたひとだ、と云つて感心した。

「こつちは本気で、なかまの一人を叩つ殺すつもりでしたよ、実際に殺せたかどうかはわかりませんがね、自分では本気にそう思いつめていたんです」と小田滝三は云つた、「二番めの子が生れてまのないときだし、しようばいに気乗りがし始め、これならどうやらやっついていけるつて思つてたときでしたからね、その上とくいを横取りされたうえ、ばかみたように云われたんですから、こんなその日ぐらしの者にとっては、それこそ生き死にの問題なんですからね」

「六、七年まえにそんな年寄はいなかつたな」と寒藤先生は云つた、「そんなような年寄がいたという記憶はないな、それははなしだな」

「私もあとでそうじゃないかと思ひましたよ、どうしても死にたいとか、一時間たつと頓死する毒薬とかいうんで、つい聞きとれているうちに熱がさめちやつた」

「にえ湯がぬるま湯になつたというわけだ」寒藤先生は笑つて云つた、「そのはなしの年寄のように、小田くんも一服盛られたということだな」

「おかげでばかなまねをしずに済みましたかね」

或るとき、曾根隆助がたんばさんをたずねて来て、自分の妻が

男をつくつたがどうしたらいいか、と意見を求めた。曾根は左官の手間取で三十八歳、妻とのあいだに五人の子供があつた。そのかみさんはここの女房たちから、鬼ばばあと呼ばれていたが、とぎすのように痩せて色が黒く、抜けあがつた狭い額の下に、驚わしのようなすどい眼が光っている。頬骨は尖とがつて高く、いつも紫色の薄い唇は、きつと一文字にむすばれていて、蓋を閉じたはまぐり貝のようにみえる。——としは三十五歳だが、誰もそれを信じる者はいない。四十五、六だという者が大部分であり、五十歳より下ではないと断言する者さえあつた。

彼女はお琴という名であるが、女性とはうまが合わないようで、苦情を云うとか怒るとか、自分のほうに云い分のあるときだけは

口をきくが、さもなければ朝夕の挨拶もしないし、挨拶をされても返辞はしないのであった。その代り男性とはうまが合うのだろうか、老人でも若者でも、男に対して常に関心があるらしく、男を見ると眼の色が変わる、と云われていた。

お琴は近所のかみさんたちに、刷毛屋はけの妻のみさおとよく並べて噂をされた。軀つきや風貌も共通した点が多いし、男好きなどころもよく似ているというのである。

「でも刷毛屋の人のほうがまだましだね」とかみさんたちは云った、「こっちは鬼ばばあだけれど、刷毛屋の人はまだあいそがいしいし、つきあいつてことを知ってるもの」

このように、お琴はかみさんたちから嫌われていた。

お琴が男性に対していかに大きな関心と興味をもっていたにしても、鬼ばばあという渾名が示すような風貌と性分では、なかなか色っぽい問題はおこりにくいであろう。刷毛屋の女房がそのほうの達人であるのと正反対に、お琴はそれまで潔白であり無傷であつた。五人の子供たちも正しく曾根隆助の子であるし、——それが証明できるか、などという好奇心の強い人には、いちどお琴に会つてごらんさい、とお答えしよう、——またいま彼女は妊娠ちゆうであるが、それも隆助のたねであることを疑う者は一人もなかつた。

そのようなお琴が、ついに男をつくつたという。曾根隆助の話

によると、相手は二階に間借りしている二十二の青年で、孝ちやんといい、昼は運送店に勤め、夜は定時制高校にかよつてゐる。二十二で夜間高校にかよつたというのはよつぽど好學精神の旺盛おうせいなたちなのだろう。温和おとなしくて、天候の挨拶をするにも顔が赤くなる、ということであつた。

「ええ本当ですとも」と曾根隆助は云つた、「先月の末でしたか、朝のまだ暗いうちに、お琴のやつが二階からおりて来たので吃驚しました、寝衣に細ほそひも紐をしめただけの恰好です」

どうしたんだときいたら、お琴は平氣な顔で、あらおまえさん起きたのと云い、「孝さんが起きないからいま起こしにいつて来た」のだと答えた。

「そのときはまあそうかと思いましたが、その男は六時に勤めにゆくんです、いや、勤めにゆくために毎朝六時にうちをでかけるので、おくれちやあいけないからってわけで、まあそんなこつたらうと思いました」

そんなことが幾たびかあつたのち、お琴は亭主をすつかりまるめこんだと思つたものか、一昨日の夜半、そつと起きだして二階へあがつていった。

「私はそれを見て、また起こしにいくんだな、間借り人を置くと女房もたいへんだなと思つて、そのままうとうとしかけました」
隆助は眼を細めて、うとうとしかけたようすを示し、それからその眼を急にみひらいた、「——うとうとしかけて、ひよつと気が

ついたのは、いまは朝ではなく夜なかだつてことでした、私はおとついはおそくまで仕事で、疲れきつてましたから八時に寝ちやつたんです、それで子供たちが寝るときの騒ぎも知らなかつたんですが、お琴のやつが起きたんで眼がさめたんでしよう、とたんに時計が一時を打つたのを思いだしたんです」

彼は起きあがつて時計を見た。その古い六角時計の針は、一時十五分をさしていた。寢床を見るとお琴はいない、すると夢でもなかつたのだと、彼は思った。

「それから眼が冴えちまつて眠れやしません」と曾根隆助は云つた、「氣持だつてひどいもんで、ひつきりなしになにかが喉へこみあげてくるし、あばら骨の裏側が火で焼かれるようなくあい

したよ」

時計が三時を打ってから、お琴は下へおりて来た。おりて来るときは用心ぶかく足音を忍ばせ、それから足音を高くして手洗いにゆき、戻つて来て寢床にはいると、大きな欠伸あくびをして眠りこんだ。

「私は朝までまんじりとしませんでした、へんな話のようですが、お琴のやつが哀れで哀れで、おかしなことを云うようですが、できることなら抱いてやっていっしょに泣きたいような、へんてこな気持でいました、これは本当のことなんですよ」

外が白んできてからとろとろと眠った。眠りかかったというこ

とだつたらうが、そのうまいの鼻柱を叩くように、お琴がとげとげしい声で呼び起こした。誇張なしに手の平で鼻柱を叩かれたようだったという。いつまで寝てるんだねこのひとは、おくれるじやないかねずつなしだよ、つて喚きたてたということだ。

「その声を聞いて初めて、私ははらわたが煮えくり返るようにかつとなりました」と曾根隆助は云つた、「ゆうべのことをばらしてはん殴つてやろうかと思いましたが、——五人の子供がありましたからねえ、はん殴るのはいいがゆうべの事を話したら、子供たちがどんなにびつくらするかと思うと、私の言葉は喉にひつかかつて出て来やしませんや、なさけないはなしだが、私はなにも云わずに起きましたよ」

昨日も仕事を休み、今日も仕事を休んだ。軀じゆうの骨がばらばらになり、はらわたがみんな溶けてしまったようで、動く気にもなれなかった。

「それでまあ、思案にあまつて、来たようなわけなんですが」

「おかみさんはおなかが大いとかいってたようだね」

曾根隆助は「へえ」といって、自分が妊娠してでもいるかのよう
うに、首をちぢめ、頭を搔いた。

「金持でも貧乏人でも、学問があつてもなくても」とたんば老は云つた、「人間にはみんな、そんなような間違いをおこす時期があるんだな、男にも女にもさ、なま身の軀というやつはときどき、自分でもどうにもならなくなることもある、そうだろう隆さん、

ま、——そういうことでひとつ考えてみよう」

たんば老は手を伸ばして、二つの湯呑に茶を注ぎ、一つを曾根隆助に渡して、自分のをゆっくりと啜った。

その夜半、曾根隆助の家の二階でその事がおこった。午前二時ちよつとまえ、二階の電燈が急にともつて、お琴と孝さんを仰天させた。二人が振向いてみると、隆助が電燈のスイッチへ手をやったまま、上から二人を見おろしていたのだ。

「驚くことはないよ孝さん」と曾根隆助は云った、「明るいほうが情がうつつていいだろう、ゆっくりやんなよ、ねえこんなことをするのはよつぽどお琴に惚ほれているんだらうからな、孝さんにきれいさっぱり進呈するよ」

お琴も孝さんも動けなかった。明るい電燈の光りの下では、動きようのない状態だったのかもしれない。孝さんのふるえているのが、隆助の眼によく見えた。

「お琴は進呈するよ」と曾根隆助は続けた、「それから五人の子供と、お琴の腹の中にいる子も付けてやる、わかったね、私の云うことはこれつきりだ、さあ、二人でまたゆつくりやんな」

そして彼は、電燈をつけたままにして、階下へおりて寝た。

鬼ばばあという渾名を名実ともに具備したうえに、五人の子とまだ胎内にいる子まで付いている女を、二十一か二の青年がよろこんで貰う筈はないだろう。否、たとえ四十か五十のふけた男で

も、それほど勇猛心のある人間がいるとは思えない。すなわち、孝さんは逃亡し、お琴は泣いて亭主に謝罪し、あまりロマンティックではないこのロマンスは、終りを告げたのであった。

「ええ、うまくいきました」と曾根隆助は事がおさまったあとでたんばさんに云った、「五人の子供と腹の子を付けてやると云ったのが当たったんですな、荷物もなにも置きつ放しでとびだしてつたきりです、お琴のやつも、子供たちのために勘弁しておくれつてつて泣きましてね、——へえ、やつぱり御相談に来ていいことをしました、あのせりふはみごとに効きましたよ」

お琴はこの出来事をどのように自己処理したものか、その後もけろつとして、長屋のかみさんたちに平気でくつてかかり、どな

りちらし、叱りつけたりするのであった。孝さんのことは殆んど知らない者はなかったのだが、当のお琴だけがそんなことは夢にもなかつたようにふるまうので、さすが口達者なかみさんたちも、舌鋒ぜっぽうの持つていきどころがないようであった。

いま、われらの「街」は眠っている。くまん蜂の吉はどこかへ移っていったが、たんば老の世話になった人たちの多くは、この長屋内のそれぞれの家で眠っている。たんば老に助けられたことを思いだして、感謝の溜息をついている者もあるが、たいていは忘れてしまっていて、それにもかかわらずこの長屋にたんばさんがいること、困ったときには相談に乗ってもらえる、という安

心感に慰められて溜息をつくのであった。

この街をうしろから囲っている西願寺の高い崖がけと、崖の上に黒ぐろと茂る樹立ちとが、いまは圧迫するようにではなく、この一群の長屋ぜんたいをかき抱き、そのやすらかな眠りを見まもっているように感じられる。——黒い樹立ちから眼をあげると、空にはいちめんに星が輝いているが、そのまたたきは冷たく、非情で、愛を囁きかけるといふよりも、傍観者の嘲ちやうろう弄ろうのようにみえる。「よしよし、眠れるうちに眠っておけ」とそれは云っているようであった、「明日はまた踏んだり蹴けつたりされ、くやし泣きをしなくちやあならないんだからな」

あとがき

私は去年（昭和三十六年）「青べか物語」という本をまとめた。それはある漁師町の人たちと、そこにおこった出来事についての話であるが、この「季節のない街」は、都会の「青べか物語」といつてもいいほど内容には共通点が多いのである。

わが国ではもちろん、世界のどこでも、極貧者は自分たちの街を作るようだ。計画的にそうするのではなく、あたかも風の吹き溜まりに塵芥じんかいが集まるような、いつ、そうなったともわからな
いほど自然な成り立ちであり、経済的にも感情的にも、自分たち

の「街」以外の人間とは、交渉を持つとしないのが一般である。

ここの住人たちは「街」という概念では団結して他に当るけれども、個別的には孤独であり、煩瑣論的はんさろんな自尊心を固持しているのが常のようだ。煩瑣論的というのは、作中に出てくるのだが——たとえば——ひと摘みの塩を借りにゆく、という行為をとつてみても、本当にそれが必要である場合のほうが多いと同時に、少しも必要ではないが、親近感を強めるために、また相手に優越感を与えるために、あるいは吝りんしよく嗇しやくのために、そうすることがしばしばあるのである。

私がこれらの人たちに、もつとも人間らしい人間性を感じるのは、その日のかてを得るため、いつもぎりぎりの生活に追われて

いるから、虚飾で人の眼をくらましたり自分を偽ったりする暇も金もない、ありのままの自分をさらけだしている、というところにあると思う、——もちろん、豊かな生活をしている人たちと同様、かれらにも虚栄心があり、みえもあり、嫉妬しつとや誹謗ひぼうや貪欲どんよくなどもある。しかしそれらは、いかにも底が浅く単純なので、すぐにみすかされてしまうし、逆効果をまねく場合が多いようである。そんなところにも人間の弱さやかなしさが率直にあらわれるのである。

こういう「街」の住人は、一時的なものと、永住者とに大別される。一時的な人たちの中にも、そうなる本質をそなえている者と、現象的な不運によるものとあり、前者はしばしば永住者にな

るし、後者はやがてここから脱出する可能性をもっていて、これらが以前からの定住者とのあいだに、現実的にも心理的にも、多種多様なトラブルをおこす原因となり、ささやかではあるが当人同志では深刻な、悲劇や喜劇をかもしたすようだ。

私は「季節のない街」の中でこれらの人たちと再対面したわけである。登場する人物、出来事、情景など、すべて私の目で見、耳で聞き、実際に接触したものばかりであって、「青べか物語」と同様、素材ノートの総ざらえといってもいいくらいである。

——このノートを小説として再現しながら、作中の人物のひとりひとりに、私は限らない愛着となつかしきを感じた。この人たちはかつて私の身ぢかに生きていたのであり、かれらの笑い声や、

嘆きや怒りや、啜り泣く声が、いまふたたび私のところに帰ってきたのである。それを歪わいきよく曲まがすることなく、できるだけあつたままに私は写し取っていった。

そしてまた、これらの人たちは過去のものであるが、現在もなお、読者のすぐ身ぢかにあつて、同じような失意や絶望、悲しみや諦めに日を送っている人たちがあつて、ということを書きたいのである。

それゆえ「ここには時限もなく地理的限定もない」ということを記しておきたい。それは年代も場所も一定ではないのである。ではなぜこの「街」という設定をしたかという点、年代も場所も違い、社会状態も違う条件でありながら、ここに登場する人たち

や、その人たちの経験する悲喜劇に、きわめて普遍的な相似性があるからであった。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第十四巻 青べか物語・季節のない街」
新潮社

1981（昭和56）年11月25日発行

初出：「朝日新聞 夕刊」

1962（昭和37）年4月1日～10月1日

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田晶子

2018年9月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

季節のない街

山本周五郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>